

Fate/IronAvenger

デイガボルバー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Fate／Stay Nightと、MCU（マーベル・シネマティック・ユニバース）…とりわけアイアンマンのクロスオーバー二次創作小説です。

両作品のネタバレが発生しますので、閲覧にはご注意ください。

目次

備考欄

魔術師（キャスター）ステータス

1

裁定☒（ルーラー）ステータス

11

開戦前

Episode1：英霊召喚 | 18

Episode2：Proof that

at Tony Stark has

a heart. | 40

Episode3：交流 | 62

Episode4：クリエイターズ

87

Episode5：魔術師（キャス

ター）VS騎乗兵（ライダー） | 109

Episode6：暖かい日 | 133

Episode7：冬木のグルメ | 冬

木市新都の茄子ぶた玉お好み焼き |

156

Episode8：会食、その後

186

Episode9：優雅たれ | 214

Episode10：英雄王 | 237

Episode11：鉄人兵団と王の

財宝 | 263

Episode 12: 多元宇宙論 (マルチバース)	290	Episode 19: ガリアスタ・マンシオン	422
Episode 13: 冬木市立穂群原学園2年A組	312	Episode 20: 鉄人兵団と呪いの朱槍	444
Episode 14: 明くる日、技師と王	334	Episode 21: 戦士と、戦士と、戦士	469
Episode 15: 陣地作成	352	Episode 22: 激戦の後、それぞれの傷	494
Episode 16: 執行者	370	Episode 23: 裁定☒と、赤い宝石	515
Episode 17: 時計塔の魔術師達	385	Episode 24: 冬木教会にて	
Episode 18: 魔術師 (キヤスター) VS 槍兵 (ランサー)	404	Episode 25: 不壊誓いし星条	532

E p i s o d e 3 2 : 英霊トニー・ス	s t a r t	722	
E p i s o d e 3 1 : G a m e R e :			
703			
E p i s o d e 3 0 : 金色の夜明け			
	わりに	665	
632			
E p i s o d e 2 9 : 聖域の戦いの終			
E p i s o d e 2 8 : 移民の歌			
E p i s o d e 2 7 : 鎮魂歌		605	
580			
E p i s o d e 2 6 : 聖域の戦い			
			554

の盾
 タークによる幾つかの自己考察と、ズレ
 る運命のカタチ
 760

備考欄

魔術師（キャスター）ステータス

○真名：トニー・スターク
Tony Stark

本名：アンソニー・エドワード・スターク
Anthony Edward Stark

性別：男性

身長：173cm

体重：78kg

特技：理解・創造

好きな物：家族

苦手な物：胡桃くるみとテーツナツメヤシ入りパン

天敵：サノス

出典：アイアンマン（映画）

地域：北米

属性：秩序・中庸

隠し属性：人

一人称：僕

二人称：君

演者：ロバート・ダウニーJr.

声優：藤原啓治

イメージカラー：赤・金

〈ステータス〉

攻撃値：E

耐久値：E

敏捷値：E

魔力値：E

幸運値：B

宝具：EX

〈クラス特性〉

○陣地作成

ランク：B+

：あらゆる発明品の量産に優れた生産能力、拠点としての高い防衛能力を誇り、居住

性にも優れた『マンション』を形成する事が出来る。

後述のスキル『至高の科学者』と組み合わせることで、一体で戦闘機一機分の戦闘能力を持つアーマーを、一日最大20体のペースで量産することが可能。

〈スキル〉

サイエンティスト・スプリーム
○至高の科学者

ランク：EX

：天性の創造力と知識吸収能力が組み合わさり、遂には時空転移すらも可能とした、トニーの無限に成長する頭脳を象徴するスキル。

素材さえあれば、生前に創造してきた全ての発明品を作成可能。

更に、あらゆる優れた創造的スキルに触れる事でそれを理解し、習得・応用することが出来る。

理論ではなく、神性や魔性といったその存在固有の要因による創造性を再現することは出来ない。

本作のトニー・スタークは、このスキルによって己のマスターであるアトラム・ガリアスタから魔術と科学技術の複合理論を吸収している。

そのため魔術師ではないが、霊子で編まれた自らの霊基を解析することで、Bランク

相当の『道具作成（偽）』スキルと『概念改良』スキルの効力を獲得し、作成したアイテムに魔力を帯びさせ、改良強化を図るコトが可能。

ただし、トニー本人は魔術師ではなく魔力を行使する術を持たないため、作成にはマスターの助力及び、大々的に作業を行う為の陣地拠点が必要不可欠。

○鉄アイアンの男

ランク：A

：死地から帰還して以降の10年以上、鉄の鎧に身を包んで戦い続けたトニー・スタークの固有スキル。

後述の宝具によるものにせよ、自らの手で作成した物にせよ、己の発明品に属するアイテムを自らが装着した時、宝具効力とは別に攻撃値・耐久値・敏捷値に最大2ランク分の能力ボーナスを得る事が出来る。

ボーナス数値は装備品の性質によって上下する。

遠隔操作によるアーマー制御の場合、ボーナスは加算されない。

また、様々な情報を瞬時に取り入れ展開する戦況判断能力に非常に長じている。

○黄金律

ランク：B

：トニーの人生総てには、善かれ悪しかれ金が付いて回った。
金の善悪両面を体感し駆け抜けた故のスキル。
彼が発明を続ける限り、金は彼の周囲から離れることはない。

○???

ランク：EX

…???

〈宝具〉

○鉄人兵団
アイアン・レギオン

ランク：A++

種別：対軍宝具

レンジ：0～99

最大補足：200人

…常時展開宝具。

トニー・スタークが開発に携わった発明品。

後述三つの宝具はそれぞれ独立した機能と起動キーを有するが、しかし総体としての鉄人兵団という一つの宝具としてカウントされる。

破損した場合、拠点で修復しなければ補充は不可能。

トニーが生前使用した全ての発明品に関する生産ラインをも使用可能なので、運用スペースたる陣地と素材さえ確保できれば、発明品の完全再現すらも可能となる。

以下は、作中に登場した発明品。

・アイアンマンアーマーmk-85

：トニー・スタークが、その生涯の最後に纏った最強のアイアンマン・アーマー。

ナノマシンによる瞬時展開・修復を可能とする超科学兵装。

展開時、攻撃値・耐久値・敏捷値が1ランク上昇する。

負傷を治療する機能や、外部からエネルギーを吸収し己のエネルギーに変換する『ナノ・ライトニング・フォークサー』など、高い戦闘能力だけではなく様々な機能を有する。

Aランクの神性を帯びる雷をも吸収・運用することが可能。

ナノマシンは10億機以上ストックされているが、損傷し失われた場合は陣地で再生産しない限り補充することは出来ない。

サーヴァントとしてのトニー・スタークは、ナノ・マシンの続く限り、その補填によ

り肉体のあらゆる損傷を再生することが出来る。

普段は胸のハート型アーク・リアクター内部に格納されていて、リアクターそのものも着脱可能。

エネルギーシールドを展開すると、Bランク相当の対魔力スキルを獲得し、耐久値が1ランク上昇する。

・アイアンマンアーマーmk-42

：分離機能、遠隔操作、自己修復など、後のアーマー開発の基礎となる様々な機能を実装したアーマー。

元来はトニーの体に埋め込んだセンサーを用いなければ運用不可能であるが、本作に於いては宝具としてのF・R・I・D・A・Yのサポートと最新技術を組み合わせただけによって、後継機であるmk-43アーマーには一枚劣るものの、映画本編よりも信頼性のある高度な遠隔操作を可能としている。

・アイアンマンアーマーmk-34・デザスターレスキューアーマー

：通称“サウスポー”。

人命救助に特化したアーマー。

左手に、強力にして巨大な伸縮自在アームを装備する。

様々な自然災害の中で活動可能なほどの装甲を誇るが、飛行性能は全アーマー中でも

低い部類に入る。

装備すると、耐久値が2ランク上昇する。

・アイアンマンアーマーmk118・ステルスアーツイラレーベルRTスーツ

：通称「カサノヴァ」。

mk116・ナイトクラブが有する高度なステルス機能と、mk117・ハートブレイカーの有する高出力巨大リアクターである大型リパルサー・トランスミッターを搭載したアーマー。

それらを支える高い強度も誇る、高戦闘力と隠密性を併せ持つ。

宝具として、概念的な隠密性を誇るため、魔力を含めたあらゆる探知能力の影響を受けない。

装備すると、攻撃値が1ランク上昇し、宝具威力が1ランク相当上昇すると同時にCランク相当の気配遮断スキルを獲得する。

・スターク・サテライト

：スターク・インダストリー製の人工衛星。

召喚された土地を上空から監視しており、その姿は電磁迷彩とジャミング機能で巧みに隠されている。

トニーが開発した殆どの発明品が格納されていて、状況に応じて撃ち出しサポートす

る事が可能。

・ F^フ・ R^ラ・ I^イ・ D^デ・ A^ア・ Y^イ・

：アイアンマンを支援する人工知能のひとつ。

トニー・スタークの補助頭脳、電子秘書とも呼ぶべき存在。

高度な処理能力と自律性能を誇り、鉄人兵団の持つ全機能を管理可能。

・ 作中に新たに登場し次第、追加記述予定。

○ ???

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

： ???

○ ???

ランク：EX

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

：？？

○???

ランク：？

種別：？

レンジ：無制限

最大補足：1

：アイアンマンを持つ、直接戦闘力以外の全機能を有するサングラス型デバイス。
それ以外にも効力を有するが、現状は不明。

裁定☒（ルーラー）ステータス

真名：???

（仮称：星条旗のルーラー）

性別：男性

身長：183cm

体重：88kg

特技：絵画

好きな物：家族

苦手な物：ジエネレーションギャップ

天敵：???

出典：???

地域：???

属性：中立・善

隠し属性：人

一人称：僕

二人称：君

演者：???

声優：???

イメージカラー：青

〈ステータス〉

攻撃値：C

耐久値：EX

敏捷値：C

魔力値：E

幸運値：A

宝具：EX

〈クラス特性〉

○真名看破

ランク：C

：視界に入ったサーヴァントの真名・スキル・宝具などの全情報を把握する。

把握できるのはサーヴァントとしての情報のみであり、思想や個人の事情は対象外。

また、真名を秘匿する効果をもつ宝具や、スキル等の隠蔽能力を持つサーヴァントに対しては、幸運値の判定が必要となる。

○神明裁決

ランク：C

：ルーラーとしての最高特権スキル。

召喚された場に存在する全サーヴァントに対して、2回まで令呪を行使することができる。

他のサーヴァント用の令呪を転用することは出来ない。

〈スキル〉

○???

○絶対の不諦

ランク：EX

上記の『??』スキルと並ぶことで『不屈の意思』と『戦闘続行』スキルが複合変成した、(星条旗のルーラー)の固有スキル。

あらゆる苦痛、絶望、状況にも絶対に屈しないという極めて強固な意思。

肉体的、精神的なダメージに極めて強い耐性を持ち、逆境に追い込まれるほどステータスにプラスの補正がかかる。

ステータス上で大きい戦力差を持つ者が相手であればあるほど、このスキルの効力は増す。

ただし、幻影のように他者を誘導させるような攻撃には耐性を保たない。

○???

○ダクティカルアーツ軍隊戦技

ランク：A

：濃密な従軍経験と、自分より強いものと戦い続けてきた経験が積み重なった戦術眼と戦闘スキル。

戦況を的確に把握し、あらゆる武器を最適に使いこなし、状況に則した適切な戦闘行為を行う事が出来る。

ステータス上で大きい戦力差を持つ者が相手であればあるほど、このスキルの効力は増す。

このスキルには、かつて仲間内の密偵から学びとった、Eランク相当の気配遮断スキル及び、Cランク相当の単独行動スキルの効力も含まれる。

〈宝具〉

○不壊誓いし星条の盾
スターズアンドストライプス

ランク：B++

種別：対人宝具

レンジ：0～20

最大補足：3

：地上最強の金属・ヴィブラニウムで作られたラウンドシールド。

“地上で最も強い”という概念硬度を誇るため、地球に属するあらゆるすべての物質に強度に於いて優先する性質を持つ。

最低でもランクBまでの宝具攻撃と、それ以外のダメージ全てを衝撃含め完全無効化する。

ソレ以上の威力に於いても、ランクAまでのあらゆる攻撃を極限まで軽減する。その硬度は、『?????』スキルの効果にも比例して上昇する。

究極的には、絶対“絶対に砕かれるコトのない不屈の盾”である。

○悉く打ち砕く雷神の鎚
ムジョルニア

ランク：A+

種別：対軍宝具

レンジ：0～50

最大補足：200

：北欧神話の雷神・ソーの持つ、滅び往く星の心臓・界核神金を加工して神代のドワーフによって鑄造された神造兵装。

所有権を鎚に認められれば、手元に無くとも自在に呼び寄せ操ることが可能となる。

雷神と所有者の仲立ちの機能を果たし、装備すると神性を秘めた稲妻を操り、飛行能力を獲得することが出来る。

ソーと比肩するほどの高潔な魂を持つモノでなければ、持ち上げる事はできない。

ルーラーとして召喚された（星条旗のルーラー）だからこそ、その高潔な行動理念から、友人であるソーから借り受けることが可能となっているため、『己が信念』から逸脱してしまふ場合、この宝具を使用することはできない。

ソー本人か、それに類するモノが使用すれば、周囲すべてを焼き尽くす雷霆そのものと呼ぶべきランクA++宝具「万雷打ち轟く雷神の嵐」という上位形態も使用可能であるが、本来の持ち主ではない（星条旗のルーラー）に貸し出されている現在は使用不可。



開戦前

Episode 1 : 英靈召喚

「ああ、僕なら君らエルメロイと同じ轍を踏んだりしないとも。

せいぜい指を啜えて、勝利者となった僕の帰還を待っているがいい。」

僕は友人に向けて、怒りも隠さずそう言った。

これから始まる、参戦するコトが魔術師としての誉れと名高い決闘儀式：聖杯戦争。

そこで聡明なるロード・エルメロイⅡ世を相手取り、魔術師として誇り高き決闘の末に勝利する。

その光景を夢見て心踊っていた僕を、彼はなんとも失望させてくれたものだった。

…まあいい。

いや、内心全然良くないしモヤモヤはしているのだが、それだからこそだ。

故にこそ、僕は此度の戦争を優雅に勝ち抜いて見せるさ。

それをもって証明としてくれる。

このアトラム・ガリアスタこそは名高き現代魔術科ノーマリマジックのロード・エルメロイⅡ世と並ぶ、

当代きつての優れた魔術師だということを、ね。

.....

…西暦2004年、1月。

僕、アトラム・ガリアスタは日本の地方都市・冬木の地に降り立った。

首筋を隠すまで伸びた煌めくブロンドの髪と、艶やかな褐色の肌。

それらを戴く美しい相貌は、平たい顔のジャパニーズ諸君からすると、さぞかし眩しくその眼に映るコトだろう。

ははは、ホラ。

道行くご婦人がたが、僕に見惚れている。

解っているとも、僕は美しい。

だが、日本の女性も中々どうしてエキゾチックで悪くはない。

この長い滞在期間、何人か閨ひなを共にするのも吝かではないかもだ。

…しかし、なんというか。

冬季の日本は、寒い。

遠路はるばる意気揚々と臨んだ僕であるが、このカラツとしたうすら寒さに出鼻を挫

かれそうになった。

我が家の有する大規模油田による石油資源は、僕のホームである中東地域から遠く離れたこの島国にも多大な恩恵を与えている。

故に、商談のためにあらゆる地域の言語を習得した僕は、当然日本語も巧みに操る：が、それだからとはいえ、この国の土を踏んだコトなどは、これまでの人生で一度たりとも無かった。

というか、用事が無い。

同じ島国と言えど、魔術協会の中心たる時計塔とUKロツクがあるイングランドに比べれば、申し訳ないが僕としては興味の対象にはなり得ない。

商談は我が国に居ながら行うコトが可能なモノだし、何より優れた魔術師である僕にとつて、この国は特段魅力的なモノではなかったからだ。

「魔術師…魔術、か。

そうだと。

僕は、魔術師だ。」

口の中で、誰にも聞こえない音で小さく呟く。

我が家が油田の他に確かに所有する技術的資産、《原始呪術》。

何かを損ない、それを元手に利益を得るコトを基本とする、中東地域にて古くから伝わってきた呪い。

あまりに単純で、それゆえに世界で最も歴史あるカタチの魔術体系…そのひとつである。

我が一族が百年程昔、富める貴族の嗜みとして、下々の魔術師から買い取った技術だ。流石の慧眼と言える。

一族の中でもとりわけ祖父は、この星の抱えるエネルギー資源の未来を見据えていた。

今はザブザブと湧き出て恩恵を与えてくれる我が家の油田も、やがては枯渇するだろう。

それが私の代か、先の子孫の代のコトかは分からない。

しかし、いつかは必ず来る『飢え』の事態に備え、我らは新たなエネルギー資源を模索せねばならないのである。

そのための魔術だ。

そのために、西欧の時計塔などという黴臭い魔術社会にも干渉する。

我が一族の繁栄を、揺るぎ無いとこしえのモノにする為にも。

…父は、それを理解していなかった。

富に慢心しきっていた。

墮落していた。

祖父が残した、新たなエネルギー資源への糸口である原始呪術を、ただの財テク程度にしか見ていなかった。

そうではない…そうではないことを、証明しなければならぬ。

それだからこそ、僕はこの遠い島国にやってきたのだから。

…聖杯戦争。

あらゆるすべての願いを叶えるコトが出来るとされる、万能の願望機…《聖杯》を奪い合う、魔術師の闘争。

聖杯を欲する七人の魔術師・マスターと、彼らと契約した七騎の使い魔・サーヴァントがその覇権を競い合う。

使い魔といっても、そんじよそこらの下級な獣や霊体などではない。

英霊…偉業を成し遂げ、歴史に名を刻み世界に召し上がられた者達。

その写し身を、聖杯のバックアップを受けて召喚せしめる。

そして競い合い、殺し合い、末に残った一組にのみ、聖杯を手にして願いを成就する

権利が与えられるのだ。

調べたところによると、これは二百年近くも昔から続く大儀式であるらしい。

あらゆる願いを叶える奇跡を実現させようというのだ。

生半なモノでは無いというコトだろう。

だがしかし、僕は正直この、なんでも願いを叶える杯とやらに興味はない。

そんな胡乱げなモノに願うまでもなく、大抵の願望は我が家の富をもつてすれば叶ってしまうのだから。

僕が欲しいのは誉れだ。

この戦争に勝ち抜き、魔術師として偉業を成し遂げたという実績が欲しい。

それこそが、家名と富以外はたかが知れてると陰口を叩かれる、我が家の魔術を魔術社会に認めさせる最良最短の手段に他ならない。

それが成れば、原始呪術と“現代科学”を交え発展させた、僕の魔術の優良性を証明するコトが出来る。

…それこそが、尊敬する祖父が夢見た、新たなエネルギー資源への扉を開くカギとなるのだ。

.....

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。」

だから、やってやる。

「四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。」

証明してやるさ。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。」

ビルディングをひとつまるごと購入し、魔術工房も設置した。

召喚のための触媒も、入手した。

ギリシア神話に名を残す、偉大な魔術師：

“コルクスの魔女”を呼び出すに足る、古い文献。

「——告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

この戦争、僕のような富めるモノが喚ぶならば、恐らく“キャスター”こそが必勝の選択肢だ。

彼女は恐らく、最強の幻想種・竜を呼び出す宝具：『金毛羊皮』を持つ。

我が原始呪術によって無限の魔力を持つコルクスの魔女が、竜を喚ぶコトが出来れば、まさしく無敵だ。

そして、神代の魔女が持つ知恵で、我が呪術をさらなる高みへ……！

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。」

ふはは、完璧だ！

見ている、エルメロイめ！

僕の完璧なる栄光へのロードを！

はっは、景気付けにBGMとしてかけていたBlacksabbathの
iron manも、心地よい重低音を上げているわ！

ツハー！

やっぱアガる曲だわー！

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

英霊召喚のための詠唱を唱えきった、その刹那。

眩く溢れる光と共に、バックグラウンドミュージックに映える様な重い金属音が、アトラム・ガリアスタ所有の魔術工房ビルディングの一室に響いた。

「……え？」

光が止んだ先……英霊召喚の為の魔術式が描かれた、大理石の床には、*“ある物体”*が佇んでいた。

左膝と右手を床に突き、顔を伏せるソレは、確かにヒトのカタチはしている。

英霊と言うくらいだ、ヒトのカタチは保っていて然るべしであろう。

だが……

「……誰だ、お前は。」

アトラムは動揺を必死に押し殺し、目の前のソレに問い掛けた。

確かに、人のカタチをしている。

しかしそれを、容易く偉業を成したヒトの英霊であるとは判断できなかった。

これが、狙い通りに召喚された、コルキスの魔女その人であるとも。

「……誰？」

その問いにはどういった意図が？

失礼、この場には他に該当者がいらつしやらないようですし、貴方の身体からはどうやら、高純度の…アー、なんらかのミステイックなパワーを検知できます。

それ故に確信をもって問わせていただきますが、貴方は聖杯戦争にて私を召喚したマスターなのでは？」

ひれ伏したソレは顔であろう箇所を持ち上げ、男性の軽妙な口調で問い返した。

「…それは、そうだ。

しかし私は、古代ギリシアの古い文献を触媒に召喚儀式を行ったのだ。

その結果として呼び出される存在としては…君は、どう見ても相応しくは無い。」

そうだ、相応しくない。

少なくとも、コルキスの魔女本人や、その縁の英霊にすら見えない。

「ははあ、ナルホド。

ハッハ、それは確かにその通りでしょうね。

申し訳ない、随分と面食らったでしょう。

なにせ、見ての通り…」

言いながら、両手であろう箇所を左右に広げてソレは立ち上がる。

金属音と、何らかの駆動音を響かせながら。

「I私 Aは Mア Iイ Rア Oン Mマ Aン Nだ」

目の前のソレは、機械人形だった。

シンプルで頭の悪い表現かもしれないが、そうとしか言いようがない。

赤と金色を基調とした、メタリックなボディ。

掌の丸い孔、胸部中央のハート型のスポット、そして眼に相当するであろう顔面部分の横穴二つがそれぞれ輝く。

顔面部には、目の他に鼻や口、耳といったパーツは見られない。

今現在、先進国で実用に向けて研究がなされている玩具のような二足歩行人形……それらとは比べるべくもない精巧な機械人形が、眼前に在る、と感ぜられた。

否、しかし……

「……君が、英霊だと？」

その姿はなんだ？

鉄の男とは……自動人形だとも言うつもりか？

それにしても、あまりにも……」

「自動人形とは、魔術で動かす操り人形の使い魔である。

その可能性だって十分にある。

だが、人形の英霊などとは聞いたことがない。

しかも、こんなにメタリックで科学機械寄りな印象のものなど。

「オートマタ？」

「魔術とやらを使ったロボットか何かですか？」

「ウルترونみたいなものかな……」。

「アー、違う違う。」

「ともかく私は人形ではありませんよ、ホラ。」

「言うところ、ソレを構成していた金属的なパーツの全てが消え去った。」

「否、胸の中央に輝くハート型の何かに、液体の如く流動的に吸収されていった、という表現こそが正しいのかもしれない。」

友人であるロード・エルメロイⅡ世の義妹……

「かのライネス・エルメロイ・アーチゾルテの操る魔術礼装にも似た動きだったが……？」

「ね、言ったでしょう？」

「先ほどの姿も、正直シビれるぐらいクールでイケてる」と自負してはいますが、
「アー

マー”を脱いだ私も、中々どうしてホットだ。

妻には、生前よく言われたモノですよ。」

現れたのは、一人の中年男性だった。

自分ほどではないが、まあハンサムと言えないこともない、とアトラムは感じた。

口髭と顎髭をキチツと切り揃えた、白髪混じりの男。

我が父よりも、幾分若い程度だろうと思われる。

黒いスーツをカジジュアルに着こなし、ワインレッドのインナーの上には、例のハート型のパーツが輝く。

その姿に、たしかに自動人形ではないにせよ、ますますアトラムの疑念は深まった。

「…君の奥方がどう仰ったかなどは、此方は知るよしも無いのだが。

だからとて、申し訳ないが、やはり君が英霊などとは思えん。

どう見ても、君は現代の人間ではないか。」

人類史に名を刻んだ『境界記録帯』^{ゴーストライナー}の姿としては、あまりに歴史が若すぎる。

発明王として名高いトーマス・エジソンや、そのライバルであり電気を人の領域へ引き入れたニコラ・テスラかと一瞬考えたが、やはりあのアーマーとやらの存在とは結び付かない。

「現代…ン、なるほど、これが聖杯からの知識供給とやらか。

便利なもんだ。

フム、今は…なるほど、2004年。

ならば失礼、アー…貴方のコトは、なんとお呼びすれば？」

「…アトラム。

私の名は、アトラム・ガリアスタだ。」

「ありがとう、ミスタ・ガリアスタ。

貴方の疑問も尤もです。

確かに見ての通り、私はいわゆる過去の偉人達のように古ぼけて…違うな、時代遅れな…ゴホン、そうではなく。

時代がかっていない、洗練されている。

まあ、それも当然ですよ。

なにせ私は、今から19年後の2023年に死亡した人間ですからね。」

「なっ、なに!？」

今まで訝しげな表情で様子うかがっていたアトラムも、流星に驚愕の声をあげる。

未来の人間？

バカな、そんなパターンもあり得るといふのか？

否、だとしても先ほどのアーマーの説明にしては、19年ほっちの半端な技術進歩で

はどうにも…。

やはり、レディ・ライネスのモノと同じく、魔術礼装とでも？

…考えても、埒も明きはしない。

「…まだ、私の質問に答えていないぞ。

何者なんだ、お前は？」

眉を潜め問うアトラムを前に、彼は微笑んで跪いた。

「失礼、マスター・ガリアスタ。

私の名前はトニー・スターク。

此度は、キャスターのクラスで現界しました。

以後、宜しくお頼み申し上げます。」

—————

アトラムは一先ず、トニー・スタークこそが己が召喚したキャスターのサーヴァントであるという事実を認めねばならなかった。

パスは繋がり、アトラムの魔力はトニーに流れ込んでいる。

しかし、想定以上に魔力の消費量が多い。

アトラムは、かのコルクスの魔女を呼ぶと想定し、神代の魔術師を操るに足る心構えをしていた。

だが、その想定すら越える魔力を、未来人だと言う中年は食らっていたのだ。

「フム、なるほど…残念ですな、マスター。」

貴方が準備した触媒とやらは、どうやら偽物だった様です。」

なにやら洒脱なサングラスをかけ、召喚に使ったはずの触媒を眺めながら、トニーは言い放った。

「…なんだと?」

それは、聞き捨てがならない。

祖父譲りの審美眼と経験、金に明かして手にいれた豊富な魔術知識を持つアトラムとしては、己が偽物を掴まされて決闘に赴いたなど、容易く許容は出来なかった。

「今、この文献とやらのスキャンを行いました。」

精巧に作られていますし、なにやらミスティックなエナジー…すなわち魔力とやらも

確認できませんが…。

しかし、パピルス紙としては劣化具合が些か不自然だ。

これは、なんらかの人的手段で経年劣化を装ったのでしょうか。」

その程度の細工が己に通用するとは、アトラムにはどうしても思えない。

「これだけならば騙し通すには弱いのですが、コレを取り巻く魔力が、信憑性を偽装する役割を果たしていたのかもしれませんが。」

普通に観察すれば、まず見抜くことは出来ないのでしょうか。」

「…そんなものを看破する、お前の根拠はなんだ?」

文献もどきから目を離して自分の方を向くトニーを、睨み付けるようにアトラムは問う。

「私は、技術者のサーヴァントなのでね。」

加えて、エネルギーの指向性や物質の組成、その他もろもろを調査する手法に、訳あつて詳しい。

そういつたものをスキャンするデバイスを持ち合わせているのは、私という英霊を形作る上では当然の要素なのですよ。」

そう言つて、トニーはかけていたサングラスを外し、アトラムに差し出した。

「……?」

変わらず訝しげな表情で、サングラスとトニーを交互に見るアトラム。

「かけてみてください…とは言いませんが、内側からレンズを覗き込んでみてください。」

「……。」

警戒しながら、サングラスを覗き込む。

「……………これは！」

驚愕した。

レンズの中には、まさしくサイエンスフィクションそのものとしか表現できないような光景が広がっている。

レンズ越しに映る映像のすべてを解析し、その細やかなデータが表示される。

特に、注視していたであろう触媒の文献については、こと細かに組成要素が記されていた。

更には視界に映る、サーヴァントであるトニー・スタークの身体と己の手では、映りかたが違う。

高度なエネルギー探知性能を秘める、小型にして超高性能な多機能デバイスだ。

魔術と同時に科学技術の最先端にも触れ、好んで使用する異端の魔術師たるアトラムには、それを瞬時に理解するコトが出来た。

「そのグラスや、先ほど私が纏っていたアーマー。

こういったモノを作成するスキルを持つ英霊ヒロこそが、私：トニー・スタークなのですよ。

「ご理解いただけましたか？」

「……。」

アトラムは、気付けば顔に装着していたサングラスを外して、改めてトニーを見据える。

話通り、マスターになるとサーヴァントを視認するだけでステータスを確認することが出来るようだった。

しかし、己がサーヴァントの戦闘力は、見たところでは著しく低い。

攻撃値も、耐久値も、敏捷値も、魔力値すらも、最低値のE。

幸運値はBとまずまずだが：気になるのは、宝具のランクだ。

E X：規格外？

判別がつかないが、消費する魔力の多さを考慮にいれるならば…。

「…いいだろう。」

たしかに、私の遙か想像を超える科学技術は目を見張るものがある。

トニー・スターク、我がキャスターのサーヴァントよ。

私は、お前を僕とし、この聖杯戦争を勝ち抜くことを誓おう。」
アトラムは、サングラスをトニーに返却する。

「光栄です、我がマスター。」

必ずや、私が貴方に勝利をもたらしてご覧に入れましょう。」

サングラスを受け取り、トニーは微笑んだ。

その笑顔は、なんとも言えず胡散臭い。

表面では、確かにトニーを認めて見せた。

しかし…

『触媒について、偽物であったという確信は持てない。』

目当てのサーヴァントは引けなかったが、まだ戦争開始までは余裕もずいぶんある。』

工房内を案内するため、アトラムはトニーに先んじて歩み出す。

目を細め、顔を向けずに後方を見やった。

『奴が使えんサーヴァントであったならば。』

始末して、新たなサーヴァントを召喚する手筈を整えるコトも可能であるから、な。』

不穏な目論みを組み立てるアトラムをよそに、トニーは立ち止まる。

「失礼、マスター。」

「このBGMチヨイスは貴方のものですか？」

トニーは、部屋上部のスピーカーを指差し尋ねる。

「…ああ、そうだが。」

それが何だ？」

「いえ、素晴らしいセンスだと感激しましたね。」

何を隠そう、私も大好きなんですよ。」

Black Sabbath!

なるほど、私が貴方に召喚された理由がわかりましたよ。」

「……。」

まさか、この曲が触媒になったとでも言いたいのか。

あっけらかんと言い放ち笑うトニーを尻目に、うんざり気味に頭を振ったアトラムは、そのまま部屋を後にしたのだった。

Episode 2 : Proof that Tony Stark has a heart .

僕の名前は、トニー・スターク。

端的に言えば、死んだ人間だ。

確かに生前、僕はアイアンマンと呼ばれていた。

ヒーローと呼ばれていた。

しかし一方で、死の商人とも呼ばれていた。

傲慢な独善家とも呼ばれた。

前者も後者も、間違いなく僕の真実だ。

他者にとっての真実を、自分勝手に否定することなど出来はしない。

自分が何を成しても、自分のやってきたコトが消える訳じゃない。

それは、死んだとしても同じだ。

遺してしまっただ家族には、僕の負債を押し付けることになったかもしれない。

それでも僕は、 “あの時” ああいう選択をした。

その結果、僕たちは “奴ら” を撃退するコトが出来た。

そして：僕は死んだ。

悔いがないと言えば、ウソになる。

筋骨隆々で老いばれで、そして完璧な友人が、今度こそ自分の人生を歩むのを見届け
たかった。

筋骨隆々だったのに見る影もなく肥え太った友人の、心の傷を癒す手助けをしたかっ
た。

筋骨隆々の一面という悩みを超越した、僕と同じ天才の友人と、いつかみたいにこれ
までの人生を語り合いたかった。

：僕の友人、マツチヨばつかりだな。

数少ないマツチヨじやない友人：彼には酷いコトをしてしまったけれど、一家の長の
先輩として沢山話を聞きたかった。

：それに、最後までソリは合わなかったけれど、チームへの想いを誰よりも強く感じ
た友人のためにも、生きてチームを守っていたかった。

五年ぶりに再会できた坊やには、本当は僕の手から贈りたいものも沢山あった。

そういえば、坊やの叔母さんにゾッコンいかれて、カッコつけて髭を伸ばし始めたア

イツのコトもまあ：正直言うて応援してやりたかった。

そして、いつも僕を支えてくれた鉄の鎧仲間の親友にだって、もつと恩を返したかった。

他にも、沢山の仲間たち。

あの時の戦いは、壮観だったな。

まさしく感無量だった。

かけつけてくれた彼らにも、何か返せるものがあつたはずだ。

もちろん未練はチームの友人達のコトだけじゃない。

妻が頭を悩ませていた畑の肥料作りを、手伝いたかった。

畑だけじゃない。

これからの人生のすべてを、支えあつて生きていたかった。

そして、娘に：娘が送ってくれた愛の言葉に、その数に。

何年も何年もかけて、僕も愛を返したかった。

しかし、それでも僕は死んだ。

どんなに悔いがあつても、死は訪れる。

そして、自分の選択の末にそれがあるならば、それは受け入れるべきだ。それを否定するコトは、自分の行いすべてへの否定に他ならない。

自分が触れ合つてきた全てのものの否定に、他ならない。だから、悔いも飲み込んで受け入れる。

最後に妻がかけてくれた言葉によつて得られた安らぎを否定する気など、僕にはとても起きなかつた。

しかし、死によつて自分の行いが消え去ることなど、やはり無いのだろうと思う。ならば、安らぎだつて確約されはしないのだろうか。

何故なら僕は、喚ばれてしまった。

願いを叶える、などという謳い文句に興味はなかった。

だが：しかし、途切れていたはずの僕の意識を引く声に、嫌な胸騒ぎを覚えた。僕の戦いは、終わることを許されないのだろうか。

：いや、違う。

“誰かが死して尚諦めず、争いを呼ぼうとしている”のだ。

そいつが喚ばれたから、僕も喚ばれた。

“抑止力”というやつが働いた結果らしい。

正直、この期に及んで争いに荷担するなんて、真つ平ゴメンというやつだ。

死んでまで戦いたいなんて言うやつ気など、知れたものじゃない。

だが：僕たちに由来する何か、また別のどこかで戦いを広げようとしている。

それは：それだけは、二度と看過することは出来ない。

それを止めるためならば、僕はもう一度戦おう。

なぜなら、僕はアイアンマンだからだ。

.....
僕を召喚した男は…なんというか、鼻持ちならないやつだった。

金持ちで、まあ僕ほどではないがイケメンで、女好きで、他人のコトなどお構い無し。自分のルールで好き勝手生きてる自信家、そのくせプライドばかり高くてキレやすい。

…理解ってるさ、これは別に自己紹介じゃない。

この英霊召喚とかいうシステムは、どうやら召喚者に似た性質を持つ英霊を召喚するらしい。

認めたくはないが、アトラム・ガリアスタは僕にそっくりな性格をしているらしい。た。

今の僕にじゃない、昔の僕にだ。

…いや、言い訳だな。

こちらは年長者なんだ、譲って認めよう。

僕と僕のマスターは、性格的難点において共通点が非常に多い。

認めてしまえば不快ではあるが、彼と付き合うのはそう難しくはなかった。

なにせ、彼の思考は読みやすい。

自分が考えそうなことを考えるのだから、人生経験において多くを重ねている僕にとつては御しやすい相手とも言えた。

僕の目的は、あくまでこの戦争に喚ばれた僕の世界の誰かが、過激なコトをやらかす前に止めることだ。

彼の「戦争に勝ち抜き、チャンピオンベルトを巻いて凱旋する」という目的とは、今のところズレは無い。

ならば、互いに過度に干渉せずに目的を遂行するだけで十分というものだ。

幸い、気に入らない相手と歩幅を合わせるやり方は、ロス長官との数年間で慣れてい
る。

当たり障りなく、へらへら笑ってやり過ごす。

大丈夫、やれるさ。

…そう、思っていた。

「キャスター、お前の能力は理解した。

お前の持つ『至高の科学者』のスキルによって、我々は超科学が誇る無数のアーマール軍団を製造出来る。

ならばそれを賄う無限の魔力があれば、我々は無敵というコトだ！」

アトラムは、自慢げに言い放った。

僕が先程デモンストレーションにとお見せした『マーク85』アーマールの戦闘力に、ずいぶんご満悦らしかった。

「……………」

「故に、見たまえ。

我が原始呪術による高度な魔力炉を！」

これとお前の力さえあれば、我々は勝てるぞ！」

アトラムは、そう誇りながら自前の魔術装置を僕に披露した。

確かに、一目見て卓越した技術を感じとるコトが出来た。

魔術的なことはわからないが、今が2004年であることを考えると、この装置を構成する科学面の観点から見ても10年以上は先を行っている。

装置の周囲では、無菌服のようなものを着たアトラムの配下が、これまた2004年現在では珍しいタブレット端末を操作し、調整作業を行っている。

このビルディングには、彼が雇った優秀な魔術師や技術スタッフが大勢勤務しているらしかった。

これらを己の魔術と組み合わせ、言う通りの高性能炉として機能させられると言うならば、それは恐ろしくも凄まじい技術力だ。

しかし：：しかしだ。

「：マスタ―、一つお尋ねしたい。」

「うん、なんだ？」

私は今、気分が良い。

何でも答えてやろうじゃないか。」

「…この装置は、貴方の原始呪術によるエネルギー変換を補助する装置。そうですね？」

「ああ、そうだ。」

我が原始呪術とはつまり、代償を用いた魔術。

何かを損ない、何かを得る。

エネルギー変換こそがその真髄さ。

その効率を極めて高水準に向上させる装置こそが、この魔力炉というわけだ。

『素材』を元手に、高純度の魔力結晶を精製する。」

アトラムはやはり誇らしげだ。

しかし、僕は苦々しげに質問を続ける。

「…素材、ですか。」

その素材とは…この、装置に納められた“子供たち”のコトですか？」

その装置には、いくつかの硝子ケースが設置されていた。

中には、年端もいかない子供たちが、簡素な検査着を着せられて蹲る。

彼らを糧に産み出した結晶を、僕のエネルギーソースに使うというのか…！

「そうだと。」

やはり、生け贄に使うには新鮮な魂が良い。

効率良く魔力を抽出し結晶に変換できるからね。

では、ひとつ作って見せようか。」

そう言い、アトラムはハンドサインで職員に装置の起動を促そうとする。

「ッ…止めろ!!」

僕はアトラムの腕を掴み、とつさにそれを制止した。

「…なんのつもりだ、キャスター?」

アトラムは、不愉快そうに眉をひそめて僕を睨み付ける。

「…申し訳ない。」

貴方のやり方に、私は一切口を挟む気は無かった。

魔術師同士の、互いが覚悟した争い事ならば、と。

今の今まではね。

だが、"これ"だけはダメだ。

戦いに無関係の子供を巻き込むどころか、それを糧に殺し合いを行うなんて…
"僕"には耐えられない。

許すわけにはいかない。」

一気に言いきつた僕を、アトラムは変わらぬ調子で睨み付けて口を開いた。「何を言うかと思えば……なるほど。」

お前は魔術師ではなく技術者のサーヴァントだったな。

英霊とはいえ、現代の一般的倫理観とやらを持つ人間。

ならば、我ら魔術師の思想に違和感を感じるのも無理からぬコトだが……」

アトラムは、僕が掴んだ反対側の腕……

赤い刻印が施された右手を上げ、僕に見せつける。

「思い上がるな。」

お前の主は私だ。

私のやり方が気に食わずとも、頭を垂れた以上は異論など許さん。

もし逆らうと言うのなら、「令呪」を使って従わせることも可能なんだぞ。」

右手に力を込めるアトラム。

……頭に血を上らせて話したところで、彼を納得させることは出来ない。

それに、忘れてはならない。

「彼は僕に似ている」んだ。

失われる命に、向かい合うというコトを知らない人間。

たとえこの装置の完成までに何人の犠牲を出してきていたとしても……それを、僕が咎

めることなど出来はしない。

僕にとって大事なものは、過去の彼ではない。

これから彼と組むに当たって、僕が戦いに赴く気持ちを削ぐような卑劣をやらせないことだ。

そのためならば…ある程度、切れるカードは切っておく。

僕は一旦緊迫した息を吐ききってから、口を開いた。

「ああ、もちろん承知しているさ。」

ただ一方的に、貴方がこれまで培ってきたモノを否定するような理不尽な真似はしない。

僕が言いたいのは、あくまで子供を…いや、もつと言えば「人間を素材にする」のは許容できない、というコトだ。」

「…下らない。」

それと、我が魔術の否定とは何が違う？」

苛つくアトラム。

大丈夫、彼はまだ僕の話聞いてる。

彼は、傲慢で自信家であつても、利に聡い男だ。

僕と同じで。

ならば…

「違う。」

まったく違うさ、マスター。

僕が指摘したいのは、あくまで素材の部分なんだ。

つまりは、損なう代価について。

ここについてののみ思想の部分で食い違いがある、というだけの話なんだよ。

他の部分については、正直嫉妬を禁じえないレベルで脱帽しているとさえ言える。

技術的に、僕では思い付かない未知の側面が強いからだ。」

「……。」

手放しに誉められて若干気を良くしたのか、表情は変えないまでも力は緩む。

沈黙しながら僕に次の言葉を促しているようだ。

「貴方だって、こんな戦争が始まってすらいない段階で躓いて、貴重なリソースである令

呪を切りたくはないだろう？」

ならば、ここは互いの意見を擦り合わせるべきだと思うんだ。

僕には、改善に向かう意見を提示する用意もある。」

「…使い魔風情が、マスターの『ボク』に対して意見だど？」

アトラムの一人称が揺らいだ。

魔術師としてのプライドと、戦争へ向かう覚悟と、僕が持つ技術への興味がせめぎ合った結果だろう。

アトラムは魔術師であると同時に、これだけの設備を設計した技術者でもある。

僕のアーマー等を目の当たりにした彼ならば、心慄られて当然だ。

…かくいう僕も、かつてワカンダ国の超技術や、ハンク博士の発見したピム粒子を前にしては言葉を失い、同時に大興奮したものだっただ。

…そういうえば、ロキの杖からウルトロンの知能をサルベージした時もそうだったな。

……OK、大丈夫だ。

あの時みたいなへまは二度としない、絶対にだ。

「マスター、使い魔だからこそだ。

今現在、僕の持つスキルも何もかも、すべて貴方の所有物なんだ。

つまり、僕のアタマの中にある技術力ですらも、貴方が獲得する権利がある。

ならば、貴方は僕というデータベースから、効率的に情報を抜き出す手段を選びとるべきだろうか？」

「…随分な自信だな。

お前の改善意見とやらは、それほどまでの確実性を持つというのか？」

「正直わからない。」

だが、成功すれば人間が産み出すエネルギーよりも遥かに潤沢なエネルギーリソースを確保できると約束しよう。

そのリソースを、人間素材の代替えとして使用する。」

「…バカな、信じろと言うのか、そんな大言壮語を。」

口ではそう言うが、アトラムは否定しきれていないようだった。僕の技術を目の当たりにしているためだろう。

加えて、彼は油田経営というエネルギー産業を生業とする企業人でもある。

ならば、この発言は無視できまい。

「信用も勿論欲しいが、それだけでは足りない。」

僕の改善策には、マスター。

貴方の協力も必要不可欠だ。」

「ふん、大口を叩いておいて、ボクの力を期待するとかいうのか？」
「言っただろう。」

貴方は僕では到底発想できない、魔術と科学の複合技術を持っている。

貴方がやるんだ。

僕の技術を代価に、貴方の魔術が現世に還元するんだ。

膨大なエネルギーを。」

「…本当に、確証もない青写真を堂々と語るやつだな。

それほどまでに成功する自信があるというのか？

確実に、ボクの勝利に貢献できると？」

「重ねて言うが、成否自体は断言できないさ。

だが僕が「現界している」という事実だけでも、成功確率をかなり高めていると考えられる。

それにこの改善策の探求は、貴方にとって必ず利益になるはずだ。

それは、この戦争で勝ち抜くことと同等の成果を生むと約束しても良い。」

「……。」

「なあ、マスター。

聖杯戦争開幕まではまだかなり時間があるだろう？

あなたはキャスター陣営として参戦するために、陣地形成を加味して早めに来日したと言っていた。

ならば、その一環と考えてはもらえないか？

もちろん、戦力配備も平行して行う。

改善策が見込みなしと判断できたら、早期にプランは打ち切るとも約束しよう。

僕だって勝ち抜く意思はあるし、このプランが潰えたら貴方のやり方に従うさ。だから、どうか……。」

「……………」

アトラムは、しばらく押し黙った。

彼は、僕が目的を果たすためにはいてもらわなければ困る人物だ。

ならば、協調の努力はしなければならぬ。

彼だって同じはずだ。

そう信じて、沈黙を耐える。

「……ハア。」

……三日だ。

三日以内に、ボクがお前を信じるに足る成果物を見せてみる。

そうでなければ、ボクの方針に従ってもらおう。」

大きく息を吐き、アトラムは答えた。

「……！」

了解だ、感謝するよ、マスター。

チャンスを与えられた以上、必ずモノにしてみせるさ。」

ここで安堵はできない。

三日あれば、「アレ」を作るには十分だ。

設計図はアタマにある。

あとは素材と…ボクの中の理屈が、「この世界」に通用するかどうかだ。

「ふん…しかし、今までは随分と取り繕った態度で接していたんだな。

そちらがお前の本性か。」

…まずい、言われて気づいた。

いつからか、若干素が出ていたらしい。

必死だったので、いつものように毒舌全開とかにはならず済んで幸いだったが。

「…良いぞ。」

素を見てしまった今になって、丁寧に接されても気色悪いだけだ。

今後は、最高のパフォーマンスを発揮するために肩の力を抜くことを許そう。」

随分と寛容に、アトラムは言った。

内心、僕が何を作るのか気になっているのかもしれない。

新品スーツを披露する前の「坊や」のような目をしている。

「お、そうか！

ハッハーそれは助かる！

ではマスター君、早速作業に必要な素材のリクエストがあるのだが…」

「おい！」

力抜けとは言ったが、最低限の礼節は心掛けるよ！

なんだマスター君って、完全にバカにしてるだろ！」

即座に指摘するアトラムだが、さほど憤ってるわけでもないらしい。

興味という大きな重石がある分、隷属を強いる感覚は若干ナリを潜めているようだった。

うん、これくらいの距離感で行けるなら随分楽だな。

やはり、変に縮こまって畏まるのは僕のスタイルじゃない。

此処にはロス長官も居ないんだ、ノビノビやらせてもらうさ。

「バカにするなんてとんでもない。

適度な脱力で、最高のパフォーマンスを発揮させていただくためだよ。

それで、素材なんだが…ああ、その職員君！

えー、名前は…え、ハッピー？ 本当に？

それは、なんというか…奇遇だな。

おっとすまない、紙とペンはあるかな？」

私とアトラムのピリピリとした空気に震え上がっていた職員は、僕の声に気付いて慌てて胸に差したペンとメモ帳を取り出した。

うん、いいね。

こういう場合、こういうアナログな手段が手早くて良い。

これがすぐ出てくるというのは、良い職場だ。

働き甲斐がある。

「ここにメモした素材を集めてくれ。

どれくらい時間がかかるかな？」

僕が書き出したメモを見て、アトラムは怪訝そうな顔を浮かべた。

「永久磁石に銅線、ゲルマニウム、シリコン、鉛、テルル、ビスマス…それと水素ガスとパラジウム？」

これだけの量で良いのか？

それならば、今日にも直ぐ揃えられるが…。

これで一体、何を作る？」

アトラムの問いに、僕は思わずニヤリと笑った。

懐かしさに、万感の思いが胸に駆け巡る。

「動力炉さ。」

妻いわく、トニー・スタークのハート…まあ、厳密な意味合いとしては違うんだが、それでも間違いなく、アレこそがアイアンマン僕の原点だよ。」

Episode 3 : 交流

アトラム・ガリアスタの魔術工房に、音楽が流れる。

AC / DC の Back in black.

空気を震わせ、芯に響くようなハードロック・ミュージックだ。

それをBGMに、二人の男が精密機械に囲まれ作業を行っていた。

「……よし。」

さあマスター、完成したぞ。

一先ずの成果物、僕の改善策の第一段階だ。」

「何？」

随分と早いな。」

書類や魔術書がきれいに整頓されて積まれたデスクに向かいノートPCを操作していたアトラムは、顔を離して己がサーヴァントを見やった。

作業補助用のマシン・アームを自分用にカスタマイズして使用しており、ソレ以外にも乱雑にデスク上に様々な機器が並ぶ。

「そういう君も…資料整理、もう大半が終了しているみたいじゃないか。

上に立つ人間が、そういうった事務処理に長けていると言うのは素晴らしいことだ。」

「お前のような髭面の中年におべっかなど使われた所で、嬉しくもなんともないな。」

「いや、おべっかじゃないさ。」

純粹に感心しているんだよ。

トップの人間が、情報の所在を把握しておく感覚を持ち続けるといふのは困難なことだからね。

それがあると、イザという時に対応に動く反射神経が段違いになる。」

「…そういうえば、お前も生前は会社経営経験があつたんだつたか。」

「向いてないから、アイアンマン^れを始めてからは妻に全権を委ねたがね。

さっきのは妻の受け売りに過ぎないよ。

僕は結局のところ、創造者だ。

何事も、適材適所つてのが重要つてことさ。」

「そいつは言えてるな。」

…さて、こちらも一先ず完了したぞ。

ホラ。

「ご注文の、魔術関連の資料だ。」

「ああ、ありがとう。

すぐに確認させてもらうよ。

なんせ、サーヴァントの体なら休眠は必要ないからね。」

魔術工房改善に関する提案から一日半。

キャスター主従の二人は、聖杯戦争に向けた準備…の、そのまた準備を行っていた。

トニーは、啖呵を切った通りの成果物を制作。

アトラムは、技術のすりあわせのために必要な魔術関連の資料を選択し、データ形式

で整理・保存。

作業はそれぞれ別種のものだが、作業行程の中で生じた疑問を即座に解消して効率化

を図るため、二人はこの間ずっと同じ部屋に居た。

何せ、古代ギリシャの魔女を召喚するつもりが、近未来の機工技術者を召喚してし

まったのだ。

聖杯戦争開幕まで一月ほど時間があるとしても、想定していた戦略からどの程度変更

を要するかを、速やかに把握しなければならない。

ならば、一行程一行程を丁寧にかつ迅速に行うよう努めねばならなかった。

「…本音を言えばジャパニーズのご婦人がたを招き入れて、優雅に戦争前の英気を養いたかったものなのだがね。」

その余裕も無くなってしまった。」
ため息混じりにアトラムは言う。

女に囲まれた甘き色と肉の時間は霧消し、ハードロックをBGMにヒゲオヤジと二人きりで籠って作業。

優雅さなど欠片も無い。

「若いんだ、その考え方を否定はしないがね。

だがまあ、何事もメリハリが大事だよ。

良いじゃないか、一日半待たせただけの価値はあったと思うよ。

さあ、見てみてくれ。」

「フン、そうであることを願うよ。

どれ…。」

トニーは少年のように声を弾ませながら促し、それにアトラムも素直に従う。

性格も近い二人は、一日半の集中作業でそれなりに打ち解けることが出来ていた。

これもまた、作成物の手応えと同様に得難い収穫であるとトニーは思った。

「これは…お前の胸に輝いているパーツと似ているな。」

アトラムは、トニーの目の前のデスクに置かれた物体を見て、率直な感想を述べる。

それは、金属の円筒に収まった輝く何かであった。

まさしく、形状や厚みこそ違うがトニーの胸に輝くハート型のパーツに酷似している。

「ああ、その通り。」

これは最初につくった小型の『アーク・リアクター』だからね。

胸のこれは、この発展型なんだよ。」

アーク・リアクターと呼称された胸のパーツを軽く指で叩きながら、今しがた完成した旧型のリアクターを持ち上げるトニー。

「…そのリアクターとやらは、曲がりなりにも宝具の一部なんだろうか？」

それを、旧式とはいえこうも容易く再現できるものか？」

「“この世界”でも、僕の発明品が機能することも一先ず確信できたしね。」

作り方さえ理解できていれば、再現は難しいことではないよ。

特殊な素材も必要ないし、僕が最初にこれを作ったのはロクに自由な活動も出来ないテロリストの洞窟拠点内部だった。

囚われ兵器作成を強要された中で、監視の目を欺きながら脱出手段の一部として作り出したのがコレさ。」

あつけらかんと言つてのけるトニー。

魔術師界限ならば珍しい話ではないが、一般社会ではそうそう起こらないレベルの物

騒な事件ではないかとアトラムも感じる。

今から19年後に死亡する人間だということは、自分と同程度の年齢の、その事件に出会う以前のトニー・スタークが現在に実在していることになる。

しかし、アトラムはそんな人物の情報など記憶に無い。

…英霊の座に登録されるほどの偉業を成す、北米を拠点に活動する大企業の社長と嘯く男の情報を、自分が知らないなどということが有り得るだろうか？

気にはなるが、今現在の自分にとって重要な事柄とは言えない。

それに関する問いを、アトラムは飲み込んだ。

「…それで？」

そんな劣悪な環境で制作した小さなソレが、一体どれほどのエネルギーを生むというんだ？」

トニーが持っていたりアクターを手に取り、まじまじと眺めながら問うアトラム。

「ああ、とりあえずコレ一基で毎秒3ギガジュールの電力を生み出す事が出来る。」

「な、なに!？」

驚愕のあまり、アトラムはおもわずリアクターを取り落としそうになる。

「おいおい、気を付けてくれ。」

落つことしたくらいで壊れはしないが、一応現界して初めての製作物だぞ。」

「ば、バカな！」

じゃあなにか!?

こんなちっぽけな発光体だけで、原発二基分のエネルギーを生み出すことが出来るというのか!?

「ああ、そうだ。」

僕の父が生涯を、そして僕の命の恩人が生命をかけて、ついに完成したモノだ。

その価値を正しく把握してくれるのは、喜ばしい事だよ。」

トニーの指摘を無視して興奮するアトラムに、トニーは苦笑して答える。

「……ふん。」

成る程、たしかにボクを唸らせるだけの成果物だったということだな。」

「そう言ってもらえるなら、時間をもらった甲斐があるというもんだ。」

コレはまだ第一段階で、改良品である第二段階以降に進むには別の作業が可能かの確認も必要なんだが…当面の課題は、そこじゃない。」

トニーは立ち上がり、魔術資料が納められたUSBメモリを軽く降りながら問う。

「果たして君の魔術は、リアクターが生み出す電力を魔力に変換可能か?という点だ。」

「…その根本的な疑問は、ここまで作業を進めてから投げ掛けるべき内容なのか?」

ジトツと睨むアトラム。

「まあそこは……エネルギー変換が真髓とまで豪語した我が主の腕前を、尊敬し信頼した故の判断……というか？」

おどけた口調で苦笑するトニー。

「フン……まあいい。」

お前はボクに成果を示した。

なら、次はボクが見せてやるさ。

我がガリアスタが潤沢な資金を元手に培った、代償魔術の真価をな。」

.....

夕暮れ時の冬木市。

俺は、学校からの帰り道を歩いていた。

生徒会の備品整備の手伝いで、少し遅くなっちゃった。

暗くなり始める時間帯で、両手にはパンパンに膨らんだビニール袋。

ゆるい坂道を上っているから、若干しんどい。

夕飯のための買い出しで、切れてた醤油を補充するくらいの気持ちだったのに買いきってしまった。

それもこれも、旬の白菜が安かったせいだ。

試食にあつた甘い冬大根のおろしが美味しかったというのもある。

白菜といつたら、この時期なら鍋が良い。

そういえば、藤ねえが今日は肉をガッツリ食べたいと言っていた。

桜は、今年の正月は餅を食べ損ねたと呟いていた。

それなら、豚肉と餅を揚げて入れる、みぞれ鍋なんかどうだろうか。

ならば大根が必要だろう。

そう考えたらあれこれ思い付いてしまって、家の食材ストックなんかお構いなしにア

レコレ買ってしまった。

…情けない。

直感でメニニューを選ぶと、こういう展開になりがちだ。

「はあ…。」

まあ、気に病んでも仕方がない。

それよりも、三人分の食材を想定して、残った材料を今後どうするかを考えておく方

が建設的だ。

一度刃を通した野菜は、どんどん鮮度が落ちていくから……

「あつー！」

不意に、買い物袋の底が抜ける。

とつさに膝で穴を覆うが、間に合わなかった白菜が転げ落ちて坂道を転げていく。

「わつ、とつ、ちよつ……！」

慌ててみても、白菜は止まることもなく転げて回る。

どうしようもない！

わーもう、なんでこうなのさ！

「おつと……これは、キャベツかな？」

君が落としたのかい？」

そこにまさしく救いの手。

後ろを歩いていたらしい人が、白菜を受け止めてくれたらしかった。

「あつ、すみません！」

ありがとう、ごさいま……す……。」

破れた袋を庇ってなんとか振り向くと、そこには一人の男が立って居た。

デカイ……服の上からもわかる筋骨隆々な肉体は、身長も180cm以上はある。

それに、綺麗にセットされたブロンドの髪に、白い肌。鼻筋の通った整った顔立ち。

「ずいぶん流暢な日本語だけど、一目で外国の人であることが理解できた。構わないよ。」

しかし、それ…大変そうだね？

「買い物袋が破れてしまったのか。」

白菜を両手で持ちながらこちらに歩みより、彼が言う。

「あつ…ああ、そうなん、です。」

「ちよつと、買いすぎちやつたみたいで。」

「みたいだね。」

その状況では、二つの袋を抱えて歩くのは至難の技だ。

「どうかな、一つ持つのを手伝おうか？」

彼の、そんな白く綺麗な歯を覗かせて微笑む様を見て、俺は慌ててしまった。

「え！」

「いやいや、そんな悪い、ですよ！」

大丈夫、破けた方の中身はカバンに詰め込んで持つて帰るから！」

「しかし、君は見たところハイスクールの学生だろうか？」

そのバッグには勉強道具が入っているんだろうし、全部は入りきらないんじゃないかな。」

「うっ……」

凶星だ。

今日は六時間授業だったし、置き勉強はしない派の俺のカバンはパンパンだ。

正直、けっこう困ってしまっているのは確かだった。

「なに、気にやむ必要はないよ。」

実は、僕はアメリカからこの街に仕事で来たばかりでね。

右も左もわからなくて、少し戸惑っていたところだったんだ。

誰かに街の話を聞けないかと考えていたところ、ローリングキャベツに遭遇したって訳さ。

だから……」

言いながら、男は白菜を持たない方の手を俺に向けて差し出す。

「荷物持ちの駄賃代わりに、少し街の話を聞かせてもらえないかい？」

「……」

なんとも、屈託が無くて頼りがいのある笑顔だ。

なんというか、100%の善意が全身から発散されて伝わってくるような感じがする。

もう、物理的に眩しく光って見えるような気さえしてくるのだ。

ていうか、その完璧な白い歯は実際光っているのかもしれない。

ここまで真つ直ぐだと、頼るのを渋るのさえ悪い気がしてきてしまい…

「わかりました。」

じゃあ、お言葉に甘えてお願いできますか？」

俺は、破れてない方の荷物を差し出して頼んでしまった。

「了解だ。」

僕の名前は…ブレット・ヘンドリック。

短い間になるだろうけど、宜しく！」

「俺は、衛宮士郎です。」

「こちらこそ宜しく願います、ヘンドリックさん。」

.....

「なるほど、冬木ハイアットホテル。」

「いいね、じゃあ当面の宿はそこを当てにしようかな。」

「当面の宿って…ブレット。」

海外から仕事で来たのに、拠点のことも考えてなかったのか？」

道中話しているうちに、俺はすっかり気安い接し方をするようになってしまった。

それだけ、ブレットの人柄が誠実で、話し易かったのかもしれない。

気を張らずにいられるのは助かる。

正直、なつてないとは思うけど敬語で話すのは苦手だったからだ。

「ああ、急な仕事だったんでね。」

おかげで、せっかく初めての日本だって言うのに観光を考慮する間もなかった。」

ブレットは、肩を竦めて苦笑する。

「大変だな。」

冬木なんて、見るものも大して無いから観光は期待できないだろうし。」

「そんなことないさ。」

シロウが教えてくれた中でも、リユードージって場所は興味があるよ。

話で聞いただけでも、まさしくジャパニーズ・テンプルって感じた。「
そういうもんか。」

まあ確かに柳洞寺は、参道から山門を抜けて本堂を望むまでの行程に、そこはかたなく風流を感じさせられるかもしれない。

友達の実家がこういう風に誉められるというのは、なんだか少し嬉しい。

「だったら良かった。」

ブレットも忙しいかもしれないけど、この街を少しでも楽しむチャンスがあるってんなら俺も嬉しい。」

「ああ、そうなれば良いね。」

感謝するよ、シロウ。」

そうこう話してるうちに、気付くと家の前に着いてしまっていた。

なんというか、ブレットとは通じるものがあるというか、会話をしていると時間があつたという間だった。

「ここが俺ん家だ。」

本当に助かったよ。

荷物、ありがとうな。

ブレット。」

「そうか。」

こちらも話を聞いて助かったし、お互い様だな。

しかし…うん。

シロウの家も、話に聞くりユードージって場所が連想させる良い雰囲気を感じさせる
とうか…素晴らしい屋敷だな。

実にトラディショナルだ。」

俺ん家を眺めて満足そうに頷くブレット。

少し照れ臭い。

「そ、そうか？」

古いだけだけどな…。」

「僕の友人が言っていた。

古き良きものこそ、人々の支えになるってね。

謙遜することはないさ。」

微笑むブレット。

何か、懐かしむような色合いを感じる。

「…ああ、そうだな。」

ありがとう、ブレット。」

「…よし、それじゃあ玄関口まで運ぶか……」

「あ、士郎ー！おかえりー！そして、ただい……ま………う？」

ブレットが言いかけた時、エンジン音・走行音と共に朗らかな声が響いた。

「おかえり、藤ねえ。」

乗っているスクーターを停車させ、丸い目をして俺とブレットを交互に眺める妙齢の女性がひとり。

「あ、うん、士郎…。」

えーつと…こちらは、どちら様…？

は、はろー。

ないすちゅーみーちゅー…？」

「…藤ねえ、俺が言うのもなんだけど、英語教師がその英会話能力つてのはどうかと思うぞ。」

慌てなくても、ブレットには日本語が通じるよ。」

「シロウ、彼女は？」

「ああ、藤村大河。」

ウチの学校の英語教師で、なんていうか…俺の保護者みたいな人っていうか、そういう人だよ。」

頬を掻いて笑う俺に、正気を取り戻した藤ねえが食って掛かる。

「みたいて何よ、みたいて！」

私は立っ派に、士郎の保護者なお姉ちゃんですー！」

「あー、悪い！」

勿論わかつてるって。

言葉のあやだつて。

で、こつちはブレット。

俺が買い出しの袋破っちゃつて、持ちきれなくて困つちまつた所を助けてくれたんだ。」

「はじめまして、ミス・フジムラ。

ブレット・ヘンドリックです。」

微笑んで手を差し出すブレット。

「なんと！」

それはどうもご親切に。

藤村大河です。

士郎を助けていただきまして、ありがとうございます。」

ハツとして握手に応える藤ねえ。

キツチリ教師とウチでのフリーダム感のギャップといい、このスイッチの切り替え具合は尊敬に値するよな。

「ハハ。」

僕もこの街に今日来たばかりで、地理に疎い所を彼に助けられましたからね。

お互い様ですよ。」

「そうなんですかー。」

ん？

ということとは、もしかして今日の夕飯の予定も決まっていなかったりしますか？」

「え…ええ。」

それはまあ、そうですね。」

「じゃあ、ちょうど良いですよー！」

その買い出しの内容からして、今日はお鍋でしょ、士郎!?

だったら、せつかくですからお礼ってことで、晩御飯を食べて行かれませんか？」

「え？」

「ちよ、何言ってるのさ藤ねえ！いきなりそんな誘い方したって、 Brett にも都合があるだろ!!」

「今、無いつて言ってたじゃないの。」

だったら、荷物持ちのお礼が街の軽い説明くらいじゃ足りないってば。

「一飯くらい之恩義で報いてもバチは当たらないでしょう。」

「そ、そうかも知れないけど……。」

俺は、ブレットの方をチラリと見やる。

「……そうですね。」

お招きいただけるなら、此方としては非常に光栄ですよ。

シロウ、構わないかな？」

優しく微笑み、問いかけるブレット。

なんだか、今の状況と俺の心境を汲み取ってくれたみたいに感じられた。

な、なんだこのイケメンは……！

確かに、俺も重い荷物を持つてくれた礼には足りないとは思っていたのだ。

それに、なんだかブレットにはもっと話を聞いてみたいような気もしていた。

理由の辺りは、自分でも良くわからないのだが。

「ああ、勿論。」

ブレットが大丈夫なら、是非食べてっくれ。

今日は、腕によりをかけるからな！」

なんというか、思った以上に澆刺とした声が出たことに自分でも驚いた。

.....

「お、やっぱ先に来てたな。」

「ただいまー、桜！」

玄関を開け、屋敷へ入っていく土郎。

「やあ、中もやっぱり素晴らしい。」

日本に来て、さっそくこんなにも日本的な家屋を見ることが出来て光栄だよ。

「お邪魔します。」

「わかりますよ。」

旅行に行くと、土地柄なりの建築様式に触れたくなりますよねえ。

「ただいまー、桜ちゃん！」

それに追従して大人二人が続く最中、既に明かりが灯っていた家屋内部から、パタパ

タと足音が聞こえてきた。

「先輩、藤村先生、おかえりなさい。」

「一緒に帰ってくるなんて珍しい…です、ね……。」

足音の主は、出迎えに現れた途端に視界に入ったブレットの顔を見て、足と言葉を止

めた。

「あー、桜。

そうだよな、やつぱり驚くよな。」

「大丈夫よー、桜ちゃん。」

このブレットさんは、士郎の恩人で日本語ペラペラのアメリカンらしいから！」

「いやいや藤ねえ。

そんな端折った説明じゃ意味わかんないだろ？」

「いいじゃんいいじゃん、説明は中に入ってからでき。」

うー、さぶさぶ！

早くおコタであつたまろー！」

バタバタと靴を脱いで駆け込んでいく大河。

「おい、高校教師！」

つたく、いくらプライベートだからって、廊下を走るなよなあ…。

悪い、桜。

説明は中であるから…ひとまず荷物下ろさなきやだな。

俺は手が塞がっちゃってるから、玄関の鍵、閉めといてくれないか。

ブレット、遠慮せず上がってくれ。」

「…ああ、わかった。」

大河に続いて、居間へ入っていく士郎。

玄関には、桜と呼ばれた少女と、ブレットの二人だけになった。

紫色の髪を、肩まで長さに伸ばした美少女。

目を引く外見をしている筈だが、それでもどこか儂げな印象を受ける。

少女は、目を見開いて金髪の偉丈夫を見つめていた。

「あ、あの…貴方は…。」

「…君は、『マスター』か？」

「……ッ！」

絶句する桜。

「落ち着いてほしい。」

僕は、*「君達」*と争い合う役割を割り振られた存在ではない。

ここに来たのは偶然だよ。」

ブレットは静かに、言い聞かせるように、優しく語りかける。

「…わ、私は……。」

「おーい、桜、ブレット？」

どうした、そんなところに突っ立って。

早く中に入らないと風邪引くぞ。」

不意に、居間から顔を出して土郎が語りかける。

「ああ、すまない。」

サクラが、僕の持つ荷物を代わりに持つと言ってくれてね。

だが、任された物事は僕が全うしたいと断つたんだが、彼女は優しさからか引いてくれなくて。

そこからは押し問答ってやつさ。」

「なんだそりゃ。」

真面目だなあ、二人とも。

それで体冷やしてちや世話無いぞ。

早く入ってこいよ。」

呆れたように笑い、土郎は引つ込む。

「ともかく、今は中に入ろう。」

出会った経緯はシロウが説明してくれる。

誓って言うが、君の存在を僕は知らなかったんだ。

信じてくれと、言葉を尽くす事しか出来無いけどね。」

「……わかり、ました。」

あの…ブレットさん。

私のコトは…二人には……。」

「わかった。」

秘密にしているのなら、僕が干渉することはない。

約束するよ。

…すまない。

戦いも始まっていない今、君の平穏を脅かすような真似をしてしまった。」
ブレットは沈痛な面持ちで謝罪したあと、桜を残して居間に入っていった。

「……どうして。」

先輩…私は……。」

悲痛な、絞り出すような小さな声は、誰の耳にも届くことはなかった。

E p i s o d e 4 : クリエイターズ

日本ではじめての夜は、予想だにしない暖かな厚意に触れる事が出来た。シロウは優しい少年だ。

他者の喜びを、そのまま自分の喜びとして受け取って感じられる少年。

彼とサクラが二人で作った鍋料理は、心に染み入る美味しさだった。

身体トレーニングについてよく訊かれたので、自分が識りうるかぎり効率的な鍛練法をいくつか教えてあげた。

“あの頃の僕”には効果がなかっただろうが、彼はまだ成長期に見える。

これからいくらでも強くなれるだろう。

タイガは、とても親しみやすい女性だった。

パワフルで、なんというか：はじめて出会うタイプ的女性だ。

体質の都合で酔うことの出来ない僕を相手に、よくあれだけ楽しく酒を呑むことができるものだと感じた。

朗らかで、陽光が射す様に人の内側を朗らかにする性格は、得難い長所だと思った。

サクラは、大人しい子という印象だったが：

それは無理のないことだったのかもしれない。

事情が事情だ。

僕の立場は、^{クラス}「大聖杯」の内部で嚴重に秘匿されている。

そうなれば、唐突に現れた僕は正体不明のサーヴァントでしかない。

戦争が始まる一月も前に突然生活圏で遭遇してしまえば、警戒してしまつて然るべしだ。

「…悪いことをしてしまつたな。」

呟いた言葉が、屋敷の闇に消える。

彼らは本当に優しい人たちで、今日の宿が決まっていな僕を引き止め、屋敷に泊めると言ってくれた。

タイガに付き合い随分酒を呑んでしまったので、酔つて見えないとしても、心配してくれたりしい。

落ち着いて考える時間も欲しかったし、お言葉に甘える事にしたのだった。

ブレット・ヘンドリック。

広告アートやコミックブックアートの携わるデザイナー。

海外進出を考えているアメリカ企業の、日本支社での広告デザインを担当するため来日した…という、設定。

そんな、確実さもない僕みたいな怪しい外国人を、出会ったその日に家に泊めるなんて。

底無しの善人だ。

危うくすらある。

だが、それでも尊い感性だと僕は思う。

サクラとタイガは帰宅したので、この家に居るのは僕とシロウの二人だけだった。

宛がわれた寝室の扉：シヨウジを開き、夜空を見上げる。

「……………」

…今現在、召喚済みのサーヴァントの数は四騎。

狂戦士は、この街には居ない。

魔術師は、恐らく新都と呼ばれるビル街に居る。

動きがない事を考えると、拠点を作成し戦争の準備をしているのだろうかと思われる。

騎乗兵は、此処からさほど遠くない場所に居る。

こちらもあまり動きがない。

暗殺者の召喚も確認できるが：気配遮断スキルが働いているらしく、居場所は把握できない。

単純に考えれば、バーサーカー以外の何れかがサクラのサーヴァントなのだろうか

…。

…僕の目的、やるべき事を考えれば、気にする必要はないのかもしれない。だが、僕は知ってしまったのだ。

戦意ではなく、恐怖に揺らいだ彼女の瞳を、見てしまった。

まずい事態になっているのを見ると…無視できないんだ。

立場も何もなげうって、動いてしまうかもしれない。

無視、できたら良いのに…。

『ウソだろ?』

…心の中で、彼が笑った。

かけがえのない、仲間かぞく。

戦友の声。

「フ…そうだな。」

瞬く星を見つめながら、思わず微笑んでしまった。

…僕には、目的がある。

この世界に喚ばれた理由、果たすべき事が。

だが、戦うのは使命を与えられたからだけじゃない。

僕は、護るべき個人の自由…そのためにこそ戦うんだ。

今日、このエミヤ邸で触れ合った人たちの、優しさに誓おう。

“僕らの世界からのイレギュラー”を、必ず打ち倒して見せることを。

………

2004年 1月中旬

冬木市・新都

ガリアスタ所有高層ビルディング

あれから、十数日が経過した。

結論から言えば、ボクの代償魔術は最良の形で功を奏したわけだ。

大成功だ。

当然と言える。

何せ、半永久的に膨大な電力を生み出す機関”など：あまりにも、ボクが有する”
いくつか”の魔術と相性が良すぎるアイテムだったからだ。

ひとつは当然、原始呪術。

そしてもうひとつは：『バグダッド・バッテリー原始電池』。

中東郊外・ホイヤットラ・プヤ遺跡にて発掘された、世界最古の電池とされる壺。

その流れを汲む、中東のとある魔術師一族が発展させてきた。科学ならざる電力機器だ。

その一族を、没落寸前で我が祖父が「歴史と技術」ごと買い取ったのである。

有する機能は、「雷に自らの魔力を付加する」コト。

つまり、なんということはない。

原始電池にリアクターを組み込むだけで、問題など一発で解決なのであった。

原始電池は、今までは強力な戦闘特化の魔術礼装として扱ってきた代物だ。

溜め込んだ雷を操り、電速の攻撃を繰り返したり。

配下の一族三十人ほどで、天候に働きかけて余所の魔術師の拠点を落雷攻撃したりし

たものだ。

…本当は、あの作戦が想定通りに進行してさえいれば、触媒として『菩提樹の葉』が手に入り、最強のセイバーを引くことが出来ていたかもしれないのだが…。

いや、言うまい。

あんな「怪物」の考えなど、推し量れるものではないし…思い出したくも無い。

それにお陰様で、こうして間違いない人間以上の代償素材を入手するに至ったのだから。

原始電池を通して「神秘を励起」させた電気エネルギーは、その内在魔力において人間を大きく上回る。

当然である。

何せ、電気：つまり雷とは、元来「天の神業」みわざに他ならないのだ。

ギリシャのゼウス、ローマのユピテル、北欧のソー、インドのインドラ、中国のきゆうてんおうげんせいふかてんそん九天応元雷声普化天尊：天雷の象徴たる神など、枚挙に暇がない。

我が原始呪術・原始電池に紐付くアラビア神話に於いて言うならば、クザイ神が該当する。

天にかかる虹は彼の神の弓、稲妻は矢、雹は投げ槍であるとされる。

ジャジーラー、アルアラブアラビア半島にイスラームの教えが根付くより以前に土着していた、多神教の一柱である。

つまり我が魔術に於いて、魔力を帯びた雷を扱うコトは、生け贄を捧げるコトと同等に相性が良いのだ。

：なんだか、我が友人のライバル講義のような理屈をこねてしまったが。

つまりは、リアクターを組み込んだ原始電池から発せられる、無限の電気魔力：それを代償魔術でもって純粋な魔力結晶に変換する！

今ここに、我が家の魔術は一つの究極に至ったという話である！

はははは、なんだこれは！

祖父の夢見た理想のエネルギーそのものではないか！

キヤスターの言った通りである。

奴が作った成果物を変換し、ボクが潤沢なエネルギーを生み出す！

ボクがやったのだ！

…いや、認めねばならない。

トニー・スターク。

奴の存在は、間違いなくボクの子カラと相性が良い。

ならば、主従としての連携を、もつと密にするコトも視野に入れねばならないかもだ。

これは、ボクの魔術ブライトを賭けた戦いだ。

ボクはこの戦いで名を上げ、ガリアスタの存在を磐石なものにする。

それが、祖父が魔術に込めた想いを成就させるコトに繋がる。

しかし、同時にこれは奴の戦いでもあるのだ。

…そういえば、ボクは奴が聖杯戦争にかける「願い」を知らない。

主従として並び立つならば、何を欲するのかを知っておく必要がある。

そう、思い始めていた。

「おいー！」

聞いているのか、マスター？」

不意に、声が張り上げられる。

「…ああ、悪い。」

少し考え事をしていた。」

「そうか？」

なんだか恍惚な感じで “これ” を見つめてたから、持ち前のナルシズムが発揮されたのかと思ったよ。

ホラ、自分の造り出した作品に対する満足で、トリップしちゃってたのかと。」

「…やかましい。」

まあ、作り上げたものに対する自信に、多少高揚していたのは認めるがね。」

アーク・リアクター搭載型原始電池…

名称を仮に『M^{ミステック}・P^{パワー}・S^{ソース}・リアクター』と称したソレを接続した代償魔力炉は、想像

以上の結果を齎した。

以前の素材を使用した状態では、子供六人程を使用した上で、ソフトボール程度の大きさの魔力結晶しか精製できなかったのだ。

しかし、目の前の成果物はどうか。

M. P. S. リアクター一基を通常稼働しただけで、まさしくティーンエイジャー一人分ほどの大きさの魔力結晶が精製できてしまったではないか。

「正直、震えるね。」

「この技術は、今後の表社会も魔術社会も、大きく変えるぞ。」

「かもな。」

だが、これで認めてもらえるな、マスター？

子供を動力に使うのはナシだ。」

「こやかに確認するキャスター。」

「…ああ。」

しかし、折角「買い取った」素材が50体以上、無駄になってしまったな。

ソレ以上の利益を生むアイテムを手にした以上、気にするような出費でもないが。」

「…やはりあの子らは、君のホームグラウンドで買い付けてきた子供達だったか。」

キャスターは、それを確認すると苦々しげに呟く。

「ボクが拠点を置く国ならば、余所からの観光客を見かける程度には近代化していて治

安もそれなりには良いがね。

だが、それでも一皮むけば世界の現実なんてそんなものさ。」

ボクは肩を竦めて、しかし特別な感慨もなく言う。

ソレに関して、キャスターの信条に合わせて悪びれるつもりも一切無い。

我が家は元々、篡奪者さんだつしゃの家系だ。

武力をつけ、財力を掴み、権力をもぎ取り、魔力を買い取った。

その全ては、勝つべくして冷静で強欲な研鑽を積み上げてきた成果だ。

魔術を否した父ですら、その点に於いては豪烈だったと認めざるを得ない。

代々、先代を超えるべく豪なれと磨いできた一族。

故に、ボクも当然、最も一族で優れる為に生きる。

それこそが、一族の強さの証明にもなるからだ。

今回のソレも、その一環だったというだけだ。

余所者に倫理観とかいうモノを説かれたところで、そんなもの。

そちらの世界の感覚を、覚悟も無く押し付けるな…という話だ。

「…あの子達は、どうする？」

「どうも何も…用済みだからな。」

余所に転売して、少しでも損失分を回収するか…。」

そこまで言うとは、キャスターはあからさまに表情を曇らせた。

…こいつ。

子供絡みの事柄に対しては、妙に感情的になるな。

過去に何かあったか？

伝承に逸話が残る過去の英霊とかではないから、どうにも判別がつきづらいが、生前ほんたいの事情を持ち出しすぎじゃないのか？

複製品の使い魔の分際で。

半ば呆れたものだったが、それでもヒゲオヤジがシヨゲた顔を見ると、それをそのまま口に出す気にもなれず……

「…あるいは、ボクの一族で役立つ何かに育ててみる、とか。」

戯れに、適当に思い付いたアイディアを口に出してみた。

「…ほう？」

そいつはまた…ユニークなアイディアだ。

君の口から、そういった言葉が出てくるとは夢にも思わなかったが…良いね、実に建設的だよ。

未来投資というのは、贅の尽くし方としては非常に有意義で痛快だ。」

また、あからさまに機嫌を良くする、我が使い魔のオヤジ。

言ってみただけだ、と前言を撤回するコトも出来た。

だが：どうにも、そういう気にはなれなかった。

自分の使い魔の機嫌を慮おもんばかつての発言では、断じて無い：と、思う。

もしかすると、かの『双貌塔』に於いてボクを苦しめてくれた友人ライバルの教え子：現代魔術科の子供達を思い出してしまったのかもしれない。

ああいうのを発掘して育てるといふのは、どういう気分なのかな、と。

「…まあ、いずれにせよ戦争が始まる前には、この国からは出しておいた方が無難だな。

お前を召喚した時点で、戦略プランの大幅な見直しが必要になったんだ。

非戦闘員は、侍従達も含めて邪魔になる。

配下の精鋭をある程度残して、残りは本国に帰還させるとしようか：」

そこまで言った時、突如としてブザーが鳴った。

ビルディング敷地内に設置した防犯センサーに、何者かが引っ掛かった合図である。

『スターク様、ガリアスタ様。』

敷地内に、許可の無い何者かの侵入を確認しました。

魔力反応と生体反応を感知、魔術師かと思われませう。』

ブザーが鳴り止むと同時に、女性の音声がスピーカーより響く。

「ありがとう、F・R・I・D・A・Y。」

このタイミングで、魔術師の侵入者ってことは…マスター。」
F・R・I・D・A・Y・とは、キャスターの宝具の一部である。

超高性能の学習型人工知能。

あらゆる面でキャスターのサポートを行う、優秀な電子秘書といったところか。
しかし、セクシーで良い声だ。

このオヤジ、中々に良い趣味をしている。

「これは驚いたな。

まさか、開戦前にも関わらず魔術師陣営の「陣地」に飛び込んで来る勇者が存在するとは。」

自然、口角が上がりてしまう。

ボクがキャスターを召喚して、半月。

このビルディングが我が工房であると、いかに時代遅れの魔術師連中でも流石に気付ける頃だとは想定していた。

しかし、まさか勇敢にも本陣に直接挑んで来るとは。

余程の自信があるのか、或いは…。

「最初の実戦、か。」

気が早いことだ。

で、マスター。

「まずは当初の予定通りで構わないな？」

「ああ、勿論だとも。」

ボクは、踵を返して魔力炉室を後にする。

追従するキャスト。

「我々は、エネルギー開発にばかり心血を注いできた訳ではない。

そのために、お前には数多の貴重な魔術資料を閲覧させたんだ。

平行して配備していた、もう一つの成果物も確認させてもらおうとするさ。」

「ああ、了解だ。

僕の『陣地作成』と『アイアン・レギオン鉄人兵団』。

その機能を是非お見せしようじゃないか。」

.....

闇夜の冬木・新都。

その寒空の下、ライトアップされ輝く巨大な一棟のビルディング。

きらびやかな其処は、しかし周囲のビル街からは隔絶されているという印象を与えた。

単に、他のビルを見下ろす高層設計になっているだとか、外周に十分な敷地が存在し、其処に雰囲気を彩るような木々と照明柱が設置されているだとか。

それらもそれぞれ要素の一つ一つではあるかもしれないが、そういった理由だけではない。

間違いなく、「何らかの人為的なやり方」で、他者を寄せ付けない何かを、そのビルディングは発していた。

しかし、そんな場所に近づく人影が一つ在った。

青紫色の特徴的な癖つ毛に、蒼白とさえ言える白い肌の少年。

フアーのあしらわれた白いジャケットを纏い、黒い手袋を嵌めた手には何やら「書物」を携える。

整った顔立ちは、不敵な笑顔で歪んでいた。

「お初にお目にかかります、ミスタ・ガリアスタ。

ぼくの名前は間桐慎二。

始まりの御三家・間桐の次期当主にして、此度の聖杯戦争の参加者^{マスター}です。

何卒、宜しくお願い致します。」

敷地に踏み入った後、一礼をした後ビルディングを見上げる少年。

始まりの御三家。

聖杯戦争という魔術儀式を開催した、三人の魔術師の末裔とされる。

周囲に人影は無いが、明らかに相手が見聞きしているのを想定した振る舞いをしてい
る。

その態度は、不穏なものを含ませながらも堂々としたものだった。

『これはこれは。

礼節を弁えた御仁の様で、感服した。

この極東の地に住まいながら我が名をご存知とは、事情通でおられる様だが…礼節に
は礼節で返さなければな。

はじめまして、マトウのマスター。

私が、アトラム・ガリアスタだ。

此度は、時計塔推薦のマスターとして参戦した。

此方こそ、有意義な戦争となる様、宜しく頼むよ。』

刹那、照明柱に備え付けられたスピーカーから声が響くと共に、慎二の前に人影が現れた。

夜間であり、照明で照らされている事を加味したとしても、その人影は随分と色彩を保っており明るい。

「…魔術による映像ビジョンつてやつですか。」

一瞬驚いたが、直ぐに不敵な笑みを取り戻して少年は言う。

『それは半分正解、半分外れといったところかな。』

直接姿を見せられず、申し訳ない。

なにせ、こちらのサーヴァントのクラスはそちらも想定済みだと思うからね。

うかつに「マンション」から出るワケにはいかないんだよ。』

「何、構いませんよ。」

穴熊を決め込むのなら…引きずり出して差し上げる。

…ライダー!」

少年は、携えた書物を開いて叫んだ。

書物は輝き、同時に遙か上空に大きな影が出現した。

その影の正体を判別することなど、魔術で『強化』された肉眼ですら困難であった。
迅^{はや}い。

辛うじて確認できる、それが纏う色は白。

白い暴風と化したそれは、一足飛びにビルディングに突撃していた。

『ほう、騎乗兵のサーヴァントか。』

初手でカミカゼとは、如何にもジャパニーズらしいと言えなくも無いが…。

しかし、それは成らなかつた。

ビルディングの壁面に直撃する寸前、『光の壁』に阻まれる。

「っ!!」

完全に勢いを殺された白は、その姿が露となる直前に霧散した。

場に残ったのは、その乗り手であろう存在のみ。

宙空から、しなやかに着地して見せたその人物は、女性だった。

紫色の長髪を風に靡かせた、長身の女性。

扇情的な衣服に身を包み、その目は眼帯で覆われている。

「チツ…：やっぱりそう易々とはやらせてくれないか。」

ライダー、下がれ！」

『成る程、アレはそちらのサーヴァントの宝具だったか。』

宝具とは、その英霊が持つ高名なアイテムや逸話そのもの。

姿形で正体がバレてしまうほどの逸品だった、というわけだね。

直ぐに隠すのは、良い判断だ。』

「ええ、まあ…その通りですよ。

あの謎のバリヤーさえなければ、貴方の陣地を基礎ごとへし折って破壊して差し上げられたんですが…。

まあ、構いません。

威力偵察を行うなら、これくらいはやらないとキャスターの陣地は崩せない。」
尊大な笑みの褐色と、冷や汗一つに不敵な笑みの蒼白。

『いや、素晴らしい覚悟だ。』

思いきりの良い用兵を行う魔術師は、好感が持てるよ。

時計塔の老いぼれ連中とは大違い。

礼と言っては何だが…君の言う威力偵察に、もうひとつ成果を加えてあげよう。』

アトラムが言い切るか否かのタイミングで、ビルディング上部から新たな人影が飛び出す。

メタリックレッドにゴールドのヒューマノイド・ボデイ。

胸には丸いリアクターが輝き、両手足部から何らかのエネルギーが噴出。

その状態で宙空に静止していた。

「…なんだ、アレは？」

思わず、慎二が本音を漏らした。

これは、聖杯戦争だ。

魔術師同士の殺し合い。

神秘と神秘をかけた決闘のはずだ。

なのに、空に飛ぶアレは…どうみても、魔術に属する代物ではない。

どちらかというと、超科学…いや、

サイエンス・フィクション
S F のソレじゃないか。

『さて、僕の相手はそこのお嬢さんというコトで良いのかな？

だったら悪いが、少しの間付き合ってもらおうか。

此方で『作成』した、アーマーの性能テストをね。』

Episode 5・魔術師（キャスター）VS 騎乗兵（ライダー）

相手方のサーヴァント…おそらくキャスターは、空中に静止しながら攻撃を開始した。

そのメカニカルなボディの肩部が展開し、数発の小型ミサイルが発射されたのだ。バカな、魔術儀式でミサイルだど!?

神秘に満ち溢れたサーヴァント戦らしからぬ光景に目眩がしてくる!

『ライダーのマスター君。

巻き込まれなくなきゃ、引っ込んでろよ!』

馬鹿にしやがって!

そんな忠告、撃ってからするな!

鎧が遮蔽物となり顔もステータスも覗けないが、奴の浮わつた口調は腹が立つ!

「ライダー!」

ぼくのコトは構わず奴を攻撃しろ!」

ぼくは、片手に『偽臣の書』を握りしめながら走り出す。

ミサイルに狙われてしまつては堪らない。

それを眺めるアトラム・ガリアスタの、獣を追い立てる様な：寧猛で嗜虐的な瞳が気に食わない。

ああ、確かにお前にとってぼくは罠に迷い混んだ獣にしか見えないだろうさ。

だが、獣を侮ると痛い目を見るコトを教えてやる…！

「…っ！」

ぼくの言葉に反応し、ライダーが駆け出した。

その両手には鎖つきの短剣が握られ、それを巧みに操りながら迫り来るミサイルを叩き落として行く。

その鎖の軌道は、獲物を狩り取る蛇の如くであった。

『Wow！』

なんとも扱いのメンド臭そうな武器を使うな、レディ！

とんかち振り回してた、どっかのサーファー君と良い勝負だ！』

しかし、キャストはその動きを読んでいた。

数発のミサイルは、動き方を限定するためのモノだったらしい。

奴の両掌が、ライダーの脱出コースに向いていた。

瞬間、そこから輝く炎とも雷ともとれる一閃が放たれた。

まさしく光線レイと称するに相応しいそれは、避ける間もなくライダーに襲いかかる。

だが、直撃は免れた。

ライダーの敏捷値はB。

如何に光の一撃と言えど、そう易々とはいかない。

しかし…それでも、ライダーの腕を掠り、黒く焼き焦がす程度のダメージは与えられてしまった。

それは即ち、一つの真実を浮き彫りにする。

「アレは…あの機動兵器らしきモノはやはり、『神秘を宿している』というのか!」

サーヴァントの体は、高密度のエーテル体だ。

神秘に満ちたその靈基からだは、元来高ランクの神秘を宿す攻撃以外では傷一つ付けられない。
い。

刃物だろうがミサイルだろうが、神秘の伴わない攻撃など意にも介さず、疲れも知らずに戦い続けることが可能な最上級の使い魔なのだ。

それを…ロボット奴が間違いなく傷を付けた。

その事実。

奴は、『此方で作ったアーマー』と言った。

つまり、奴はサーヴァントを傷付けるに足る兵器を製造するコトが可能な英霊と言うコトになる。

その脅威。

「……っ！」

ライダー、そいつを放置するのは危険だ！

何がなんでも仕留めろ!!

“外して”も構わない!”

ライダーは、無言の同意とでも言わんばかりに歩みを速めた。

ピルの壁面：ではなく、あの光の壁。

強い反発力のあるエネルギーの障壁を、あたかもそれが当然であるかの様に二本の足で駆け上がり、瞬く間に飛行するキャスターの目線まで登り詰める。

『おいおいマジか。』

バリアをよじ登るなんて、そんなのアリか?』

あつという間にコチラの射程範囲に入ってしまったつてのに、キャスターは間の抜けた調子で言葉を漏らすのみだった。

しかし、一々大袈裟な身ぶりでリアクションをとるやつだ。

気に食わないが、だからこそ逃がさない。

ライダーの鎖が、キャスターの右腕部を絡めとる。

『ウわわっ!!』

そのまま、鎖を勢いよく引き込んだ。

ライダーはCランクの筋力に加え、Bランクの『怪力』スキルを持つ。

恐らく足からの噴出で浮力を得て、腕からの噴出で姿勢制御していたキャスターでは、ライダーのパワーで引つ張られてはバランスを保てまい。

鎖に絡まったキャスターが眼前まで迫ったところで、ライダーは“眼帯”に手をかけた。

『えっ……?』

ライダーの顔が、露あらわになる。

此所からは確認できない。

出来てしまうと、マスターであるぼくでも影響を受けていただろう。

“眼”を解放したライダーの存在を認識し得る距離に居るコト。

それが、ライダーの“魔眼”の発動条件だった。

これでキャスターの奴は“石”になる。

もう、飛び回るコトは…

『…アー、お嬢さん?』

君の顔や瞳が美しいのは、十分に理解したよ。

だから、そんなに情熱的に見つめないでもらえるかな？

僕には愛を誓った妻子が居るものでね。

君の想いには応えられないよ。』

「なっ……！」

バカな、無事!?

ランクAの対魔力を持ってたって、かなりの重圧を与える『宝石』ランクの魔眼だぞ

!

面を食らうライダーとぼく。

驚愕はまだ終わらない。

終わってくれない。

『しかし君の鎖のパワーといたら、参るね。

引き剥がそうにも、装甲が凹んで食い込んでしまつて。

なら、こうするしかない。』

いいながら、至極あっさり。

キャスターは、己の右腕を“切り捨てた”のだった。

身体が自由になったキャスターは、そのままライダーに向き直る。

『さあ、次のはさつきより強烈だぞ。

効果は如何程に…つと！』

瞬間、キャスターの胸部が強烈に輝いた。

光の炸裂。

ほぼゼロ距離で、さつきの光線の何倍も強烈な光の束が…

今度は、ライダーに直撃した。

「あああ…つ！」

光の束に圧され、光の壁に叩きつけられる。

二つの高エネルギーに挟まれたライダーは、堪らず小さな呻き声をあげた。

…ああそうだ、分かってたコトだ。

あのバリアーだって、宝具の突撃をはね飛ばすほどの神秘を内包して…つてコトくら

い…！

「ライダー！」

光の壁を思い切り後ろ蹴りしろ！」

身体が焼かれる痛みに耐えながら、力を振り絞ってぼくの命令を実行するライダー。

その勢いで、なんとか挟撃から脱出する。

『おつと！』

無茶するなあ、お嬢さん。

ウチのチームに居た、青い肌の良い子ちゃんを思い出すよ。』

最初のしなやかさも見る影もなく、なんとか着地するライダー。

若干ふらついた手つきで、なんとか眼帯をかけ直す。

ダメージが思ったよりデカイ。

ライダーの耐久力は、最低値のEだ。

うかつにダメージを貰えばこうなっちゃうのは分かってたコトだったのに…！

『…なるほど。』

君のサーヴァントの真名に、アタリがついたよ。

マトウのマスター。』

僕の隣に己の映像を映し、アトラムが言う。

「…へえ？」

そいつはすごい、今のちよつとしたやりとりだけで、もう把握できたって言うのか？」

心臓が早鐘を打つ。

『いや、随分と分かりやすいと思うがね、アレは。』

ましてや私は此度の聖杯戦争で、君と同じ『古代ギリシャの英霊』を喚ぶつもりだった。

一通りの逸話については頭に置いてあったので、推察は簡単なものだったよ。』
…ああ、クソっ。

こいつは、完全にたどり着いている。

『キヤスター、先程の熱烈な視線は、お前に対する求愛行動ではない。

『魔眼』を利用した、立派な攻撃だよ。』

『そいつはまた…ありがたいやら残念やら、複雑な心境だね。』

キヤスター陣営の主従は、余裕綽々といった風体で会話する。

片腕では姿勢制御に難があるためか、金属音と共に地面に降り立ったキヤスターではあるが、その焦りは欠片も見られない。

『確かに。』

映像で見る限り、かなりの美女だ。

あの格好にもそそられるものがあるし、『海神』に見初められたのも頷ける。』

ライダーはその言葉を受け止め、不快そうに齒軋りをする。

アトラムが言うや否や、上空に映像が写し出された。

何もない空間に、前触れもなく。

アトラムの姿を映している術の応用だろうか。

その映像は、ある一コマを切り取って静止していた。

『直ぐに宝具を隠して、姿形を見られない様にする発想は良かったけれどね。』

それは古くさい魔術師連中の、時代遅れな決闘ごっこでしか通用しないと理解すると良い。

科学技術による映像解析と魔術を併用するコトが出来る相手には、一瞬の油断が命取りになるのだよ。』

その映像は、宝具が消滅する直前。

光の壁と宝具の激突による衝撃光は、なんらかの手段で取り払われていた。

そこに映るのは…。

衝撃で投げ出されるライダーと、“白い天馬”の姿であった。

『はあ、なるほど。』

視るだけで攻撃手段になる眼と、美しい天馬。ペーガッス

これなら僕にも正体がわかったぞ、マスター。

お嬢さん、貴女の真名は『メドゥーサ』だろう？おなまえ

あの宝具は、貴女のご子息…ご息女？かわいこちゃん

どちらかわからないが、お仔さんかな？』

「…っー」

…最悪だ。

戦闘では、右腕を貰った分こちらが優勢と言えなくもない。

だが、聖杯戦争は情報戦の側面が強い戦いでもあるのだ。

名だたる英霊は、その逸話に栄光の側面も彩られれば、同時に弱点なども強く映し出す。

真名が知れてしまうと言うコトは、攻略法を知られてしまうコトと同義だった。

…いや、本来はこんなことになるハズは無かったのだ。

魔眼が…石化の魔眼さえ通用していれば！

「…なんなんだ、お前。

なんで、魔眼が通用しないんだ！

おかしいじゃないか！」

堪らずぼくは、叫び声を上げる。

応えが返ってくる筈もない。

聖杯戦争は情報戦なのだ。

己の秘密を、容易く明かす筈が…。

『ふむ、君は戦術眼そのものは悪くないが、状況を見通す観察眼が些か鍛練不足だな。

冷静に考えれば、理解できそうなものだが。

いや…それとも魔術師の常識と我々の常識は別なのかな？』

キャスターが、残った左手を腰に当てて、わけのわからないコトを言う。

『人間が、腕がもぎ取れて平気なワケがないだろう。』

その瞬間、空をつんぎく轟音が鳴り響いた。

キャスターが現れたビル上部。

其処から、複数の何かが飛び出す。

人影が一つ、二つ、三つ……いや、十体以上は出現していた。

「ば、バカな……」

それは、キャスターだった。

細部の形状は違うが、基礎には同じ設計思想が存在するであろうロボット機械の群体。

その光景に、やっと理解した。

今まで、ぼくらが戦っていたキャスターは。

ぼくのライダーに、ダメージを与えてくれたソレは。

“本人”じゃあ無かったのだ。

まさしく外見通り、ロボットだったのだ。

奴の“作った鎧”アーマーという言葉に、引つ張られてしまっていたのか。

敵の英霊という、常識の埒外に在る者の姿を、突飛な姿であっても不思議ではないと、思考を放棄していたのか。

ステータスが確認できない時点で、疑問に思うべきだった。

リモコンロボットには到底見えない、血の通ったような動きに騙された。

腕を一本貫つて優勢など、馬鹿げた話だ。

奴にとつては、数多ある手駒が少し欠損した程度の損害でしかなかったのである。

魔眼が効かないはずだ。

奴は離れた場所で、映像に写ったライダーを眺めていたに過ぎないのだから。

如何に神代の神秘だとして、こちらが仕組みを把握して適切に対応でもしない限り、現代の無機質な科学技術を突き抜けて発揮など出来る筈もない。

『さあさあ、まだまだ試したいアーマーは沢山在るんだ。』

マーク47からの遠隔システム移植実験。

この“マーク7”は引き続き僕が操作しよう。

F. R. I. D. A. Y.

他のアーマーの機動テストは君に任せるぞ。』

『了解しました、“キャスター”様。』

“ハウスパーティー・ドライラン・プロトコル”を実行します。』

無数のアーマーの眼光が、此方を射抜く。

…駄目だ。

勝てない。

少なくとも奴の拠点を舞台にしたんじゃ、今の“ライダーではギリ貧になる…!”
「ツライダー!」

再び宝具を発動しろ!」

ライダーが、その首筋に刃を突き立てる。

『うわ、何やってんだ?』

見目麗しい女性の自殺願望なんてのは、絵になり過ぎて逆に怖いぞ!』

ドン引きしながらも、アーマー軍団を殺到させるキャスター。

ライダーの宝具発動には、若干のタイムラグが存在する。

間に合うか…いや、間に合わせる。

“奥の手”を使ってでも…!!

『レンジ外から、高速で飛来する複数の微少なエーテル体の反応を感知しました。』
『何?』

瞬間、連続した金属音と共にアーマー軍団に“ナニカ”が激突する。

衝撃こそ大したことはないが、鋭い。

深く、浅く、突き刺さった複数のソレは、一瞬キャスターの駒の歩みを止めた。

その間に、ライダーは宝具を完成させる。

首から滴った血液から、天馬が産み出されたのだ。
すかさず騎乗し、駆け出す。

『つ…クソ！』

キヤスター、
『逃がすな』！』

『ああ、了解！』

F・R・I・D・A・Y、全機ミサイル発射！

フォーメーションH・L・Fだ！』

『了解しました。』

キヤスター様。』

一斉に撃ち出される、無数の小型ミサイル群。

くそつくそつ！

ふざけやがって、これじゃあ本当の戦争じゃないか！

アトラム・ガリアスタ！

金に明かして、日本国内でなんて戦い方しやがる！

「ライダーあー！！」

ぼくは、駆け寄るライダーに手を伸ばした。

それをひっ掴み、素早く内側に招き入れる。

攻撃からぼくを庇う姿勢。

この女は、カンこそ多少鈍いが冷静な判断には優れているので最短の言葉で状況を把握できる。

これなら……!

途端、急加速。

迫り来るミサイルを、全速力で駆けながら難なく躲かわして突き放す。

そうしている内に、ミサイルもキャスターも見えなくなり、奴等のビルさえも彼方の光点と化したのだった。

.....

「……行ったな。」

ガリアスタビルの一室、管制室にてモニターを眺めながら、アトラムは呟いた。
「みたいだな。」

まあ…逃がしはしていないが。

F. R. I. D. A. Y?」

『はい。』

ミサイルフォーメーションH. L. F。

The^木 best^の place^葉 to^を hide^隠 a^す leaf^な is^ら in^森 a^森 fore^へs ["]

“。 成功しました。』

「OK。

位置座標を表示すると同時に、音声を拾ってくれ。」

『了解しました。』

僕とのやりとりの後、F. R. I. D. A. Yはシステムを繋げる。

モニターに冬木市の地図と、同時に音波グラフが出現した。

『…クソクソクソクソッ!!』

お前のせいだ、お前の宝具さえ初手で決まってるや、こんなことにはならなかったん

だ！

どう責任をとるつもりだよ、ライダー！』

『…申し訳ありません。』

『謝ったって、なんの解決にもならないんだよ！

こっちはお前の真名も！

もしかしたら“切り札”の存在も見破られちゃったかもしれないんだぞ！？

まだ正式に戦争開始もしてないってのに、大ダメージじゃないか！』

スピーカーから、とある男女の会話音声が流れる。

苛烈に罵声を浴びせているのがライダーのマスター、シンジ・マトウで、それに平謝りしているのがライダー…メドゥーサその人だった。

名高きギリシャ神話に伝わる美女に、好き勝手怒鳴り散らす少年。

「…盗聴機を仕掛けられたのは良いが、これは……。

なんとも聞き苦しいな。」

そう、あのミサイル乱射は囧だったのだ。

フォーメーションH・L・Fは、アトラムの“逃がすな”の言葉を合図に発動する、

全力で、しかも気付かれる事なく盗聴・座標把握を行う装置を取り付けるための戦術だった。

ミサイルはそれなりの破壊力こそあるが、その弾速ではサーヴァント相手に易々と当たるものではない。

しかし、確実に牽制にはなり、相手の行動を大幅に狭めるコトが出来る。

とりあえず靴に取り付けたし、拠点に帰られた後も広範囲で盗聴できるので、彼の行動は今後我々に筒抜けということになる。

…思春期のティーンエイジャー相手には、些か気が引ける話ではあるが。

しかし…

「いや、僕の見立てでは、もし君が女性のサーヴァントを召喚したら、こんな感じで無闇に強気になってマウント取りに行つてたと思うぞ。」

「……。」

僕の指摘に、押し黙るアトラム。

己の事ながら、容易に想像できてしまつていたのである。

相手がメドゥーサの様に、仕事に対して冷静に動けるタイプならまだしも、私の強いタイプとかだつたら反逆されて殺されていたかもしれない。

そんな光景を、僕でさえ容易に想像できてしまう男だ。

なぜ出来るかつて？

僕も似たような経験があるからだ。

懇意の女性に手をあげたり罵声を浴びせたコトはまず無いが、恨まれたコトは数知れず。

極めて恥ずべき過去だが、事実だから仕方がない。

口には出さないが。

「…ソレはともかく、奴が向かっている場所は何処だ？」

この方角なら、マトウの屋敷とやらではなさそうだが。」

気を取り直し、話題を変えるアトラム。

この十数日で僕の態度に慣れたのか、もう一々目くじらを立てることも無くなった。

そうなれば、彼は優秀な戦略家であり戦術家だ。

非常に頼りになるマスターである。

「フム…此方の尾行を警戒して、迂回して戻るつもりなんだろうな。

彼は若者らしいピーキーさこそあるが、中々戦術にかけては優秀であるらしい。」

僕は、正直感心してモニターを眺める。

魔術師つてのは、みんなああなのか？

あの若さで、よくもあんなクソ度胸を発揮できるものだ。

「…それに関しては、ボクも認めるがな。

中々興味深い少年である、とは。

しかし、それと戦いは別の話だろう。」

アトラムは、モニターを眺めながらも顔をしかめて言った。

「僕が、マスターを攻撃しようとしなかったことを責めているのか？」

「…まあ、今回は良い。」

突発的だったし、兼ねてから考えていた設備のテストを行えたのだからな。」

僕のスキル…

『サイエンス・スクリーム至高の科学者』は、生前に造ったすべての発明品を再現可能とするものだ。

さらに、召喚後に培った新たな知識すらも、スキルの一部として取り込むことが出来る。

生前、親父の研究を吸収してアーク・リアクターを完成させたり、ロキが悪用していた四次元キューブテッセラクトを探し出すために、一夜漬けで熱核反応物理学のプロになったりした時の逸話が、サーヴァントの性能として設定されたものらしい。

お陰で、アトラムが纏めてくれた魔術資料を読破した僕は、偽物とはいえキャスター本来の『道具作成』スキルを習得するに至った。

つまり、魔術兵器作成のプロというわけだ。

何、宇宙の特異点を操作するガントレットを作るよりは、簡単な仕事だったさ。

これに加え、僕には『陣地作成』スキルがある。

つまり、アベンジャーズマンションとか、本部基地とか、ああいったテクノロジー満載の設備を設置することが出来るわけだ。

それも、素材さえあれば比較的容易に。

これらスキルの組み合わせで、僕は基地を作り上げた。

ワカンダ国やヒドラの基地を参考にしたエネルギーバリアも張ることが出来た。仕上げは上々。

本当は、宝具である『アイアン・レギオン鉄人兵団』の効果も試そうと思っていたのだが…これは、一部とはいえF・R・I・D・A・Yの機能を試せただけでも良しとする。

他にもまだまだ改善の余地はあるが…この僕とマスターが、半月かけた準備だ。

学生の軽いノリで突破できると思われちゃ困る。

そう考えていたんだが…。

「戦争も始まる前の前哨戦だ。

功を焦ることもあるまい。

だが…」

モニターから目を離し、こちらを見据えるアトラム。

その眼は怒気を孕ませるでもなく、ただ真摯な思いだけが伝わる眼差しだった。

「素材にするはずだった子供たちを哀れむのは、まだ良い。

共感はできないが、理解はしよう。

だが、戦争が始まったとき……覚悟を持って対峙した魔術師相手ならば、例え相手が子供だとしても情けをかけるな。

敵として闘え。」

今までで、最も熱意を込めた口調で、アトラムが言う。

「戦う意思に応えないのは、戦士としてもつとも恥ずべき侮辱だ。

それだけは、ボクが絶対に許さん。

我がサーヴァントとして戦争を勝ち抜く覚悟が在ると言うのなら、それを肝に命じておくが良い。」

そこまで言い切ったマスターにの言葉に、僕は『坊や』の姿を思い出した。

親愛なる隣人として、怯えながらも懸命に戦ってくれた彼を。

そして、集ってくれた様々な仲間も。

戦う意思に、年齢も性別も、国や星だつて関係ない。

それを、僕は理解しているはずだったが……。

今から臨む戦いに於いては、まだ足りなかつたらしい。

「ああ……了解した、マスター。」

これは戦いだ。

貴方と共に、目的のために死力を尽くすことを誓おう。」

：口では、そう言える。

だが、その状況を前にして、果たして僕はそれを選択できるか？

答えは…いくら悩んでも、見出だせない。

状況に直面するまで、僕は悩み続けることになるだろう。

少年の罵倒音を聴きながら、僕はそう思った。

E p i s o d e 6 : 暖かい日

シロウ達の好意で世話になってから今まで、僕は冬木市の構造を把握するため、ひたすら歩いていた。

市立図書館で街の地図や地形図をコピーし、それを元に地理を確認したわけだ。

シロウに教わったりリユードージや、シロウが通うという学校も見た。

何日もかけて森をさ迷った挙げ句に洋館を見つけたり、丘の上に洋館を見つけたり、そういえば新都にも洋館が在った。

聖杯戦争という、外国人が主催する儀式の開催地故であろうか。

他にも街の人に話を聞いて噂などの情報を集め、街の状態については大方把握できたとと思う。

これで、この街の何処が戦場になってしまう場合も、街の人々を巻き込まない様に立ち回るコトが出来る。

自分なりの、準備は完了したと言って良い…とは、思う。

だから。

そうして僕は今、自分の役割を全うするために、此処を訪れていた。

2004年 1月中旬

午前

冬木市 冬木教会前

この教会を運営する教派である「聖堂教会」という組織は、聖杯戦争に於いて中立的な立場から監督役を勤める人物を当該地域に派遣するという。

神秘の「管理」を謳い、我らが主に信仰を捧げる聖堂教会。

そして、神秘の「秘匿」を大前提とし、人道よりも求道に生を尽くす「魔術協会」という組織。

二つの組織が、現代社会に於いてつつがなく、この魔術儀式を成功させるための管理サポートを行っている…らしい。

魔術戦の痕跡を隠蔽したり、敗北したマスターを匿ったり。

その監督役が派遣された運営拠点こそが、この冬木教会…らしい、という…のだが。

「…此処が、本当に神へ祈りを捧げる教会だというのか？」

理由はわからない。

だが、言い様の無い不快感を、この場から感じてしまったのだ。

僕にとつての教会は…主に祈りを捧げる場所。

人の生に隣立ち、その最後を送り出してくれる場所。

そういう、神聖というか…安らぎの場所だった。

だというのに、此処からは…。

かつて戦った、〃血塗られた^{ドクロ}髑髏と大蝮の六本の触腕〃を象徴に掲げた組織。

悪魔の研究が行われていた、彼の狂人たちの研究施設にも似た、禍々しい違和感を感じずにはいられなかった。

「……。」

安易に此処に踏み込むのは、危険かもしれない。

しかし先日ついに、新都にてサーヴァント戦が繰り広げられたのだ。

戦争は着々と近づいている。

なのに、戦争の管理者による協力が得られない状況というのは心許ないが…

それでも、この直感を無視することは、僕には些か憚られた。

今は、距離を置こう。

そう考え、踵^{きびす}を返した時……

「クク……どうした？」

中に入らんのか、雑種。」

教会敷地の門。

そこに繋がる扉に、一人の男がもたれ掛かっていた。

黒いレザージャケットを纏った、金髪赤眼の男。

腕を組み、こちらを値踏みするように眺めながら、尊大に笑う。

「君は……この戦争で喚ばれたサーヴァントじゃないな。」

僕の問いに、片目を瞑って鼻をならす男。

「フン、その小賢しい眼。」

この我を差し置いて『裁定者』を名乗る輩か。
オレ

不遜極まりない上に、呆れる程の無粋よな。」

まるで全知であるかのような振る舞い。

その威容。

モデル顔負けの様な、まるで古代美術の彫刻の様な均整の取れた体躯に、美しい相貌。

何処か、浮世離れた存在感を放つ男。

「……成る程。」

貴方は類いまれなる慧眼をお持ちの様だ。

どういう経緯で現界しておられるのかは知らないが、貴方のような御仁が居られるのなら、この戦いにも勝ちの目が見えてくるかもしれない。」

彼は、恐らく僕の総てを見抜いている。

そういう超越者に心中を透かされる感覚を、僕は過去に味わったことがあった。

思えば、「彼女」が見せてくれた僕の内心の願望も、後の決断の背中を押してくれたのかも知れない…。

ともかく、誰に対してもそうだが。

そういう相手と向かい合うときにこそ、心根を素直に広げているべきだ。

彼を相手に己を偽ることは無意味だし、失礼だろう。

「ほう？」

この私の力を正しく理解し、畏れも抱いている。

此度の余興を我が物としている感覚も理解している。

その上で、我に叛意を持つでもなく、在るがままに期待などをして見せるか。ク：つくづく不遜だが、それにも増して呆れた無垢ぶりだ。」

クツクツと笑う彼。

「一見つまらぬが、その実そうでもない。

無垢故に、我欲は人一倍と来ているか。

面白い…赦すぞ、雑種。

特例として、裁定者の任を全うするコトにも、分不相応にも我を「駒」として数えたコトにも目を瞑ろうではないか。」

なにやら、機嫌良さそうに笑い続ける。

何が笑いの琴線に触れたのかはさっぱりわからないが、機嫌を損ねなかったのなら、それは良かった。

「しかし…雑種。」

貴様を裁定者として認めるとして、何故此度の余興にて現界した？

我は雑種どもの戯れの法則ルルルなんぞに興味はないが、貴様のような存在が現れるコトは、よほど儀式様式そのものに改変が加わりでもせん限り有り得ん筈だろう。

それほどの特殊性が、此度の余興に発生しているとも思えん。」

男が、純粹に疑問を投げ掛ける。

「或いは…この私の千里眼めを持ってしても見抜くコトが叶わぬ何かが、其処には在る、か？

クク…。」

転じて、愉快そうに微笑む男。

まるで、未知の脅威が存在する事実を愉しんでいるかの様だ。

「…正直、詳しくはわからない。

だが、推察は出来ているんだ。

きつと僕の素性についても、貴方ならばおおよその検討はついているんじゃないか？」

僕は、思わず質問を質問で返してしまふ。

「フン…。」

眼と目が合う。

彼の赤い瞳から放たれる視線が、射抜くように突き刺さる。

悪意ではない。

害意でもない。

ただ、無感情に僕を見据える…。

「…成る程。

やはり、些か面白い事態になっている…というコトか。」

やがて目を瞑つて、一人頷き彼は笑つた。

納得したように眼を開くと、自重を預けた壁から離れて歩き始める。

「良かろう、興が乗つた。

供を許す故、付いて来るが良い。

貴様の事情と、此度の異常。

この我に篤^{とく}と語る場を呉^くれてやろうではないか。
感謝するが良い…滅多に無いコトだぞ、雑種。」

それは有り難い。

確かにまたと無いチャンスだ。

歩み征く彼の背を眺めながら、ならばと僕は口を開く。

「ありがとう。」

なら、名前を覚えてくれないか？

折角こうして会話する機会を得られたんだ。

最初に互いに自己紹介はしておきたい。」

僕の言葉を受けて、男は立ち止まり高らかに笑い声を上げた。

「唯の阿呆か承知の上か…サーヴァントに口頭で真名^{まな}を問うなどはな。

あまつさえ、その眼で見えている事実を敢えて我の口から出させるか。」

…確かにそうだ。

僕はただ、承知の事実だとしても、お互いに口に出して確認し合うコトは大事である
と思っただけなのだが…。

サーヴァントとしては拙かったのかもしれない。

「良い、赦すぞ雑種。

本来であれば、王の名を問うて見せるなどという不敬な輩は即座に首を刎ねる所だが
…。

名を識つて尚問う貴様の根性には、些かならず面白味を覚える。
故に名乗ろう。」

言いながら、振り返る。

「ギルガメツシユ。

此の星よに於いて、最古にして最上。

絶対不変、唯一無二の王である。」

メソポタミア文明、シュメールの都市国家ウルクの支配者。

あらゆる英雄譚の源流にして、“英雄たちの王”。

それが、目の前に居る人物：アーチャーのサーヴァントの正体であった。

「ん？

この我に名乗らせたのだ。

問うた貴様がそれに応えぬ道理はあるまい。

この我の耳に乗せるのだ。

堂々と名乗れよ、雑種。」

王が見据える。

ああ、それならば応えねばなるまい。

僕は――

.....

2004年 1月中旬

午後

冬木市 バス停

「……きよ、今日はたくさん買いましたねえ。

藤村先生。」

「ホントだよ……なあ、藤ねえ。

本当にこんなに一度に、大量に買い込む必要があったのか？」

「なーによう、士郎ってば。」

桜ちゃんがおめかしするのは良くって、お姉ちゃんが好きな服買うのにはイチャモンつけるってわけー？」

今日、俺と桜は藤ねえの誘いで、新都まで買い物に出掛けていた。

と言つても、回る店は大体ファッション関係の店。

俺は荷物持ちだ。

今日は特別やるコトもなかったし、それ自体は構わなかったんだが…。

「いや、そういうつもりじゃないけど…。」

ていうか桜は紙袋ひとつ、自分で持てる分だけで済んでるじゃないか。

対して藤ねえは、紙袋がひいふうみい…

ああもう、数えるのもバカらしい！

バーゲンだからって、こんな両手が塞がるまで買うこと無いじゃないかって言ってるんだよ！

おかげで、帰りのバスでえらい場所とつちやって、周囲の視線が痛かったよ。」

ため息混じりに文句をこぼす俺を見て、藤ねえがプクツと頬を膨らませる。

「いーんですうー！」

お姉ちゃんは仕事着と、*“家の用事”*で着る服と、私服とを買わなきゃなんだから。

「ガクセー諸君と違って要り用なんです〜！」

「ふりふりと言ひ張りながら、ずんずん帰路を進んでく藤ねえ。」

「わ、わかるけどさあ。」

「でも、荷物持ちするこつちの身にもなつてもらえと〜。」

「…先輩、実はですね。」

「その買ひ物袋、三分の一は先輩用のお洋服なんです。」

「えっ。」

「桜の小声の報告に、俺の文句も思わず止まる。」

「先輩、あんまり服に頓着が無いからって。」

「お姉ちゃんとして、若人の青春を応援するため一肌脱ぎたいって、藤村先生が…。」

「……。」

「気を使わせちゃつてたのか。」

「それは、なんというか…そんなことも知らずに、悪いコト言っちゃつたな。」

「…わかつた。」

「ありがとな、桜。」

「教えてくれて。」

「い、いえ。」

本当は内緒でサプライズにしたかったって藤村先生が仰ってたのに、私……。
どんだん小声になる桜に、俺は精一杯笑いかける。

「だったらさ、逆に俺からサプライズを仕掛けるってコトでどうかな？」

.....

「お弁当作ってくるだなんて、気が利いてるじゃない！」

士郎！」

藤ねえは、打って変わってご満悦で俺の背中を叩いた。

俺たちは今、公園に来ている。

休日だというのも合間って、なかなかの盛況ぶりだ。

俺たちみたいに弁当を広げて食べてる一段も居れば、公園内に設置されたグラウンドで遊ぶ子供達もちらほら。

「まあ、出先で何か食べて帰る可能性もあったんで黙ってたってのもあるんだけど…そうでないなら、帰る頃には腹が減るだろうと思ってるさ。」

「さすがです、先輩！」

でも…。」

…うん、わかってる。

藤ねえのコトは言えないよな。

明らかに作りすぎた。

必要なのは三人分の筈なのに、明らかにその倍…いや、もつとあるかも。

家の整理をしてたら、滅多に使わなくなってた重箱を見つけて、テンション上がって作っちゃったんだよな。

レジャーシートを敷いて重箱を広げる様は、まるで運動会みたいだ。

「いーっつていーっつて！」

余ったら晩御飯にすればいいんだし！

お腹も減ってるから食べよ食べよ！

いったただつきまーす！」

「はいどうぞ。」

つて、あわててかつ込むなよ、藤ねえ。

「お茶もあるから、ゆっくり食べてくれ。」

「ここに笑顔で割り箸を割り、食事を開始する藤ねえ。」

「食べてる顔が本当に朗らかだ。」

「『じいさん』と藤ねえが居たから、俺の料理の腕は鍛えられたんだと実感する。」

「そうですね。」

「色とりどりで、バランスも良くて美味しそう。」

「私もいただきます。」

「そう言ってもらえると、気張った甲斐があるってもんだ。」

「俺も食べようかな。」

「いただきますつと。」

「そこから、暫しまったりと食事。」

「抜けるような青空で、一月だって言うのに今日は随分暖かい。」

「小春日和を思わせる陽気は、屋外で食べるのに最適のロケーションと言えた。」

「なんとなしに、グラウンドを眺める。」

「子供八人くらいで、サッカーをやってるらしかった。」

「おお、なかなか上手い。」

子供の遊びだからと侮れない、言うなれば草試合の様な真剣さが感じられた。

…ん？

いや、違うな。

子供だけじゃない。

良く見なくても、大人も混じって楽しんでいる様子だった。

両方とも、がっしりとした体格の成人男性だ。

片方なんか筋骨隆々。

どちらもブロンドの髪を風に靡かせ、汗だくで勝負していた。

…ていうか、うん。

間違いない。

片方の、茶色い革ジャンを着たマッチョは、どうみても見覚えのある人物だった。

「くっ！

やるな、ギルガメッシュユ！

まさか現世のスポーツで、ここまで動いて見せるとは！

「アメリカンじゃないフットボールは初めてだが、只者ではないというのは理解わかる！
君、現界してから数年間、何をしていた！」

「ふははははは！」

「無論、総てだ！」

「……。」

「どうしたんですか、先輩？」

「箸が止まっていますけど。」

「んー？」

「おや、あれってブレットさんじゃない？」

「ものすごく白熱してるけど。」

「…そうだな。」

「ブレットだな。」

「もう一人の金髪さんは、友達かな？」

「子供達にも負けないくらい楽しんで、真剣に勝負しているのが見て分かった。」

あまりにも楽しそうだから、声をかけるのも野暮というか、憚られる。

どうやら、ブレットともう一人の金髪さんが敵チーム同士対戦しているようだった。大人が入っては輪が乱れる様に思われたが、これがなんとも良く回ってる。

身体能力差ではなく、カリスマというか、試合運びに眼を配つて的確にサポートする形で試合に参加しているらしかった。

子供達の遊びであることを常に意識して、それでなお全力で勝ちに行っているというか。

暫く見ていると、お昼時だから子供達が帰って行ってしまった。

満足しきった顔で、金髪二人に手を振って去って行く子供達。

それを見届けた後、ブレットがもう一人の金髪さんに握手を求めていた。

金髪さんは、愉快なものでも眺めるようにブレットを一瞥いちべつした後、快く握手に応える。仲良さそうだな。

やっぱり友達なのかな。

デザイナー仲間とか？

そんなコトを考えていると、ブレットはどうやらこちらに気付いた様だった。

友人に声をかけた後、彼を伴って此方に歩いて来る。

またあの完璧な笑顔に向けて走ってくる様子は、海外ホームドラマの一シーンの様にも見えた。

「やあ、シロウ！」

タイガにサクラも！

「こんにちは、奇遇だね！」

運動後でアドレナリンが出まくっているのか、ブレットはやたらテンションが高い。

「ああ、こんにちは。」

「本当、奇遇だな。」

「こんにちは。」

「見えましたよー、サッカー！」

「二人ともお上手でしたねー！」

「……………こ…こ…こ、こんにちは。」

「俺たちが挨拶を返すと、ブレットは友人を掌で示す。」

「ああ、彼は僕の知り合いだね。」

「ええと……………」

「なにやら言葉に詰まっている。」

「そこで、助け船を出すかの様に友人が答えた。」

「…我の名は長く特殊であるが故な。

ギル、とても呼ぶが良い。」

ぶつきらぼうに言う男。

その赤い眼は、こちらを値踏みするような粘着質な何かを感じたが…ブレットの友人であるし、先ほど無邪気に子供達とサッカーで遊んでいた姿を思い出すと、そう嫌いなもなれない気がした。

「彼は『国』は違うけれど、『似たような仕事』をしている人でね。

この街で偶然知り合つて、話をするようになったんだよ。」

へえ。

外国人が集うみたいなお店もあるつて言うし、そういうこともあるんだな。

なんとなく感心してしまう。

「クク…なるほど。」

現状を鑑みれば、間違つてはいない。

上手く言つてのけるものだ。」

なんだかわからないけどご機嫌なギルは、俺たちを一通り眺め終わった後、弁当箱に視線を落とした。

「…おい、そんな雑種。」

その弁当は、貴様が作ったモノか？」

「へっ？」

まあ、一応、はい。

そうですけど…。」

…ほんと、随分変わった人だな。

変な教材でも使つて、日本語を覚えちゃったのかな。

「ギル。

彼が、僕がさつき話したシロウだよ。

ほら、美味しいみぞれ鍋を作ってくれた。」

ブレットが、にこやかに告げる。

ひ、人に話したのか…誉めのニュアンスで。

なんか照れ臭いな…。

「ほお、此奴が…。」

…フム、香りは悪くない。

よかろう、赦す。

雑種よ、その弁当を我に献上する榮譽を与えよう。

感謝するが良い。」

そんなことを言いながら、ギルは勝手にレジヤシートに上がり込んでしまった。

慣れた手つきで、小皿をとって割り箸を割って見せる。

…な、なんて図々しさだ。

俺は、若干の困り顔で藤ねえと桜を交互に見る。

「良いじゃない！」

士郎の料理に興味を持ってくれたってコトでしょ？

お姉ちゃんとして鼻が高い！」

「わ、私も…お二人が良いのなら、構いませんよ。」

あつけらかんと笑う藤ねえと、何かを決意したように言う桜。

藤ねえは平常運転だけど、桜のこれは…。

前回、ブレットが来た時に緊張しっぱなしで態度が悪くなかったコト、気にしてたもんな。

それに対して思うことがあるんなら、俺が支えてやらないと。

「わかった。

ブレットも上がってくれよ。

正直、作りすぎちゃって困ってた所だったんだ。」

見上げて誘う俺に、ブレットは嬉しそうに笑った。

「そうか！」

やあ、ありがとう！

シロウの料理と見て、僕も実はワクワクしてしまっていた所だったんだ！」
輪に入るブレット。

それを見て、ギルは満足そうに頷いた。

やっぱ仲良いんだな、この二人。

「よし。」

そう来なくてはな。

では、いただくでしょう。

さあ、雑種よ！

我にオススメのメニュートップ3を、教え示して見せるが良い！」

公園に響くような轟音で、高らかに勅命を下すギル。

…食べるのは良いから、恥ずかしい真似はやめてくれ。

Episode 7 : 冬木のグルメ～冬木市新都の茄子ぶた玉お好み焼き～

それは、一人の男が英雄へと至るまでの始まりだった。

若くして、両親を失った。

優しく大好きな母と、仕事人間だった父。

父の仕事は国を護るためのもので、それは立派な仕事だと理解していた。

だが、大きすぎる仕事の責任感に取り憑かれるように働き、家庭を省みない父に、若

い彼は反発してしまったものだった。

それでも父に寄り添い微笑む母を見て、内心嫉妬していたのかもしれない。

その日もそうだった。

若さを言い訳にバカやって、母を伴って仕事に出かける父に対して労いの言葉ひとつも掛けられなかった。

両親は、そのまま帰って来ることはなかった。

なりゆきで父の会社を継いだ。

若さと愚かさを孕んだ、少しばかりの才能を止めることが出来るものは存在しなかった。

そうして、国を護るために戦った男の息子は、殺戮兵器をばら蒔く死の商人となった。

父の友人である共同経営者が、父の時と同じく国防にのみ商品を卸していると、信じていたということもある。

しかし、そればかりが言い訳にはならない。

己の行動に責任を持たなかったが故に、自分の作品はテロリストに渡っていた。

それを、知らなかった。

責任は己に返り、さらなる凶器を産み出すために、彼は囚われた。

そこで、すべてを知る。

己の作つたモノが何を傷つけ、何を産み出しているのかを。

それらに傷つけられた過去を持つ、同じ囚われ人であつた技術者が居た。

その技術者は、それでも彼を真摯に諭してくれた。

世界を変えうる力を持つもの、その在り方：理想を。

彼の命と願い、そして己の責任を背負つた男は：その日から、鉄の鎧を纏つた。

それは償いなのか、己の過去に対する覚悟だつたのか。

兎にも角にも、それは成すべきコトだと信じて疑わなかつた。

己が生み出した凶器に立ち向かうため、彼は超人となった。

.....

.....

.....

「.....」

その日の寝起きは、あまり良いとは言えなかった。
頭痛がする。

昨日はあの後、ライダー陣営を追い返した時の映像を精査していたが、気付けば初勝利を祝した宴会になってしまっていたのだ。

詰めていた部下たちも巻き込み、ボクら主従を中心にはしやぎ過ぎてしまった。
飲み過ぎた。

情けないが、完全に二日酔いだ。

ボクは、キングサイズ・ベッドから身を起こした。

『おはようございます、ガリアスタ様。』

「…ああ、おはようF・R・I・D・A・Y。」

2004年 1月中旬 午前

冬木市 新都

ガリアスタ所有ビルディング・アトラムの寝室

やり取りの最中、窓を遮っていた巨大カーテンが開かれていく。

ひとつの壁面全てを覆った強化ガラス窓に、陽光と共に冬木市の光景が広がった。

窓に歩み寄り、街を見下ろす。

昨日の戦いは、ビルの敷地内でのみ行われた。

敷地外に出る前に、ミサイルはすべて此方のセンサーに感知され、最初はサーヴァントを誘い込むため解除されていた防衛用リパルサー・レイで撃墜された。

鉱石を用いた音声遮断結界も張っていたし…。

街の様子を見るに、騒動に発展するような問題はなかった筈だ。

「F. R. I. D. A. Y、マンシ^我ョン^{工房}周辺に於いて、聖堂教会の隠蔽行動は確認できたか？」

『いいえ。』

当工房、並びにライダー陣営共に完璧な隠匿対策の上での戦闘行為であったため、監督者の修正作業を必要としなかったのだと推察されます。』

ほう。

こちらについては大して心配はしていなかったが、マトウの少年も中々やるものだ。逃げの鮮やかさや、あの時タイムニング良く投げつけられた「暗器」等：手強い相手なのだと思わせてくれる。

流石は御三家、といった所か。

暗器の解析も含め、注視すべき陣営のひとつと言えよう。

「キャスターはどうしている？」

『トニー様は、ラボにて作業をしておられます。』

流石はサーヴァントというか。

あれだけ酒をあおって騒いでいたというのに、その翌朝から機械いじりとは恐れ入る。

「わかった。

ボクは、軽くシャワーで汗を流してから合流すると伝えてくれ。」

『畏まりました。』

うん。

良い秘書だ。

普段から侍従に身の回りの仕事をさせていたボクだが、彼女のような高性能人工知能ならば、さらに痒いところにも手が届きそうで、実に羨ましい。

この技術に関する知識も、戦争中にキヤスターから引き出したくなる。

『では、侍従長様に衣服の準備をなさるように要請しておきます。』

…いつの間にか、ボクの侍従達ともスゴく仲良くなってるし。

そういえば魔力炉改修の際も、ライダー襲撃の際も、部下連中ともかなり連携がとれていたな。

この子、本当に人工知能なのか？

靈魂を使った使い魔とか、妖精だったりしないだろうな。

気付いたら、ボクまで “この子” とか呼んでしまっている始末だし…。

『如何なさいましたか？』

やはり、シャワーだけでなく入浴もなさいますか？

バスタブにお湯を張りましょうか？』

いや、お母さんか!?

.....

シャワーを浴びて、身支度を済ませてラボに行くと、キヤスターが何やらアーマーに向き合っていた。

見たことのない種類だ。

恐らく、昨日ライダー撃退に出撃したアーマー群の中には無かった。

キャスターの頭部には、昨日“マーク7”を遠隔操作する際に装備していたヘッドギア・デバイスが見られる。

「ああ、マスターか。

おはよう、二日酔いだって？

薬は処方してもらった？

F・R・I・D・A・Yのチョイスは的確だから、苦いけれども効果は^{テキメン}観面だぞ。

苦いのを敢えてチョイスするのは、次回二日酔いしないように促すためらしい。」

アーマーから目を離さず、細部を確認しながらキャスターが笑う。

「…魔術師を甘く見ないでもらおう。

ボクくらいになると、酒気を発散させる程度の術は当然心得ているんだ。」

「ほう、そいつは結構。

是非とも、生前友人になりたかったね。

若い頃は、飲みすぎて記憶を失うなんてのはしょっちゅうだった。」

「……。」

思わず、返事に窮^{きゆう}してしまった。

今しがたまで見ていた夢を、思い出す。

…やはり、あれはこの男の記憶なのだろうか。

マスターとサーヴァントの繋がりが見せた、英霊の過去…。

「どうした、マスター？」

僕の顔に何かついてるか？

ああ、あまりに僕がクール過ぎて、昨日の「ギリシヤの君」みたいに見惚れてしまったというのなら勘弁してくれよ。

僕は妻帯者だし、そっちの趣味は無い。」

黙り込んだ僕を見て、肩を竦めておどけて見せるキャスター。

「…要らんコトを言うな。

ボクだって、ご婦人のお相手をするのが大好きだよ。

ただ、朝っぱらから良く回る口だと呆れていたただけだ。

それで、何を作っている？

そのアーマーは何だ。

随分とシャープな作りだが。」

ボクは、思わず誤魔化し気味に話題を製作物に移した。

しかし、そのアーマーについて気になっていたのも、また事実だ。

そのアーマーは、濃緑を基調としたボディに金のラインが走った細身の姿だった。

今まで見てきたアーマーのどれとも違い、どう見ても人間が装着するコトを想定して作られてはいない。

「ああ、こいつはマーク41…『ボーンズ』と呼んでるんだが、その改良型だね。

遠隔操作するコトを前提として設計し直したものだ。

関節部が細かく多数存在し、柔軟で俊敏な駆動を可能とする。

その辺は、僕の…なんというか、『孫』の様な存在の機械生命体を参考に、よりヒトの質感に近づけてみた。」

…その、孫のような機械生命体という言葉も聞き捨てならないが、話が逸れてしまうから置いておくとして。

マーク41については、知っている。

スタークがかって製作したアーマーについては、スペックノートを作らせ確認済みだった。

しかし、顔面部はアーマーシリーズのどれとも違う人間的な構造になっているし、何より…

「これは…表面装甲の各部に、『デイスコ』の意匠も取り入れてあるな？」

ステルス機能も搭載しているのか。」

ディスコ：マーク27は、光学迷彩を用いて周囲に同化する機能を有するアーマーだ。

スタークの生前に存在した『ヘリキャリアー』と呼ばれる巨大な飛行空母は、この機能で大規模な隠密行動を行えたらしい。

：とんでもないな、未来。

そこまでのステルス技術が開発される気配など、現代の軍事産業からは微塵も感じられないが。

「ピンゴー！」

そこも、孫の能力を参考にはしたのだからね。

アーマーとして装着する発想をオミットした分、有効なシステムにスペースを割くことが出来たよ。

攻撃力は最低限だが、隠密性と柔軟性に長けたスペックとなった。

そして、光学迷彩で消える『カメレオン』システムだけが、こいつの能じゃない。

見てろ…。」

キャスターが、ヘッドギアにて何らかの操作を行う。

すると、マーク41改の表面が揺らいだ。

そのまま、キャスターそっくりの姿をとったのだ。

一見すると、全く見分けはつかない。

もう一人トニー・スタークが存在するという、魔術的とすら言える出来映えだ。

「これは…擬態機能か！」

「その通り。」

僕の友人の女性エージェントが時折使用していた、他人の顔に扮装する“ツールと

…これまた、孫の能力を参考にさせてもらった。

まあ、実際に手で触れたりすると違和感はあるだろうが…。

その辺も誤魔化す必要がある場合は、君の魔術でカバーすれば良い。」

キヤスターは擬態アーマーを操作し、揃ってボクに笑いかける。

魔術師が言うことではないかもしれないが、正直なんとも気味の悪い光景だった。

「名付けて…そうだな。」

“ロキ・アーマー”…だとあんまりか。

いや、伝え聞いた彼の散り様には敬意を表するが、“時間泥棒作戦”の時に四次元キューブを持ち逃げされた恨みもあるし…ゴホン！

…まあ、それはいいとして。」

ロキ…北欧神話に登場する、悪戯の神だったか。

そういうえば、ロキの力が宿った仮面が騒動を起こすアメリカンコミックや、それを題

材にした映画があった。

それに因んだと言うことだろうか。

いや、むしろ今の口調だと、そいつ本人と因縁があるみたいな感じだったけど…。

いやいや、バカな。

近未来の英霊ではなかったのか、こいつ？

「…うん。」

『ヴィジョン・アーマー』。

未練かもしれないが、これでいこう。」

散々よくわからん事で悩んだ挙げ句、勝手に決定してしまった。

思い入れがあるのだろうし、下手に突っ込む真似もしないが。

ボクにとって重要なのは名前ではなく、これの用途なのだから。

「…成る程。」

これで、日中のボクを護衛しようというつもりなんだな？」

今日は、街に繰り出して土地勘をしっかりと掴んでおく算段をあらかじめキャスターに

伝えていた。

目的はそれだけではないが…。

配下を何人も連れ歩くと目立つため、キャスターのみを連れて行く事を考えてはいた

が、それで陣地形成が遅れるのもつまらない。

上手くやれないか思案はしていたのであるが…。

これは、その為の装備と言う訳なのだろう。

「またまたビンゴ！」

やあ、以心伝心してきたな、マスター。

これなら姿も自由に欺けるし、正体隠しに最適だ。

状況に応じて、F・R・I・D・A・Yと操作を交代して対応も可能だしな。

他にも君の魔術をサポートできるアイテムも用意してるし、日中の非戦闘時ならば十分にガードをこなせる筈さ。」

聖杯戦争は、原則として夜に行われる。

魔術の基本である神秘の秘匿を順守するため、比較的隠蔽が容易な夜間を利用するとうわけだ。

しかし…注視すべきは遠隔操作システムの基礎部分だ。

無線LANはまだわかるが…無人航空機ドローンとは。

「確かに、60年も昔から盛んに軍用として研究されている分野ではあったが…将来的にそんなにも一般化するとはな。」

思い切った真似をするというか…法整備が大変だろうに。」
「まさしくだね。」

精々先回りして悩んで、情報を活かして得するように振る舞ってくれたまえ。」

.....

2004年 1月中旬 正午直前

冬木市 新都

……とにかく、腹が減っていた。

私は、昨日今回の聖杯戦争で初めてのサーヴァント戦が行われたというので新都ビル街まで見に来たが、それが予想を上回る完璧な隠匿具合だったので大いに驚いた。

そのうえ外部被害も全く無く、やりくちが「ワカメ」とは思えない程の鮮やかさだっ

たため、私に出来ることなど見当たらない。

まったくの無駄足だった。

おまけに、私も私はテンションに任せて野草を採りすぎたらしい。

しかも……せっかく出掛けたのに聖杯戦争絡みの情報で収穫無しなのが悔しいからか、この上さらに、文字通りの「道草」までも気になり出す。

「ふう。」

まいったな。

どこに腰を落ち着けて休めば良いんだ。

焦るんじゃない。

私は腹が減っているだけなんだ。

腹が減って死にそうなんだ。

「バカヤロー！」

二度と稽古に遅刻するんじゃないやねえぞっ！

このっ！」

「すみませんでござるー！

すみませんでござるー！」

「……………」

.....

「あゝ、しまった。

アーケードはここで終わりだったか。」

ああ…情けない。

どこにも入れずに何をやっているんだ。

引き返すか…いやいや。

野草と毒草の山をリュックに積めて背負ってる女がウロウロしてたらヘンにみられる。

くそっ、それにしても腹減ったなあ。

“めし屋”は…。

どこでもいい。

“めし屋”はないのか。

ええい、ここだ。

入っちゃまえ。

.....

「しゃあない。」

「.....。」

2004年 1月中旬 正午

冬木市 新都

お好み焼き屋・鍾馗

とか考えつつ、結局いつもの店を選んじやうんだけどね。

「ナスとぶた玉ください。」

「はーい、ナスぶた玉ひとつ。」

注文してしまうと気が楽になり、店内を見回すゆとりが出てきた。

「やあ、こういうジャパニーズ的な庶民料理の店に入ってみるというのも悪くない。モダン焼きとやら、食べるのが楽しみなな。」

…見るとそこには、ブロンドの長髪に褐色肌が印象的な、妙にリッチげな男が居た。自分の後ろのテーブル席に、黒髪オールバックな連れの男と向かい合って座っている。

『…ズルいぞマスター。』

こういう面白そうな店に来るなら、一言教えておいてくれよ。』

…マスター？

今の街の状況上、私のような “冬木に住む魔術師” なら嫌が応にも反応してしまう言葉だった。

だが、この言葉ひとつではなにも断定できない。

私は、二人の男の話に聞き耳を立てることにした。

「いや、街を歩くと言ったら外食になるのは想定できるコトだろうが。今さらグダグダ言うなよ。」

『そうかもしれないが…僕は、こういう土地柄の出るジャンキーなフードに目がないんだ。』

シヤワルマとか大好きでね。

せつかく目の前に見えるのに“食べられない”なんて、そんなの酷い拷問だぞ。』

…今、聞き捨てならない事を口走ったか、あの男。

お好み焼きはジャンクフードとかじゃないわ！

B級グルメだ！

※個人の意見です。

「うるさい奴だな。」

そんなに食いたいならテイクアウトしてやるし、構わないだろう。』

テイクアウト
お持ち帰り！

そういうのもあるのか。

普段は毎回店内で食べるから、マジで気付かなかった。

しかし…

『いやいや、何を言い出すんだ！』

こういうピザやパンケーキ系統の料理は、出来立てアツアツを食べてこそだろう！
 おお、意外とわかってるじゃない。

オールバックの人。

しかし、食べられないってどういうコトだろうか。

「わかったわかった、そんなに気になるなら、機会があれば次は連れてきてやるさ。

まったく…折角「エルメロイⅡ世」から聞き出せた、彼おすすめの日本の飲食店だから来てみたと言うのに。

もうちよつと「十年前」のストーリーに思いを馳せさせてくれよ。」

えっ…！

…あぶない、危うく声を出してしまふところだった。

師匠せんせいのコトを知っている…？

やっぱり、聖杯戦争マスタの参加者か？

だとしたら、二枠有る「時計塔」枠の一人か。

…私は時計塔に属する魔術師だけど、この戦争に関しては「部外者」だ。
 わざわざ関わるのは上手くない…ケド、このチャンスは逃せない。

黙って聞き耳立てて、何か情報を掴むコトが出来れば、今後有効に動くためのチャンネルに繋がるはず……

『クソ……いいさ。』

こつちだつて残つてるスタッフ全員分、高級SUSHIの出前とかとらせてもらうかな。

君の金で……ン？

なあマスター、何か妙な臭いがしないか？』

唐突に、恐らくサーヴァントであろう男が言う。

「ん？」

『いや、F. R. I. D. A. Yがおかしな臭気を感じたと……』

アレだな。』

サーヴァントが指差した方向には、店内に設置された荷物置場が在った。

そこには、私の持ち込んだ野草のつまったりリユックが置いてある。

しまった！

臭い含めた認識阻害の術はかけてたけど、サーヴァントや時計塔から派遣されるレベルの魔術師には見破られるかも……！

「ああ、アレは……」

『いや、酷い臭気レベルだぞ。』

感じないのか、マスター？

アレは…なんだ、“雑草”か。

なんだって飲食店内にあんなものが…』

「『雑草』などという名前の草などない!!」

…はっ、しまった!

思わず、テーブルぶつ叩いて怒鳴ってしまった!

だって仕方ないじゃん!

あのオールバックやろう、またてきとーな知識で言いやがるから!

『え!?!』

…あ、うん。

すまない、取り消そう…。』

あつげにとられて、ぼんやり謝罪するオールバック野郎。

「えっ、いやあの……えつと……。」「慌ててしまう。」

どうする、なんと答える!?

「ふっ……やはりか。」

こんなカタチで、君と邂逅するとは思わなかったがね。」

マスターの男は、総てを承知していたかのように笑ってこちらを見る。

同時に彼は懐から鉱石を取り出し、それを割るコトで「結界」を敷いた。

音声遮断の結界……!

くっ……やはり気付かれていたのか。

『マスター、彼女を知っているのか?』

「もちろんだとも。」

冬木にその家ありと呼ばれる魔術の名家……」

私の正体まで知っているというのか。

部外者の、私の家のコトまで……!

「聖杯戦争、始まりの御三家のひとつ。」

……ん?

「セカンドオーナー」遠坂家当主！
その人だろう！」

自信満々の顔で、マスターの人は推理を突きつけてきた。

「……。」

「……。」

…思わず、間が空いてしまった。

「……フ、凶星を言い当てられ動揺しているようだな。」

今回の聖杯戦争、参加するであろう現当主はティーンエイジャーの少女であると聞いていたのでね。

昨日の今日で目敏く「激突」を察知して新都に偵察に来た君は、そうであるに違いない。」

沈黙のカタチが予想外だったのか、推理の裏打ちを語り出すマスターの人。

「……。」

「……。」

「……。」

再び、沈黙。

……えーつと。

どうしよう。

完全に人違いされてるよね、コレ。

『…マスター、この感じはハズレなんじゃないか？

ものすごく気まずそうな顔をしているぞ。』

「………そ、そんなハズはない。」

サーヴァントの指摘に、極力表情を保ちながら…しかし、口の端をヒクつかせて答えるマスター。

…変に顔に出して黙っちゃったせいで、遠坂さんに成り済ますとかも出来なくなってしまう。

…もう良いか、面倒くさい。

こうなったら、私が如何に部外者を説く方がずっと建設的だ。

「えつと…すみません、時計塔からのマスターさん。

私は遠坂さんじゃありません。

一応現代魔術科リッヅに所属する魔術師です。

勿論、時計塔枠もう一人のマスターでもありません。」

「……。」

再び、沈黙。

『……ホラ、やっぱり違うみたいだぞ。』

しかもノーリτζジって、一応例のエルメロイだかいり合いの関係者なんじゃないか？

どうするんだ、マスター。

かなり恥ずかしい状況だぞ、コレは。』

「うっ、うるさい黙れ！」

君！

我が名はアトラム・ガリアスタ！

遠坂でないと言うなら名を名乗りたまえ！

さすれば、今から電話してエルメロイに直接確認してみてくれる！」

目に見えて取り乱したマスター……ガリアスタさんは、あたふたしながら問いかけてきた。

……はあ、なんだかドツと疲れた。

こっちはお腹がペコちゃんだというのに、なんでこんな気を遣って体力を消耗しなけ

ればならないのか。

仕方なく、私は名乗ることにした。

「…私は、沙条綾香さじょうあやかです。

よろしくおねがいます。

ガリアスタさんと、そのサーヴァントさん。」

Episode 8 : 会食、その後

「おお、美味そうに焼けているな。

まあ食べたまえ。

モダン焼、君の分もご馳走するよ。

ミス・サジヨウ。」

マスターは、ヘラとやらを持ちながら極力自然な笑顔を形作つて言った。

「そうですか。」

では、遠慮なく。」

彼が切り分けようと動くよりも早く、アヤカ・サジヨウは自分のヘラでモダン焼きを

両断した。

「……。」

呆気にとられたマスターを尻目に、半分にしたソレを手際よく自分の皿に乗せるサ

ジヨウ嬢。

同じテーブルに着いて対面しているので、非常にスムーズだ。

それと、目の鉄板に在る自分が注文したエッグプラント^{なす}とポークのオコノミヤキと

を見比べる。

そして、ゆつくりと口を開いた。

「う〜ん。」

モダン焼とぶた玉で、ぶたがダブってしまった。」

『奢ってもらっておいて、随分な言い方をするお嬢さんだな。』

遠慮とか一切ナシか。』

2004年 1月中旬 午後

冬木市 新都 お好み焼き屋・鍾馗しやうき

結果を言うと、サジヨウ嬢の身分は確かなものと証明された。

冬木市中でも極上だという霊地とやらに住まう魔女。ウイッチ

黒のセミシヨート・ヘアーに眼鏡をかけた、美人であるが一見しても取り立てて変

わった特徴は見られない少女。

彼女の証言通り、イギリスはロンドンに拠点を置く“時計塔”という、西欧魔術師の総本山に所属する魔術師だそうだ。

アトラムが、本当にあの後エルメロイ氏に電話で確認したのだ。

途中、電話向こうの氏を相手に、ねちねちとした嫌味を吐く自分のマスターの姿を見て呆れたりもした。

：そういえば、マインドスロキトーン杖に煽られて、仲間達と口喧嘩したときの僕らもあんな感じだったかもしれない。

うん、今さらも今さらな話だが、人の振り見て我が振り直せ、だな。

それを眺める間や、電話を代わってエルメロイ氏と通話する間も、サジヨウ嬢の表情はさほど変化しなかった。

マイペースな子なのだろう。

あるいは、マイペースなフリを演じている女優なのかもしれないが。

「…それで？」

ミス・サジヨウ。

君はこの土地に住まいながらも、聖杯戦争に参加しない魔術師一族なのだろう。

ならば、何故わざわざサーヴアント戦の現場周辺など嗅ぎ回っていたのかね。」

アトラムは、半分持つてかれてしまったモダン焼きと、物足りなくて仕方なく追加注文したビーフの鉄板焼きを食しながら質問した。

「…新都に居るからといって、現場を確認に向かったとは限らないと思いますが。」

もきゅもきゅと二つの品を交互に味わいながら、合間にそう答えるサジヨウ嬢。

…クソ、二人して美味そうだな。

これを見ながらSUSHIを食ったところで、如何に高級でもジャンルが違い過ぎて満足出来ない気がする。

「私を舐めないでいただきたい。」

如何に葉草で誤魔化したとて、自分の工房周囲の魔力残滓を感じ違えたりはしないよ。

どの程度の時間を彷徨っていたのかも、おおよそは把握できる。」

アトラムの言葉に、ここで初めてサジヨウ嬢の眉根に一瞬力が入る。

アトラムは、「戦場」に特化した魔術師だ。

戦い抜くために必要な感覚とスキルはズバ抜けており、それはサジヨウ嬢の想定を上回っていたらしかった。

「…私はただ、聖杯戦争による冬木市の被害を最小限に留めたいだけです。」

この魔術儀式の規模も、何人の魔術師が心血を注いで来たかも理解していますし、それそのものを否定することはしません。

ただ、自分が住まう場所が荒れてしまうコトを防ぎたい。

戦争が終わった後も、変わらず暮らしていけるように。」

サジヨウ嬢は言い切った後、表情を戻してモダン焼きを口に運ぶ。

それは当然の感情だと思った。

僕は、かつて僕らのチームが戦った後の市民達の声を思い出していた。

ニューヨーク、ワシントンD・C、ソコヴィア、ラゴス、ミュンヘン…。

勝手に戦って、街を破壊して去ってゆくモノ達。

そう糾弾されたコトがある。

宇宙人の侵略でも、自業自得のロボットの反乱でも、魔術師同士の殺し合いでも同じだ。

そこに住む人々にとっては、破壊の痕跡が残るのみなのだから。

「…それは、時計塔・現代魔術科の一員としての考えか？」

「違います。」

一人の、沙条綾香という魔術師個人としての意思です。

私は聖杯戦争の「部外者」ですが、だからこそ譲れないものは在る。」

鉄板が熱と焼ける音を上げる中、二人の魔術師は睨み合った。

「…成る程。」

覚悟があるなら、ソレで良い。

ならば我々は、此方の邪魔をされない限りは君の行動を阻害しないコトを誓おう。

神秘の秘匿は、全魔術師が負うべき責務だ。

異を唱える理由も無いからな。」

そう言い笑うと、アトラムはモダン焼の最後の一片を口に放り込んだ。

…しかし、アトラムはハシの扱いが上手いな。

「それで、その考えは冬木のセカンドオーナーである遠坂嬢も同じと考えて構わないね？」

口の中を片付けた後、アトラムが問う。

「…私が彼女の陣営に荷担することはありませんよ。」

彼女もまた、最後のモダン焼を飲み込んだ後にそう言った。

「そういう意味で尋ねたワケではないが…ま、良いだろう。」

…では、君以外の魔術師は？

冬木の街に、この戦争に対して何らかの関与意思を持つモノは存在するかい？」

アトラムは肩を竦めた後、探るようにサジヨウ嬢を見やりながら最後の鉄板焼を口に

運んだ。

「魔術師が魔術師から何かを求めるならば、相応の対価を払っていただかないと。」

そう言い、サジヨウ嬢は笑う。

一見屈託の無い笑顔だが、その内心は計り知れない。

「…何が欲しい?」

「そうですね。」

とりあえず、先ずこの場の払いは全てお任せして構いませんか?」

こんなものはジャブですらない、とでも言う様にサジヨウ嬢は問う。

実際こんな細身で年頃の少女のランチ代など、石油王であるアトラムには痛くも痒くもないだろう。

「もちろん、それについては最初からそのつもりだったさ。」

他には?」

「では…私では対処しきれないサーヴァント絡みの被害が想定される事態に遭遇した場合、それに対処していただけますか?」

一拍置いて、問う。

「…それは、少々対価が大きすぎやしないか?」

実質、これは共闘の提案だ。

サーヴァントの脅威から、街を守ってくれという願い。

確かに、外様の魔術師に乞う責任としては重すぎる。

「そうではないと、断言できる情報であると自負しています。」

「信憑性と、保証は？」

「信用してほしい、としか。」

…私も、師匠から聞いた貴方の人物評を考慮した上で、この条件を提示しています。」

真つ直ぐ見据えて、サジヨウ嬢は答える。

「ハツ…それはそれは。」

因みに、やつはボクのコトをなんだって？」

皮肉げに笑い、しかし確かな興味を抱いてアトラムは問う。

…わかりやすい男だな、我がマスターは。」

「利に聡く、戦技に於いてはかなり突出した術師である、と。」

そして…闘争を好み油断ならないが、理由なき暴力に訴える愚者ではなく。

“魔術師として一番大切なもの”を持ち合わせる人物である…とも仰られてまし

た。」

淡々と語られた人物評は、僕にしてみれば中々的を射てる内容だと感じられた。

面白い、僕もエルメロイ氏と話をしてみたいものだ。

「……。」

複雑な表情で、返事に窮するアトラム。

「私は、師匠の眼を信じています。」

私の魔術……その道を見極め示してくれた、あの人を。

だからこそ、この評価を信じて、交渉させていただいているのです。」

強い眼だ。

こういう眼の若人は、非常に好ましいと思う。

アトラムはどうだろうか。

我がマスターは、どう判断するのか……。

「……エルメロイめ。」

厄介な生徒ばかり揃えてくれるものだ。」

アトラムは苦々しげにそう言い、水を飲み干してから立ち上がった。

「そういう動きをするならば、君と私だけで決めたトコロで効率的ではない。」

故に、この話の続きは私の次の目的地に赴いてから、先方も交えてからにして貰おう。」

「次の目的地とは？」

サジヨウ嬢は、首をかしげ尋ねる。

そういえば、今日の予定ではそういう話になってたな。

「遠坂邸だ。」

元々、今日我々は街を巡った後にセカンドオーナーの元へ挨拶に向かう予定だったのだよ。

何う件は電話にて伝えてあるので、問題ない。」

「…電話で声を聞いたはずなのに、私と遠坂さんを間違えたんですか？」

ジトつとした眼差しで、アトラムを見つめるサジヨウ嬢。

「…電話というのは、発信者の音声そのまま相手方に届くワケではないんだ。

見ず知らずのティーンエイジャー同士だと、案外間違えてしまうものなんだよ！

いいから、出立の身支度をしたまえ！

会計を済ませるぞ！」

懐から財布を出し、卓に叩きつけながらアトラムが叫ぶ。

「…何勘違いしているんですか？」

「はっ。」

「私のバトルフェイズは、まだ終了してませんよ…！」

言葉の意味はわからんが、とにかくすごい食い気を感じる。

「な、なにを言ってるんだ。」

君は既にお好み焼きとモダン焼き半分を食っただろうが！」

「折角奢りなんですから、堪能しなければ損です。

すみませーん！」

イワシのカレー玉ひとつと、キャベツたつぷりのイカ玉ひとつ！

あとコーラも！」

「こ、この期に及んであと二品と炭酸飲料を注文だと!?」

「いえ、その後さらに三品は行きたいですね。」

「なっ…!?!」

絶句するアトラム。

…いつぞやのサーファー君を思い出すな。

あのときの打ち上げも、みんな満身創痍の中で、あいつ一人だけモリモリとシャワル

マ食いまくってたっけ。

あのマツチヨ神と並ぶ大食いの女子って…。

「くっ…!」

じゃあ、君が食い終わるまで我々はここに足止めさせられるのか!?

おい、キャスター！

お前もなんとか言ってやれ！」

「あ、サーヴァントの人、キャスターだったんですね。

というか、全然会話に入ってきてませんでしたけど、勝手に話が進んじやって良かったんですか？」

我がマスターは、テンションに任せて余計な情報を漏らしてしまつたが…まあ、仕方ないか。

『ああ、僕の方は問題ないよ。

マスターとこの街の住人の話し合いに、死人である僕が口出しすべきじゃないし。』
これは素直な気持ちだ。

それに、「こつち」では陣地作成に大きな進展が見込めそうな局面でもある。
モダン焼を食べなかつたストレスをエネルギーに、一気に成果を引き込めた。

これならば…アーク・リアクターをまた一段階強化できる。
そうなれば、此処からの進展は早い。

一気に、「僕の世界」の段階まで持つていける筈だ。
だから…

『悪い、マスター。

暫くそつちの操作はF・R・I・D・A・Yに任せるよ。

大丈夫、音声はオンにしてるから、何かあればスグに対応するよ。

それじゃ。』

「な、なにっ!？」

おい待て、キヤス……」

………

ふう……よし、じゃあ頑張ってくれ、マスター。

良いじゃないか、念願のジャパニーズレディとのデートなんだ。

楽しんだら良い。

……相手は子供だけでも。

「よし……じゃあF. R. I. D. A. Y.

マシン・アームの操作をマニュアルに変更。

これより……『バッドアシウム』の精製に着手する。」

.....

2004年 1月中旬 夕方

冬木市 深山町 海浜公園

「やあ、すっかり話し込んだじゃったな。

ギル、おやつを奢ってくれてありがとう。

美味しかったよ。」

「フ、礼には及ばん。」

貴様の弁当こそ、辛うじてではあるが我が舌に乗るレベルに到達していたのだ。

未だ駆け出しといったところではあるが…。

このまま育てば、やがては我が臣下に加えるコトも吝かではないぞ。

故に、今後は我が欲した時に駆けつけ、飯を献上するコトを赦す。

良き者達と戯れ、良きものを見、良きものを食し、これからも励めよ。

ケータラ
弁当係よ。」

「誰が仕出し屋だ！

まったく、ブレットの知り合いだったのに、なんてエラそうな奴だよ…誉めてくれてるのは分かるケドさ。

まあ、別に俺の料理を気に入ってくれたってんなら、都合がいたらまた作ってあげるコト自体は構わないよ。」

先輩とギルさんが、親しげに話しています。

なんとというか…意外でした。

あのギルさんという方は…怖くて、冷たくて、他の人なんかどうでも良い…というよ
うな振る舞いというか、空気を感じる…ヒトに見えていました。

優しく暖かい先輩とは、相性が悪そうだと思っただのに。

すぐに、何処かへ行ってくれると思っただのに。

『確かにね。

でも何時だつて、ヒトは見かけに依らないモノよ。

アンタ自身も、そうでしょ？

サクラ。』

一方で、藤村先生とブレットさんも笑いあつて談笑しています。

「なるほど、アーチェリー・クラブのコーチを。

確かに、タイガの様な先生が支えてくれるなら、やる気は出るだろうね。

僕の友人も弓の腕に長けていて、娘に教えるのが楽しいと言っていた。」

「弓道とアーチェリーは、また違うんだけどね。

誉めてくれるのは嬉しいけど、私なんて教師としてはまだまだだし…自分の子供うんぬんの話も、ちよつとまだ想像もつかないし……ていうか、相手もいないし…。」

照れ笑いのあと、自分の言葉にずんずん凹んでゆく藤村先生。

「アー…すまない。

そんなつもりで言ったワケじゃなかったんだが。

でも、あまり気にしすぎても、心に縛られて動きが制限されてしまうぞ。

タイガは優しいし、誠実だし、チャーミングだ。

在るがままに過ごしていれば大丈夫さ。」

「えっ…そんな、チャーミングだなんて…ブレット。

そう、かしら…?」

輝く微笑みに、思わず顔を赤らめる藤村先生。

ひゃあ…映画みたいなこと言うヒトだなあ。

『ホントね。』

歯の浮くような物言い。

地球人の男って、皆こうなのかしら。』

「ああ、そうさ！」

僕のような朴念人だって家庭を持つことが出来たんだ。

だから、ファイトだ！タイガ！」

ブレットさんが、左手でガッツポーズをしてニカつと笑いました。

その、左手の薬指には…シルバーに輝くリングが……。

「あ。

…あ、あは。

アハハ。

あー、そうよねー。

あ、ありがとー、ブレット。

新たな出会いを求めて頑張るわー。」

誰かに捧げられたであろう愛の証を見つめながら、藤村先生が乾いた笑いを浮かべる。

わあ…多分あれ、悪気どころか何の他意も無いんだろうなあ。

言葉通りの善意のみとか…。

そういうところ、ブレットさんって先輩に似ているかもしれない…と思った。

先輩が、そのまま大きくなると、ああいうヒトになるのかも、と。

そう考えると、 “ 視えていたモノ ” のせいで恐ろしく感じていた彼のコトも、そう苦
手意識を持たずに接するコトが出来る様になっていました。

『それは良いコトだけだね。

でも、彼らの性格は…果たして、どうなのかしらね。

それって格好良いかもしれないけど、とつても生きづらい性格だと思うわ。

私も、ヒトのコトをとやかく言える性格ではないかも知れないけれど。』

……。

兎も角、そうこうしながら私たちは、広げていたお弁当やシートを片付け終わりました。
買い込んだ藤村先生と先輩のお洋服を仕舞わなければなりませんし、ここでブレット
さん達とはお別れです。

「今日は、本当にありがとう。」

飛び入りで現れた僕たちに、食事を振る舞ってくれて。

君たちには、ご馳走になってばかりだな。」

「フン、気にするでないわ。

シールド
守護者よ。」

貢ぎ物を受けとるコトもまた、英傑の役目であると知るが良い。」

「いや、なんでお前が偉そうなんだよ、ギル。」

「偉そうなのではない！偉いのだ！ふははははは！」

「…はあ、もういいや。」

でもホント。

ギルの言う通り、気にするなよな、ブレット。

俺の料理で喜んでくれるヒトがいるなら、それは俺の喜びに繋がるんだ。

つまり、俺の為でもあるんだからさ。」

「ああ…ありがとう、シロウ。」

微笑み合う二人と、高笑いする一人。

この一日で、彼らはずいぶん仲良くなつたと思いました。

先輩が、ああして平和に笑ってくれと、私も安心します。

すぐく、嬉しい気持ちになるんです。

「…ふふ、そうねー。」

ごはんは、みんなでたべるとおいしいわねー。」

藤村先生は、気持ちの昂りと急転落下のペースが早すぎたためか、どこか虚ろです。ブレットさんの言葉は実質その通りで、このヒトほど誰かに寄り添うというコトに長じた女性に私は出会ったことはありません。

「ご実家」のコトを差し引いても、なぜこうも出会いがないのでしょうか。

「ふん…辛気くさい顔をするな、虎の女よ。」

貴様の存在があればこそ、此度の宴は楽しめた。

どれ…特別に褒美を取らそう。

手を出すが良い。」

ギルさんの言葉に、藤村先生はおずおずと右手を前に出します。

そこに、何処かから取り出された長いリボンが掛けられました。

「何か、願い事を考えろ。」

数は三つだ。」

「う、うん。」

藤村先生は祈るように目を瞑り、ギルさんは手早くリボンを巻いてゆきます。

二回巻き、三回結ぶ。

鮮やかな黄、黒、そしてピンクで構成された輪が出来上がりました。

そのカタチを見て、先輩が口を開きます。

「これ…ミサンガか？」

「その原典だが…まあ、似たようなものだ。

奇跡による美しい結末とやらを願う紐、という意味ではな。

願をかけ、自然と切れた時に願いが叶うというものだ。

本来は己で巻くコトで願いを込めるモノだが…。

此度は褒美だ。

この我自ら、願を補強してやった。

加えて貴様が「強運」の持ち主ならば、複合作用にて軽い願望器程度の効力は発揮されるかもだぞ。

有り難く思えよ、虎の女。」

得意気に笑うギルさん。

「どうやら、本心から藤村先生を気遣つての行動だったみたいです。

「…よくわからないけど、うん。

「ありがとう、ギル君。」

「うむ、しかし願とは、ヒトの健やかなる生きざまをこそ燃料として燃え上がるモノ。

我が輝きし宝の威光に傲るわごコトなく、今後も励めよ、虎の女。
「あははははは。」

ていうかそろそろ、その虎の女っていうの止めない…!?

「ふははははは!」

「いや、ふはははじゃなくて!」

…良かった。

藤村先生、元気になって。

ギルさんは…恐ろしいから苦手だけれど。

『…怖がってたって、運命はやって来るのよ。

サクラ。』

……………。

「サクラ。」

びっくりした。

振り替えると、ブレットさんが立っていました。

「それとシロウも。」

さつき、僕の連絡先を渡しただろう。

タイガにも話したが、何か困った事があつたら遠慮せず連絡してきてくれ。」

私は、食事の時に思い出したように配られたメモ用紙の存在を思い出しました。

携帯電話の番号と、メールアドレス。

「ああ、ありがとう。」

でも、冬木に来たばっかのブレットの方が困ったことは多いだろうからさ。

そつちこそ、なんかあつたら連絡くれよ。」

「ハハ、そうだね。」

ありがとう、シロウ。

それじゃあ、僕たちはこれで。

いこうか、ギル。」

ポケットの中のメモ用紙に、手が触れます。

…ブレットさんの厚意は嬉しい。
でも…私は…あのヒトは……………。

去り行くブレットさんの背中を、つい見つめてしまいます。
その時…

「…今のうちに死んでおけよ、娘。

馴染んでしまえば、死ぬコトも出来なくなるぞ?」

「……………っ!」

すれ違い様の、ギルさんの言葉。
わたしだけが、聞いたことば。

体が、温度を失う感覚。

竦んで、動けなくなる。

いつたい、なに、を……………。

『…理解ってる筈でしょう、サクラ。

何度だって言うわ。

怖がってたって、運命はやってくるの。』

……………。

.....。

「桜！」

「っ.....。」

先輩の声が、聞こえました。

「どうしたのー？ポーツとしちゃって。」

ほらほら、今日がいくら暖かいつて言っただって、日が落ちれば冷え込んでくるよ。

早く帰ろ？」

藤村先生の声で、体を廻る血液に熱が戻ったような気がしてきます。

「...すみません、なんでもありません。」

ええ、帰りましょう。」

...私だって、わかってる。」

でも…私は、嫌。

知らない。

どうすることも出来ない。

願わくば…今が続けば。

この日々が、続きさえすれば……。

Episode 9 : 優雅たれ

遠坂家は、2000年以上の歴史を持つ魔術師一族だ。

元々は日本に住まう「隠れキリシタン」の家系であったが、当時の当主であった遠坂永人が、ふらりと現れた「魔法使い」の存在に感銘を受け、勧誘されて弟子入り。

以降、魔法使いに伝授された「転換」性質の魔術を代々磨き続け、現代に至る。

故に、遠坂家は「魔術協会」と「聖堂教会」、両方と深い繋がりがあった。

だからこそ、中立的な立場と「魔法使いの弟子」という強力な背後関係を持つ遠坂家が、当時既に反目しあっていた二つの組織から冬木の地の管理を任されたのである。

『アインツベルン』と『マキリ』という、二つの先達大家と共に、儀式に参加するコトとなった。

全ては、聖杯戦争という「奇蹟を起こす大儀式」を成立させるため。

二百年の長きに渡る、遠坂家の道のりの始まりは、そこであった。

特級の霊地であり、聖杯戦争という強大な魔術儀式が敷かれた冬木という地を魔術的に管理するには、並大抵の精神力では勤まらない。

故に、『優雅たれ』。

常に余裕を持ち、確実なる研鑽に裏打ちされた実力でコトに当たる。それこそが遠坂家の信条であり、理念であった。

遠坂家六代目当主：遠坂凜は、勿論それを胸に生きてきた。

亡き父の遺志を継ぎ、此度開かれる“五度めの聖杯戦争”を成功させるために。万能の願望器などに、かける望みはない。

そこに定められた戦いがあるならば、当然に勝たねばならないからだ。そう、ただ優雅たる生を謳歌する為に。

2004年 1月中旬 午後

冬木市 深山町 遠坂邸

(な、なんで貴女がココに来てるのよーッ！)

遠坂凜は、優雅たりえない狼狽ぶりで、心中にて叫んでいた。

今日は、午後からの来客に備えて準備をしていた。

時計塔から招待され、此度の聖杯戦争に参加する。『中東魔術師の長』：アトラム・ガリアスタを招く為だ。

なんでも中東の石油採掘件：その大半を握る石油王であり、その魔術も、時計塔での地位も、聖杯戦争参加権すらも金で買い取ったという豪腕魔術師らしい。

歴史で言えば遠坂家の半分に足りるかどうかの歴史の浅い一族ではあるが、その存在感は既に時計塔でも無視できないレベルに達しているという。

そんな男が、戦争とはいえ魔術儀式に参画する故の礼儀を通すと来訪する。

本来であれば来日して直ぐ挨拶に来て然るべきであったのだろうが、ガリアスタは新都に高層ビルディング一棟建設し、まるまる自らの工房に仕立て上げてからやっと連絡を寄越してきた。

時計塔への影響力を傘に着た、強気なやり方だ。

『知り合いの神父』の話によると、キャスタークラスのサーヴァントが喚ばれた頃と、奴が冬木市に工房を設置した時期は重なる。

恐らく、今日の来訪にはサーヴァントを連れ立って現れる筈だ。

威を示すのと同時に、管理者への礼を通す目的の来訪であるならば、そうするのが正

しい。

私は、未だサーヴァントを召喚していない。

自分の魔術に適した日取りを決め、最高のサーヴァントを引き当てるために、今はまだ待つ。

だから…今日は、アトラム・ガリアスタという魔術師を見極め、少しでも多くの情報を得る会合としなければならない。

そして、遠坂の主として優雅たるコトを、外様の魔術師に示す。

そう考え、気合いを入れて臨まんとしていたのだ。

だのに……

(いやあ…さつき、お好み焼き屋さんで偶然会っちゃって。

そしたらなんか…成り行きで。)

なんで、いきなり想定外の奴が居るかなー!?

沙条綾香。

お父様が亡くなった後の私の生活を繋ぐため、後見人として財産管理をしていた「クソ神父」が売っ払っちゃった、元はウチの土地だった超級スゴい龍脈上の土地に住む魔術師。

ほむらはら
穂群原学園においてはクラスメイトでもあり、学校卒業後は私も留学予定である「時計塔」に既に在籍している先輩でもあった。

コイツは、父親や姉がいろいろやった結果「聖杯戦争には参加しない」立場で冬木に住んでた筈なのに…！

(どーゆー成り行きよ！)

よりにもよって時計塔の成金と連れ立って、今日という日に現れるって…アンタ私に喧嘩売ってんの!?)

(いやいや、そんなつもり無いから！)

ホント無いって！

私はあくまで「部外者」として、今回の戦争で中立的な立場から、二人に話がしたいだけ！)

(あー!?)

いつも通り、念話でキンキンやりあってしまう。

他者に感知される心配は無い、ハズののだが…。

「…いい加減、脳内でのヒソヒソ話は切り上げて貰えるかな？」

トオサカの当主よ。」

流石に、睨み合いが長く続いていたからか、痺れを切らしてアトラム・ガリアスタが口を開いた。

玄関先で突つ立つて客人を待たせてしまふなんて、優雅じゃない真似を私は…！

「…し、失礼しました、ミスタ・ガリアスタ。」

改めまして、本日は良くぞお越しになつて下さいましたわ。

では、どうぞお上がりになつてください。

「従者”の方も、どうぞご一緒に。」

私はなんとか建て直し、彼らを屋敷に招き入れる。

人智を超えたチカラを持つサーヴァントを、客人として招き入れる。

この行為は、暗に「暴虐に出るような愚を冒すモノは、礼を失するモノ」であるというコトを示す行為でもあった。

「ありがとう。」

では「キャスター」。

お言葉に甘えて同行しろ。」

それを、当然のように承知していたであろうガリアスタ。

やはり、一廉ひとかじの人物であるというコトは間違いない。

『畏まりました。』

ガリアスタ様。』

…今、あつさりと自分のサーヴァントのクラスを明かした!?

まだ、厳密には戦争も開始前だというのに…!

思わず、目を見開いて術の主従に視線を送ってしまふ。

「何、此度はセカンドオーナーである貴女への挨拶が、半月ほど遅れてしまったのでね。

その謝礼としてならば、この程度の情報は安いものさ。

気にしないでくれたまえ。」

肩を竦め、ガリアスタは笑う。

…なるほど、先手を打たれた。

これから聖杯戦争という“情報がモノをいう戦争”を戦う上では、サーヴァントのクラスは現状、かなり大きな手土産と言える。

まして、拠点に籠って戦う、虚弱で弱点の多いキャスタークラスの情報ともなれば尚更だ。

ガリアスタ陣営にとって、どれ程の重要度の情報なのかは判断がつかないが、それでも客観的に見れば十分に過ぎる。

このカードを切られては、
“無礼を働いた客人”
に対する態度で接するコトは出来な
くなくなった。

悔れないわね、アトラム・ガリアスタ。

「邪魔すんでえ。」

何食わぬ顔で、二人に続こうとする綾香。

「ハイ、邪魔すんねやったら帰ってー！」

すかさず、リモンチョウチユウ 裡門頂肘でブロック！

鋭い肘が綾香を襲う！

「あつぶない！何すんの…！」

『あいよー。』

綾香が激怒するより早く、サーヴァントが踵を返して立ち去ろうと歩み出した。

「待て待て待て待て！」

咄嗟に止めにかかるガリアスタ。

『帰つてと仰られたので…。』

「素直に帰ってどうする！」

用があるから来てるんだろうが！」

キレ味の良いツツコミ。

よその国の人とは思えないクオリティに舌を巻く。

「あと、ミス・トオサカ。

ミス・サジヨウとも話があるので同席を願っているワケだから。

君にも益となる話の筈だ。

故に、彼女の参加も認めて欲しい…良いかね？」

…想定外だが、仕方ない。

彼女にはあくまで部外者を貫いて欲しかったのだが。

「ハア…わかりました。

じゃ、皆上がって下さい。

今、お茶をいれますので。」

.....

いれたての紅茶と、シヨートブレッドクッキー。

ささやかな持て成しの席で、四者の会合は始まった。

挨拶もそこそこに、ガリアスタの魔術師はひとつの提案に纏わる話を展開する。

冬木の街を、聖杯戦争の被害から護るための協定。

それを、同じ時計塔所縁の魔術師である綾香からの提案があつたとはいえ、外様の魔術師である彼が考慮するとは。

勿論、冬木のセカンドオーナー…管理者一族である私としては、それが成るに越したコトはない。

しかし大儀式にして、最上の使い魔である英霊のサーヴァントを用いる決闘儀式に於いてそれを考慮するというのは、魔術師としては甘きに過ぎる愚である、とも言えた。

…それでも、私は街を管理してきた遠坂の長としての誇りを持って勝利したい。

こういう部分が“心の贅肉”なのかもしれないが、これを削ぎ落として目的を達するコトが、“自分の選択”として正しいモノだとは思えなかった。

しかし…

「…その条件が、冬木に住む魔術師の情報…というのはね。」

そればかりは、管理者である私が許容するワケにはいかない。

それは、庇護下に在るモノ達を売るコトに他ならないからだ。

「ああ、勿論それについて君が私に情報を漏らす必要などはないよ。

ただ、私とミス・サジヨウの協力体制を把握し、街に被害が出る状況になれば互いを

邪魔しない…そういう黙認の確約さえ取り付けてくれれば、それで良い。」
「…なるほど。」

あくまで、この契約は貴方と綾香の間でのみ交わされる取り決めである。

それを私が知ってさえいければ問題ない、と言いたいのですね。」

確かに、私と綾香の希望は重なる。

故に、彼女の目的を損なうコトは無いだろう。

それに協力するモノが居たならば、その場に於いてはソレを害するコトもしない。

しかし…

「他陣営からしてみれば、私たちが協調している様にも捉えられかねませんね。」

「そう思いたい連中からは、そう思わせておいてやればよろしい。」

実際、複数のマスター間で組むコト自体はルール違反ではないのだからね。

それに…状況次第では実際に手を結ぶという選択肢も吝かではない。

ミス・サジヨウの目的と完全に合致した暁には、君とてそれは同じだろう？

ブラフなのか真実なのか、それを開示するのか秘匿するのか。

情報をコントロールするというのも、魔術戦では重要なコトだよ。」

そう言つて笑い、ティーカップに口をつけるガリアスタ。

…やはり、中東の魔術社会を牛耳り、西欧魔術社会においても大きな影響力を持つ男

というだけはある。

魔術の腕では負ける気は勿論無いが、戦火ゆらめく実際の闘争と、権謀術数乱れ舞う政略を戦い抜いてきた強者。

しかも、世界でも有数の億万長者。

それが、目の前の男なのだと言った。

彼を超えなければ、聖杯戦争で勝ち残ることは出来ないのだ。

「じゃあ、そーゆーコトでよろしく。」

綾香は、聖杯戦争参加者同士の睨み合いなどはドコ吹く風で、ぱくぱくとクッキーを食いまくっていた。

…こいつ、この前にお好み焼き九枚も食べたとか言ってたっけ？

この細い体のドコに、食べたモノとぶつとい肝っ玉が詰まってるのか、ヒラキにでもして拜んでやろうか。

『失礼、ちよつと良いかな？』

トオサカの当主さん。』

唐突に、今まで黙っていたキャスターが口を開く。

…そう、このサーヴァントと言う何者かにも疑問を感じていたのだ。

なにせ、全く神秘の気配が感じられない。

キャスターというだけあって、高位の魔術師であればそういう隠匿術も行使可能なのかもしれないけれど…。

それに、この男…口調や雰囲気が変わった？

「…なんだ。」

発言するのか、キャスター？

この期に及んで、お前が何を語ると言うんだ。」

ジトつとした目で、キャスターを睨むガリアスタ。

先ほどまでの接し方と違う気がする。

『ああ、ちよつとしたコトだよ。』

コレについては未だマスターにも話してなかったから、少々憚られるんだが…まあ、こちらの陣営の利益を損なう質問じゃない。

だから、どうか発言を許して欲しい。

構わないかな？」

軽妙な口調で、三者を順に見ながら確認するキャスター。

…なんかイラつと来る性キャラクター格してるわね、コイツ。

「…まあ、ミスタ・ガリアスタが許可するなら、私は構わないけど。」

「…その話、私にも関係するの？」

クツキーをカリカリ食べ続ける綾香が問う。
なんか齧げっし歯類しみたい。

『勿論、関係する。』

むしろ、この街を護るために広く活動するであろうキミにこそ、この質問は投げ掛けたいんだよ。

どうかな、マスター？

許可はもらえるだろうか？』

己がサーヴァントの問いに、むっつりと黙っていたガリアスタは、一旦息を吐いて重い口を開いた。

「…良いだろう。」

後で、どういふつもりなのかは聞かせてもらおうからな。」

『了解、感謝するよ。』

まあ、質問したい内容は至ってシンプルだ。

この街に、不審な人物が侵入した形跡は無いかね？』

…よりにもよって、サーヴァントがそれを聞く？

どういう意図の質問よ。

「…そんなの。」

これから魔術師同士の戦いが始まるのよ？

一般的に見て不審な輩が、わんさか集まるでしょうよ。」

『ああ、それはそうだな。

勿論そのとおり。

だから… “明確にこういう奴” が現れたら、僕に教えて欲しいって人物をリストアップしておいた。

…まあ、中には地球人類じゃないやつも、人間ですらないやつもいくらか居るが。』
 そう言つて、キャスターは懐から一つの箱を取り出した。

黒いプラスチックらしき素材と、銀色の金属で構成されている。

「…なにこれ？」

『この中に、この街に潜んでいるかもしれない “悪党”^{ヴィラン} の情報を纏めておいた。

出来れば、この会合の後にもチェックして見て欲しい。

現れなければそれで良い。

だが、もしリストアップした悪党を見かけるコトがあつたら、是非僕に知らせて欲しい。』

情報が込められている…つまり、これはそういった機能を持つ魔術礼装ということ？
 あまり魔術的なアイテムには見えないけれど。

こんなの始めて見るし…。

「ふーん。」

まあ、見るだけなら見ても良いけど。

で、これってどうやって中身を確認するの?」

私の発言に、周囲の空気が凍りついた気がした。

三者三様、思い思いの表情で私を見つめている。

…え、何。

私、そんな変なこと言った?

『どうやって…手っ取り早くPCに繋げてくれれば良いさ。』

普通のUSBメモリだからね、これ。

PDFファイルで纏めてあるから、2004年現在ならば、よほど旧式のハードでもない限り確認できると思うよ。』

…???

…ぴー、しー?

ゆー、えす、びー?

ぴーでー…えふ?

言ってる意味がわからない。

やはりこのキャスター、神代の魔術師だとも言うの？

現代の魔術師では解読できない、特殊な魔術言語を唱えられてしまったのかしら。

「…あー。」

キャスターさん。

遠坂さんは古いタイプの魔術師だから。

コンピュータ関係の知識については、1930年あたりにお生まれになられた御老人とかよりも疎いんですよ。」

…え？

じゃあなに、これって現代の機械道具なの？

こんなちっちゃいの？

「…冗談だろう？」

2004年だぞ。

AndroidやiPhoneが出回って、子供のPC離れが囁かれ始めた時代じゃない。

それに、すっかりハイスクールのカリキュラムに情報科目インフォメーションが組み込まれていて当然になった時代じゃないか。

WindowsもXPが登場して久しい頃でもある。

先進国である日本の：しかもうら若きティーンエイジャーが、USBメモリの存在すら知らないなんてコトが有り得るのか？

偉大な魔術師一族とやらは、生きた化石か何かなのか？」

なんだか、またワケのわからない単語を羅列してくるキャスター。

や、やめて！

聞いているとアタマが痛くなる！

やっぱりキャスターの精神汚染攻撃なのでは!?

「うわっ、アタマを抱えて呻き出したぞ！

やめろキャスター！

コンピュータ関係の単語はもう出すな！」

「と、遠坂さん！

大丈夫、怖くない！怖くないよ！

ほら、落ち着いて！

紅茶飲んでほらほら！」

.....

2004年 1月中旬 夕方

冬木市 深山町 道路

「…追い出されちゃいましたね。」

「お前が、唐突に余計なコトを言うからだぞ。」

キヤスター。」

『…僕のせいなのか？』

アレは。』

知恵熱を出して倒れてしまった遠坂さんを残して、私達は遠坂邸を後にした。

キヤスターさんからのお願い情報については、私が後日遠坂さんに教えてあげるとしよう。

しかし…このキヤスターさんというのも謎なヒトだ。

英霊だと宣うワリには、現代的知識が豊富すぎる気がする。

サーヴァントとして喚んだとき、現代知識が聖杯から付与されると聞いたコトがある

けど…その範疇を越えていないか？

…まあ、私は彼と戦うコトは無いのだし。

気にする必要も無いのだろうけど。

「…まあいい。」

すべき話は一通り済ませた。

あとは、君から情報を聞き出すだけだ。

ミス・サジヨウ。」

「そうですね…。」

では、立ち話もなんですから喫茶店にでも入りましょう。

注文すれば、なんでも出してくれる面白い店があるのですよ。

麻婆丼でも、カレーでも、トムヤムクンでも、ソムヤムタイでも、ポツピア・ソツと

か、カオ・オプ・サツパロットとか。」

『…まだ食う気なのか。』

ホントにサーファー君並みだな。

というか、タイ料理の割合が半端じゃないんだが。』

取り敢えず、遠坂邸の在る丘を下りながら会話する。

目的地の喫茶『アーネンエルベ』は新都側に在るので、橋を渡って向かう必要があつ

た。

「おや?」

遠目に、数人の人影を見つけて立ち止まる。

合わせて、二人も倅ない立ち止まってくれた。

「うん、どうしたんだい?」

「いえ、ちよつと…。」

私が視線に捉えた先には、少年少女を連れだつて歩く女性が居た。

私の学校の先生である、藤村先生。

それと、確か「後藤くん」のクラスメイトであつたハズの衛宮くん。

それから…ワカメの妹の桜さん、だつたつけ。

買い物袋をたくさん抱え、つかれた表情だけでも朗らかに歩み行く。

三人は、こちらに気付いてはいない。

車線の向かい側に居るし、車通りも多いからだろう。

『…二人は年齢が君と近いな。』

スクールメイトかい?』

「…特別仲の良い友達じゃないですけどね。」

それと、一人はウチの学校の英語教師です。」

つい、語気に感情が乗ってしまったコトを、私自身も感じていた。

『あれが、君が護りたい街の一部というワケか。』

何か、彼の言葉にも熱が籠められるのを感じる。

彼も、やはり一廉の英霊というコトなのだろう。

「そんな、大それた気持ちを持って臨んでいるワケでは無いですけどね。」

その言葉に、アトラムさんの目が細められた。

「…ならば、逃げ出そうとは考えなかったのかね？」

確かに霊地は大事だ。

だが、命に勝るモノでは無いだろう。

聞けば、君の一族は長年この土地で生きてきたワケでもないという。

時計塔とも強いコネクションを持つ君が、命を懸けてまでこの街に固執する理由になるというのか？」

中東という一つの地域を支配する、誰よりもヒトにとっての土地という存在の大事さを理解する魔術師。

彼が、承知の上で敢えて問う。

程度はともあれ、これから協調するにあたっての相手を、見定めるための質問であると感じられた。

「…これは、遠坂さんにも訊かれて答えたコトでもあるんですけど。」

たしかに、そもそも関わる必要なんてないのかも…なんて弱い考えを封殺できるほど、私は強くないです。」

去り行く学友と先生の背中を眺める。

考えが吐き出される。

うん、言葉にすると、やはり覚悟が体に染み渡る。

私は、改めて二人の方を見据えて笑った。

「でも…『やれることをやらずに逃げた過去』…。」

…そんな重荷を一生抱えて生きられるほどの強さも持ち合わせてないっばいんですよね。

「これが。」

E p i s o d e 1 0 : 英 雄 王

2004年 1月中旬 夕方

冬木市 冬木大橋

「…サクラに、何か言ったのかい？」

『星条の守護者』たる男が、我を見据えて尋ねる。

つくづく愉快な男だ。

当世に於いて、この我に対して此処まで揺るぎ無き眼まなこを向けた男など、此奴の他には存在しなかった。

女であれば、前回の余興に姿を表した『憐れな童の娘』が存在したが…この男は、かの女に似た性質を持っていると感じられた。

未来の為に戦いながら、その心は過去を見つめている。

その様は、憐れながらもいじらしく、そして美しい。

この我が目をかけるに足る男など、『綺礼』きれいの他には此奴が初めてであると言えた。

「フ…何、少々気に食わぬ醜悪な憑き物に魅入られていた故な。」

忠告を呉れてやったままでだ。」

偽りでは無い。

あの娘もまた、憐れな宿命に囚われていた。

なれば、己が手によって幕を下ろした方がまだ潔く、魂の安寧も約されよう。

：何より、あの娘の存在が在ればこそ、此度の余興に無料にも横槍を入れた輩の姿が見えてきた。

そういう意味では、感謝しているとさえ言える。

「…そうか。」

君なら気付いているんだろう？

あの子が抱える事情を。」

沈痛な面持ちで、問いかける守護者^{ブレット}。

此奴は恐らく、あの娘が参加者^{マスター}であるという事実しか知り得はしないだろう。

あの娘の身に起こった出来事も、躰^{からだ}の奥で蠢く^{うごめ}モノも想像すら及ばぬ筈である。

「そうさな。」

戦人^{いくさびと}ならざるモノが、そう在れかすと宿命付けられている。

憐れな娘よ。

しかし…貴様は裁定者だ。

娘の憐れさを看破したとて、何をも為すコトは出来まい？」

我は、橋から望むコトが出来る川を眺めながら問うた。

みおんがわ
未遠川。

嘗て龍神が住まうとされたソレは、この街に於いてはそこそこ見ごたえのある代物であると言える。

我がシユメールが誇るテイグリスとユーフラテスの清廉にして偉大な水流には、無論敵うべくも無いが。

水の流れは、運命さだめに似る。

ただびと人の身一つでは、到底抗いきれぬ。

で、あれば……

「…僕は、裁定者ルイラーである以上に、僕自身だ。

為すべきコトと、成し遂げたいコトが違つたとしても、僕は…僕の心のままに戦うさ。たとえ、一人だつたとしてもね。」

ままならぬ重責を課せられ、俯きながら云う。

クク、実に愉快だ。

このくだらぬ末世に於いて、これほどの傑物が如何にして生まれたと言うのか。

此奴を綺礼にぶつけてみる、というのも一興かもしれないな。

「だが、一人でも戦うが……」

顔を上げる。

信念の籠もった、瞳。

「一人ではないと信じる。」

強い言葉が、我を貫いた気がした。

眼が見開かれてしまったのを、自制するコトも出来なかった。

「だからこそ……僕は、僕として出来るコトをやらせてもらう。」

手を翳す。

守護者の躰が、淡く輝く。

「裁定者の『神明裁決』に於いて、二画の令呪を持って願たてまつい奉る。

英雄王…『例えばどんな苦境に追い込まれても、全力で生き残ってくれ。』」

強力な魔力による補正が、我が身に降り掛かった。

裁定者のクラスは、聖杯戦争を機能させる為のスキル『神明裁決』を持つという。

其は、現界する総てのサーヴァントに対する絶対命令権……『令呪』を二画ずつ所有する。

それを……愚かにも此奴は、纏めて我に行使したのだ。

命ずるでもなく、英霊たるこの身に対して……ただ「生きる」と。

「ふ、ふははー！

フハハハハハハハハッ！」

肚から笑いがこみ上げる！

思わず破顔し、仰け反ってしまう程の衝撃！

こ、此奴め！

やっつけてくれるではないか！

我を爆笑させ、麗しの腹筋を崩壊させて来よるとは！

「ふう……心底、面白い男よ。

貴様、我が「如何様な手段」でもって現界を保っているのかすら知らぬのであろうに。

よくもまあ、そのような口説き文句を吐けたモノだ。

オマケに、令呪を切って捧げ物とするとは。」

「過去の君に興味は無い。

積み重ねた過去の末に、今何が出来るのか。

重要なのはそこだ。」

スツパリと言いい切りよる。

この男ならば、言峰教会から滲じむ醜悪さと、彼処と我の関連性に薄々勘付いているだろうに。

我ほどではないが、この男には強い人たらしの才能があるのだろうと感じられた。

歴史を蔑ないがしろにするでなく、それらの集積の上に今が在る…という、理解。

正しく、英雄の在り方であると言えよう。

遠き世界の記憶に在る、太陽神スーリヤの子の姿を幻視させられる。

「フ…良かろう。

此度の捧げ物…言こそ不遜なれど、受け取っておいてやろう。

故に、この我の耳に言葉を乗せる榮譽を授ける。

必要在らば、我が携帯電話に連絡を寄越すが良い。

興が乗った暁には、貴様に力を貸してやろうではないか。」

我は、光り輝く金色の携帯電話を取り出して見せつけた。

此れなるは、我が特注の代物である。

当世の技術は拙い上にセンスが無い。

もつとギラギラさせねば、王たる我が持つには相応しく無いであろうが！

「ありがとう、ギルガメツシユ。」

現界して初めに、まず連絡手段の確保をしておいて良かったよ。」

「む…：そういうえば貴様、携帯電話は如何にして確保した？」

貴様が現界したのは、ここ一〇日前後の話だったであろうが。」

純粹な疑問を投げ掛ける。

黄金律スキルをAランクで所有する我ならば、道を歩くだけで世界が我に富を献上するが、此奴はそうではあるまい。

「ああ、日雇いのアルバイトを掛け持ちしてね。」

なんせ、この体なら疲れもしないし、食事も必要ない。

休みなしに働けば、旧型機種種の携帯電話を購入するだけの費用くらいは稼げる。」

…なんと涙ぐましい努力か。

カッツカッツではないか。

「…では貴様、宿はどうしているのだ？」

よもや、インターネットカフェを渡り歩いているなどとは言えないな。」

「え？」

まさか！

使える資金も限られているのに、必要ない宿泊費なんか捻出したりはしないさ。

ホラ、この街には鬱蒼とした森林や山が沢山あるだろう？

だから……」

「ええい、やめろ！」

ソレ以上云うな！」

バカな……野宿だど!?

では、あの服は一日も洗濯を……。

いや、召喚された時から装備していた、エーテルで編まれた衣服であるならば必要は無いのか。

しかし……だからとて、我が目を掛けるに足る男が、こうも見苦しい惨状であるなどは……！

「……守護者よ、此れを取らず。

受け取るが良い。」

我は、我が「蔵」の中から本皮の長財布を取り出した。

更に、その内に忍ばせた『ゴールデンブラックプラチナカード』を取り出す。当世に於いて、選ばれし富裕者のみしか持ち得ないクレジットカードである。

我が財に直結する一枚、それを差し出した。

「えっ！

いや、それは流石に悪いよ。

大丈夫、野営は慣れてるんだ。」

「ええい、遠慮するな戯け！」

我が宝を授けようというのだ！

感謝して受け取らずして何とするか！」

無理やり渡す、などという無様な真似は出来ん。

故に、己から手を伸ばすまで待つ。

睨んで待つ。

だから、はやくとれ！

この我に恥をかかせる気かア！

「…わかった。

ありがとう、ありがたく使わせてもらうよ。」

根負けしたのか、遂に守護者はカードを受け取った。

フハハ。

これで、此奴は我が財にて生きるモノとなった。

即ち、我が家臣と言つて過言ではあるまい。

「フン、わかれば良いのだ。」

では、それを使って早速宿を取りに行くが良い。

冬木ハイアットホテルのロイヤルスイートがオススメだ。」

「えっ、今からかい？」

戯けめ、何を新鮮に驚いておるのだ。

「今日まで野宿しておったモノが、電速で動かん限り金を使う決断なんぞ出来んであるうが！」

良いからさっさと行け!!」

思わずダン!と、アスファルトを踏む。

「わ、わかったわかった。」

そんなに怒られるコトをしたかな…?

じゃあ、行かせてもらうよ。」

そう言つて、守護者は走り出した。

なんとも危うい男よ。

己を省みる性質に、些か欠けている節があるな。

今日の昼飯を献上した弁当係も、どうやらそのきらいは有る様であったが。

「宿をとったならば、備え付けの電話から我がケータイに連絡を寄越すが良い！」

それをもって、我が命を遵守した証明としてくれる！」

我が言葉に、返事代わりとばかりに守護者が手を振った。

フン、全く不遜である。

しかし、奴の存在は中々どうして悪くない。

此度の余興に面白味を加えるには、丁度よい存在であると言えた。

「フン。」

…さりとて、横槍を入れる無粋なイレギュラーの始末。

コレを彼奴の手に任せるつもりなどは、サラサラ無かった。

此度の絡繰りからくは、今日おひよの一日で大凡把握おおよそした。

「平行世界の更なる彼方」から、勇んで喚ばれた守護者には悪いが…其れを伝え教えてやりはしない。

始末は、我自らがつけてやろう。

この私の遊興の場を、手前勝手に乱してくれる輩。

我が至宝を持つてして、この星よから消滅けしてやらねば気が済まぬ。

クク…別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？

嗤いながら、大橋を歩み征く。

すると、道向こうから歩み来る一団の姿が目に入った。

…ほほう。

今日は、まこと面白き日よな。

次から次に、“珍妙なるモノ”が現れる。

.....

…新都の店に向かうというのは、失敗だったのかもしれない。

『…マスター。』

「…理解っている。

向かってくる、あのブロンド髪 of 男。

サーヴァントだ。」

「…っ！」

咄嗟に身構えるサジヨウ嬢。

当然だ。

ヴィジョン・アーマーを通して会話する僕とは違い、向かって来るアレは正真正銘の

サーヴァント。

僕なら兎も角、歴史上の英雄サマなわけだ。

ビビってしまうのも当然のハナシだと思つた。

その上、F. R. I. D. A. Y. から不穏な報告を受ける。

『接近するサーヴァントから、未知数の高エネルギー反応を感じ。

過去確認したデータと比較、雷神の反応に酷似しています。』

…なるほど。

つまり、ヤツは神様クラスのパワーを持つサーヴァントつてワケだ。

そりゃ、なんとも嬉しくない事実だね。

聞いている間に、為すすべもなく男は僕らの眼前まで歩み寄つて来た。

「…この戦い自体は良い。

良い趣向だ。

宝を求め、英雄同士が覇を競い合うとは素晴らしい！」

ニタリと嗤い、唐突に…そして蕩々と語り始める男。

「なぜ生前思いつかなかつたかと齒噛みするほどだ。

この術式を考案した魔術師共とやらは、ひとつの天才であつたのであろうよ。

だが…それを受け継ぐ貴様達現代の民はどうかな？」

男の言葉は、眼は、アトラムに向けられていた。

「…尊大だな、英霊。」

成る程、自分のサーヴァントは余程コミュニケーションを取りやすい部類だったというコトを思い知らされるよ。」

一瞬言葉に詰まりかけるが、それでも不敵に笑ってみせる。

相手の威圧感は何分にも感じているだろうに…見栄っ張りなマスターだ。それだからこそ、こういう場面では頼もしい。

「当然だ。」

英霊たるもの、大きく、尊く在らねばならん。

しかし、貴様のサーヴァントだと…？」

そのまま、アトラムに向いていた視線は、アーマーほくに向けられた。

「フン…成る程。」

卑しくも引きこもり、巢穴から此方を伺っているというワケか。

我が玉体を盗み見る所業、万死に値するトコロであるが…ふむ。」

そう言つて、僕の方に歩み寄つて来た。

突然襲いかかつて来るコトはするまい…とは思うが。

ライダーと違って、マスターを伴わず闊歩している。

そして、この値踏みするような態度。

油断は出来ない……と言つても、このアーマーには掌のソニックブラストしか戦闘用装備が無い。

出方を伺わなければ。

最悪、宝具の一部……『機動衛星』スタークサテライトを発動する必要が有るかも……。

「……成る程。

美しい。」

赤い双眸が細く閃き、此方を射抜いた。

その眼は、アーマーを貫いて拠点の僕をすら見透かしている様に感じられる。

「貴様……何時の時代の英霊だ？」

これほどまでに精緻な人形を、我がウルクの民以外が組み立ててみせるとは。

しかも、これには魔術の類が一切使用されていない。

卓越した技術と、この世の理だけを頼りにこれだけのモノを仕上げるなどと……。」

観察している。

そして、見抜いている。

過去の英雄が、僕の最新アーマーを？

「面白い……表層に映した像は、あらゆる状況に対応して常に変化している。」

…うむ、動力となつてゐる“核”の存在も素晴らしい。

忌々しい神々の力である第四状態ブラズマを此の様な小さな箱に収め、完全に制御…。

…いや、若干の無駄がある、か？」

『それは当然。』

これはまだ完成品じゃない。』

…しまった。

ついうっかり口をついて出てしまった。

初見でデイスコ・システムを看破されたばかりか、リアクターの構造まで言い当てられて、少し昂ぶつてしまった。

「ほう…此れより更に、洗練する計画プランがあるか？」

『…ああ、まあね。』

で、君は？

ウルクだとか言つていたが…かの王朝の偉大な英雄といえば…。

まさか、名高きギルガメッシュ王だとも？』

僕は、限られた情報だけで当てずっぽうに言つてみる。

すると男は、面白そうにニヤリと笑つた。

「我を知るか。」

クク：良かろう。

その知識と、卓越した技術に免じて、覗き見る不敬は赦そう。

如何にも、我はギルガメッシュ。

あらゆる英雄総ての王である。」

マジか、当たった。

普通、アツサリ真名を明かすか？

コツチを舐めてるのか：まあ、ソー級の英雄だつて言うならそれも分からないでもない。

しかし、英雄の王と来たか。

デカイコト言うやつだな。

大昔の王様だから、当然なのかも知れないが。

『それはそれは、王におかれましては、ご機嫌麗しゅう。

それで？

まさか、今からサーヴァント戦をおつ始めるなんて言わないよな。

日が落ちてきたとはいえ、まだ夕方だ。

戦争には早いぞ。』

此方を見据えて嗤う王から、目線を外さず言う。

「何、此度貴様たちと出会ったのは偶然だ。

そこな魔術師を屠って終わらせる、などと云う気は毛頭無い。

安心するが良い。」

アトラムが、苦々しげにギルガメツシユを睨む。

しかし、逆上して攻撃命令を出すような真似はしないでいてくれている。

助かる…そのまま穏便に済ませる方向でいてくれ。

多分だが…なんの準備も無しに、コイツと戦っちゃダメだ。

「…が、貴様の人形。

此れには非常に興味が湧いたぞ。

我が蔵に納めるに相応しい逸品だ。

我への献上を赦す故、感謝するが良い。

人形師よ。」

…何？

意外で光栄な反応だが、それでも冗談じゃない。

コレは今日完成したばかりのニューアーマーだぞ。

『そいつは光栄だ。

だが…』

「加えて。」

途端、僕の言葉を遮ったギルガメツシュが、ぐるりと視線を別所に向けた。

「貴様だ。」

貴様にこそ、我は興味が湧いたぞ…女。」

青天の霹靂^{へきれき}。

唐突に自分に話題を振られたサジヨウ嬢は、目を見開いてギルガメツシュを見つめた。

「は…私、ですか？」

身を引きながら、顔を引きつらせサジヨウ嬢が問う。

「無論だ。」

貴様は…美しいにも程がある。

我がウルクにすら、これほど我好みの女はいなかった。」

王の、見透かすような寧猛な視線。

…これは、ヤバイかも知れない。

「女よ…誓うが良い、我への忠誠をな。」

我が妻となれ。

さすれば、貴様の裡に蟠^{わたかま}る感情の総てを解放してやろう。

この世のあらゆる愉悅に勝る、極上の悦楽を味あわせてやろうではないか。」
唐突に、プロポーズを初めた英雄王。

「どういう神経してんだ、こいつ？」

一体、サジヨウ嬢の何がコイツの琴線に触れたかは分からない。

しかし…

「…やめて。」

私は、貴方なんかに興味はない。

お父さんとも、バカ姉とも上手くやってるんだ。

溜め込んだモノなんてない！

来ないで…！」

明らかに嫌がっている。

そりやそうだ。

ひと目見て、なんでもかんでも理解った気になっているイケメン。

正直言つて気色悪い。

変態だろう、そんなヤツ。

「故に、人形と娘は連れ帰る。」

余った魔術師は…まあ、不要であろうな。」

凶悪な色を滲ませ、せせら嗤うギルガメッシュ。冗談じゃない：勝手なコトばかり言いやがって。

それに、折角の新型アーマーを渡してやる気だって更々無かった。だったら…。

『マスタァー！』

ヴィジョン・アイ

V・Iを使うぞ！』

ヴィジョン・アーマーの眼が光る。

リパルサー・レイとはいかないが、スタン・グレネードのように注意をそらすコトは出来る。

車道が赤信号で本当に良かった。

「うおっまぶしっ！」

突然の閃光に、英雄王の視界を奪うコトには成功した様だった。

同時に掌から衝撃波ソニックブラストを放ち、ヤツを吹き飛ばす。

「ミス・サジヨウ！」

此方へ！」

同時に、閃光対策をしたアトラムがサジヨウ嬢を掴む。

よし、これなら…

「逃がすと思うか？」

視力が回復しているのかいないのか、ギルガメッシュが迫りくる。何か、ヤツの背後が煌めいたような気がした。

『なんでもかんでも、キミの思い通りになると思わない方が良い。』

僕は、事前に機動衛星から「呼び出した」アーマーを突撃させた。

マーク34 “サウスポー”。

伸縮自在の強力な巨大アームを持つ、本来は人命救助に特化したアーマーだ。

自然災害に耐えうる装甲を持つ代わりに、飛行速度は確かにトロイ。

だが、視界をツブせているならば、飛べれば十分なのだ。

飛べて、掴めて、硬いならば。

それだけの性能があれば…。

『僕は、お前をブツ飛ばせる。』

「ぬおッ…!？」

ギルガメッシュを掴み、サウスポー・アーマーは空を飛び去った。

アーマー全体で見れば遅いとはいえ、F-117戦闘機程度の速度は出る。

暴れたトコロで、安々とは抜け出せない。

彼方に去ってゆくアーマーを見送る間もなく、僕らは行動を開始した。

『マスター、工房に移動しよう。』

ミス・サジヨウ、君も同行してもらおうぞ。』

「えっ!?!」

「迷っているヒマはないぞ。」

君は、どうやらあの金ピカサーヴァントに目を付けられている。

我々は、情報を聞き出す前に君を失うワケにはいかないんだ。」

「…理解りました。」

今日出会って今までの貴方達の紳士的な態度は、少なくともあの光り輝く変態よりは信頼できます。」

サジヨウ嬢が頷くのを確認して、僕は両者を両腕に抱き抱えた。

戦闘能力は低いが、ヴィジョン・アーマーだつて飛行能力は有る。

走つて帰るよりは、飛んで帰ったほうが断然早い。

『よし、ではF. R. I. D. A. Y.。』

ヴィジョン・アーマーの操作は君に任せるぞ。』

『了解しました。』

「…お前は、奴と戦うのか?」

アトラムの神妙な面持ちの問に、僕は肩を竦めて笑つた。

『いやあ、どうかな。』

少なくとも、話をつけてやろうと思ってるよ。
それじゃ…。』

.....

2004年 1月中旬 夕方

冬木市 新都 冬木中央公園

「フン、此方はエーテルで構成されている。

大方、宝具の一部であつたのだろうな。」

我は、鉄屑と化して転がるソレを見下ろした。

ヒトを救うための構造。

成る程、無駄が無い。

しかし、なればこそ。

私の玉体に些かの傷すらも付けけるコトは叶わなかった。

『あー、よくもまあ、ここまで徹底的にボコボコにしてくれたモンだな。

いや…破損状態を見るに“ザクザク”か？』

無人の公園に、金属音が鳴り響く。

見やると、其処には鉄の男が立っていた。

「この期に及んで、未だ“本体”で現れぬか。

己が鎧を信じてのコトであろうが、不敬だぞ。」

赤、金、銀。

3つの鈍い光沢を纏う鎧。

胸には丸い光が灯る。

『だろうと思つてね。

せめて多少は賑やかにしよう、数だけは充実させてみた。』

その言葉と同時に、上空に空を裂く音が鳴り響く。

鎧の数が、十、二十…否、ソレ以上か。

「ほう…。」

口の端が持ち上がる。

総ての、形状が違っている。

それに、中々どうして格好が良いではないか。

求愛を邪魔されたコトに因しては些か業腹だが…戯れとしては悪くない。

『まあまあ、そう怒るなよ、金ピカくん。』

穩便に話し合おうじゃないか。』

鉄の男は、両の手を我に向けながらそう言った。

ク、幾十もの砲頭を向けながら、良くも言えたものだ。

「良いだろう。」

貴様がそれに足るほどに、我を楽しませられたら…の話だな。」

そうして、我は「蔵」の門を開放した。

E p i s o d e 1 1 : 鉄人兵団と王の財宝

2004年 1月中旬 夕方

冬木市 新都 ガリアスタ・マンシヨン

管制室

「キャスター！」

状況はどうなっている!？」

どうやら、マスターが帰還したらしい。

ドカドカと、慌ただしい足音が聞こえる。

まあ、気持ちは理解する。

状況は、まあ…見ての通りだが。

「すごい…映画のセットみたいなのでつかいモニター…!」

続いて、あつけにとられたミス・サジヨウ。

ヴィジョン・アーマーのエスコートにより、無事ではあるが風圧でバサついたヘアースタイルを整えながらの入室。

おっと、女性と見るや我が主よりも事細かに状態を目の端で確認してしまった。

妻帯者としては、これは悪癖だな。

気を付けねばなるまい。

『おかえりなさいませ、ガリアスタ様。』

いらつしやいませ、サジヨウ様。』

「ひゃっ…!？」

えつと…お、お邪魔してます…?」

いいね、新鮮なりアクシオン。

魔術師という非常識な存在である彼女が、テクノロジーの産物である我が右腕秘書に驚愕する。

ああ、それともヴィジョン・アーマーで模っていた姿と、僕の実際の姿とのギャップに戸惑っているのか。

「これは…やはり戦闘になっているか。

キャスター！」

無線を通じてアーマーを操る、僕に並び立つマスター。

悪いね、軽妙に返事して見せたいが、生憎余裕がない。

「なっ……これは、なんだ……!?!」

モニターを見上げ、絶句する。

だよな、僕も恐らく全く同じ感想だよ。

…OK。

所感を述べよう。

ダメだな。

全く歯が立たない。

.....

2004年 1月中旬 夕方

冬木市 新都 冬木中央公園

僕とマスターがこの半月間、心血を注いで作り上げたアーマー軍団は、既に七割方がスクラップに変えられてしまっていた。

なにせ、英雄王の攻撃手段はシンプルに強力だ。

僕の友神：北欧神話の雷神・ソーのムジヨルニアにも匹敵する強力な武器。

それを、無数：まさしく無限に等しい数、ヤツは所有しているらしい。

そんなトンデモアイテムを、湯水のごとく撃ち出して来るのだ。

何やら、「ドクター」のクルクルゲートにも似た何か：いや、英雄王自身もアレを門ゲートと呼んでいたか。

金ぴかのトンデモワームホールを使う高慢ちき同士、彼らは気が合いそうだね。

：話が逸れたが、ともかくゲートだ。

空中にそれを自在に出現させ、お宝兵器を射出してくる。

とんでもない弾速で、無数にだ。

おまけに、ゲートは任意の場所にいくらでも展開可能。こちらは飛び交うアーマーの軍団。

しかし、流石に無数とは言えない。

僕のスキルをフル回転させても、日に最大で20機。

召喚されてから今までで製造したアーマーの数は、試作機含め100機前後。

ミサイルもリパルサーも、悉く通用しない。

恐ろしいやつだ。

物量で僕が驚異を覚える相手など…まあ、それなりに沢山居たが。

…昨夜の麗しきゴーゴンの末妹嬢との戦いで、この戦いに対する見積もりを低く捉えていたとは思わない。

彼女も十分に恐ろしいパワーを秘めていた。

僕らの世界パースに居たなら、迷わずスカウト…あるいは警戒していたであろう人材だ。

それだけに、気を引き締めていたつもりだった…。

ヤツは…英雄王は、そんな想定をすら大幅に上回る戦闘能力を有しているらしいかった。

「どうした、人形師。

話し合いとやらはせんのか？

鉄人形をガチャガチャ右往左往…。

まるで会話もおぼつかぬ、とでもいう様な風情ではないか。」

口の端をつり上げ、冷笑する英雄王。

悔しいが、確かに奴の攻撃を捌いてる内は、わざわざ小粋なジョークを挟んで反論してやるコトなど出来そうもない。

すっかり暗くなった無人の公園は、夜間照明を受けて鈍く光るアーマーの残骸で埋め尽くされていた。

撃墜された機体数、実に70機以上。

すまない、マスター。

僕は今回、ガリアスター一族の財布に大ダメージを与えてしまった様だ。

「フ…とはいえ、悪くはない。

多少は、我が『ゲートオブパピロン王の財宝』の猛攻に慣れてきたらしいな。

ただカトンボの如く飛び回るだけではなく、攻めの意志も覗かせている。

そうでなくては、張り合いが無い。」

そりゃそうだ。

こっちは常時、F・R・I・D・A・Yと一緒に攻撃軌道パターンやエネルギーの性質を分析しながら戦ってるんだ。

実際、最大弾速とゲートの出現タイミングを察知くらいは出来るようになった。この辺で、一発力マシてやれ。

突っ立つヤツを、破碎するアーマーの影に隠れつつ空中から立体的に包围する。

「…ほオ。」

奴の門の展開速度は、恐ろしく速い。

だからこそ迎撃の隙は与えない。

胸部リアクターに、エネルギーを集中する。

全機で一斉に放つ「ユニ・ビーム」！

心臓部から直接出力し、打ち出す熱線！

ライダーを追い詰めた、いわゆるアイアンマン・アーマーが持つ必殺技だ。

これなら、本来回避不可能……

「しかし、コレでは『戦』とすら呼べぬ見戯に過ぎんぞ。

人形師。」

ビームの総ては、出現した輝く盾の様なモノであつさり防がれた。

同時に撃ち出された鎖に、包围していたアーマーは全機貫かれる。

「温い。」

この程度の光では、我が肌を焦がすには全く足らぬわ。」

そのまま、凄まじいパワーで地に引きずり下ろされ、叩き付けられるアーマー群。

20機分のスクラップ追加だ、マスター。

：流石にマスターのためにも、これ以上壊されるのは癪だな。

「見るに、我を此所まで引き摺って来た巨腕の一機と、貴様が直に操るその一機以外は、総て“お試し”で組み上げた木偶であろう。

有象無象を数ばかり寄越したところで、この我の身に傷を付けるどころか、動かすことすらままならぬという事実には気がかぬワケでもあるまい？」

それまた、王の仰る通りというやつだ。

ヤツは戦闘開始時点と変わらぬ地点・変わらぬ姿で、腕組みしながらニヤケ面でふんぞり返っている。

傷付けられない、どころの話ではない。

ヤツに、戦闘体制すらとらせられないでいるのだ。

まあ、悔しいがそれも道理と言える。

英雄王は完全に、此方を侮ってくれているわけだ。

まあ、それ自体は仕方ない。

古代の王サマだし、エラそうにイバるのが仕事みたいなもんだ。

僕らと出会う前のソーも、そういうトコロがあったらしいし。

しかし……だからこそだ。

そういう部分は、付け入る隙になる。

「F. R. I. D. A. Y!

今だ、ブチ抜け!」

僕は、頼れる電子秘書君に「口頭で」指示した。

激戦を繰り広げちやいるが、僕もF. R. I. D. A. Yも公園にはいない。

指示は、遠く離れたガリアスタ・マンションで告げるコトが出来る。

どんな地獄耳でも、聞き取れやしない。

拠点を活かした戦術、これが魔術師^{キャスター}クラスの最大の利点なのだ。

「ぬっ!?!」

瞬間、英雄王の足元に穴が空いた。

縦横無尽に飛び回るアーマーをブチ壊し、小気味良く爆音を響かせるシューティン
グ・ゲームはさぞかし気を引いたことだろう。

その隙に、此方は「下」から攻め入らせて貰った。

マーク25・サンパー／ストライカー。

両腕に削岩機を装備した、^{ヘビーコンストラクションスーツ}建築作業用アーマーだ。

これで、奴の足元を崩す。

元来は地面を掘削しつつ進むなんて無茶な運用をする予定ではなかったため、それに騒音を撒き散らしていたコトだろう。

…が、英雄王はしたり顔でアーマーを破壊するのに夢中だった。

破砕音と爆風が掘削音と振動を誤魔化し、ついに奴は足場を失うまで気付かなかった。

「ハ、面白い。」

が、この程度の策がどうしたと言う！」

英雄王は難なく崩れた足場を飛び退き、同時に掘削を終えたサンパーアーマーを破壊した。

ああ、勿論理解ってるさ。

しかし、このタイミングだ。

ついに、ヤツを動かした。

飛び退き、宙に身を投げ出した今なら…！

「何っ!？」

僕は、手ずからコントロールする「マーク42」アーマーを突撃させた。

こいつはヤツのお察しの通り、僕の宝具の一部だ。

出力は、他のアーマーの比じゃない。

「ハッ、勝負所で斯様に杜撰な手段を選ばずとはな！」

我が身が宙に浮いたと見て勝機を捉えたと言うつもりならば、所詮は戦知らずな職人風情の浅知恵よ！」

王の財宝が迫り来る。

驚異的な物量差である。

だが、その脅威は「アーマー一機」で対応する場合にこそ感じるモノだ。
『成る程、確かに。』

だが、クリエイターの浅知恵ってヤツも、中々捨てたモンじゃないと自負しているの
でね。

そいつを披露しよう。』

僕は、「いつか」の様にマーク42を分離させた。

顔、腕、足、胴体。

いくつものパーツに別れ、それぞれがそのまま飛行し突撃する。

「なんとっ!?!」

英雄王が目を剥く。

ヤツの財宝の軌道も弾速も予測済みだ。

アーマー状態では貫かれていただろうが、分割されたパーツ状態ならば難なく回避で

きる。

そう、マーク7から受け継ぎ発展した自在な操作性。

これこそが、マーク43アーマーをはじめとする後のアーマーすべての開発思想、その基礎だった。

『王よ。』

貴方は確か、私のアーマーをご所望でしたね。

いや、光栄ですよ。

かの偉大なる王朝の支配者たる貴方のお眼鏡に叶うとは。

なので…』

財宝の弾幕を潜り抜けたアーマーが、組上がつてゆく。

『差し上げますよ、お望み通りね。』

中空にて回避不能な、英雄王の体を中心に。

「貴様っ…！」

なんのつもり…！」

カン！という小気味いい金属音と共に、フェイスパーツの装着が英雄王の言葉を遮る。

ついにマーク42アーマーを纏った英雄王は、宝具としてのアーマーが誇る高出力に

拘束され、身動きを奪われた。

うん、いつか見た光景の、見事な再現だ。

『さて…ギルガメッシュ王。』

これで、落ち着いてお話が出来そうですね。

お分かりでしょうか？

もはや貴方に勝ち目は無い。』

「ぬう……」

英雄王は、身に力を込めて足掻いて見せる。

アーマーが軋む。

凄まじいパワーだが…流石に、“緑色のブルース”やソー程じゃない。

どんな怪物だろうと、人体と同様の構成をしている以上、どう頑張っても力を入れられない体勢というものが存在する。

全身を固められ満足に動かせない状態では、まさしく無駄な足掻きというヤツだ。歯が立たないなら、舐められてる内に身動きを封じる。

常套手段さ。

パワープレイは、僕のスタイルじゃない。

『まだ聖杯戦争は開幕さえしていないんだ。』

この段階で、僕は貴方をやっつけたいななんて思っちゃいない。

大人しく、剣やら鎖を引っ込めて降参してくれませんか？」

英雄王は、アーマーを纏う己を財宝で包囲していた。

そのままアーマーを狙って撃ち出せば、己を傷つけると理解しているだろうに。

「……。」

…お？

足掻きが止まった。

話を聞く気になつたかな。

『…それじゃあ、僕らの友人であるあの少女や、僕の新作アーマーのことはスツパリ諦めてほしい。』

そうすれば、此方は平和的に会話で歩み寄る準備が…』

「…この我に、敗北を認めろと。」

さらには不遜にも、我が天との鎖もの扱いにさえも指図したか…!？」

…ウソだろ。

今、宝物を指して友達とか言つたか？

まさか、そこまでソーと同じタイプだと？

鎖大好き、鎖が友達…!？」

もしそうなら……このあとの展開は……!!

「思いついたな、雑種ツ!!」

今すぐ貴様の元まで赴き、無礼を抜かした唇ごと頭蓋をカチ割ってやらねば気がすまぬ!」

ウワ、やつばスゴい怒ってる!

拘束こそ外れないが、マーク42アーマーの軋み方が半端じゃない!

「此のような鎧で我を押し込められたなどと考える、その傲り……!」

我が財をもつて微塵に砕いてくれるわ!」

一斉に、王の財宝が展開される。

まさか、己もろともアーマーを破壊して脱出する気か!?

イカれた覚悟だ、これが大昔の英雄ってやつなのか……!

……アーマーもう、仕方ない!

「自爆しろ、F. R. I. D. A. Y!」

『了解しました。』

『壊れた幻想、実行します。』

瞬間、
炸裂。

.....

2004年 1月中旬 夜

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション
管制室

「……………どうなった、F. R. I. D. A. Y?」

『鉄人兵団・マーク42アーマー及び、同時出撃していた全てのアーマーの機体反応が消失しました。』

衛星からの映像を解析：冬木中央公園に、1h a相当のクレーターを形成。

周囲にギルガメッシュ含めた動体反応は見受けられません。』

「……………」

…マジか。

それほどの威力が？

壊れた幻想…サーヴァントの切り札である宝具に、ありったけの魔力ミステイクパワーを込めて発させる、一発こっぴりの最終手段。

リアクターの出力との相乗効果なのか、想定以上の威力を生んでしまったらしい。

…事前に、周囲に市民が居ないコトを確認できていたのは、不幸中の幸いだつたが……。

「…キャスター、ギルガメッシュはアレで倒すことが出来たと思うか？」

モニターにて一部始終を共に見守っていたマスターが、画面かは眼を背けずに問う。

神妙な面持ち…此方の答えと共通の見解を、既に持っているらしいって顔だ。

流石、戦闘面に於いてはカン働きの鋭い。

「…いや、宝具による拘束も、ヘタをするとあのまま腕力だけで砕き解かれていたかもしれない様な男だ。

アレで撃退できたと考えるのは早計だろうな。

いやはや、聖杯戦争…。

油断していたつもりはないが、想像以上に凄まじい。」

マスターは、同意を示して頷きつつも、逆隣に向き直った。

「…ミス・サジョウ。

申し訳ない。

街を保護すると約した舌の根も乾かぬうちに、市民公園に多大な損害を与えてしまつた。」

ばつが悪そうに、これまたモニターを見守っていたサジヨウ嬢に向かつて平謝りするマスター。

「…いえ、人的被害の発生を防ぐため、夜中に人が寄らない公園を戦場に選ばれた、貴殿方の判断は正しいです。」

そして…キャスターさんと同様に、こちらも再認識しましたよ。

これが、聖杯戦争。

へたをすると施設の一つくらい、簡単に地図から消える戦いなんです。」

衛生写真によってモニターに写し出された、己が街に空く巨大なクレーターを見つめながら、サジヨウ嬢は呟く。

「冬木中央公園…あそこには、十年前は建設中の市民会館が在ったそうです。」

サジヨウ嬢はモニターから目を離し、僕らを見据えて語り出す。

「しかし市民会館は完成するコトなく、地図に乗るコトなく、その姿を消しました。」

…周囲一帯ごと、炎に飲み込まれて。」

底冷えるような、少女の静かな語気。

戦慣れた魔術師は、それに吞まれぬように息をのみ、言葉を返す。

「…第四次聖杯戦争。」

その破壊によるモノだと?」

少女は頷く。

「冬木大災害…そう呼ばれています。」

私は、その後に入居した身なので詳しくは知りませんが…。

住民にとつて、いまだ癒えぬ大きな傷になっていることは間違いありません。」

言いながら、サジヨウ嬢は手を差し出した。

「この戦争、私一人で出来るコトなどやはり限られるのだと思います。」

ですから…改めてお願いします。」

貴殿方の力を、私に貸してください。」

差しのべられた手と、冷ややかに見えて力の籠った瞳を交互に見比べるマスター。

「…そうだな。」

私も、あれほどのパワーを持つ存在との戦いに際して、戦場となるこの街について、あ

まりに無知に過ぎると実感した所でもある。

現地協力者の必要性、価値はハネ上がったと言えるだろう。

それに…」

眼を伏せ笑うアトラムを、サジヨウ嬢は覗き込む事はせず静かに見つめる。

「それに？」

「…奴は、英雄王は。」

未だ予定段階であつたとはいへ、我が同盟相手を眼前で毒牙にかけようとした。私の姿など、眼中に無いという風情でだ。

如何に古の英雄相手といえど、その様な侮りだけは絶対に許せん。」

言いながら、寧猛な笑みを浮かべた顔を上げる。

「ガリアスタの男として、誇りにかけて誓おうじゃないか。

奴から、他の英雄達から、君を護り通すコトを。」

そして、握手に応じた。

力強く…猛禽の如きアトラムの視線と、サジヨウ嬢の冷やかな視線が交錯する。

「…なんだか、格好いいコトを言いますね。」

口許だけで、静かに笑いサジヨウ嬢は言う。

「当然さ。」

私は祖国でも一番の美男子であると自負しているからね。」

その砕けた調子に、マスターは肩を竦め、脱力した柔らかい笑顔で応える。

「それに、理由としては何よりもう一つ。」

君に協力しつつ聖杯戦争に勝ち抜くコトで、鼻を明かしてやりたい偏屈教師が居るの

「や。」

おどけた調子のアトラムに、思わず吹き出すサジヨウ嬢。

この場合の偏屈教師は、勿論二人の共通の知り合いだろう。

「眉間に刻まれた皺がより深くなって、面白い表情が見られそうですね。」
「だろろう？」

それだけだって、君と同盟を組む理由には足りるところさ。

…ともあれ、これから宜しく頼むよ、アヤカ。」

「…下の名前はやめて下さい。」

握った手を離し、サラツと躲すサジヨウ嬢。

「おや、ハハ。」

つれないね。」

キザつたらしく笑うマスター。

…くう、一々昔の自分が思い出されてムズ痒くなるな。

B. A. R. F. でセラピー・ビジョンを見せられてる気分だ。

ともあれ、よろしい。

話はいい方向に纏まったな。

ならば…

「ご両人、同盟記念とでも思つて聞いてほしい話があるんだ。宜しいかな？」

会話の輪に入り込んで、両者を交互に見つめて切り出す。

「…それは、トオサカ邸で提示したUSBメモリ関連の話か？」

流石、鋭い。

というか、以心伝心も急速に極まってきたな。

やはり、こちらが似てると感じるように、マスター側も僕の行動を予測できるのだから。

…それは、なんだか少し癪だな。

「…まあ、その通り。」

ミス・サジヨウも、構いませんか？」

「…ええ。」

冬木の町を護るコトに、繋がる話なのでしょう？」

少女は静かに、だが力強く頷く。

…ああ、マズいな。

センチメンタルになりすぎる。

自分の町を守りたいだけの、直向きなティーンエイジャーだなんて…。

“あの戦い”の直後として喚ばれた僕にとっては…彼”と重ねてしまうのは、無理からぬコトだ。

…いかん、切り離して考えねば。

この世界は、この世界だ。

「ああ、その通り。」

是非、聞いてもらいたい。

僕が、この聖杯戦争に参加するコトになった経緯と…その目的を。」

.....

2004年 1月中旬 夜
冬木市 新都 冬木中央公園

「……これは、酷いな。」

僕は、冬木市新都に在る大きな公園を訪れていた。

ギルガメツシュの薦め通り、冬木ハイアットホテルにチェックインした矢先、この公園で大きな戦闘の魔力反応とやらを感じしたからだ。

生前は持たないスキルであったが、この役割に割り振られて喚ばれたコトで身に付いたパワー。

“クイーンズの坊や”の様な感覚^{センス}。

それが報せた所によると、ここで戦っていた人物はギルガメツシュ。

もう一方は、わからない。

僕と別れる直前、ギルガメツシュとキャスターの反応位置は比較的近かった。

それが関係しているのか…？

ともかく、ギルガメッシュを見つけて話を聞いてみないことには…。
大きな爆発が生んだ戦闘痕…：人影は見えないが、反応はある。
ならば、彼はきつと生きてこの公園に…。

歩き出した僕の足が、何かを蹴飛ばした。

硬い。

金属片だ。

戦闘で照明が死んだ公園で、眼を凝らして足元を探る。

其所に、在ったのは……………

「えっ…？！」

金属片。

それは…：何かの頭部の様に見えた。

…いや、違う。

それを、知っていた。

それでもなければ、こうまでひしやげた鉄クズを、頭だなんて認識できない…。

「バカな…。」

…アイアンマン。

かつての仲間^{かぞく}。

その一人が創った、平和を護るための鎧^{アーマー}…。

「…トニー？」

信じがたい事実を確かめるように、震える口をついて出た言葉。

それは拾い受ける者も存在しないままに、冬木の夜闇に溶けていった。

Episode 12 : 多元宇宙論 (マルチバース)

2004年 1月中旬 夜

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション
カフェテリア

私はキャスターさんの提案で、ガリアスタ氏と共に彼の所有するマンションの食堂カフェテリアに来ていた。

本来向かう予定だった喫茶・アーネンエルベの代わりということだろうか。
しかし、広い。

それに、ビュッフェ形式の飲食物も様々に豊富だ。

ガリアスタ氏ともなれば、お抱えの魔術師や従者の数も半端ではないため、彼ら彼女らの為の設備でもあるという。

先程の未来的な管制設備もさることながら、非常に洗練されていると感じられた。時計塔という巨大組織が、彼との繋がりを重宝せざるを得ない理由が良くわかる。

私達は、思い思いに品をトレイに乗せ、カフェテリア中央のラウンドテーブルにちょこんと座った。

三者がそれぞれの顔を見渡せる配置。

「…サジヨウ君、君はまた随分と食べるね。」

デーツナツメヤシがいくつか入った小鉢と、一杯の香り良い紅茶を目の前に置いたガリアスタ氏が、呆れの混じった顔で言う。

「ええ、まあ。」

好きなものを食べたまえ、と仰られたので。

そろそろ夜ですし、晩御飯も此処で済ませちゃおうかと。

何か問題か？」

とりあえず私は、サラダをたっぷり挟んだサンドイッチと、ローストビーフ、ポークチヨップ、マッシュポテト、これまた野菜たっぷりのスープを盛り付けさせてもらった。タダだと言うのだし。

相手はお金持ちだ、遠慮はむしろ失礼にあたるだろう。

従業員用の料理も出来立てだと言うことで、おいしい料理をおなかいっぱい食べて帰

りたい。

「いや、まあ…構わないんだがね。

ん…オイ、キャスター！

お前もか!？」

私の食膳から目を離れたガリアスタ氏は、声を張り上げる。

見ると、キャスターさんのトレイには、いくつかのバーガーや山盛りフライドポテト、それに大きめのシェイクが乗せられていた。

ベタなファーストフード店の様な取り合わせだ。

「何だ、なんの問題が？」

せっかく美味そうなチーズバーガーが在るんだ。

食べないなんて選択肢は僕には無いね。

良いだろ、僕が何を食べようが。」

嬉しそうに手を擦り合わせるキャスターさん。

サーヴァントなのだし、食事の必要は無い筈だと思っただけけど。

好きなのかな、チーズバーガー。

「まあ、構わんが…今から始めるのは契約確認や情報開示といった…いわば会議だろう。ガッツリ腹に溜まるものを食い出すとは思わないじゃないか。」

「へえ、そう?」

でも君らはともかく、僕はランチだって大したものを食べちゃいないんだ。スタツフのみんなはスシの気分じゃなかったみたいだね。

一人で食べても味気ないから、そのまま一人寂しく作業を行っていた。

その分、進展はかなり望めたがね。」

…なんだか言葉に刺がある気がする。

そういえば、キヤスターさんはアーマーとやらを遠隔操作してガリアスタ氏を護衛していた。

だから、お好み焼きが食べられないと嘆いていたのだけ。

「…ヒゲ親父が拗ねて見せたところで、気色悪いただけだな。

で、その進展とは?」

紅茶を一口、その後に呆れ顔で問うガリアスタ氏。

「ああ、*“新元素”*の精製だ。

まあ新しいと言つても、それは*“この世界”*での話だがね。

*“僕の世界”*のアーマーは、mk-6以降すべてこの新元素…バツドアシウムをコアとしたリアクターで機動していた。

エネルギー効率は段違い、旧型では若干漏れ出していた汚染物質を生むこともない。

完全なるクリーンエネルギーさ。」

一口に言つてのけ、その口でそのままバーガーにかぶり付くキャスターさん。

…半分以上、何のコトを言っているのかはわからないけれど。

でも、魔術的にも聞き逃せないワードが在った。

それは、ガリアスタ氏も同じであつたらしい。

「…待て。」

新元素云々、また聞き捨てならないワードが飛び出したことには目を瞑るとしてだ。

“この世界”と“お前の世界”という言い回しは、不自然じゃないか。

この場合、世界ではなく時代と表現すべきだ。

お前の生きた時代は…今更サジョウ君に隠しだてするコトも無いだろうから言つてしまふが、そう遠い時代ではないだろう。

神代のテクスチャが張られていた、異界が如き時代などでは無いのだから。」

それは、私も感じていた。

彼の立ち居振舞い、戦い方、それに発想や知識…どれをとつても現代人に限りなく近しい感覚を覚える。

そんな彼が、明確に“違う世界”というニュアンスを強調してくるといふのは…不思議な話だ。

魔術という、なんでもアリな世界の住人である、私たちの観点から見ても。「うん、いい指摘だ。」

まず話したいのはソコ：僕という英霊の出処だよ。」

そこでキャスターさんは食べかけのバーガーを皿に置き、私の方に体を向ける。

「では…改めまして、ミス・サジヨウ。

僕の真名はトニー・スターク。
なまえ

西暦2023年に死亡した人間。

妻と娘を何より愛する、天才発明家だ。」

突然の告白に、ガリアスタ氏も私も驚愕する。

今、真名と享年を明かした…!?

でも、未来の英霊って…!

「…確かに、未来の英霊であるお前は、真名からでは弱点を計り得ないと思われる。

だが、お前と同じく未来からの英霊が他で喚ばれないとも限らん。

だのに、お前というヤツは何の断りもなく…!」

わなわなと震えるガリアスタ氏。

そりゃそうだ。

ちよつと迂闊に過ぎる気がするが…

「まあまあ、落ち着いてくれよマスター。」

先ずは聞いてくれ。

僕だってバカじゃない。

実際、時代云々どころの話じゃなくなっているからこそ、この話を二人にするんだ。言つたらう？

僕の世界と、この世界。

二つは恐らく、決定的に違っている世界なのだと思う。

貧富の差とか、国籍の違いとか、時代がどうか…。

そういったニュアンスの違いではない。

明確に、異世界…異なる次元の存在であると、僕は考えているんだ。」

…これだ。

この発言が、魔術的にすら突飛な話なのだ。

何故なら、彼…スタークさんの言い分をそのまま信じるならば…

「…バカな。」

ではお前は…平行世界の人間だ、とでも言うつもりか？」

胡散臭そうに顔を歪めるガリアスタ氏。

当然だ。

平行世界の存在を確認し、運用するなど：それは「第二」に分類される、魔法と呼ばれる奇跡に他ならない。

たしかに、英霊召喚という術式そのものも、魂という情報体に実体を与えて顕現せしめる、「第三」の魔法に類する奇跡の術理であるが…。

だからと、また別の奇跡が付随して発生したというのは、中々飲み込めない事実だった。

「その通り。」

何せ、ざっとネット経由で調べたところ…トニー・スターク。

本名エドワード・アンソニー・スタークという人間は、この世界、この時代の地球上には存在しないのだからね。

更には、父であるハワード・スターク。

母であるマリア・スタークも同様に存在せず。

故に当然、我が父が創業した巨大軍需産業：僕の時代にはそうではなくなるが。ともかく、スターク・インダストリーズも存在しないわけだ。

こういう事例が、軽く調べただけでも複数見受けられたよ。

妻も、友人達も、何もかも。

生前、僕の周囲に存在した様々な馴染みのあるモノが、この世界には影も形も、痕跡

すらも存在しなかった。」

言い切り、シエイクを一口含むスタークさん。

…突拍子もない話を、事も無げに語ってくれる。

「…そんなもの、言葉だけではな。

証拠はあるのか？」

ジトつと睨んで、己が僕に問いかけるガリアスタ氏。

「ああ、僕の宝具端末は全て、一つのネットワーク・ラインで繋がっている。

アーカイブに保存された僕の世界の情報を、必要ならいくらでも開示するさ。

例えば1940年代、アメリカ合衆国は戦争に勝利するために、スーパーソルジャー “超人兵士” を生み

出し、ナチスドイツはオカルト兵器開発機関 “ヒドラ” を設立した。

例えば1995年、僕の世界の地球は異星人の攻撃を受けかけた。

それに、僕の世界で言う魔術師とは、チベットの山奥で修行して世界を裏側から守護する存在らしい…まあ、これに関してはうろ覚えの伝聞だが。

だが、この世界ではそんな事実など存在しない…とかね。

これらはずまり、僕の居た世界と君らの世界は “良く似た別世界” である、という証明だ。

そうだろうか？」

またまた、さらっと次々繰り出される驚きの事実。

証明内容ひとつひとつとつてみても頭痛がするが…。

自分という存在の痕跡がこの世界には無い。

そんな事実を、あつげらんかと証明するというスタークさん。

「…すでにお持ちの情報ならともかく、この世界の住民情報とか。

そういうこと、あつさり調べられてしまうもののですか？」

私は遠坂さんほど情報弱者ではないつもりだが、それでも胸を張れるほどコンピュー

ター関連に強いわけではない。

せいぜいが、友人や師匠とネットゲームで白熱するぐらいのものだ。

彼の言葉を、うっかり信じるわけにもいかない。

「ああ、国防総省ペンタゴンの機密情報だって、学生時代の僕が手作りPCで暇潰しに盗み見ること

が出来たんだ。

ましてや、今は僕の宝具：開発したテクノロジーの総ても手の内にある。

インターネットに接続されたこの世界の情報で、僕が閲覧できないモノなど存在しな

いと断言しよう。」

…なんというか、この英霊は現代に喚び出されてはいけない種類のサーヴァントな気が

する。

過去の偉人でもなんでも無い、世界の構造を知りつくし、あっさり変えてしまえる存在なのだ。

どんな魔術的な存在よりも、恐ろしいものと対峙しているのではないか…そんな気分にさせられる。

「…確かに、ボクもスターク・インダストリーズなんて企業名は聞いたことがない。

石油産出国である我が国が、経済大国アメリカの巨大軍需産業の存在を知らない、などというコトはあり得ないからな。」

魔術とは全く違う方向性で、肯定せざるを得ないと呻くガリアスタ氏。

その表情は、完全に企業人のそれだ。

なんでこの人、魔術師なんてやってるんだろう。

「だな。」

因みに我が世界に於いて2010年頃以降、我が国とお隣のカナダは“合成石油”の大量生産・輸出を開始する。

君の国にとっては強力なライバルになるはずだ。

気を付けてくれたまえ。」

タイムスリップもののタブーめいた予言発言に、ガリアスタ氏はがっくり肩を落とす。

「やっぱりかあ……」

新世紀に突入した辺りからヤバそうとは思っていたんだ……！

君らアメリカは、金稼ぎに關してだけはガチ過ぎるくらいにガチなものな……！

こうなれば、やはりリアクター技術の確立は急務と言わざるを得まい……！」

……この人、もはや聖杯戦争とかやってる場合ではないのでは無からうか。

「あの……いくら平行世界とはいえ、こういう未来云々の話って、簡単に口走つても大丈夫なものですか？」

素朴な疑問をぶつけてみる。

「おや、この世界では魔術師までもが、バック・トゥ・ザ・フューチャー理論を信じているのか？」

おどけた調子で訪ねるスタークさん。

……腹立つ言い方するな、この人。

「……それで？」

その平行世界の存在云々の話が、なんだと言うんだ。

何故、この話が我々に関係する？」

紅茶を飲んで気持ちを落ち着けて、ガリアスタ氏は問う。

確かに、言ってしまうえば彼の出自などは『聖杯戦争でのアドバンテージ』にこそなれ

ど、敢えて今日であったばかりの私に開示するメリットが見受けられない。

「ああ、問題はソコだ。」

それには、僕がこの聖杯戦争に参加した目的を説明しなければならぬ。

まずは…こいつを見てくれ。」

そう言つて、スタークさんは何やら平たく黒い板を取り出した。

表面のすべてがディスプレイで構成されている。

…ゲーム機、じゃないよね。

流石に。

そう思っていた矢先、彼が板で空を叩いた。

その瞬間、〃空中に〃複数の映像が写し出される。

彼の宝具によるものか、未来の科学技術の賜物か。

まるで、本当に…SF映画の世界のようだ。

「これは…?」

「僕が先程、トオサカ嬢に渡そうとしたUSBメモリに納めた情報と同じものだ。

この世界に現れた可能性のある…僕の世界の悪党達^{ウィラン}。」

映像には、様々なものが写っていた。

無機質なロボットの軍団や、金角の兜を被った男。

それに見るからに地球人類ではない巫人や…惑星ほどある顔面…!?

「ウルトロン、ロキ、ダークエルフ、ドルマムウ、エゴ・ザ・リビングプラネット、クリー人…それにチタウリや、サノス。」

僕が直接対峙した奴ばかりじゃないが、それでも僕の世界で猛威を振るつた恐ろしい奴等だ。

ウルトロンは…僕のせいだが、それ以外にも複数の脅威があつた。

大半が、地球の常識では計れない恐ろしい存在だ。

星を破壊する、なんてのは当然にやつてのけようとするクレイジーな輩ばかり。

確かに、英霊と呼ばれる単一戦力は強大だつた。

メドゥーサ嬢も、ギルガメッシュ王も。

だが断言しよう。

猛威を振るつた場合の厄介さの度合いでいえば、こいつらは引けをとらない…。

いや、場合によっては遥かに上回るだろう。」

…情報が、ブツ飛びすぎている。

脳の処理が追いつかない。

ただ、これだけは言える。

こんな、魔術世界にとってすら常識はずれと考えられる存在達を相手に戦つてきたの

が彼だというのなら。

キヤスター…トニー・スタークは、間違いなく英霊^{ヒーロー}である、と。

「…こいつらの内の誰かが、この世界に現れた可能性がある。」

他にも様々な悪党は居たが、平行世界…多元宇宙^{マルチバース}の壁なんてものを越えて見せられるような輩は、限られてくるから…このリストの内の誰かで間違いはないだろう。」

恐ろしいことを言い放ち、一拍空けた後でスタークさんは続けた。

「僕は、そいつを倒すために喚ばれたんだ。」

これが、僕の戦う理由。

僕の世界の厄介事を、こちらに持ち込むわけにはいかない。」

極めて真面目に言つてのけた後、スタークさんは、バーガーに大きくかじりついた。

…沈黙。

スタークさんが新鮮な野菜を咀嚼する音だけが、カフェテリアに響く。

「…そいつは、聖杯戦争に関連してこの世界に現界しているというのか?」

「だろうと思うよ。」

でなければ、「抑止力」とやらと聖杯なんてものを通じて、遠い異世界人の僕なんか
が喚ばれる理由が無い。

サーヴァントの一騎として喚ばれているかは不明だが、関わってはいないはずだ。

ならば…万能の願望器なんてモノを、キケンな奴にとらせるワケにはいかない。」
抑止力…また、頭痛のするような単語が出てきた。

世界の総意、防衛機構とされる、この世界のルールそのものが如き存在…だったかな。
情報を整理しながら問いを絞り出すガリアスタ氏は尻目に、ばくばく食べながら答えるスタークさん。

まあ…私も言えたことじゃないけど。

ローストビーフお代わりしたいし…。

でも、話が重くて腰をあげるのが憚られる。

「…なるほど。」

そういう意味で、ボクとお前の目的に食い違いは無い。

戦争に勝つ、という思いだけは共通しているのだからな。

しかし、我々二人がその悪党とやらと結び付いていないとも限らないのではないか
？」

敢えて悪い仮定を提示するガリアスタ氏。

確かに、少なくとも半月は付き合ったガリアスタ氏はともかく、今日であったばかり
の私に情報を開示する理由はなんだろうか。

「まあ…そういうリスクが無いワケでもないが。」

かといって、悠長に構えてる時間もない。」

そう言つて、スタークさんは納得したように頷き、私たちを交互に見る。

「だったら、僕はとりあえず自分の審美眼を信じるさ。」

ビビつて縮こまつてちや、物事は解決しない。」

言いながら、食べきつたバーガーの包み紙をくしゃくしゃと丸めるスタークさん。

…何がそんなにお気に召したのかはわからないけれど。

「では…結局のところ、やること自体は変わらないわけですね？」

この聖杯戦争に於いて、冬木の町を守護する。

それが、スタークさんのやりたいコトにつながる、と。」

それならば、脅威の度合いこそ増したものの、私としては問題ない。

「その通り。」

僕は聖杯戦争に勝ち抜くことと同等に、ミス・サジヨウの目的にも共感するのさ。

だからこそ…今後の方針として、優先的にやらなければならぬコトがある、と思う

ワケだ。」

ソースがついた口をペーパータオルでぬぐいつつ、スタークさんはこちらを向く。

「…それは？」

にこやかな笑顔。

…なにか、嫌な予感がした。

「もちろん、冬木の町と市民の皆様に、我々キャスター陣営の味方になっていただくコトだよ。」

2004年 1月中旬 夜

冬木市 深山町 間桐邸

食堂

「…今夜も、サーヴァント戦が行われた様じやのう。」
ぼくらは、食卓を囲んでいた。

家族の団らん…一般家庭では、こういう状況をそうやって表すのだろう。知識の上では知っている。

でも…ぼくは、そんなものを経験したコトなんて一度だってない。

「片や、十年の時を生き延びし、英雄王」。

片や、此度の戦争にて喚ばれた魔術師^{キヤスター}。」

祖父…間桐臓硯^{ぞうけん}言葉に、ぼくの体は思わず大きく体を揺れた。

キヤスター…ぼくが、してやられた相手だからだ。

「かつての聖杯戦争を生き抜いた彼の王は、その性能においてトップサーヴァントと呼んで差し支えない。

其れに対し、ライダー戦に続いてまたも引き分けという結果を勝ち取った訳じゃ。

此度のキヤスター…中々に侮れぬ。

そうであろう、慎二?」

落ち窪んだ眼窩^{がんか}の奥で、鈍く輝く瞳がぼくを見据える。

…ああ、まただ。

「…ライダーの傷は、回復しました。

次は、奴のテリトリーで戦い合ったりはしない。

次は…次こそは、ぼくは負けたりしませんよ。

お祖父様……」

震える唇で、なんとか言葉を発する。

隣に座る妹……桜は、俯いて微動だにしない。

お祖父様の隣に座る父……鶴野びやくやは、無表情にぼくを見つめる。

……変わった。

十年前……決定的に変わってしまったぼくの保護者達に、ぼくは逆らうことなど出来なかった。

いや、以前から問答無用の気はあった。

が……それとは明らかに異質な何かに変貌したのは、間違いなく10年前のあの日からだ。

「当然じゃ。

そうでなければ、お前をそうまでしてやった甲斐が無い。

そうでなければ、切り札を握らせた甲斐も無い。

ライダーのサーヴァントをも任せるコトなど出来ぬのじゃ。

……慎二よ。

儂はな、お主に期待しておる。

そうであるからこそ……思うのじゃ。

「嗚呼…此れでは足らぬのじゃな」と。

「……………っ!!」

震えが止まらない。

まただ…また、ぼくは代えられる。

ぼくは間桐の長男だ。

マキリの魔術を扱うためだったならば、あらゆる苦痛に耐えましょう。

魔術師になれるならば…そうであつたならば。

でも…これは違う。

違うのだ。

ぼくは、また…違うものに書き換えられてゆく。

十年前、間桐家が別のものに書き換わつた様に。

「お祖父様…ぼくは……………」

「心配するでない、慎二。」

第五次聖杯戦争は、まだ始まってさえいないのじゃ。

備えの必要性を、キャスターめから感じ取ることが出来た…この事実こそ僥倖。

故に…残りの半月。

お主の備えを万全に整える。」

…ああ、逆らえない。

「全て、儂の望むままにせよ。

さすれば…勝つ。

さすればこそ、お主は儂の孫として…。

“絶対の存在”と成るコトが出来るのじゃ。」

何故なら、ぼくは思ってしまったている。

間桐家は変わってしまったけれど、それでも願ってしまったている。

「さあ、慎二…共に世界を救おうぞ。」

ぼくは、お祖父様に認められたい…と。

Episode 13 : 冬木市立穂群原学園2年A組

2004年 1月中旬 夕方

冬木市 新都

その日、我々は映画を観に行っていた。

いつもの三人で、気兼ねなく、ふらつと。

友人の蒔の字：まきでらかえで蒔寺楓と、さえぐさゆきか三枝由紀香。

それぞれ趣味も性格も異なるが、それだからこそ三者三様意見も異なるため、映画鑑賞も悪くない。

蒔の字が御父上から譲り受けたチケットでの鑑賞だったが：うむ。

今更サメ映画かよ、と侮った自分を殴り付けたい程度には興奮したものだった。

花の女子高生が、三人揃ってB級映画も無いだろうと思われるかもしれないが、いやいやコレが中々侮れぬ。

まさか、かの合衆国産の映画で、日本神話とペルシア世界のオマージュを組み合わせ

てくるとは思わなかった。

まさかのクライマックスで、騙した鮫を踏みつけて、怒り食らいかかって来たところを持ち前のツノで刺し貫き、逆に食らい尽くしてしまう兎とは。

流星のアレクサンドロス大王や大国主神も、あれには苦笑いを禁じ得ないであろう。

…いや、まあそんなコトはどうでも良いのだが。

重要なのは映画観賞後、シアターと同じビルディングに入っている喫茶店にて、感想を言い合っていた最中の出来事だ。

「…ビビッたあ〜。」

なんだ、結構な揺れだったな。

無駄にたわわな氷室ひむろの果実がバインと上下してたぞ。」

「同性間に於いてもセクシャル・ハラスメントは成立するという事実を、汝はもう少し考慮すべきだな、蒔の字。」

…だが、前半部分に関しては、蒔の字の言う通り。

談笑を思わず止めてしまうほどの大きな揺れが、建物を襲ったのだ。

しかし…

「だが、地震と言うには単発だな。

これは何に由来する振動だ？」

訝しんでいると、由紀香が神妙な面持ちで口を開く。

「…え、鐘かねちゃん、蒔ちゃん。

今、向こう側が凄く光つたよね？」

それに大きな…さっきの映画で聞いたような、爆発みたいな音も…気付かなかった？」

「は？」

いや、光つたか？

店がガタンと揺れた音は聞こえたけど、爆発なんてのも…アタシは感じなかったけど。

鐘つちは？」

「私も感じなかったが…由紀香、その光とやらは何処を起点としていたかは分かるか？」
妙な胸騒ぎ。

私と蒔の字が感知できなかったモノを、由紀香だけが…こういった出来事は、初めてではない。

我々に見えない何かを、彼女は当然に風景として認識する。

「えっと…中央公園の方だったと思う。」

冬木中央公園。

十年前、あの大災害の中心地となった場所。

…不意に、綾香嬢の存在が思い出された。

未来予知という異能を持つ彼女。

そして、冬木の街を取り巻く不可思議^{オカルト}。

由紀香は、未だ死の香りと不吉な噂の渦巻くあの公園で、我々には見えぬモノを多く見たと言う。

…イヤな感じだ。

「…時の字、由紀香。

今日はもう帰ろうか。」

帰途についた後も、由紀香はチラチラと公園を気にしていた。

「心配しすぎだとも思うけど、まー災害の予兆とかだと怖いしなー。」

用心に越した事あ無エかー。」

一人、お気楽に笑う蒔の字。

しかし、こういう場合は此奴の平和な明るさが逆に心地好い。

そして、だからこそだろう。

落ち着かない由紀香と、帰路に意識を向ける私では気付けなかったコトを、蒔の字が

感じ取ったのは。

「あっ!？」

…お、おい、二人とも!

あれ…あれ見てみるよ!!」

蒔の字が、驚愕の表情を浮かべて指差す先…。

そこには、一棟の高層ビルディングがあった。

アレは知っている。

ここ数カ月内に新築された建物。

中東の富豪が購入したという、冬木市でも最新の建築物だ。

その入り口に、我々の視線は釘付けになった。

「…綾香嬢？」

件の富豪に肩を抱かれ、学友…沙条綾香嬢が足早にビルディングに入っていく様を、我々は見送るしか無かったのだった。

.....

翌日

2004年 1月中旬 朝
冬木市 深山町 穂群原学園
2年A組 教室

…昨日は疲れた。

色々なコトがありすぎたし、作戦会議が夜遅くまで及んでしまつて、結局ガリアスタ氏のマンションに泊まる流れになつてしまつたし。

客間として豪華に過ぎる装いの部屋を宛がわれ、一ヶ月以内にケリのつく聖杯戦争に本当に必要な設備なのかと疑わしいほどだと半ば呆れたが…。

それでも、その持て成しは素晴らしかつた。

従者さんたちも洗練されていたし、何よりスタークさんの宝具であるというA・I秘書・F・R・I・D・A・Yさんの心配りが凄かつた。

お陰で、昨日の疲れを今日に持ち越すコトなく元気に登校できている。

…本来であれば、魔術師の体内であるとさえ言える魔術工房に、初対面で一泊だなんて迂闊に過ぎると言えるのだが。

未だ徘徊しているかもしれないギルガメッシュ王を警戒して、夜間の外出は慎重を期すべきだ、という判断のもととの行動であつた。

「…いふう。」

教室を見回す。

遠坂さんは、まだ登校して来ていない。

昨日のサーヴァント戦については、遠坂さんも感知している筈だ。

何か訊かれるかもしれないけれど…。

その時の感触如何で、提示する情報を厳選しなければならぬ……

「まさかの時のスペイン宗教裁判!!」

「わあっ!?!」

唐突に、ガラーリ…というかがシヤン!と開かれた教室のドアから、褐色短髪の日本美人・時寺さんが叫んで現れる。

続いて眼鏡とロングヘアがステキなグラマラス軍師・氷室さん。

純朴ショートカットで清楚な優しい三枝さんも、どこか申し訳なさそうに続く。

「アタシたちの武器は、突然の登場!」

そして恐怖、この二つ!

それと残りは…どーでも良いー!」

ズンズンとした獰猛な勢いで私の席まで歩み寄る蒔寺さん…いや、ヒメネス枢機卿。他の二人も追従するが、枢機卿ほどのテンションではない。

というか、三枝さんはいつもの苦笑いだ。

「お、おはよう三人とも…。」

朝から元気だね。」

蒔寺さんがテンションでネタ全開に振る舞うを言うのはいつものコトだ。流して挨拶する。

しかし…

「お、おはよう綾香ちゃん…。」

「うむ、おはよ…。」

「おー元気だとも！」

だがその言葉アー

そっくりそのままお返しするぜ！

大人しい顔しておゲンキな沙条さんよー！

えー、おい!?!」

「…………。」

…えっ、は？

なにコレ。

「声おつきいなあ…なんの話？」

「おーおー好き勝手言いなさる！」

とぼけてくれますか！

だアが、そうは問屋が卸さねえ！

家や冬木で一等の呉服屋だ！

そこがそっぽ向くとなったら

祝い事ン時やー大変だぜ！

それが嫌なら答えてもらおお…」

良きところで、ゴツンと鈍い音のツツコミが入る。

崩れ落ちる蒔寺さん。

「よさんか馬鹿者。」

プライベートな内容故、大っぴらにはせん約束だっただろうが。」

「いや、そーだったけど！

イザ本人を前にしたら

滾るじゃん!?

アタシらの周りじゃ

とんと聞かねージャンル
なんだもん、こんなのつい…」

再び鈍い音。

でも、今度のは重い。

蒔寺楓は二度沈む。

「朝っぱらからウルサイよ、アンタは。

おはよう、みんな。」

救世主の如く参上する、美綴綾子みつづりあやこさん。

キリツと鋭く眉が太い、弓道部主将を務める文武両道美人さんだ。

面倒見が良く正義感も腕っぷしも強い、流星は我が2—Aの姉貴分だ。

「やあ、おはよう美綴嬢。

そして、すまんな綾香嬢。

どうしても気になると、蒔の字が聞かんのだ。

内容が内容なので、ちゃんと訊くのは昼休みか放課後にしろと念押ししたのだがな。」

カラカラと笑いながら、流し目に此方を見やる氷室さん。

…何か企むような、深く思考するような目付きだ。

値踏みしている、とも言える。

「…何、訊きたいコトって？」

「うむ、勿体ぶつても仕方がないので、取っ掛かりのみ話すが…。」

昨日の夕刻、新都のとあるビルディング前にて…我々は汝を見かけたのだ。」

「!!!」

…夕方、ビルの前。

まさか、ギルガメッシュから逃げおおせた時のコト…!?

「…すまんな。」

三人一緒の時、蒔の字が第一に発見してしまった故、此奴の暴走を止められなかった。言うに憚られるコトであるならば、無理には訊かんが…。」

…え、なにこの気の遣われ方。

あれ？

コレもしかして私、いかがわしいカン違いをされてる？

ガリアスタ氏か、スタークさんのアーマー相手かわかんないけど…!?

外国人男性と二人でマンションに入った、みたいな方向で、あらぬ誤解を…!?

隠匿魔術が切れた瞬間を見られたのか!?

困っていると、そこで更なる人物が教室に登場。

「おはようございます、みなさん。」

ああ、関係者…遠坂さん！

(ちよつと…遠坂さん！)

なんだか、キャスター陣営との関係性で面倒なことになってるの！

口裏あわせて助けてくれない…!?

貴女だつて、聖杯戦争関係者が下手に印象が根付いたら困る筈…)

必死の念話でアピールしてみるも…。

(…。)

無言の微笑み。

口も、心も、水を打ったように静やか。

「あら、いけない。」

職員室に用事があったのだったわ。」

わざとらしい理由付けを口に出しながら退散する遠坂さん。

チクシヨー！

…はあ、もう。

逃げ場がない。

へたに気遣い通り話を避けてもヘンに見られるし…。

仕方ない。

「ああ、ガリアスタ氏と一緒だった時ね。

声をかけてくれれば良かったのに。

あ…それともあの時は、話しかけづらかったかな？

私、顔色悪かったでしょう。」

やましいコトが無いとアピールするために、平然と振る舞う。

…裏社会云々話はあるけれど、やらしいコトは断じて無い。

ならば背後の魔術話を隠しつつ、身の純潔を証明しなければなるまい。

だって、そんな勘繰りされるのは気色悪い。

ただでさえ、ギルガメッシュ王の求婚でイライラがたまった直後だというのに。

「顔色が悪いというか…」

「肩ア抱かれとつただろうが！

誤魔化されんぞワシや！」

氷室さんの言葉を遮って、蒔寺さん復活。

ホント元気だなあ。

「え…何、なんの話？」

困惑して、美綴さんが三枝さんに問う。

「え、え…と…なんて言ったら良いものか…」

「沙条にオトコがいるんじゃねーかってハナシだ！」

イケメンパツキンのな！」

「何イー!？」

「蒔ちゃん!？」

うわ、ぶっちゃけてくれやがったよこの子！

美綴さんも目の色変わってるし！

しかもやつぱ、あそこから見られてたのか面倒くさい！

あの時は、アーマーの高速飛行を体験した直後だったから、フラついてただけだし…。

そこですかさず支えてくれたガリアスタ氏は紳士だと思うけど…。

こんなの勿論正直には話せないし、うふうんな疑惑に繋がるのだけは絶対に嫌だ。

「いやあ…あの時は、ちょっと体調を崩してた所を支えてもらってただけだよ。」

あの人は、私の「薬学」の先生…の、友達でね。

ホラ、美綴さんと氷室さんは知ってるでしょ？

「ロンドン☆スター」さん。

あの人の、仕事関係の知り合いなんだ。」

その言葉に、二人が反応する。

「ロンドン☆スターって…『英雄史大戦』の一流プレイヤーさんでしょ？」

氷室に、新たな戦略を授けてくれた人。」

「そそうそそう。」

英雄史大戦とは、世界中の偉人や英雄、妖怪を操って戦う戦略カードゲームである。

以前、うじうじしていた氷室さんに発破をかけるために、このカードゲームを使って協力してもらったのだ。

因みにロンドン☆スターとは私の師匠^{せんせい}、ロード・エルメロイⅡ世その人である。

私のウィッチ・クラフトの方向性として薬草を用いたアプローチを示してくれたのは彼だし、彼がガリアスタ氏と友人であるコトも事実だ。

何の間違いも無い。

「彼の御仁はイギリス人だったし、ガリアスタ氏とやらは見たところ中東系の成人男性だった。」

相も変わらず良くわからん交遊関係を持っているな、汝は。」

「まあね。で、彼は仕事でこつちに来たって言うから、せっかくの機会だったコトで、
“鍾馗”で食事をご一緒した帰りだったんだ。」

なんでも、ロンドン☆スターさんにお薦めされた店が、たまたまあそこだったみたい。」

「…あー。」

私のいきつけ、お好み焼き屋「鍾馗」の名前を聞いた氷室さんは、何かを察した様に呻く。

「成る程、ガリアスタ氏は海外の御仁。

日本食への興味が勢い余って、あの店の「おかしなメニュー」まで注文してしまったわけだ。

で、おかしなメニュー食べちゃって、ちよつとフラついてしまったと。」

ここまで話せば、流石の氷室さんがつつがなく推理してくれる。

鍾馗にたくさんある、謎メニュー…。

「世紀末覇者焼き」とか「悪魔騎士焼き」の洗礼を受けた経験のある彼女なら、そう結びつけてくれると信じていた。

「そ、その二つの要素があったところで、あのイケメンと沙条がデキてねーって理由にはなんないだろ！」

ビルに二人で消えただろうがよ！」

理路整然とした氷室さんの推理にたじろぎながら、食らい下がる蒔寺さん。

なんでそんなに、あの人と私が良い仲だと思いたいんだ。

そんなに恋バナに餓えているのか。

実際かなり美人なのに、性格一本でその手の話題を自ら遠ざけてしまっている気がするんだケドなあ、この子は。

「無いよ…あの人って私と一回り近く年も違うし、何より一夫多妻制度国家の人だからね。」

他所の国の制度だし無闇に批判するコトはしないけど、だからってそういう価値観まで合わせようとは思えないよ、私には。

あのビルはあの人々が日本で活動するための持ちビルで、体調崩した私を助けてくれただけなんだから。

恩師の友人で偉い方なんだから、へんな下衆の勘繰りは止めてね。」

ダメ押しに、国際的価値観を強調。

案の定、この言葉で皆の表情が変わった。

現代日本人の価値観では、この事実が決定的だろう。

「なーんだ、カン違いだったのか…。」

…思いの外、残念そうだな。

美綴さん。

乙女ゲーじゃない、リアルイケメンにも興味があったのか。

「ぐぬぬぬ…！」

「ぐぬぬじゃないでしょ、蒔ちゃん。」

カン違いだつてわかつたんだから、ちゃんと謝らないと。」

「うぐぐぐぐうぐ!!」

ふう、どうやらなんとか誤魔化せたかな。

顔を真っ赤にひきつらせながら、震える蒔寺さん。

その眼前に、顔がくつつきそうな距離で氷室さんが立つ。

「やれエー————!!」

蒔寺アア————!!!」

「うゝあゝ あアアゝ————!!」

「いや、土下座とかままではしなくて良いからね!」

.....

2004年 1月中旬 昼

冬木市 深山町 穂群原学園

屋上

「…で、実際のところ、どうなんだ？」

お弁当を広げながら、氷室さんは問い掛けてきた。

「…何が？」

今、この場所には私と彼女、ふたりきり。

ここに来て、やっと本題であるといった風情で語りかけてくる。

「アトラム・ガリアスタは、中東国家に多大な影響力を持つ石油王だ。

その彼が、日本の一地方都市である冬木に、わざわざ新築で高層ビルを建造してまで進出してくる理由が思い付かん。

通常ならば…な。

だが……」

陸上選手らしい栄養バランスのしつかりとれたお弁当から目を離し、私を見つめて彼女は言葉を続ける。

「汝が絡むというならば、話は別だ。

沙条綾香の「未来予知」：それに絡む、「冬木に起こる悲劇の回避」。

彼の御仁が来日した理由には、これが関係するのではないか？

ガリアスタ氏は、紛争地域における救護支援や、災害対策なども請け負う防災企業やボランティア団体をも傘下に納めていると聞くからな。」

…あつてるっちゃあ、あつてる。

へえ、そうなんだ：あの人そういう会社もやつてたのかあ。

まあ、多分「代償魔術」に使う素材を集めるためのシステムなのだろうけども。

それに、私のウィッチ・クラフトによる予言。

これらの複合により、またまた氷室さんは奇跡的なカン違いをしてくれたらしい。

こちらに都合の良い結論にたどり着いてくれた。

「…流石の推理力だね。

そこまで感づいているというコトは、さつきは敢えて皆を誤魔化す方向に話を進めてくれたんだ？」

「ああ。

下手に彼女たちを巻き込むわけにはいかないからな。」
：ホントありがとう。

ホント助かった。

やあ、やつぱり持つべきモノは友だわ。

それも、市長オーナーの娘でもある友。

ひとでなしの赤い悪魔セカンドオーナーとは大違い。

そして：このカン違いは、とても都合良く利用できる。

騙して陥れるのではない。

互いに利を得るための協調だ。

昨夜ガリアスタ・マンションで話した話題に、上手く結びつけられる一手。

「そこまで理解っているなら、話は早い。」

私も、弁当から視線を離して氷室さんを見つめた。

「冬木を護るため：是非、ガリアスタ氏を交えて会談の場を設けたいの。

口添えしてもらえるかな？

貴女のお父さん：冬木市長、氷室ひむろどうせつ道雪氏と。」

Episode 14 : 明くる日、技師と王

2004年 1月中旬 昼

冬木市 新都 ガリアスタ・マンシヨン

地下工場 // ガリアスタ
スタック G & S ファクトリー //

上部・集中監視室

「さて、マスター。

僕は昨日、英雄王ギルガメッシュというド級の対戦相手を目の当たりにし、痛感した

コトがある。」

キヤスターは、空中に浮かぶ立ホログラム・インターフェイス体 画面の前に立ち、画面を指差しながら言った。

其処には、あらゆるアイアンマン・アーマーのスペック・ノートが映し出されている。全て、実際にこの工房で作り上げたものだ。

そして昨日、悉く英雄王に破壊された。

「正直、あの辺りのアーマーをどれほど量産したトコロで、英霊存在：即ち一騎当千のサーヴァントが相手では歯が立たない。

有象無象、一山いくらの賑やかし扱いが精々だ。」
確かに。

初見の上に拠点で戦ったライダー戦は難なく退けられたが、英雄王相手だと弾除け程度にしか機能していなかった。

掘削と分離・捕縛・自爆コンボによる奇襲など、そう何度も通用するものではない。

「だが、これはお前が英雄王に指摘された変えようのない事実でもあり、ボクが事前に聞いていたコトでもある。

今までのアーマーは、全て試作機だ。

そうだろうか？」

ボクは、座っていたリクライニング・チェアから立ち上がり、キャスターに並び立つ。
「全ては布石だ。

そう…お前が持つ技術の全てが、この世界でも再現可能であるかを確かめるための布石。

昨日の…平行世界の与太話。

あれが真実であるなら、そういうコトになる。」

一通りアーマー・デザインを眺めた後、キャスターに向き直る。

「ああ、そうだな。」

その通り。

当初にも言った通り、僕の世界の物理法則が、この世界でも適応されるのかを調べる必要があった。

まずはリアクターの作成、次にアイアンマン・アーマーの製造。

そして、昨日完成したバッドアシウム。

この新元素を生み出すコトに成功した時点で、ほぼ確定と言つて良いだろう。」

キャスターは、胸のハート・リアクターを指で叩いて頷く。

「僕の操るテクノロジーの全ては、この世界でも再現可能だ。」

そう言つて、キャスターは立体画面をスライド操作する。

無数のアーマーの設計図は、その最も長所的な部分を残して消え去り、それらが組み合わさつてゆく。

さらに新たな記述も複数出現し、やがて一つの図面となった。

「だから……ここからは一気に『到達点』にかけ上がる。」

ここまで来て、ようやく僕らは彼ら……他の英雄と覇を競い合うラインに届くはずだ。」

そう、全ては試トライアル・アンド・エラー行行錯誤だ。

トニー・スタークが人生をかけ、たどり着いた『究極の一』にたどり着くための道筋。
「フン、そうやってもらわなければ困る。」

そもそも、ボクがお前を自らのサーヴァントとして戦い抜く覚悟が決まったのも、コレを見たからだ。

お前の持つ技術の全て：我が財力で、その再現をする。

そのためには……」

「アイアンマン・アーマーmk—85。

僕の最強の『ナノマシン・アーマー』。

その製造に着手する。」

映し出された図面を前に、宣言する。

：改めて考えると、途方もない話だ。

ボクはこの戦争に際して、あらゆる点に於いて世界の技術レベルを何十年分と更新してしまっていた。

確かにキャスターの宝具と陣地によって、恐るべき効率化は成されている。

宝具によって再現されたツールにより、急ピッチで我が工房地下は巨大工場と化した

メガ・ファクトリー

のだ。

しかし、それは単に時間短縮ショートカットをしているに過ぎない。

結局のところ、これらは全て金さえあれば再現可能な超技術なのである。

アーク・リアクターも、パワー・アシストツールも、ドローン・テクノロジも…あまりに多くの技術革新が、この極東の小さな地方都市で成されていた。

この上、更にあのレベルの…魔術と見紛う程のナノマシン技術とは…。

「…話に聞く第三次聖杯戦争の開催時期は、第二次世界大戦セカンド・ワールド・ウォーの前年であったという。

故に、当時の世界情勢を反映した前哨代理戦の体を成し、各国軍事勢力が聖杯戦争に極秘参加したらしいが…。」

ボクは、改めて工場内部を見下ろした。

最新機器で構成された製造ライン。

そこでは、我がガリアスタ少数精鋭の技師達と、マシン・アームが淡々と作業を続ける。

バッドアシウム精製と、アーク・リアクターの量産。

金を湯水のごとく使っている自覚はあった。

…が、それを補って余りある莫大な利益を確信しているし、何より『菩提樹の葉』を手に入れるために確保していた資金も残っていた。

問題はない。

代わりに入手した古代ギリシアの文献も、思いの外安値で手に入ったし。

…今思えば、それは文献が偽物であったからなのだろうが。

…いや、もうそれはいい。

良くはないが、とりあえず今は飲み込みこもう。

で、それはそれとして、だ。

「第三次聖杯戦争当時に匹敵する程の戦争準備を、個人で行った魔術師などボクが初めてだろうな。」

気持ちを切り替えると、思わず笑みが溢れる。

自嘲ではない。

慢心でもない。

ただ、なんとなく可笑しかったのだ。

これを、大人げないとは思わない。

確かに、間桐の当主は少年だったが、魔術師などという生業は金をかけてナンボなのだ。

外部から挑戦者を募るということは、アウト・オブ・レンジ射程外から財力でブン殴られる覚悟をして

然るべし、という話である。

「まあ、英雄王なんていう、一人で戦争がやれてしまうような怪物を相手にするんだ。それに……敵は奴だけじゃない。

こちらにも、出来る限りのコトをやらないと、だな。

何せ……残り半月だ。

準備期間はもう少ない。」

キャスターは、改めてボクの方に向き直った。

「残りの期間で、僕は工房の製造レベルを到達点まで持つていく。

だから、君にもやるべきコトをやってもらおうぞ。

マスター。」

テクノロジーにおいて、サーヴァント……トニー・スタークが最高のパフォーマンスを発揮するならば。

マスターであるボクも、やるべきコトをやる。

「ああ、当然理解しているさ。

お前のテクノロジー総てに、魔術の神秘を付随させる。

その為の、神秘を貶めない上での原始電池の量産。

それは、ボクが必ず成して見せよう。

M・P・Sリアクターの数を揃えるには、絶対に必要だからね。

そして……」

僕は、キャスターに用意させたタブレット・ツールを取り出した。軽く叩き、空中に立体映像を展開する。

「コレらの解析も、完璧にこなすさ。」

そこには、複数の物体が、二つのグループに分けて映し出されていた。

一つの映像群は、英雄王に破壊された後、回収したアーマーの残骸。

そして、もう一つは……ライダー陣営が退去する際、こちらを妨害した飛来物。

複数のエーテル体。

回収した、その姿カタチは……

「ああ、頼むよ。」

しかし……こりや、何だろうな？

いや、何かは理解できるんだが……こういうビジュアルのものは、珍しい気がする。」

ふむ、なるほど。

欧米人のキャスターには、^{アメリカン}そう感じられるかも知れない。

しかし、ボク……^{エミレテイメイガス}中東魔術師としては、実は解析するまでもない見慣れた代物だった。

なにせ、これは黒塗りの^ダ投擲剣。

我が中東地域における暗殺者が扱う武器としては、ありふれたモノだったのだから。

.....

2004年 1月中旬 昼

冬木市 新都 冬木ハイアットホテル

最上階・ロイヤルスイートルーム

「.....ム。」

柔らかな陽光が降り注ぐのを肌を感じ取り、我は^{オレ}覚醒する。

薄く開いた眼に映るは、寢室。

冬木ハイアットホテル、そのロイヤルスイートルーム。

つまらぬ冬木の街の中では、我が評価基準に於いて及第点ギリギリと言える、数少ない寢床であった。

「...そうか。」

貴様が、我を此処に担ぎ込んだ訳か。

「守護者。」

我は身を起こし、此方に歩み寄ってくる人影に向かって言葉を投げた。

「ああ。」

知り合つたばかりとはいへ、ボロボロの君を見かけたというのに捨ててはおけないからぬ。」

その両手に湯気立つマグカップを持った守護者が、ベッド脇のサイドテーブルにそれを置きつつソファに腰かける。

「備え付けのマシンがあつたので、ラテを淹れてみた。

良かったら、どうだい？

疲れがいくらか落ち着くよ。」

芳しい湯気が、鼻孔をくすぐる。

この我が、あの程度の戦闘で疲弊しているであろうという、その浅慮こそは不敬である。

が…しかし、気遣いそのものは悪くはない。

「フン…安物であろうとはいへ、香りは合格点だ。

良からう、受け取ってやる。」

…おっと、これは。」

いかんいかん。

手を伸ばし、漸く気付いた。

マグへと伸ばした腕が視認できない。

今現在、我が身は「宝具の指輪」効力でもって透明化していたのだった。

指輪を外し、庫に収蔵する。

「成る程。」

そういう芸当が可能な宝物もあるんだな。」

守護者めは、別段驚いた様子もなく笑う。

姿を消すような存在は見慣れている、と言わんばかりだ。

まあ、そうでなければ当然のように、身の透けた我を担ぎ込むコトなど出来まいが。

「当然だ。」

我は、世の総ての財宝を収集せし王。

我が行使できぬ奇跡など、そんなにない。

昨夜の負傷後、咄嗟に使用した回復薬の作用で眠りに落ちた身を護るために身を消し

ていたが…。

裁定者の眼だけは欺くコトなど出来なんだか。」

ともあれ、回復薬の後味で不快感の残る口を直す意味では調度良い。マグを手に取り、香りを楽しみ、スプーンを回す。

クリームが溶け、装いを変える。

表層の白と裡なる黒がカタチを変えて変容する様は、中々に愉快であると言えよう。まるで、何処ぞの性悪神父の様ではないか。

思わず溢れた笑みのまま、開いた口にカフェ・ラテを流し込んだ。

「…ほお。」

不覚にも弱味を晒してしまった腹いせに、軽く抜き下ろしてやろうとも思っていたが。

それも、悪しき点が見当たらぬのであれば叶うまい。

その程度には、この安物のカフェ・ラテは洗練されていた。

「お気に召したかい？」

そう言い、微笑みながら自らもラテを口にする守護者。

「うむ。」

モノの安つぽさはともかく…それを鑑みても尚、悪くない。

コレは、一つの生涯をかけて磨かれた感覚の賜物であろうよ。」

我の言葉に、守護者は満足そうに頷く。

「そう言ってもらえるのは光栄だ。

日課のモーニング・カフェラテだけは、僕が夫婦生活に於いて欠かすコトの無かつた役割だからね。」

…ふむ、そうか。

あの儂く憐れな竜の娘と似ているなどと、些かの外した考えであつたやもしれんな。

何せ此奴は、満足している。

己が生、其の総てに。

その終わりに。

ならばこの煌めきは、騎士の王などと謳われ使い潰された…憐れにして尊く、美しい娘のモノとは根本的に別種であろう。

どちらも美しく、どちらも収集するに値する。

「それで、ギルガメツシユ。

昨日、僕と別れた後の話だが…。

あの後君は…サーヴァントと戦つた、というコトで良いんだろうか。」

語気が変わり、此方を見据えて問い掛ける守護者。

フン…別段、隠しだてする必要も無い。

「応とも。

賢しい人形遣いの英霊であつたわ。

この我の虚を突き、幾ばくかのダメージを与えおつた輩よ。

お陰で、我が財を二つ駆使して即座に対応せねばならなかつた。

奴の方もあの場所には居なかつた故に、迂闊に次の攻め手を打てなかつた様だがな。」

…思えば、この我が怒りよりも存続を優先し生存策に打つて出たコトは、守護者によつて齎された二画の令呪による気紛れやもしれぬ。

強制された感覚こそ皆無であるが、ふと選択肢が浮かぶ程度には効力を發揮している様だつた。

まあ、構わぬがな。

あの優れた人形技師を、思うままに屠つてしまうのは惜しいというコトは、気の鎮まつた今だからこそ考えられる。

「…ああ。

確かに昨夜、あの場所にサーヴァント反応は君のものしか確認出来なかつた。

遠隔でサーヴァント相手にダメージを与える程の存在というコトは…相手のクラスはキヤスター？」

…此奴め。

何かを確信しておるな？

しかし、婉曲に問い掛けている。

認めたくない事実でも、そこには在る…か？

「ほう、そう考えるか。」

我はアーチャークラスのサーヴァント。

対魔力スキルを所持する故、並みの遠隔魔術など歯牙にもかけぬと自負しているが。

それを、裁定者たる貴様が識らぬワケはあるまい？」

返す問い掛けに、発言を窮する守護者。

ハ、そら見たことか。

性分でもあるまいに、遠回りなどして見せるからそうなる。

「…ああ、そうだね。」

実際、そうだという確信があったんだ。

アレのコトなら、僕は…恐らく、制作者の次に良く識っているからね。」

そう言いながら、守護者は部屋の片隅を見やった。

其処には、我が破壊した人形の残骸が転がる。

…ほほう？

「成る程、そういうコトか。」

あの人形遣いめは、貴様の世界の住人であった…というコトだな？
そうであろう、守護者よ。」

一瞬の間の後、守護者は口を開く。

「…アレを作り出すコトの出来る人物には、心当たりがあるよ。

確信は持てないけどね。

僕の友人かもしれないし…それに通ずる何者か、かもしれない。

いずれにしても…ああ。」

我の指摘に、記憶を反芻する様に眼を瞑り、頷く守護者。

「彼らは僕の世界の人間だし、もし召喚されるならば、当てはまるクラスは恐らくアーチャーかライダー、そしてキヤスターだ。

この戦争に於けるアーチャーはまだ召喚されていないし、ライダーなら、姿を實際に確認した。

容姿も性別も結び付かない。

エクストラクラスの可能性もあるが…その召喚は、確認出来てはいない。

ならば…そういうコトなんだろう。」

マグの把手はしゅを掴む指に力が込められ、そこから僅かに感情が見てとれる。

「ハ、二つか三つの隣枝どころか、根本の大元すら異なる平行世界の英霊存在が、こうも

集まるとは。

面白いではないか。」

我は寝具より身を乗り出し、縁に腰掛けて守護者と向き合う。

「それで？」

其奴に対する確信を、貴様はどうするつもりなのだ。」

此奴の心の裡を計り試す。

「…先ずは、探る。」

キヤスターが何者なのか…これは、今回の戦いに於いて重要項目になるはずだから。」

慎重を期する、か。

最適解ではあるが、些かつまらぬ。

此奴らの状況が進展せぬのではな。

我も『行動』を起こす前の戯れとはいえ、飽いてしまうというものだ。

「そうか。」

では…生意気にも我が身を救い上げた件についての褒美をとらそうではないか。」

時が進む早さを、後押しをする。

「我が眼が捉えた、彼奴の所感を伝えよう。」

マスターに関する情報も含めて、な。」

「……………」

精々、我を愉しませろよ。

何せ貴様達は、そうするコトでしか価値を示せぬ。

貴様達、平行世界の英霊共が元来喚ばれた抹殺対象は、聖杯戦争の火蓋が切つて落とされる前に…

我が、完膚なきまでに消滅させてやるのだからな。

Episode 15 : 陣地作成

2004年 1月下旬 昼

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション

地下工場 “G&Sファクトリー”

ラボラトリースペース

あれから十数日。

我々キャスター陣営の目論みは、概ね上手く行っていると言えた。

素材さえあれば、キャスターの構想するメカニズムは一日かそこらで開発、試用、量産体制の構築まで駒を進めるコトが可能だ。

その素材と言うのも、当初の想定であった“コルキスの魔女”運用に要するであろう魔術的マテリアルなどよりも、グッと収集の目処がつきやすい物品ばかりである。

世界の技術革新の最前線を常に走り続けてきた、我がガリアスタ一族ならば当然の話

だ。

それに加え、原始電池の量産体制：ひいては、M・P・Sリアクターの運用構想に於いても、我々は大きな進展を遂げる。

兼ねてより技術提供を行っていた優秀な学生を自陣に引き入れたコトが幸いしたのである。

「ミス・タ・ガリアスタ。

重ね重ね、この度は貴重な機会をお与えいただき感謝していますよ。」

眼鏡をかけた茶髪の青年が、機材に囲まれたラボの中、成果物を前に笑顔でそう言った。

「それはこちらの台詞だよ、カウレス・フォルヴェツジ。

かの双貌塔での戦いに於いて、私は大きな不利益を被ったが…。

結果的に君という優秀な魔術師との縁が結べたという事実を考慮すれば、安い出費であつたと言わざるを得ない。」

ボクの言葉に、カウレス君は照れ臭そうに頬をかいて笑う。

そばかす顔のせいかな実年齢よりも随分幼く見えてしまう彼は、しかしその貪欲な学習意欲と、魔術社会の常識に囚われない先進技術を盛り込んだ自由な発想力でもって、べ

テランの術師すら歯牙にも掛けぬ勢いで次々に革新を齎^{もたら}してくれたのだった。

例えば、生体電位を発想に盛り込んだ技術。

人間に限らず、あらゆる生命は活動を行う際に常に電流を内包し、発している。

東洋医学に於ける“氣”の正体こそが、この生体電位であろうとも言われている。

実際、これに関連したりハビリテーションやフィットネス等の医学研究は世界中で行われているものだが…。

魔術世界に於いても、当然これらは大いなる意味を持つ。

ヒトの内包するエネルギーのカタチとしての、生体電流。

18世紀末の医師にして物理学者：ルイージ・ガルヴァーニの研究に端を発した“電気生理学”と、電気魔術の複合を行おうというのだ。

兼ねてより、そういう発想は此方にもあった。

ヒトが発する魔力^{オト}と生体電流は、形態の違いこそあれほぼ同質の存在であると言える。

これらに関連付けるコトによって、電気魔術の可能性は無限に広がるのだ。

しかし…

「恐縮です。

でも…まさか俺の研究が、こんなにも早く実を結ぶことになるなんて、思わなかった

ものですから。」

…ああ、だがしかし、だ。

ここまで本格的に双方の関係を理解した技術発展を行うコトが出来たのは、カウレス君の研究の賜物であつたと言えよう。

カウレス君は、実際にこの研究を学生として行っていた。

それについては、十分に把握している。

「フ…世の中、何が物事を動かすかなど、分かったモノじゃない。

そういう意味では、この奇縁を結んでくれたエルメロイと、その弟子の問題児君に感謝だな。」

「あ、アハハ…問題児ですか。

現代魔術科^{ウチ}のコト、良くご存じで…。」

そう、彼こそは我が友、ロード・エルメロイⅡ世の弟子…。

すなわちミス・サジヨウと同様、時計塔が誇る現代魔術科に所属する学生なのである。「それはそうさ。

付き合いが長いって程じゃないが、彼らとはそれなりに濃密なファースト・コンタクトを経験したものだからね。

ある程度、骨身には染みている。」

カウレス君との交流：そのキツカケこそが彼らだ。

“双貌塔”の一件以降、エルメロイと現代魔術科に面白味と価値を見出だしたボクは、エルメロイ教室のとある天才学生に技術提供を行った。

我が天雷魔術の術式行使に意見くちだしをしてくれた学生…。

気に食わないが、しかしその発想力と着眼点には目を見張るものがあつた。
ならば利用しない手はない。

原始電池の技術発展を手伝わせようとしたのだ。

その彼が悩むコトすらせず、ノータイムでエルメロイと同時に巻き込んだ魔術師こそが、カウレス・フォルヴェッジだったのである。

「ハハ…その辺の話は、俺も聞いてますよ。

まあ、確かに変わり者ばかりですけど、今の西欧魔術社会にはない“熱量”を持つている人達だと思えますよ。

現代魔術科の面々は。」

まさしく、である。

当のカウレス君本人だって、電気魔術に関する素養は目を見張るものがあつた。

…が、それだけではない。

「熱量と言うならば、君こそまさしくだろう。」

魔術師として一番大事なモノを、君は秘めていると私は思うよ。」

「……っ！」

彼だからこそ、ボクは今回スカウトを行ったのだ。

気が多く移り気な前述の天才魔術師とは違い、カウレス君には成功に対する貪欲さがあつた。

歴史はあれど衰退しつつあつた魔術師一族である、フォルヴェツジ家。

その命運を一身に背負い、若くして当主となつた重責があるのだろう。

奇しくも、話に聞く間桐の当主と似たような境遇と言える。

成功と学術的好奇心に飢えていたカウレス君は、ボクの誘いに対して二つ返事で乗つて来た。

連絡の翌日には、殆ど着の身着のまま来日していた程だ。

「…重ねて、恐縮です。」

こんな大儀式に参加する機会なんて、そうそう無い。

ご期待に答えてみせますよ、必ず。」

爛々とギラついた視線が、己が生み出した成果物を見つめる。

やはり、素晴らしい。

彼は使える。

「ああ、私も勿論、ソレを望んでいるとも。」

彼に電気魔術の才を見出だし、開花させたエルメロイ。

ソレを、ボクが十全に使いこなそう。

アヤカ・サジヨウト、カウレス・フォルヴエツジ。

彼らを伴った勝利は、聖杯戦争に参加しない道を選んだ奴エルメロイに対する当て付けともなるだろう。

「しかし…本当に凄まじいですね、このM・P・Sリタクターは。

いえ、そもそもアーク・リアクターの存在だって俄には信じがたい超技術なんですけど…。」

カウレス君は、今まさにスペックを再確認していた成果物…。

最新式のリアクターを手を持ちながら言った。

キャスターが胸に装着したリアクターとほぼ同型と言える薄型モデルのアーク・リアクターと、ダウンサイジングして初期型リアクター程に抑えた原始電池。

それらを組み合わせた代物だ。

「そうだな。」

この技術は、すべての魔術の有り様すらも変えかねん。」

現在のM・P・Sリアクターを構成する要素は、アーク・リアクターと原始電池だけ

ではない。

この工房の核となっている、代償魔術炉。

そのシステムをすら凝縮・搭載していた。

即ち、カウレス君が持ち込んだ生体電気魔術の応用だ。

M・P・Sリアクターが生み出す膨大な電気魔力を、そのまま人体や霊基の糧とする。

代償魔術によるエネルギー変換術式をリアクターに組み込むコトで、それが可能となる。

即ち、魔力結晶に変換・摂取する行程を省いてしまったわけだ。

「全くですよ。」

現代魔術社会に於いては、魔力を賄う術こそが全魔術師の悩みの種なんです。

それを、一発で解決してしまうテクノロジが、この小さな箱に込められている。」

それは即ち、超常の具現たる魔術を行使するための、大きな制限のひとつを解除してしまう所業に他ならない。

ましてや、現状我らが立ち向かう大儀式は聖杯戦争。

サーヴァントという、莫大な魔力を消費する存在を戦わせ合う儀式なのだ。

それに際して、これ程のアドバンテージはそうあるまい。

そして、これに勝ち残るコトで示すことが出来る。

ボクにとつての、この戦争の目的は変わらない。

しかし、手段は明確化していた。

キャスターが齎し、ガリアスター一族とフォルヴェツジ家が組み上げた超技術の有用性。

それを、聖杯戦争の勝利という箔を添えて証明するのである。

そのためにも…。

「それを証明するための策を、我々はとらなければならぬわけだ。

生み出した技術は、実証してこそだからな。」

「ですね。」

その確認作業を、キャスターが行ってるって話でしたけど…」

「そいつも概ね滞りなく完了したよ、カウレス君。」

カウレス君の言葉を遮り、キャスターがラボに進入して来た。

歩きながらタブレットを操作し、我々に並び立つと同時に空を叩く。

お馴染みの立体映像が、そのまま展開された。

「…いやはや、何度見ても。」

「テンション上がる?」

立体画像を見つめて目を輝かせるカウレスを横目に見ながら、キャスターは微笑む。

「ああ、うん。」

「こういうの憧れだったからさ。」

ヒーローもののアメコミとかSFとか、そういうのに目がなくて。」

照れ臭そうに笑うカウレス君。

「へえ。」

「そりゃ奇遇だ。」

後で、アーカイブに保存してある、僕をモデルにしたコミックブックを見せてあげようかな。」

「…近代の英雄だとは聞いてたけど、自分が主役のコミックを持参してるのか?」

一転して、ずり落ちたメガネを持ち上げつつ呆れ顔のカウレス君。

「モチロン。」

タイトルはズバリ、The Invincible Iron Man。

良い出来だよ、監修は僕が直接したからね。

何、大昔の英霊^{ヒーロー}達だって、唄に語られたからこそ伝承が残ってるんだ。

それと似たようなものさ。」

立体映像を操作しながら、おどけた調子で言つてのけるキャスター。

実際、ボクも休憩時間に読ませてもらったし、中々良い作品だったのは認めるが…いや、そんなことはどうでもいい。

「自己顕示欲満載の無駄話は、その辺にしておけ。」

我々の作戦の、最終確認の話をしに来たんだろが。」

「承知してるさ、心配しないで。」

ホラ…これだ。」

最後の操作が終了すると、映像には様々な風景が映し出された。

人通りの多い屋外道路、業務中の役場、コンビニエンスストアやショッピングモール、子供達が遊ぶ公園、教育施設の職員室…。

「冬木市内の公共施設。」

その全てに、防災用機材を設置した。

M・P・Sリアクターを搭載した、我々が最新機器をね。」

……話は、数日前に遡る。

……

2004年 1月中旬 昼

冬木市 新都 冬木市役所

市長室

「さて……この度は、面談を……快諾いただき感謝します。

氷室市長。」

ゆつたりとしたソファに腰掛けながら、アトラムは目の前の人物に感謝の意を述べた。

「いえいえ、私が行政権限を預かる、冬木市の安全に関する話だということです。ならば、無下には出来ませんまい。」

ましてや、貴方のような世界的災害支援の権威の方からのお話ともなれば、尚更だ。」
丁寧ながらも、神妙な面持ちで応対する、ロマンズグレーのナイスミドル。

彼こそが、メガネが似合う冬木市長・氷室道雪氏ドロボツシムロ、その人であった。

：いやはやしかし、確かに市を味方につけるのが得策だとは言ったが。

まさか、サジヨウ嬢経由でアポイントメントを取り付けるコトが出来るとは思わなかった。

しかし、これはなんとも都合の良い展開だ。

ヴィジョン・アーマー越しではあるが、僕もこの場でマスターのフォローをさせてもらおうとしよう。

「我々のような他国の人間の、唐突な忠告を受け取っていただけるとは、ありがたいコトです。」

では…さっそくお話ししましょうか。」

アトラムは、おもむろにタブレット端末を取り出した。

僕が提供した立体映像投影型ではなく、元からアトラムが所有していたものだ。

いきなり超技術を見せつけてしまったのは、怪しまれる。

情報を小出しにし、少しずつ信用を勝ち取らなければ。

この辺は、政略を生き抜いてきたアトラムの話術と、言葉に籠る魔力。そして、サジヨウ嬢から提供された“香水”の効力を信じよう。

洗脳ではない。

それでは意味が無い。

これらは全て、言葉が感情に届く手助けをするツールに過ぎないのだ。

彼の…自身が受け持つ市を護りたいと思う心が、下す決断を信じるしかないのだ。そうでなければ、困難に打ち勝つことなど出来はしない。

.....

同時刻

冬木市役所

応接室

「これで、良かったのだな？」

沙条嬢。」

ティーカップに注がれた紅茶を一口飲んだ後、伏し目がちに氷室さんは言った。

一応、互いの紹介がてら私達も同行したけど…。

あの人たちは、出来る大人だ。

変な心配は要らなかったかな。

「うん。」

あとはまあ…大人同士の話し合い次第かな。」

私も、それに倣って紅茶を一口。

…うん、おいしい。

薬草について学び始めてから自分でも自覚するくらい茶葉の種類にも煩くなった。

その私をしても、さすが市役所。

良いお茶を使っていると分かる。

「冬木市に存在する、地質上の問題点…。」

それに加えて、戦時中より地下に眠る不発弾の危険性、か。

成る程、そういう話であれば、戦災・自然災害問わず救護の手を差しのべる慈善事業を取り仕切るガリアスタ氏が出張るのも領ける、というものだ。」

：モノこそ違えど、この街に下級の危険物だいまじゆつが埋まっている事実に違いはない。

六十年前：第三次聖杯戦争に於いては、各国の軍隊が出張って空襲まで展開されたという。

そして、十年前の大災害。

表向きに痕跡は隠されたが、それでも消せない数字データは存在するものだ。

それを、キャスター陣営は突く。

土地に迫る危険性を、確かな裏打ちと証拠を並べて証明する。

それにより、フエアーストオーナー“市政”を味方につけるといふ戦略。

「きっかけこそ私の未来予知だけれど、前々からガリアスタ氏は冬木に目をつけてたんだよね。」

格好の“宣伝”舞台として。」

お茶を飲み干し返した私の言葉に、氷室さんは薄く笑う。

「宣伝か…：そうだろうな。」

彼らとて、慈善とはいえ無償の奉仕ではない。

己が技術力を持ってして、この地に起こる災厄による害を防ぐ。

地震大国にして先進国である日本でそれを行うコトが可能ならば、それは世界に向けた最高級のアピールとなるだろう。」

「…幻滅した？」

私の問いに、今度は力強く笑う氷室さん。

「いいや。

むしろ、利益を追及して大勝負に出ている、その姿勢には好意すら覚えるさ。

滅私奉公などと、聞こえは良いが脆く胡散臭いものだ。

そういう意味で、彼らは実に信頼できるよ。」

…本当、氷室さんがこういう人で良かった。

リアリストで、でも大胆で、心の受け皿の大きい人。

彼女のお父さんもそういう人なのだろう。

だから、この会談は成立している。

「さて…後は、どう事態が動くかだな。

君の予知によれば、災厄まではそう日がないのだろうか？」

私は、無言で頷く。

「そういう場合の避難所となる学校等の備えも、充実させなければならぬだろうな。

父上は、これ以上関わることを危惧されるだろうが…私も、私なりに出来ることを模

索しなければならぬかもしれないかもしれん。」

そう言い、氷室さんは立ち上がった。

自分と私のティーカップを持ち上げ、お代わりを淹れてくれるつもりらしい。

「…ありがとうね、氷室さん。」

二つの意味での、感謝。

「フ、礼を言うのはまだ早いぞ。

災厄とやらは、まだ起こりもしていないんだ。

これからも、君の力を借りるコトになると思うが…。

その時は、よろしく頼む。」

…聖杯戦争開始は、間も無く。

これで、街を護り抜く下地せんりやくは展開される…筈。

冬木市に、キャスターさんが持つテクノロジーの包囲網を敷く。

全てを網羅し、防護する結果。

トニー・スタークの、陣地作成を。

Episode 16 : 執行者

私が時計塔から請け負う仕事としては、今回の一件は少々異質なものだった。

聖杯戦争。

星の歴史に名だたる英傑を召喚、使役した魔術師。

それが七人集って覇を競うという、魔術儀式。

開催地を管理するセカンドオーナーたる魔術師一族から一名。

第一次聖杯戦争から200年、開催に携わった二つの魔術師一族から、それぞれ一名。

そして、西欧魔術社会中枢たる組織、時計塔から二名が選出される。

そのうちの一つの枠に、私が宛がわれた訳だ。

いつもの、「封印指定」の魔術師を制圧・捕縛する仕事とは趣が異なる。

複数の魔術師による、ルールを設けた決闘儀式への参加だ。

確かに、私のやり方は魔術師を打ち負かすコトに特化している。

私が保菌する伝承は、如何なる神秘も撃ち貫く。

問答など、正しく無用でだ。

それに：聖杯戦争そのものが再現性の無い魔術神秘であったならば、それは確かに封印指定執行者たる私の領分であるかもしれないなかった。

ならば、我が拳の軌道が惑うコトなど無いだろう。

趣向は異なれど、やるべきコトは同じだ。

対象を突き抉り、打ち負かす。

それが、私の存在意義だ。

求めた場所だ。

使命は、変わらないのである。

故に、私はこの街を訪れた。

2004年 1月下旬 昼

日本国 冬木市 冬木大橋

街の中央にかかる大きな橋から、流れる川を見つめる。

いつもの男物のスーツの上から、重ね着るコートの襟で首を守る。

冬の名を冠する通り、この街における寒気の厳しさは侮れない、と感じられた。

私の故郷：アイルランドの村とは、種類の異なる寒さ。

それは気候の違いによるものか、聖杯戦争という血を求むる魔術儀式が敷かれた霊地であるが故か…。

そう、戦いだ。

そのために、英霊を召喚する。

星の歴史きわくに刻まれた、偉大なる英雄を。

「……………」

襟にかけた手で、そのまま耳につけたピアスを撫でた。

我が家…「マクレミツツ」の血脈に保菌された宝具と共に代々伝わる聖遺物。

幼い頃から両親に繰り返し聞かされた、お伽噺の英雄に纏わる逸品。

…召喚するなら、彼がいい。

彼以外には有り得ない。

このコトを考えるだけで、今まで淡々とこなしてきた封印を執行する仕事の時とは、臨む心持ちが異なる気がした。

「…いけませんね。」

自然、自戒の言葉が口をつく。

子供でもあるまいに、召喚するシモベに思いを馳せるなど。
“フラガ”の名を持つ者として、あるまじきコト。

私は心機を一転し、戦に臨む戦士として一步を踏み出した。
そう。

“赤枝”の末裔として、恥じるコト無き戦いを。

.....

2004年 1月下旬 昼

冬木市 新都 冬木中央公園前

「……やはり封鎖されている、か。」

僕は、改めてこの公園を訪れていた。

ギルガメツシユと、キャスターの軍勢が戦った場所。

そして、十年前の第四次聖杯戦争において壊滅的な被害を受けた場所でもある。とはいえ、近づくコトはしない。

なんせ、複数人の警備員が配置されているからだ。

それも恐らく、警察組織や民間企業からの派遣ではあるまい。

公園を立体的に封鎖する圧が、僕の知る“ストライク・チーム”に匹敵…或いは上回る程だ。

聖杯戦争を管理するという、教会とやらの差し金か。

「……。」

僕は、踵を返して公園を離れた。

後ろ髪は引かれるが、仕方がない。

あの後、ギルガメツシユから聞いた様々な話による印象から、もう一度此処を見ておかなければならない気持ちにさせられた。

すべては、此処から始まった。

僕に言わせれば、聖杯戦争という試みそのものが、歪んだ行いであると思う。

しかし、それを踏まえた上でも。

聖杯からの知識、“裁定者”としての与えられた役割を踏まえた上で尚、やはり感じ

る……この街が抱える大きな歪み。

その歪みの出発点は、間違いなく此処であろう。

それが、話を聞かせたギルガメッシュと、聞いた僕との共通認識であった。

……知るべきコトは、とても多い。

この街と、僕らの世界が交^{クロスオーバー}差した理由。

そこを探らなければ、この世界に根付いた違和の根本は消し去りきれないだろう。

「……こういう謎解きこそ、彼らの領分なんだよな。」

思わず、言葉が口をつく。

かつての家族^{チーム}、その知恵者達。

そのうち一人の彼女から学びとった「気配遮断」のスキルにより、隠密行動こそお手の物だったが……しかし、密偵ほどの高度な捜査を行うまでには、ついで至らなかったのだ。

これは性分なのかもしれない。

何せ、マスターの一人であるサクラを前にしたというのに、無意識に警戒を解いてし

まい看破されてしまったほどだ。

彼らほど巧みに真実を隠し、暴く術は持たない。

一人で戦うコトの難しさを、久方ぶりに改めて痛感した思いだった。

それ故、仲間を求めて弱音を吐きかけたが、やはり頭を振って払拭する。

確かに、キャスターにはそういう可能性がある。

しかし…「彼」であるとも限らないのだ。

なんせ、それほど彼には「彼の超科学^{テクノロジ}技術に纏わる悪党^{ヴィラン}」の存在がついて回った。

そういう輩こそが召喚され、この世界を乱さんとしている可能性も否定しきれないのだ。

ならば、密かに活動する。

彼に纏わる能力を持つモノならば、この街を全天より余さず監視するなど平気でやってのけるコトだろう。

軍勢を率い引きこもる陣地に突撃し、気配遮断スキルの恩恵をみすみす手放すマネをすべきではないのだ。

少なくとも、今の段階に於いては。

故に、まずはそのマスターたる魔術師について探ろう。

ギルガメツシユをして、高慢なる中東系の優男。

冬木を舞台に大きく動くその男の情報を……

「……………」

新都市街へ向かう道すがら、視られていると感じた。

視線のもとを目で追う。

そこには、一人の“麗人”が立っていた。

.....

私は大橋から離れ、街を把握する作業工程として散策する。

そのうち、聖杯戦争に纏わるという大きな公園に歩みを向けていた。

かつての龍脈が焼けた土地というだけあって、向かうごとに強まる不吉な魔力を肌を感じる。

しかし、歩調を緩めず道を往く。

土地の特異性の把握こそは、戦いにおける基礎作業だからだ。

∴そのうち、道中で私の視線は釘付けになる。

そこには、一人の男がいた。

体格の良い、短いブロンド髪の男。

ダークブルーのキャップを目深にかぶり、日本の地方都市に於いては一見して目立つ

風貌をしている。

しかし、それが衆目の視線を集めるコトなく平然と歩く。

魔術師である、自分と同様に。

しかし…彼はどう見ても魔術師ではない。

目に止める必要性を感じさせない所作こそ見て取れるが、それだけだ。

怪しい点は何もない。

魔術的観点で計ったならば、の話だが。

「…あの、お嬢さん？」

僕に何かご用ですか？」

怪訝な顔をして、問いかける男。

…しまった、視線の隠匿が甘かったか。

しかし、近付き寄ってきた男を見て、私は確信してしまった。

強者のみが持つ風格^{オーラ}。

いままで執行対象として戦ってきた、あらゆる武闘派魔術師をも上回る威圧感。

それを、何気なく佇むこの男は放っていたのだ。

ありふれた動作の全てに、隙が無い。

そんな存在が、この時期の冬木に現れるとなれば…間違いないだろうと確信できた。

認識されてしまったのだ。

それに、今は日の照る時間帯。

戦争も、開幕時期には些か早い。

ならば…。

名だたる英雄たちの戦いが繰り広げられる、鬪覇の街が私を逸らせたのか。

私は立ち去るコトなく、“文字”を行使する。

人を払い、あらゆる外部の耳を塞ぐ結界。

そうした後、訊ね返してしまった。

「…貴方は、サーヴァントですね？」

………

…看破された。

サクラの件での迂闊を悔いた矢先にコレとは…。

僕が話しかけた相手…視線の発信者は、ベリーショートヘアで赤髪の麗人だった。

スラツとしなやかな美しい印象を、見事な仕立ての男物スーツ、コートと共に纏う”

兵士の空気”でもって硬質に包む女性。

その空気感は、先ほど公園を見張っていた者達全員を合わせても足りないほどの切れ味である。

話しかけると同時にソレが突きつけられたというコトは、どうやら僕は虎の尾というヤツを踏んでしまったらしかった。

看破されて尚、隠匿できるほどに僕の気配遮断スキルは高ランクではない。

ならば、もう無闇に隠すマネもすまい。

幸い、彼女が手ずから人払いの術とやらを行使してくれた様だ。

つまりは、対話の意思があるというコトだ。

だったら…このマイナスを、プラスに変えなければ。

「…ああ、その通りだ。

そういう君は、魔術師かい？

聖杯戦争に参加するマスターの一人、というわけかな。」

僕の問いに、一瞬の逡巡を挟んで彼女は頷く。

「なら、一先ずは警戒を解いて欲しい。

僕は確かにサーヴァントだが…この魔術大会に参加する選手ではないんだ。

いわば、その監督役さ。」

僕の発言に、彼女は疑わしさを隠さない視線を向けて訊ねる。

「監督役のサーヴァント……そんな話は初耳です。」

この戦争の監督は、聖堂教会から派遣された神父が行うのではないのですか？」
彼女の疑問は最もだ。

コレに対しては、僕は全ての関係者に包み隠さず説明するつもりだった。

「それは、魔術儀式が及ぼす社会的影響を管理・運営するという『人類側』からの監督だろう。」

しかし、この聖杯戦争というシステム自体に支障アクセシデントが生じた場合に、術式そのものから対応に派遣されるクラスのサーヴァントも設定されているのさ。

元来は召喚されない、術式内部に秘匿された存在だけれどね。

これは、術式の状態を通じて『世界側』が下した判断を元に召喚される、特殊な『エクストラクラス』というヤツだ。」

僕の言葉に、また考え込むように此方を睨み、再び彼女は問いを続ける。

「エクストラクラスの存在については、詳しくこそありませんが私も聞いています。」

しかし……その言葉を信じるならば、今回の聖杯戦争には何らかの不確定要素が生じていると……」

意外にも、彼女は肯定を前提に話を進めてくれる。

魔術師という人種のイメージ……などというものは僕にはそんなにないが、それでも彼女はそれらとは遠くかけ離れた真摯で誠実な人物であると感じられた。

「そうらしい。」

その要素がどんなものかは未だ理解らないが、僕は召喚された役目を全うするために、それを調べるつもりさ。

だから、基本的には君たちの戦いを遮る真似はしないよ。」

「……基本的には、ですか。」

「ああ。」

僕の発言の意図を、彼女は汲み取ってくれたらしい。

僕は、基本的には彼らを邪魔したりしない。

だが……『僕自身がマズイと思う状況』からは、目を背けるコトなど出来ない。

たとえ、役割から逸れる行いであったとしても。

他の誰かが、其処を退けと言ったとしても。

絶対に、NOを突き付ける。

その覚悟だけは揺るがない。

戦うコトを、諦めたりはしないのだ。

「……良いでしょう。」

「貴方という監督役とやらが、何をもって戦を測るかなどは興味の外です。何れにせよ、私の行うべきコトは変わらない。」

「貴方は、貴方なりに進むと宜しい。」

「それぞれ道が、ぶつかり合うコトがあつたならば…」

視線が合う。

「彼女がこの戦争に挑む目的はわからない。」

「しかし、闘志だけは強く感じ取れた。」

「…皆まで言う必要ありませんね。」

「それでは。」

瞳を閉じ、そのまま彼女は歩き出した。

「僕の傍らを通り過ぎ、離れ行く。」

「ギルガメツシユと違い、今はこれ以上踏み込んだ話などは出来ないだろう。」

「そう考え、僕もまた歩みを進めようとした。」

「その時、不意に…」

「…ついでと言つてはなんです、もう一つ。」

「答えなくとも構いませんが、一つ訊かせて下さい。」

「歩みを止めた彼女の問いに、僕も倣う。」

「なんだい?」

「便宜上、貴方を呼称する呼び名が必要です。」

イレギュラーとしての貴方を、我々参加者はなんとお呼びすれば?」

尤もな疑問だ。

キャスターの件もある。

勿論、真名を応えるワケにはいかない。

シロウ達に伝えた “ブレット・ヘンドリック” という偽名も、戦と彼らを切り分けるために使うのは好ましくないだろう。

それに、これについても僕は包み隠さず応える用意があつた。

だから、偽りなく言うでしょう。

「ルーラー。」

聖杯戦争を監督する、裁定者のサーヴァントこそが僕だ。

よろしく頼むよ、いずれマスターの一人となる君。」

E p i s o d e 1 7 : 時計塔の魔術師達

「……ふう。

ようやく、事前準備は一段落といった所ですかね。

少なくとも、私が手伝える部分については。」

2004年 1月下旬 夕刻

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション

カフエテリア・スペース

私は、眼鏡の下から疲れ目を擦りながら、ティーカップ片手に一息ついた。

今日は、久しぶりに一日通して「魔術回路」を酷使してしまった。

「ウィッチ・クラフト魔術

「魔術」を用いたキャスター陣営の陣地補強……それについての最終確認のため

め、早朝よりガリアスタ工房にて作業を行っていたのである。

私の魔術は、葉草を用いた呪いが主だ。

簡単に言えば、様々な葉草成分を精製・合成するコトで得られる水薬ポーションや香料ポプリを用い、あらゆる面での研磨パフや劣化効果デパフを齎もたらす魔術ジャンルである。

これによる感覚強化の極致こそ、高度な情報整理による擬似的な未来予測。

この技術によって、私は氷室さんの信用を勝ち取ったのだ。

要は、西欧圏に旧くから伝わるような魔女のまじない、そのものズバリと言って良い。私の場合、性分故に“肉”や“魂”を生け贄とした術式は受け入れられなかったの
で、手間のかかる植物薬が術の主体となっている。

この手段を提案してくれたのが、誰であろうロード・エルメロイⅡ世その人であった。

私の魔術は直接戦闘にはあまり向かないが、状態付与エンチャントに特化している。

人払いや、気配探知といったような“場”に状況を設定する類いの術式なんかも十八番だ。

本来であれば、これを冬木市中総てに設置し、聖堂教会の協力者と力を合わせて街を護るつもりだった。

しかし、七つの陣営のうちの一つ…師匠と接点を持つガリアスタ氏との交流によって、事態は一変した。

“完璧なる勝利”という、表裏双方の社会に於ける体裁すらも望まんとする彼と、やつと得た安住の地の保護を求む私とは、大いに利害が一致していると云えたのである。

更には、異世界人を名乗る彼のサーヴァント。

その目的すらも、私と近いものであった。

ならば、相互の利を高め合うことに何の躊躇いもない。

私の状態付与術式で、惜しみ無く彼等に協力しよう。

：正直、遠坂さんには少し申し訳がないという思いもあるのだが。

しかし彼女は、冬木のセカンドオーナーであると同時に、私の学友であると同時に：

“始まりの御三家”でもあるのだ。

聖杯戦争という大儀式の主催者一族であり、当然その思い入れは強い。

十年前の戦争で落命した彼女の父親の様に、大災害を止める術も無く戦争に白熱してしまわない保証も無いのだ。

彼女の人柄から、そういつた姿は想像出来ないが…。

“受け継いだモノ”に対して、心情もなにも押し殺し徹底してしまえるのが魔術師という生き物でもある。

それを私は、今までの人生に於いて心底痛感してきたのだから。

聖杯戦争に於いて、遠坂凜を心底信頼するコトは難しい。

そう…共通の知り合いが存在するとはいえ、昨日今日知り合った外様の魔術師よりもである。

故に、目的の開示こそせよ、積極的な協調は避ける。

それが私の、現段階の結論であつた。

「……。」

私は、気を落ち着けて紅茶に口をつける。

気に病んでも仕方がない。

遠坂さんと、本当の意味で敵対するという可能性は、まだそこまで高くないのだ。

気分を変えるように、私は再び口を開いた。

「…しかし、よく師匠せんせいが貴方の参戦を許可しましたよね。

カウレス君。」

私の言葉に、同席する青年が肩を揺らす。

「…ハハハ。」

薄く笑い、コーヒーを啜るカウレス・フォルヴェツジ。

先日より、知らぬ間にキャスター陣営に与していた、現代魔術科に於いての私の年上の後輩。

付き合いはそう長くはない。

しかし彼の、探求心を除くあらゆる要素が魔術師に向かない性格については、それなりに理解していた。

何せ彼は、この様に表情と態度に内心が漏れ出やすい。

この気まずそうな笑顔は、そのままズバリ。

何か隠し事がある場合を示していた。

「…まさか、師匠に告げずに来日したんですか?」

またもや揺れる、後輩の肩。

「だ、だって仕方がないだろう!」

エルメロイ先生が聖杯戦争にどれだけ思い入れていたかは、

「レール・ツエッペリン魔眼蒐集列車」の件で

よく知ってる!

それを辞退する覚悟を決めたあの人に、こんな俄にわかに降って湧いた様な、急すぎる相談事なんかをフツたり出来るもんか!」

コーヒーマカップを勢い良くテーブルに置き、飛び散る滴にも構わずカウレス君が叫ぶ。

そう…聞くトコロによると、ロード・エルメロイⅡ世は前回の聖杯戦争に参加したのだという。

それも、先代のエルメロイ当主とは敵対陣営として…。

前者はライダー陣営、後者はランサー陣営。

その戦いで、ランサー擁する先代エルメロイ当主は死亡したらしいが…詳しい事情は知らない。

しかし、軽く聞き齧った程度の概要だけでもただならぬ因縁を、我らが師匠は聖杯戦争に対して待ち合わせていたのだ。

それを思うと、これを考えずにはいられないワケだ。

「いえ、私としては構わないどころか、貴方の参戦はとて有難いですし、糾弾するような真似はしませんが。

単純に、よく師匠や他の皆に気取られるコトなく来日できたなあ、と感心しているだけです。

カウレス君、たしか学生寮住まいでしたよね？」

師匠に加え、あの「天才馬鹿」さんや「お犬」さんにすら嗅ぎ付けられず来日出来たというのは、素直にスゴいと思う。

同じ屋根の下で暮らしていたというなら、尚更だ。

「…どうかな。

俺は今回、家の都合とか、そういう理由をつけて休学申請をしたんだよな。

でも、上手く誤魔化せたかどうかは正直自信が無い。

先生や皆は、俺の家の事情を知ってくれていたから深くは追求してこなかったけど。」カウレス君は、言いながら飛び散ったコーヒートを紙ナプキンで拭き取る。

彼の家の事情…それまた、私は詳しく知らない。

まあ、現代魔術科に籍を置く学生の大半は、それなりにワケありの人物ばかりであるので、それだって此方から詮索するコトはしないが。

他ならぬ私も、そういう手合いであるのだし。

「…いずれにせよ、現代魔術科ノリリツジの生徒が二名も、同陣営で協調しているんです。

結果を残さなければ、師匠の顔に泥を塗ってしまうことにもなりかねませんね。」

「そうだな…。」

ただでさえ蔑ろにされがちな現代魔術科の風評を、落としてしまうことだけは避けた
い。

やってみせるさ…それだけの準備は、整えられたハズだしね。」

そう言い、一息にコーヒートを飲み干すカウレス君。

彼は、貪欲さに於いてガリアスタ氏が認める程の人物だ。

付いた陣営の勝利が自分に齎す利を想い、全力でサポートをこなすだろう。

状況は整った。

あとは、数日後。

来るべき開戦に備えるべく……………

「……………?!」

瞬間、感じられる違和。

私は、思わずティーカップを取りこぼしそうになる。

「…どうした、サジヨウ?」

私の表情に走る緊張を察してか、カウレス君が問い掛けてくる。

「…マンシオン周囲に張り巡らせた『セキュリティ』に、引つ掛かったモノ達がいる。

数は一名…いえ、なにか大いなるモノを従えているみたい。

高度な術で隠しているようだけど…私の魔女術は逃さない。」

「……………っ!」

F. R. I. D. A. Y!

マンシオン敷地周辺の状況を教えてくれ!」

私の言葉を受け、即座に支給された『腕時計』に向けてカウレス君が訊ねた。

『高濃度の魔^{ミステック・パワー}力^{ミステック・パワー}』 反応を二つ、マンシオン敷地直前に感知…今、侵入を確認しました。

エネルギー総量と魔力^{エネルギー・パス}路^{エネルギー・パス}パターンからの予測…魔術師^{マスダ}とサーヴァントである可能性

が極めて濃厚です。

対象、更に接近：マンション内部への侵入を試みていると推察されます。』
速やかなインフォメーションがマンション内部スピーカーより流される。

やはり、そうか。

サーヴァントは「霊体化」していたのだろうが、魔女が設定した領域内部に於いては、暗殺者のサーヴァントでもない限り隠匿など意味を成さないのだ。

ましてや、現在の冬木市は全域に於いて、私が監修したキャスターさんの最新テクノロジーで防備されている。

逃しはしない。

「ライダー陣営に続いて、陣地破りを慣行してくる陣営が現れたか……」
「ですね。」

接近がバレても撤退しないトコロを考えると、本気で獲りに来ているのかもしれない。
ん。

F. R. I. D. A. Yさん、ガリアスタ氏とキャスターさんには？」

『お伝えしました。』

スターク様、ガリアスタ様、両名共に「最終調整」を終了し、迎撃体制に移行しておられます。

サジヨウ様、フォルヴェツジ様の両名は、速やかに管制室に移動してください。』

流石、仕事が早い。

そして、私の術式とF. R. I. D. A. Yさんとのリンク運用は完璧に機能していると再確認できた。

ならば、彼女の言葉通り迅速に行動する。

「F. R. I. D. A. Yさん、食器の片付けは後回しにさせて下さい。
では行きましょう、カウレス君。」

私は、ティーカップをテーブルに置いて立ち上がった。

追従して、彼もそれに倣う。

「サーヴァント戦が始まるのか…。」

「あの子」が体験したという、英雄の影…その決闘…！」

彼の拳は、強く握られ僅かに震えていた。

「怖いですか？」

分かりきった、当然のコト。

なぜなら、私だって怖い。

それでも最後の確認のつもりで、私は問う。

「…そりゃあね。」

でも、ここまで来たんだ。

目的もある……躊躇はしない！」

彼がその言葉を言い終わると同時に、私たちは行動を開始した。

今宵再び、英雄達の死闘が始まる……！

……

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション前

ガーデン・スペース

「まさか、サーヴァントの霊体化まで看破しちまう魔術師が現代に存在するとはな。

ま、相手方が魔術師の英霊を従えている可能性もあるが。

ともあれ一見して変化はなくとも、この押し潰さんばかりの空気理解る。あちらさん、完全に臨戦態勢って風情だぜ。」

虚空より、蒼衣に身を包んだ「彼」が姿を表す。

霊体化して隠れる行為の無意味さを悟った故であろう。

しかし、それでも彼は赤い眼を瞬かせて笑う。

風に、衣服と同色にして一つに結った青髪を揺らしながら。

その飄々とした様に、私は思わずため息をついた。

「…だから言ったでしょう。」

貴方の持つ「術」を用い、隠匿性を引き上げておくべきだと。」

彼の實力は本物だ。

戦いを見る前からすでに、先に出会った裁定者の英霊にも何ら引けを取らないと確信できる。

しかし…子供心に憧れ続けた大英雄が、こんなにも軽薄な男であったとは。

「そう言うなって。」

俺の願いは知ってんだろ？

教えてくれた「師匠」にや悪いが、「文字」に頼りきってちや、そいつア叶わねえからな。」

弛緩したような、ヘラリとした笑顔。

美男子であるコトは認めるが、その行為の一つ一つが私に籠った戦意を削ぐような気がして不快だった。

…再び、漏れ出そうになる溜め息を堪える。

代わりに返事を含めた、少し不機嫌な咳払いを一つ。

それを受けて、やはり彼は笑う。

しかし…

「心配しなさんな。

今言った理由も冗談じゃあねエが、早々から文字に頼らねエコトにもワケはある。

それに…」

その笑顔は、初めて見せたものだった。

獯猛な、まるで射殺す様な英雄の視線。

彼の逸話を物語る上で欠かせない、“朱き槍”を虚空より出現させ振るい構える様は、まさしく豪傑のそれであると言えた。

「そらッー」

そのまま、流れるような投擲。

朱き槍は、まるで光レーザービーム線の様に線を描き、敵地たるビルディングに向けて飛び込んだ。

しかしそれは、大きな衝撃音と共に弾かれる。

光の壁が、槍を阻んだのだ。

「えらく頑丈な護りだ。

今は使えねえ俺の“城”や、文字を全て用いた結界と同等の硬度はあるだろう。」
弾かれ帰ってきた槍をキャッチし、それでも楽しそうに笑う彼。

「…宝具ですか。」

「だろうな。」

あの壁がどういった類いの代物なのか：そいつは今のところ皆目理解らねエが。

何れにせよ、力を温存して忍び寄った状態で突破できる様な、安い代物じゃあ無えだ
ろうよ。

なあおい、そうなんだろう？

もう一人の、“時計塔からの刺客”さんよ。」

彼の言葉は、返されるコトなく夜闇に消える。

「返事はナシ、か。」

つれないねえ。

間違いなく視てはいやがるだろうから、こっちの出方を伺ってるんだだろうな。」

「魔術師が、己の工房に籠っているのです。」

当然の常套手段でしょう。」

「そりやそうだ。」

魔術師じゃなくなつて、自分の城からノロクサ出て来て、わざわざ的になる様なアホな真似はせんだろうぜ。

ただ……」

突如、ビルディング壁面より、複数の「何か」が射出された。

それは、掌サイズの発光体。

鈍く輝く銀色の、その中央が一際輝く無数の円盤。

数十個はあるだろうか。

それらが、何らかの方法でエネルギーを噴出し、空中に浮遊し我々を取り囲んでいた。

「まあ、手出しして来ねエって甘い話は無えだろうな。」

よう、マスター。

本当に、さつき話した通りで構わねえんだな？」

朱槍を軽やかに振り回し、謎の円盤を見回して彼は問う。

寧猛な笑顔は、その野生を解き放たんと震えているようにすら見えた。

「当然です。」

今回の聖杯戦争に於いて、間違ひなく最大の強敵となるであろう魔術師は、この工房

の主：アトラム・ガリアスタですから。

ましてや調査の結果だけを見ても、その従えるサーヴァントはキャスタークラスに類する、高い戦略性を誇る英霊。

この組み合わせを相手取るならば、長い時を与える選択肢は有り得ない。」
ただでさえ、1ヶ月という長大な猶予を与えてしまっていたのだ。

これ以上、野放しにして強化されるのを見逃すコトなど、絶対にするべきではなかった。

私は、両手に嵌めた手袋グラブの履き心地を確かめるように、掌を開き、握った。

その甲に、刻んだ文字が光り浮かび上がる。

“硬化”、“強化”、“加速”、“相乗”……いち早く、打ちのめすための術式の励起。
円盤が行動を開始するより早く、私達は動き出した。

「ハ、良いねえ、上等！」

思い切りの良い戦士は好きだぜ！」

目指すは、迅速なる拠点の制圧。

いつも通りだ。

素早く喉元に食らい付き、破る。

相手の領域内部であろうと、問題はない。

対策の時間など与えない。

私の保菌する伝承は、寧ろソレでこそ確実性を發揮するのだから。
「相手の護りなど、関係は無い。」

「ランサー！」

見せてみなさい、貴方の力を！」

私の言葉に、彼の野生がっいに解き放たれた。

それと同時に、円盤達が飛来する。

その外周から、流動する銀の液体を噴出し始めた。

それらは、弾丸となり我がサーヴアント……ランサーに迫る。

「応よー！」

巣穴で縮こまつてるガリアスタとやら！

こんなおつかなびつくりの迎撃じゃ、我らを阻むには全く足らんぜ！」

弾丸を、槍の一振りですべて撃墜するランサー。

それらは全て、表社会で言う誘導弾ミサイルの如く爆発する。

しかし、そんなものも意にも介さない。

ランサーは、爆炎を振り切つて宙高く跳び上がった。

「最初ハナっからクライマックスつてヤツだ！」

「呪いの朱槍”よ、牙を剥け！」

視認できるほどの朱い魔力の奔流が、槍を中心に渦巻く。

そのエネルギーに、円盤達の放つ弾幕は全て衝突前に爆散する。

戦場の空気とさえ呼べるソレを、槍は魔力ごと巻き込んで取り込むようにさえ見える。

その朱は、獲物を求めて凶々しく煌めいていた。

そして、それが臨界点へと達した刹那……

「突き穿つ死翔の槍!!」

∴冬木市・新都の一角を、拡がり覆うような閃光が包んだ。

Episode 18 : 魔術師 (キャスター) VS 槍兵 (ランサー)

2004年 1月 下旬 夕刻

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション

トライアル・スペース

「さて……こんなトコロか。

どうかな、マスター。

最終調整の具合は？」

僕は、宝具の一部であるmk-85アーマーを解除しながら問いかけた。

視線は、先日組み上げた一つのアーマーに向けている。

ヴィジョン・アーマーと同じく、こちらの世界で新たに創った新型機。

「ああ、良いな。

ボクの魔術とも食い違わない、純粋な強化が見込める仕様だ。

“大層な名称”に負けず劣らずの、見事な性能と言えるだろう。”

僕に倣いアーマーの装甲が“解除”された、その中では我がマスターたるアトラム・ガリアスタが満足げに笑っていた。

実現したナノ・テクによる恩恵を受けた新型機は、彼の右腕に“令呪”の上から装着されたグラフ型のリアクターに収まる。

このアーマーのコンセプト自体は、実は生前：ソコヴィアでの一件以前に、mk—44”シリーズの一環として考案してあったモノだ。

しかして活躍の機会を訪れなかったソレを、この度再設計した。

原始呪術と原始電池：二つの魔術構造と密にリンクした機能を有するソレの扱いを、我がマスターは瞬く間に習得したのである。

これほど飲み込みが早い人物は、鉄身アイアン・バトリオットの愛国者たる我が親友以来と言えるだろう。蜘蛛の坊やだって、最初はずいぶん苦勞した様だし。

流星は、戦争に特化した魔術師を自他共に認める男：といった所か。
「ついに、聖杯戦争開幕は目前に差し迫った。

我らの準備も、現状に於いては完璧と言って差し支えないモノとなっただろう。

あとは、蓋を開けるまで戦火の脅威など想像するしか無いが…。

少なくとも、我々は二騎の大なる怪物を目撃している。

想像に、押し潰されてしまいかねないほどの存在をな。」

マスターは、己が右手に装備されたリアクターを眺めつつ呟く。

「おや、我がマスターは大変な自信家であると認識していたのだがね。

不安なのかい？」

僕の軽口気味の問いに、マスターは顔をしかめて睨み付けてきた。

「自信はあるとも。」

しかし、それを理由に安堵して油断するなど愚の骨頂だろうが。

絶対の自信と、脅威を脅威と正しく認識する危機管理リスクヘッジの感覚が相反するコトは無い。」

マスターは僕に歩み寄り、眼前に立つて諭すように語る。

「戦に臨むならば、己が内に在る恐怖を見失ってはならないだろう。」

恐怖こそが、極限状況に於いて「命の在処」を明確にするのだ。

それを、我ら中東魔術師は決して忘れはしない。

根元の探求とやりに囚われ「學術の本質」を見失った、西洋の魔術師連中とは違つてな。」

言いながら、彼は僕の胸元を指差した。

それは、胸に嵌められたリアクター…その奥を示しているのだと感ぜられる。

「故にこそ、ボクはお前の技術力に賭けた。」

サーヴァント
お前達の霊基解析や、そこへメスを入れる技術開発にも高い資金を費やしたんだ。

全ては、十全なる戦を行うため。

それを忘れるな。」

…やや、肩の力が入りすぎているようにも見受けられる。

彼が先ほど発した言葉通り、二騎の偉大なサーヴァントとの戦いを経た結果だろうが

…まあ、気を抜くよりはずっと良い。

根本の原動力はさておき、戦いに対する姿勢に好感が持てるのも事実だ。

ならば…

「了解だ、マスター。

常にベストパフォーマンスを目指す、その言葉に二言は無いさ。

再び神話の如き英傑に相對そうとも、今度も僕のテクノロジーで撃退するコトを約束

して…」

不意に、ブザーが鳴る。

ライダー陣営が襲来した時と同様の、けたたましい警告音。

『マンシオン敷地に接近する、高濃度の魔力反応を感知しました。』

魔術回路。パターンを検出・照合：ライダー陣営とは異なりますが、極めて高い確率で英^{サレフアクト}霊を伴った魔術師であると推察されます。』

続けざまに、F. R. I. D. A. Yの報告。

「…ふん。」

今まさに、撃退する術を証明する機会^{チャンス}が訪れたらしいな。』

「みたいだな…しかし、本当に今は開戦前なのか？」

どいつもこいつもお構いなしに、問答無用で喧嘩をフツかけて来る。

この聖杯戦争^{ゲーム}って競技には、マトモなルールもマナーもあつたもんじやない。」

『確かに、先方は些か礼儀^{マナー}を失っていらつしやるのかも知れません。』

敷地内への侵入を確認しました。』

感知から、瞬く間の進撃に舌を巻く。

「やれやれだ。」

まあ、こちらの領域に乗り込んでくれたコト自体には感謝するがね。」

「逆を言えば、それだけの自信があるとも言える。」

何処の陣営かは知らないが、魔術師が魔術師の領域に対して正面突破を試みるなど：間桐の少年のように、速やかに逃亡する算段が立っているのか、余程の武闘派魔術師がマスターなのか。」

「いずれのパターンにせよ、^{プラン}戦術は既に組上がっている。

特に、後者なんかの想定は最も君の懸念していた内容だ。

ならば、僕らのやるべきコトは変わらない。

だろ？」

「それは、勿論その通りだ。」

僕らは、即座に行動を開始しながら言葉を投げ合った。

マスターの言った通り、余裕と警戒心を同時に発揮しなければね。

それはマスターのスタンスでもあるし、当然僕の歩んだ人生のカタチでもある。

そういう点こそ、やはり僕らは似ている。

「F. R. I. D. A. Y、スタッフや若人達への伝達は？」

『サジヨウ様、フォルヴェッジ様への伝達は既に完了し、両名とも管制室に向かっています。』

各スタッフについても、持ち場にて待機済みです。』

「OK。」

では、始めよう。

F・R・I・D・A・Y、僕らのアーマーに、襲撃者の映像を送って寄越してくれ。」
『了解しました。』

さて：：自分の靈基からだに、力を籠めるイメージ。

漲らせ、発散させる。

思考をクリアにし、素早く末端まで伝達：それだけで、僕の持つ全ての手段ツールにアクセス可能であった。

F・R・I・D・A・Yに向けた口頭での命令コードは、サーヴァントとして自己を運用する上で必要な事柄ではあるものの、その本質はやはりメカニズムなのだ。

英霊としての僕トニー・スタークは、つまるところ一つの巨大な機構システムに於ける中枢と捉えて差し支えない。

襲い来る脅威に向けて反撃アウエンジを行う、アイアンマンという名の防衛機構セキュリティ・システムを支配する核コアなのである。

ならば、現状に於いても成すべきコトは決まっていた。

「三度めのサーヴァント戦だ。

気を抜かず、それでもやっぱり楽に行こうか。」

.....

2004年 1月 下旬 夜

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション
エントランス・ホール

「さて、門は遠慮なくブチ抜いた。

あとは……いや、当然そう簡単にやいかねエわな。」

宝具によって力任せに防壁を破壊したランサーは、朱槍を振るいつつ戦塵から躍り出て呟いた。

「成る程。

巧みに隠されていますね。」

続いて侵入した私も、即座にそれに気付く。

この魔術工房は、巨大なビルディングを埋め尽くさんばかりの濃厚な“匂い”で充満していた。

これでは、“文字”による探索をスムーズに行うコトは難しいだろう。

「ああ、臭くてハナが曲がりそうだけ。

痛覚以外の、全感覚を刺すように刺激してきやがる。

ここまで根性のひねくれた結界術を扱う魔術師が、この時代に居やがるとは。

神秘が薄れた云々ってハナシは、案外眉唾かもしれないねエな…ツと！」

ランサーは、へらりと呆れた様に笑いながら槍を振り回した。

追撃してくる円盤たちの攻撃を、難無く迎撃している。

大層な評価を語っているが、彼自信は保有する『対魔力』スキルによって、その術を歯牙にもかけない様子だった。

私自身も“文字”の行使によって、その匂いを全て抵抗^{レジスト}しているため影響を受けていない。

しかし、厄介なコトには変わりが無かった。

正体こそ不明だが、この感覚は黒魔術やそれに類する呪術による攪乱に似る。

アトラム・ガリアスタが呪術に近い中東の原始的な魔術を操る術師であるという情報こそ掴んでいるが、しかしかなり直接的な戦術による篡奪を行うというイメージの方

が強い。

ここまで感覚系に干渉を行う、幻惑タイプの術師であるとは思わなかった。

：いや、それに類する魔術師を抱え込んでいる可能性こそ高いだろう。

これは戦争だ。

強烈な“個”たるサーヴァントを従える魔術師のツーマンセルが基本という考えは捨て去るべきである。

特に、かのアトラム・ガリアスタが相手であるならば。

『いやあ、我らが主たる“救世主”^{メサイア}と、ほぼ同年代の英雄である貴方をしてその評価とい

うのは、あまりに過大じゃないかな？

ランサー： “クー・フリーン”。

アイルランドの光の御子よ。』

エントランス・ホールに、声が響く。

男の声だ。

「ハッ、こちとら初っパナから宝具を切ったんだ。

真名なまえを知られるコトなんざ想定済みではあるがな。

しかし、巢穴に潜ったまんま高みの見物を決め込む臆病者に、気安く語られる謂れは無エゼ。

サーヴァントか、その主か：どちらかは知らんが、言葉を交わすならば出てきてツラを見せな。」

ハナで笑い、吼えるように応えるランサー。

：そう、これは想定内の出来事。

長期戦に持ち込まず、この襲撃によってガリアスタ陣営を最速で叩く。

それは聖杯戦争に勝利する上での必須事項であり、そうであるならば工房に籠り機を伺い始めた今を叩く他無かった。

そのためには、とっておきの切り札さえ容赦なく振るう。

企みを積ませる前に、斬り穿ってしまえば問題は無いのだ。

私は、何時だってそうしてきた。

それが、私に出来るコト。

存在の証明。

『成る程…だ、そうだよマスター。』

どうする？

サーヴァント

かの大英雄は顔を知らなきや会話もおぼつかないと仰るが、マスター君と彼女マスターは違うだろう。同じ魔術師、同じ組織からの出向組同士。

何かコメントはあるかい？』

その言葉のあと、円盤達が動いた。

攻撃的に、ではない。

弾丸を放ったその円周から、いくつもの光を虚空に向けて発射したのだ。

それらは交差し、一つの像を作り出す。

「魔術…の、気配は感じられねえ。

聖杯からの現代知識にも無えぞ…なんだこりや？」

思わず言葉を漏らすランサーと、全くの同意を胸中に抱くしかなかった。

全くの、未知の現象。

魔力を発する円盤から放たれる、魔術ならざる超常現象。

なんだ…これは？

『ああ、気にしないでくれたまえ。

偉大なる「クランの猛犬」よ。

これは通常、旧きモノでは理解の及ばぬ類いの現象さ。

無知は罪ではない。

これからそれを知らぬまま君達が滅び行くという事実も、当然に起こるべき現象に過ぎないのだからね。』

尊大なる挑発の言葉を背後に出現した男こそは、我らの対戦相手であった。

アトラム・ガリアスタ。

私と同様、時計塔より派遣されたマスター。

刹那、その像に向かつて朱槍が投げ込まれた。

しかし、槍は何の抵抗も受けず貫通し、向こうの壁に突き刺さる。

「…理解つちやいたが、やはり使い魔でもなければ魔力により生じる幻影ですらねえ。

ただ光が其所に在りながら、加減によって像を形成している。

妙な術を使いやがるな。」

美しい軌道を描き手元に戻る槍を掴みながら、舌打ち混じりにランサーは言った。

『…状況理解と先制攻撃を両立する、瞬速の一撃。

流石の判断力だ。

尊敬に値するよ、ランサーのサーヴァント。』

微笑みながら良い放つアトラムに、ランサーもニタリと笑って応えた。

「何、我が名に礼を持って臨む戦士おとしが相手だ。

これから殺す相手だとして：いや、だからこそ真摯なる戦で応えるのは当然のハナシだろうがよ。」

ランサーの笑みには、満足げな色が覗いて見える。

初戦の相手としては、アトラム・ガリアスタという存在はそれなりにお気に召したらしい。

分らないでもない。

魔術師としては、彼は稀少な程に「戦い競う」という行為そのものを重んじる存在であると言える。

『フム、良いサーヴァントを引き当てた様だな。』

まあ：貴女の出自を考えるならば、当然に選択肢に上がる英霊ではあったのだろうが。

順当とも言えるが、その選択に透ける自信に見合う大英雄こそが彼だ。

そうだろうか？

封印指定執行者：バゼット・フラガ・マクレミッツ。』

愉しそうな笑顔を崩さぬまま、像の視線は此方に向いた。

値踏みするような、厭^{イヤ}な目付き。

その貫禄は、彼の家が誇る魔術的歴史からは想像もつかぬほど老成しており、重圧が

あった。

戦の絶えぬ中東国家に於いて、永きに渡って篡奪を繰り返し、力を蓄えた戦士の一族。その集大成…寵児こそが、彼。

「…当然のハナシですね。

私が貴方を識るならば、貴方も私という魔術師を認識している。」
『無論だ。』

互いに時計塔によって選出された“戦闘特化”の術者。

事前情報を最も伺いやすく、そして最も警戒すべきが互い同士だった。』

「だから、自陣にて私を降すコトなど容易いとも?」

『そうは思わない。』

しかし、自信はあると言わせて頂こう。

それだけの、相応の準備はさせてもらった…というハナシだよ。

『ゴッズホルダー
“伝承保菌者”』

その言葉と共に像は消え去り、周囲の様相は一変した。

像を映していた円盤全てが、再び何かを形作る。

先程までは弾丸が如く射出されていた流体金属は、途切れるコト無く人形を形成していった。

胸に輝く円盤を核とした、鈍い光沢を纏いし軍勢。

『さあ、先ずは^{レギオン}兵団が相手だ。

一騎当千の魔術師と槍兵。

その奮迅なる戦を我々に、篤^{トク}と魅せてくれるコトを期待するよ。』

『アー、そういう訳だ。

僕の方のイケメンフェイスを披露出来なかったのは申し訳ないが、まあ仕方ないよな。

じゃ、せいぜい頑張つて良いデータを取らせてくれたまえ、礼儀知らずな侵入者諸君。

あつと…癖の悪いワンちゃん^{リイド}の手綱は、くれぐれも手離さず上がって来てくれよ、

クールなお嬢さん！

BOWWOW^ン！』

軽妙で好き勝手なその文句を最後に彼らの言葉は途切れ、同時に数多の^{レギオン}鉄人が攻撃を開始した。

「野郎オ…！」

主は兎も角、サーヴァントは陰湿なクソヤローだなッ！

結局は高みの見物決め込むつもりの様だがよオ…っ！」

両の掌から光を振り撒き、飛翔し襲い来る軍勢に応戦しつつ、ランサーが呻いた。明らかなるクランの猛犬への挑発に、こめかみには青筋が浮かんでいる。

「問題ありません。」

彼ら是我らの実力を測るつもりなのでしょうが…それはこちらも同じコト。」

飛び交う兵隊に拳を叩き込む。

鉄身は碎ける。

我が一撃は通用する。

ならば…

「軍勢を打ち負かし、拠点を破壊し、程度を探りつつ彼等を引きずり出します。

多勢を叩きのめすのは、貴方の十八番でしょう？」

私の言葉に、ランサーは嬉々として叫んだ。

槍の一振りには、先程までよりも更に力が漲っているように見えた。

「応よ、良く言った！」

遅れるなよ、マスター！

敵方の主も、それに隠れる臆病者のクソサーヴァントも！

纏めて我が朱槍が貫いてくれるぜ！」

「大言壮語は好みませんが、貴方の場合はそれでこそだと受け止めましょう。
行きますよ、ランサー！」

彼の語気が孕む勢いのまま、我々は鉄身の軍勢が犇めくビルディングへと飛び込んで
行った。

Episode 19 : ガリアスタ・マンション

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション
管制室

俺達は、速やかに管制室へと移動した。

何故って、サーヴァントや武闘派魔術師の戦いに直接介入するコトが、己の役割ではないという事実を理解しているからだ。

この工房に詰める人間のすべての、当然の共通認識である。

総員では十人にも満たない精鋭が、己の仕事を真つ当に熟す^{こな}。

キャスターの召喚当初と比べると、大分人員の数も減ったそうさ。

：しかしそれでもガリアスタ陣営は、その総力によって「神殿」に手が届くか否か、という？ レベルの驚異的な陣地を形成していた。

これは恐るべき事実である。

神殿とは即ち、文字通りの神域。

侵されざる場、結界の最高峰。

それに迫る守護陣を、近代の英霊と人間数名が築いていたのだから。

「よう、現代魔術ツ子^{エルメロイ・キツズ}。」

無事に辿り着けた様だな。」

管制室で俺達を出迎えたのは、一人の大男だった。

遊牧民風の衣装に身を包んだ、ガリアスタ氏と同じ中近東人種^{アラブ}の髭男。

氏が擁する精鋭術士、その一人である。

「一括りに呼ぶのは止めてくれて言っただろう、フリーユーカー。」

「それを言うなら、俺のコトも『フリーユ』と呼んでくれて言っただ筈だぜ、フォル

ヴェツジの坊や。

本名の響きは、どうにも気に入らねえんだ。」

フリーユーカーの隣に、俺とサジョウは並び立つ。

目の前の巨大なモニターには、工房内のあらゆる状況が映し出されていた。

「状況は、どうなってますか？」

「どうもこうも……一目瞭然だぜ。」

見な、しつちやかめつちやかのハリウッド・ムービーみてえな様相だ。

これが神秘による作業じゃ無えってんだから、サーヴァントが齎す叡知ってやつはおつかねエ。」

肩を竦めてモニターを見つめるフリーユージャーに、俺達は做った。

ナノ・テクの採用によって瞬時に実体化する無数のアイアンマン・アーマーが、二人の侵入者に襲い掛かっていた。

以前に見せてもらった、ギルガメッシュ戦の録画映像と比べるとアーマー軍団は比較すべくもなく強化されている。

撃墜もそうそうされないが、しかし侵入者は中々どうして強かった。

サーヴァントの美しい槍術もさることながら、マスターの拳ボクシング・スタイル闘術を研ぎ澄ました魔術闘法も凄まじい。

あのマスターが相手では、俺やサジヨウは勿論…

「獣性魔術」を操る級友でさえ、恐らく敵うまいと感じさせられた。

「…凄、い。」

サジヨウが、目を見開いたまま陶然と眩く。

見惚れる気持ちも解るといふものだ。

何せ、あんなものは既に人間の動きじゃない。

何気なく繰り出される拳打の全てが、文字通り目にも止まらないのだ。

それでいて勢いに振り回されず、無駄な拳動が一切無い。

アイアンマン・アーマーは、その全てがサーヴアクトとの戦闘を想定して作成されている。

キャスターの設計したあらゆるアーマーが持つ機能を再現可能な、流体する機動兵器。

縦横無尽に飛び回り、ミサイル、ビーム、レーザーメス：数えきれない兵装を使いこなして戦う姿は、まさしく映画の中のロボットアーマーそのものだ。

恐らくだが：あれ一機で、我らが師の義妹君であるライネス・エルメロイ・アーチゾルテが所有する『水銀』の魔術礼装に匹敵する性能だろう。

：あれは、天才と名高い先代のロード・エルメロイが残した特級の礼装だったと聞いている。

それに比肩する代物が、無機質に量産される武器として存在するのだ。頼もしいが：やはり、恐ろしい話ではある。

だのに、あのマスターはそれと互角以上に渡り合っていたのだ。

何なら、既に何機か撃墜してしまっていた。

拳ひとつで、だ。

魔術によって強化された四肢は、常に殺意を秘めながら躍る。

ナノ・マシンによる修繕が絶えず行われるアーマアの、その速度を上回る鋭い破壊。魔術による身体強化と、従える英霊とのチームワークの賜物であろうが、彼女の体には殆どダメージらしいダメージが見受けられない。

神話に謳われる槍兵と並び立ち、たった二人で戦線を押し上げる姿は…恐ろしくも、寒気がする程に美しいと言えた。

「ああ、敵さん側のマスターか？

参るよなア。

流石は封印指定執行者っつーか何っつーか。

あんな化けモンと殺り合うんざ、いくら金を積まれたって割に合わんぜ。

おたくらのお守りに回されて、心底ホツとしてるよ。」

フリーユガーは、へらりと笑った。

戦況には見合わない、脱力した雰囲気を持つのがこの男である。

「私のウィッチ・クラフトと、貴方の占星術による『絶対安地』の設定。

これを、カウレス君の電流強化で補助しつつ管制室にてキャスター陣営をアシストする。

これがあつて初めて、この管制室は十全以上に機能する。

重要な仕事です。

お守りだって、楽な仕事ではないと自覚していただかないと困りますよ。」
緊張しているのか、厳しく言葉尻を指摘するサジヨウ。

「モチロン承知してるさ。」

他のエリアを担当している連中だって、そいつは同じ。

いくら雇われの傭兵とはいえ、ガリアスター族にや世話になつてるからな。
得意先がツブされないう、せいぜい精一杯やらせてもらう。

俺はアストロロジャ占星術師だ。

星を読み違えたりはせんよ。」

表情は変わらず、しかしフリーガーの瞳に鋭い光が見てとれる。

「だが、肩の力は常に抜いておかにやベストな働きは出来んモンだぜ？」

弛緩した雰囲気に見えるが、しかし気は抜いていない。

数多の戦場を渡り歩いた、歴戦なる「魔術使い」の傭兵。

それがこの男なのだ実感した。

笑うフリーガーを一瞥したあと、サジヨウは溜め息混じりにモニターに視線を戻した。

「F・R・I・D・A・Yさん、作戦の準備は整っていますか？」

『はい。』

戦力消費量も想定内の範囲内、問題はありません。

即座に実行に移せます。』

F・R・I・D・A・Yの肯定を聞いたあと、サジヨウは目を瞑って深呼吸した。

俺に恐怖心を確認した彼女だが、やはり自分も同じく心落ち着かない状態ではあつたのだろう。

それを振り切る様に、俺に視線を向ける。

「ここからは、私も魔術操作に専念します。

補助は頼みますよ、カウレス君。」

ゆつくりとした確認を、俺は頷いて肯定した。

「任せろ。」

全員が全員、役割を全うする。

ガリアスタ陣営が整つての初戦だ。

やれることを確実にやろう。」

そうだ…やるべきことを、やる。

俺はやれるってコトを、証明するんだ。

フォルヴェツジ家の当主として…姉さんの“スペア”扱いだつた自分を脱却する為

にも。

結果を残す。

これは、その為の一步……!

俺の言葉に、サジヨウはしっかり頷いて答えた。

「では……侵入魔術師への対応を開始します。」

.....

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション
非常階段 下層部〜中層部

私達は、順当に階段を見つけ出し上層へと駆け上がる。

あからさまに罠でも仕掛けられていそうな屈折階段通路。

しかし、密閉空間である上に運用機構を相手方に握られている昇降機を利用するよりは、確実性のあるルート。

他に滞り無く歩みを進める手段が見つからない以上、敢えて此処を進むコトが正しい選択であると感じられた。

門を破壊した時と同様、ランサーの宝具で手当たり次第に破壊し、相手を炙り出すコトも可能ではある。

が、その横着は消費魔力に見合った成果を生み出すとは思えない。

私もランサーも、共に継戦能力に特化している。

私は魔力効率の良い“強化魔術”と“ルーン魔術”を操り、ランサーは高ランクの“戦闘続行”スキルを有している。

シラミでも潰すような要領で、このガリアスタの巣穴を蹂躞する作業には適していると言えた。

そういう自負こそがあるが、しかし：

「…気に入らねエな。」

ランサーは、狭い空間であっても構わず襲いかかる鎧の軍勢を打ち払いながら呟く。軍勢は確かに強力だが、此方の攻撃で問題無く魔力反応を停止させるコトが可能だっ

た。

槍の一突き、拳の一打で確実に破壊できる。

得体は知れないが、それならば対処は容易かった。

「此処までの進撃が、上手く進み過ぎていいる事実が…ですか？」

領き、ランサーは駆け上がった階下を一瞥する。

撃破した鎧の残骸が転がり、山積している。

それらの胸元の円盤は、機能を停止したコトを告げる様に光を失っていた。

「確かに、俺達は並み居る使い魔を撃退して進んじやいるがな。

兵力にせよ、魔術による罠にせよ…どれもそれなりだ。

奴ら、本気で俺らを殺りに来てんのか？」

…それは我らの総合戦力の高さ故の感覚なのだ、誇り一蹴してしまうことも出来る。

実際、此処までの道のりをこうも速やかに進むコトが可能な存在などは限られるだろう。

高度な幻惑術をレジストしつつ、無数に湧く屈強な鎧の使い魔に足を止められず進まねばならないのだから。

しかし…それでもだ。

「ガリアスタは兎も角、相手方のサーヴァントが見せた力の片鱗を考慮するに…
「確かに彼らの防戦は、些か……」

『真つ当すぎる。』

『そうだろうか？』

声が響くや否や、先行するランサーが踊り場に足を掛けるや否や…

状況が、一変した。

足場が変動する。

ランサーの足元がせり上がり、私の足元は高度を下げる。

その行程には、少しの予兆も感じられなかった。

魔力反応も、些かの鳴動すらも我々に感知させず、一瞬で巻き起こる現象。

正体は不明だが、目的は明らかだ。

我々を、分断する策略…！

「野郎…っ！」

ランサーが動く。

素早く踵を返し、私に向かって手を伸ばす。

私もそれを掴もうと動くが…

「ぐっ…!?」

何かが、私の体に纏わり付いた。

腕に、脚に、胴体に。

それによつて動きを制限され、伸ばした届かず手は空を切る。

「バゼットオー！」

苦虫を噛み潰した様な表情で私を見つめるランサー。

彼の状況を見て、私は自分に起こった事態も察するコトが出来た。

ランサーの体に、足元に転がっていた無数の残骸が絡み付いていた。

消えた筈の円盤の光は再び点り、しかし魔力は感じられない。

正体不明の力によつて再起動したそれらが、砕けた筈の四肢を再生させて我らを阻ん

でいたのだ。

「ランサー！」

くっ…この力は……ッ！」

足場に押し上げられ、階上に消え行くサーヴァントを見届けることしか出来ない。

それを阻止できないほど、残骸による拘束は強かった。

「……………」

ランサーが姿を消したのと同時に、私の足元の階段は平坦な足場を形成した。長方形形状の、窓一つ無い閉鎖空間。

「これは…。」

…念話を試みるが、通じない。

どうやら、今の一瞬でこの空間は強力な魔術結界としても成立してしまっただけ。魔術師の工房という強大な領域の中に存在する、言わば二重結界として作用している。

打ち破るコトは、容易くはなからう。

『不躱な対応で申し訳ないね。』

バゼット・フラガ・マクレミッツ。

しかし、こうでもしなければ君とこうして一対一の構図は作り出せなかった。』
空間上部の壁面に、一つの穴が空いた。

拘束さえ無ければ一飛びに届く距離だが、今は見つめるより他に手段がない。

「…主従の分断に成功したというのに、どういふつもりですか？」

アトラム・ガリアスタ。」

穴は閉じ、そこから彼は降り立った。

先程の映像と寸分違わぬ、自信に満ちた中東の男。

「私が、このまま水攻めでも仕掛けてあっさりコトを終わらせるとでも思ったかい？」

まあ、他のマスターが相手ならばそれを考えたかもしれないが…。

貴女が相手と言うならば、そうもいかない。」

薄ら笑いを浮かべ、ガリアスタは自らが構築した空間を眺める。

「面白いだろう？」

魔術を使わずとも、こういう芸当が出来てしまうのさ。

君達が景気よく破壊したと思ひ込んでいた、ナノ・マシンにかかればね。

そしてそれは、奇跡など神秘の手の内にしか存在しないと頑迷に信じ込んだモノ達ほ

ど、容易く欺くコトが出来る。」

言いながら壁を軽く叩き、足元を爪先で鳴らす。

その音は、鈍い金属の反響音であった。

「……。」

「気付かなかつただろう？」

踏みしめた感触は、通常の床材と大差無かつた筈だ。

鉱石なんかの扱いには、それなりに明るいのでね。

こういう細工などは得手中の得手なのさ、私は。」

この屈折階段通路そのものが、鎧の軍勢と同じ材質で構成された罫だった。そういう話なのだろう。

此処に足を踏み入れた時点で、我々はそれに掛かっていた。

「マンション内部に仕掛けた、どのトラップに掛かってくれたのでも構わなかったのだがね。

中でもコレは、お誂え向きだ。

よくぞ選びとってくれたと感謝しよう。」

そう言い、ガリアスタは右腕を上げる。

その手には、鉄の軍勢の光に似て輝く手甲が見てとれた。

感じ取れる魔力の質から考慮しても、それは戦闘用の魔術礼装である。

「…私との、魔術決闘がお望みだとも?」

私の言葉に、ガリアスタは薄笑のままスナツプで応じる。

パキン! という音の後、私を拘束する鎧たちは溶けるように消滅した。

「まあ、此方としても様々な思惑はある。

封印指定執行者を、手ずから打ち倒したとなれば箔も付く。

ましてや、神話の時代より連綿と続く伝承保菌者の魔術師相手ともなれば、尚更だ。」

そのまま、スナツプしたガリアスタの掌は握られる。

魔力の奔流が感じられる。

「それに……この聖杯戦争を勝ち抜くに当たっては、君ぐらいが丁度良いのさ。」

我が魔術兵器の実験台には、ね。」

奔流は、激しい稲光を帯びた。

『ガッシューアウト
猛れ』』

雷光が爆発し、集束する。

『さて……軍勢による拘束が解けて直ぐ様、此方へ攻撃を仕掛けなかったのは、私を侮ってくれていた為……かな？』

だとしたら、善意による忠告だ。

その認識は改めた方が良い。』

光が止んだ其処には、鉄身の巨人が立っていた。

鮮烈な赤と金色の、趣味の悪い色使いの巨躯。

私たちが打ち倒した……と、思っていた軍勢と共通した光の核を持つが、その意匠はいくらか異なる。

体格は二回りほど大きく、その頭部には日本のサムライを思わせる赤い角飾りのよう

なものが施されていた。

「……これは決闘なのでしょう？」

ならば、名乗りも上げずに即座に終わらせてしまうのは、無作法であろうと判断しました。

例え……相手が「魔術使い」じみた、伝統無き輩であったとしても。」

私の挑発に、ガリアスタが纏う巨人の眼光が閃く。

『ハ、良く言った……ッ！』

しかし、宣言した筈だがね……』

言葉の途中で、巨人の姿が消える。

バチン！という稲妻が弾ける音と共に、巨大な魔力の鼓動が私の傍らに出現した。

『これは、実験なのだよ。』

古くさい決闘だ、などとは一言だつて言つちやいない。』

「……ッ！」

迎撃は間に合わない。

即座にルーンを併用した防御を……

『些か遅いな、フラガの継承者！』

瞬間、拳撃。

ダンプカーにでも追突されたが如き衝撃が、私の左半身を襲った。

「ぐっ……!?」

咄嗟に庇った左腕ごと、胴を貫くダメージ。

たまらず吹き飛ぶが、そのまま壁に打ちつけられるコトだけは避けようと壁を蹴る。

『ほう、流石だ。』

並みの魔術師ならば、今の一撃で全身の骨がバラバラに碎けていただろうに。』

よろめきながらも、拳を放ったガリアスタを睨み反撃に転じようとしたが…顔を上げるより早く、再び閃光音が弾けた。

瞬間移動の様な、正真正銘の奇跡などでは勿論無いだろう。

電速だ。

文字通り稲妻が如き速度で、あの巨軀を駆動させ迫り来る。

しかし、させるか…!

硬化と探知のルーンを強く意識し、攻撃に合わせて拳によるガードを…!

激しい衝突音と共に、空間が鳴動したのを感じた。

眼前には、拳を突き合わせるアーマード・ガリアスタ。

『もう合わせたか…!』

凄まじいな…前言撤回だ、恐ろしく早い。

ならば……』

にらみ合うガリアスタの頭部装甲が、展開される。

鉄身の巨人の顔面全てが大きな一つの孔と成り、そこにはおぞましい程の電気魔力が蓄積されていた。

これは、不味い……っ！

離れようとするが、今度は突き合わせた拳が展開して腕を拘束する。

「……っ！」

『逃がさんさ、受けたまえ！

デストロイヤー

『破壊者』の焰をな！』

蓄積された魔力が、閃熱ビームとなって放射される……！

避けるには、拘束を解かねば……っ！

「ぐ……！」

ああああああああアツ！！！！

閃熱が、襲い来る。

ルーンの守りを貫いて、威力は私に確かに伝わっていた。

『ほう、この威力を耐えるか！

どこまで保つか見物だなッ！』

己の肌が、髪が焼ける匂いなど、久方ぶりに嗅いだ気がした。
嗚呼……しかし……

『……むー』

ガキン！という大きな金属音と共に、ビームが停止する。

奴は、己の腕をまじまじと見つめた。

そこには、変形した拳も私の姿も無い。

当然だ。

奴の拳は、私の足元に転がっている。

熱による痛みなら、耐えられる。

どうせ貫かれるならばと、ルーンによる強化魔力を拳に集約し、拘束を破壊した。

ルーンを除くと攻撃対策は素の身体強化だけだったので、かなりのダメージを負う結

果となってしまうが……問題はない。

この仕事をこなしていれば、珍しくもない程度の負傷だ。

『重ねて言うが、流石だな。』

だが、この段階でその体たらくでは先が思いやられると言わざるを得ん部分もある。』

……私が破壊した拳は、既に再生していた。

あれを、奴はあと何回行うコトが出来るのだろうか。

ましてや、直感がある。

あの鎧も、あの光線も、あの速さも。

奴にとっては切り札ではない。

なぜなら…私の中の伝承が、その切っ先を向けるに値すると判断していないからだ。つまり現状、奴は些かほども追い詰められていない状況なのである。

『ともあれ、実験を継続だ。』

まだ体は問題無く動くだろう？

伝承保菌者。』

ならば…そう仕向けてやらねばならない。

「…無論です。

当然、貴方の実験台などとして踊り続けるつもりも無い。」

奴に決定的な刃を突き付ける為の、状況へ。

『結構。』

では続けよう。

我がアーマー…』

言葉を続けながら、奴の鎧は稲光を纏った。

『mk—44T.re。』

『ソーパーバスター』の性能実験をね。』

Episode 20 : 鉄人兵団と呪いの朱槍

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 ガリアスタ・マンシヨン

中層・通路

—— 走る。走る。走る。

並み居る機人など、歯牙にもかけぬ。

目標を見定め、俺は敵の拠点内部をひた走っていた。

マスターと分断された。

隔たれた壁は、俺とマスターの念話を遮断する。

それはつまり、我らを繋ぐ魔力伝達すらも阻害しているコトを意味していた。現状、靈基維持に問題は無エが：しかしコレは、驚異的で脅威的な事実だ。

あの無機質な壁は、一種の結界として作用しているというコトになる。

物理的干渉以上の妨害機能を持つため、霊体による通り抜けすらも許容しない。

これはサーヴァント戦だ。

結界を通り抜けるのは不可能ではないが：自衛手段を持たず反撃が行えない霊体状態では、あまりに無謀かつ危険であると感じられた。

更に：この状況は切り札たる「令呪」の伝達すらも困難にするだろう。

門と同じく、槍で壁を穿つワケにもいかない。

マスターとの繋がりを断たれた状態で、靈基保持に支障を来す程の出力を込めた一撃を放つリスクは冒せない。

万が一壁向こうのマスターごと貫いてしまえば、目も当てられない結果を残すだろう。

ならば、走るしかなかった。

幸い、俺は戦うだけならさして魔力を消費しない。

さらに：本来は温存しておきたかった「ルーン魔術」を使用すれば、走る先の目的地は決定出来る。

探知のルーンで、この状況を作りやがったクソつたれの片割れ…ガリアスタのサーヴァントを見つけ出し、始末する。

そいつだけが、今の俺に出来る状況改善の一手だった。

「…参ったな。

随分と早いお着きだね、ランサー。

兵団による妨害も、マンションにしかけたトラップも、君を止めるには足りなかったらしい。」

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション

トライアル・スペース

其処は、広大で殺風景な空間だった。

白く、何も無い。

在るのは、怨敵の姿のみ。

姿を、初めて確認した。

中年の、髭面の男。

戦士とは思えぬ、凡庸な体躯。

当世風のスーツとやらを瀟洒しやうしゃに着込んだ、キザったらしい笑みを浮かべる男。

「——つと!!!」

俺は、返答も間髪も容れずに突撃した。

探知のルーンを纏った槍は、迷い無く目標する敵へと進む。

しかし、その軌道は強い衝撃によって反らされる。

『想定はしてたが、本当に遠慮がないな。』

手綱を離れた犬っコロというのは、得てしてそういうものなのかも知れないが。』

「…っ!!」

槍を反らしたのは、剣だった。

青白い光を放つ、赤い刀身の剣。

それは、奴の右腕を纏って展開されている。

右腕だけではない：その全身を、瞬く間に鎧が覆っていたのである。

俺が、マスターが、散々打ち倒してきた空っぽの兵隊。

それと似た意匠を持つ、赤金の鎧。

その胸に輝く光の核から迎撃と共に放たれた熱線を、俺はなんとか回避し距離をとる。

『なんと、怒りの中でも忘我するコトは無いらしいな。

今のタイミングのユニ・ビームを躲すなんて、恐ろしい反応速度だ。

こつちを探知して真つ直ぐ進んで来る以上、アーマーも纏わず油断を誘おう作戦は失敗に終わったらしい。』

ベラベラと、良く喋りやがる野郎だ。

その中でも、奴は迎撃の手を緩めなかった。

奴の両腕には巨大な砲が形成され、そこから強力な熱線が放たれる。

さらに、背面からは無数の噴進弾とやらが展開。

それらの速度と込められた魔力は、今まで打ち倒してきた雑兵の放ったモノとは比べ物にならない強力さを秘めていると感じられた。

安易に槍で打ち払おうものなら、相応の衝撃を受けるコトになる。肌で感じられる、威圧感。

間違いなく、あの鎧こそは奴の持つ宝具であると認識した。ならばと、俺は走った。

ミサイルは俺を追尾する。

熱線も、それに倣う。

それらをジグザグに回避し、熱線を利用してミサイルを焼き払う。そうして、空いた距離を確実に詰めていった。

俺には「矢避けの加護」がある。

熱線こそは脅威だが、ミサイルごときは対処に困りはしない。

『なるほど？』

どうやら、腕二本じゃ足りないな。

だったら…』

強力な魔力を感知する。

発生源は、四方八方。

目の端に、一瞬光が映る。

殺風景な部屋の壁が一部展開し、そこに空いた穴から強力な熱線が放たれたのだ。無数の光が、俺めがけて照射されていた。

奴もまた、その間を縫い飛び回りながら同様の攻撃を続ける。

なんて熱量だ、畜生め……！

近付くコトも叶わず、回避に専念するしか無エとは！

『いや、凄いな。』

うまく避けるもんだ。

走り回る様は本当に野生のケモノみたいだぞ、君。

ハッハ、見ていて飽きないね。』

苛つく。

此方の怒りを誘う挑発だとは、当然理解している。

しかし、奴の嘲笑はこちらの心をザワつかせた。

奴は良くわからん超兵器技術と同等に、他者を煽るセンスに長けているらしかった。

『だが、もう十分だ。』

我々は、拠点に押し入ってから今までの君を常に観ていた。

故に解析は、ここに完了している。

君のモーションパターンは、どうやら『ティ・チャラ陛下』に良く似ているらしいな。獣の野生と、歴戦闘士の気高き武技が同居している。』
熱線を回避し続けた先…その足元に、違和感を覚えた。

『しかし、君は独りきりだ。

ならば、行動予測は難しいコトじゃない。』

瞬間、足元…床下の奥に強大の高まりを感じた。

『カサノヴァマーク18』。

巨大リアクターによる、極大出力のユニ・ビームを、是非堪能してくれたまえ。』

身を翻す間も無く、俺の身体は閃熱に包まれた。

.....

アイアンマンアーマー・マーク18：通称“カサノヴァ”。

ハートブレイカー

マーク17・レベルRTスーツに搭載した、巨大にして高出力なりパルサー・トランスミッター。

そして、ナイトクラブマーク16・ブラックステルススーツに搭載した高度なステルス機能。

これらの長所を複合した、“ステルスアーティラリーレベルRTスーツ”だ。

影に潜み、極大威力のユニ・ビームを打ち込むという、一撃必殺をコンセプトとした殺意の高いアーマー。

一時期、アーマー・ジャンキー依存症アルドリッチ・キリアン気味だった頃に僕が開発した、多目的アーマー群のひとつである。

当時のアーマーは、アルドリッチ・キリアンエクストリミス事件の際に、全て爆散させた筈だった。

しかし、英霊として召喚された僕の宝具：「アイアン・レギオン」 鉄人兵団^{レギオン}には、僕の発明品が全て収蔵されていた。

つまりは、晩年の僕が手掛けた後期薄型リアクターや人工衛星、ナノ・マシン・アーマー等だけじゃない。

ジャンキー時代に作った無数のアーマーも、たくさんの人工知能^Aたちも、活動拠点の機構も、最初のアーマーも：僕が世界中にばら蒔いた殺傷兵器達すらも、宝具の一部としてカウントされているのである。

それは、仕方の無いことだ。

宝具とは、その英霊の生き様を具現化したモノだという。

メドゥーサ嬢ならば、実子とされる天馬。

ギルガメツシユ王ならば、王として収蔵した宝物。

そして、クー・フリーンならば、言わずと知れた魔槍ゲイ・ボルク。

対して僕の生き様とは、発明という行為そのもの。

それによって生まれた大半は、他者を傷付ける兵器だったのである。

それは事実だし、否定しない。

人生の都度、味わった感傷も事実だ。

だから、それそのものが具現化した宝具のカタチには、なんの異論もない。

使えるものは、何でも使う。

捨て去った過去すらも手元に収まるといふのなら……目的のために、活用しようじゃないか。

さて、話を戻そう。

ともかく、そんな懐かしのデンジャラス・アーマーであるマーク18を核に、僕はトラップを仕掛けた。

僕自身が纏うマーク85アーマーと、トライアル・スペースを囲うように設置された、いくつかのアーマー。

これらはすべて、僕の宝具だ。

エーテル 霊子にて編まれた、強力な武装。

その威力の高さは、召喚後に開発したアーマー達のモノとは段違いだ。

それらを壁面外にいくつも設置し、砲台としてユニ・ビームを一斉照射した。

操作は、もちろんF・R・I・D・A・Yに任せている。

その威力の脅威を、ランサーは即座に感じ取るだろう。

ならば、避ける。

野生と戦士の勘を研ぎ澄ませ、反撃に転じる好機を伺いながら、巧みに避けるだろう。

強力無比な宝具の存在感と、そこから放たれる強大なエネルギー。

それが無数に存在し、回避し続ける内に、彼の意識はそちらに向かう。

何の気なしにステップしている、その底面すらも僕らが手掛けた代物である、という事実。

それを考慮するのに、ほんの一瞬間が空くのである。

英雄王のときも、そうだった。

ほんの一瞬あれば、十分だったのだ。

その一瞬、足を置く場所に……存在感を消す機能を持つ砲台が潜むポイントを選ばせる為には。

かくして、ランサーは最大威力のユニ・ビームの直撃を浴びた。

その屈強な体躯は為す術もなく焼かれ続け、威力のままに天井に叩き付けられる。

これは、かなりの大ダメージを期待できると確信していた。

正直、かの大英雄を容易に倒せるなどは期待しちやいない。

ギルガメッシュ王との戦いを経験したんだ。

名高き英霊存在の恐ろしさを、侮ることは一切無い。

勝てれば上々だが、重要なのは我ら陣営の勝利なのだ。

マスターが相手方のマスターと決着をつけさえすれば、それで我々の勝利は確定する。

それまでランサーの身柄を此処に縛り付けるだけでも、役割は果たせるというものだ。

そのための分断だ。

これにより、奴はマスターからの魔力供給を期待できない。

門を破ったような、強力無比な一撃も容易には扱えまい。

時間をかけて設置した陣地で戦うのだ。

相応のアドバンテージを受けて、然るべしだろう。

カサノヴァのビーム照射ポイントに、他のアーマーも倣わせる。

ギルガメッシュには難なく防がれた熱線包囲網。

そのリベンジというわけではないが、それが確実にクー・フリーンにダメージを与えていた。

「——成る程。」

だが。

「テメエは拠点を扱って点に於いては最上の部類のサーヴァントと言えるのかもしれないエな、『キャスター』。」

僕の見通しを、はるかに上回る戦士というものは存在するのだ。

「ああ…やり口総てを鑑みれば、自明だろうよ。

己が定めた法則をもってして、取り巻く世界を自在に廻す。

たとえ魔術師存在でなくとも、テメエは間違いないく、「理を唱えるものだ。」

思えば、あらゆるヒーローはそうだった。

キャップも、ソーも、バナーも。

僕の人生を変えた彼らは、いつだって不屈の闘志で逆境をはね除けた。

「ならば、今度は俺が、「槍持ち貫くもの」たる証を見せてやろう……」

ユニ・ビームによる眩い光を、アーマーのカメラで透視する。

叩き付けられた先で、身を焼かれながらランサーは槍を構えていた。

天井を足場に力を込める。

奴に此方は見えているのだろうか……分からないが、その目は確かに見開き僕を睨み付けていた。

「刺^ゲし穿^イつ死^ボ棘^ルの槍^ク！」

.....

ゲイ・ボルク。

我が師・影の国の女王スカサハより賜った魔槍。

圧倒的な大軍に対してすら絶対的な破壊を約束する、最強の投擲武器としての「突き穿つ死翔の槍」。

その本来性能の他に、同じ名を付けて編み出した我流の扱い方が存在する。

それこそが、「刺し穿つ死棘の槍」。

槍が持つ必中……相手の心臓めがけて必ず突き刺さる「因果逆転の呪い」、その性質を利用した刺突術。

死翔を放つのは、マスターの援護が望めない現状では不可能であった。

だが……死棘ならば。

我が生の粹、体躯に刻まれた技の再現ならば。

最低限の魔力消費で、極大の成果を生むコトが可能だった。

我が身は太陽神^ルの血族なれば。

あの程度の光など、何するものぞ。

ユニ・ビームとやらの威力なぞ構わず、必殺の宝具^{わざ}を見舞った。

「終わりだ、キャスター。」

『…………ツ。』

槍は、確実に心の臓を貫いた。

手応えで解る。

我が槍が齎す死の因果は、確かにキヤスターの靈基からだに刻まれた。

「成る程、テメエは確かに強かった。

マスターの言う通り、この地で最初に斃たおさねばならなかった英霊だろうよ。」

槍を引き抜く。

熱線は、いつの間にか止んでいた。

奴の身体から、鎧よろいが失せる。

血を吐き、傷を抑え、蹲うすくまる。

「だが、俺の勝ちだ。

そこで、一つ問う。

貴様が倒れれば、この工房の機能はどうなる？」

俺は、血液と共にみるみる肌の色を失うキヤスターに訊ねた。

顔色は何えない。

しかし、身の震えは見てとれた。

「…テメエが何処の英霊かは知らんがな。

消える前に、勝者に礼くらい示したらどうだ？

貴様とてキャスターとはいえ、星に名を刻んだ英雄だろうが。」

震えるキャスターは、顔すら上げずにか細く唸る。

「……ハ、勝つたと解ると、随分と…饒舌になるじゃないか、ランサー……。

古代の英雄つて奴は…どいつも、こいつも…。

戦に、酔いしれ…た、戦闘狂、か…？」

途切れ途切れの言葉の度に、口から血が滴る。

アタリこそつちやいたが、やはりこいつはかなり近代の英霊らしかった。

神秘も薄れた時代に生まれたにしちや、強力に過ぎる英霊だが…。

しかし、それでもなければキャスターの操る妙な術の説明がつかないのもまた事実だ。

歴史の若い英霊にも拘らず、心臓を破壊されて尚言葉を紡ぐその意気こそは見事。

「異なる時代、異なる国に生まれた者に、理解されようなどと思つちやいねエ。

質問に答える気がないなら、消滅を待つまでもなく終わらせてやろうか？」

槍を握る手に、力が籠る。

奴の血で濡れた刃を払い、槍をキヤスターに向けた。

「…呪いの槍、か。

どいつも…こいつも、雷様の…とんかちと…どっこい、どっこいの…遺物^{レリツ}、だな…。」
弱々しく笑うキヤスター。

内容はいざ知らず、その語調に嘲笑の色は感じられない。

「…君は、知らない…と、思うが。

君たちに、とつての…未知、である…僕の、アーマー、すら…フウ。

それすら…言われた、ものさ…時代、遅れだとね。」

変わらず、息も絶え絶えに笑うキヤスター。

「…そうかよ。

時間稼ぎのつもりか。

わかった、もういい。

テメエの覚悟が、そうだってんなら——」

不意に、気付いた。

血の滴る量が…減っている。

「……………は……………!?!」

熱を帯びた光の刃が、俺の腹を貫いていた。

「…全く、死んで以降も刃物でブツ刺される、とはね。

前面に突き刺さり、背面を貫通する刃の感覚は…何度経験しても、慣れるモンじゃない。」

瞬く間に形成された、失せた筈の奴の鎧。

右腕でゲイ・ボルクを掴み、左腕に作り出した刃で反撃したらしい。

「野……郎オツ……！」

咄嗟に、刺さる刃を無視してキャスターを蹴り飛ばす。

奴は転がりながらも、鎧から発射される噴射でバランスをとって着地した。よろめいてこそいるが、確かに両の脚で立っている。

「クソツ……どうなってやがる？」

確かに、槍は貴様の心臓を貫いた筈だ……！」

血の流れる腹の傷を抑え、治癒のルーンで応急措置を施す。

「……言つたろ？」

武器も、アーマーも、時代遅れらしいのさ。

僕の仲間……「ヘレン・チョ博士」の言葉だ。」

奴の心臓に穿った傷は、塞がれていた。

恐らくは、奴の鎧を構成する金属によって…だろう。

「刃物で刺したのだの、ビームで撃たれたのだの…そういう闘いで負った傷なんかは問題なく消してしまえると、彼女は言った。

恋人が見ても気付かない、と豪語した。

彼女の “再生医療” の対象は、人工皮膚が主だったが…最強の金属ヴァイブラニウムを用いて “ヴィジョン” をすらも生み出した彼女の技術は…彼女が居なくなっても、消えはしない。

後に続くものが居る限り、理想テクノロジーは潰えない。」

うわ言のように、言い聞かせるように呟くキャスター。

絶え絶えだった勢いこそ整いつつあるが、それでも消耗の激しさは伺える。

しかし…奴の霊基に消滅の兆しは見受けられない。

「どうなって、やがる…?」

キャスターの吐く、言葉の意味は分からない。

だが、これだけは確かだった。

「我が身の一部たる、宝具としてのナノ・テクと…彼女の再生医療の応用だ。

これが、サーヴァントとしての僕だからこそ為し得る技術の一つ。
臓器の一つや二つ、潰れたところで創り治して見せる。」

奴は、貫いた心臓を元のままに「再現」しやがったつてのか…!?

「バカな…あり得ねえ。

俺のゲイ・ボルクは、ただ突き刺すだけの刃じやねえ。

貫き死の因果を刻み込む「肉体殲滅」の呪いだぞ…!

サーヴァントである以上、確かに臓物が壊れても死なん奴は存在するだろうが…呪を受けて無事で済むなんて、フザけた話が罷り通つてたまるものか!」

キヤスターが、再び完全に鎧を纏う。

眼光が閃き、こちらを睨む。

「テメエ、何者だ…!?!」

俺の問いに、奴は両の手を砲に変えて構えながら答えた。

「I, m I r o n M a n !」

Episode 21：戦士と、戦士と、戦士

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 ガリアスタ・マンシヨン

非常階段・結界内部

「ハア…ハア…！」

よろめく脚に、精一杯の力を込めて立つ。

『やあ…此方のナノ・マシン残量も、思いの外減ってしまった。

お互い、中々に消耗してしまったものだね。

ミス・マクレミッツ。』

鎧の巨軀を誇るガリアスタが、無機質な仮面の向こうで快活に笑った。

互いの現状を鑑みれば、それは皮肉にも程があるというもの。

私の体は散々打ち据えられ、防御に酷使した左腕など、もはや感覚も無い。

対して、アトラム・ガリアスタは戦闘開始時と然程さほど変わらぬ威容で立っていた。

奴の言うように、鎧を構成するナノななんとという素材こそ、私の拳打にて幾らか破壊できたのだろう。

しかし、それだけだ。

その総量すら推し量れぬほど、奴の鎧は新品同様の光沢を放ち続けていたのである。

『しかし、これである程度は証明出来たと思うね。

君程の武闘派魔術師に、我が礼装は引けをとらない。

十分に、他の参加者連中を打倒可能だろう。』

男は、ゆっくりと前進する。

拳を構え、臨戦態勢の私の元へ、少しずつ。

「…早くも後の戦いの算段とは。

もう、私を倒したつもりにでもなっているのですか？」

拳に、力を込める。

しかし、身に秘めた“神秘”を引き抜こうにも、それによる勝利の確信が無い。一撃必殺でなければ、私の刃は意味を成さない…。

『いや、実際決まったようなものだろうか？』

何せ、君の“魔剣”は私に対して発動しないだろうからね。』

「……………」

この男、我が家の秘伝をも識っている…!?

『驚くコトじゃないだろう。』

この戦争における君の参戦は、私よりもずいぶん早い段階で決定していたんだ。何せ時計塔選抜における、この聖杯戦争の本命こそが君だったのだからね。』

嘲るように笑うガリアスタ。

その嘲笑は、誰に向けられたモノなのだろう。

『封印指定執行者。伝承保菌者。古き赤枝の末裔。

君は自分の知名度というモノを、もう少し理解すべきではないかな。

斯様に強く格調高い魔術師の詳細を、猶予のたつぷりあつた私が隅々まで調べ尽くさないとしても?』

：にじり寄る奴の、何処に拳打を叩き込んでも通用するイメージが湧かない。

迅さでも、力でも、体格でも、魔力総量ですらも、奴は私を上回っている。

それらを発現するのは、奴の礼装。

しかし：その発動に、私の「魔剣」は切り札たる感を察知しなかった。

『対して、君のリサーチは随分と甘かったと言わざるを得ない。

私という魔術師の人となり程度は把握していた様だが、サーヴァントを召喚し1ヶ月の準備期間を儲け、工房まで逃えた魔術師を相手取るにしては、随分と杜撰ずさんな突撃だったな。』

奴が近付く。

倣つて、私は後退る。

『君の奥の手である魔剣は、相手の切り札にカウンターを合わせるコトで十全に効力を發揮する類いの宝具だと言う。

魔術師を相手にするならば、成る程、確かに強力な効果を持つだろう。

その性質上、この聖杯戦争に於いてはサーヴァントにすら打ち勝つ強さを秘めている。

だが…どうなのだろうね。』

後退する踵が、壁を蹴った。

もはや退路は無い。

『その発動の目を徹底的に潰すほど均一化された武力を有する相手に対しては、果たして有効なのかな？

君の魔剣… “斬り決る戦神の剣” は。』

巨軀が陰り、その無機質な眼光が此方を見下ろす。

『そも、我が礼装の起動段階で宝具が発動しなかったコトに違和感を覚えなかったのかね？』

これ程の礼装、従来の魔術師連中ならば十分に奥の手と呼べる代物だ。』

奴の手が伸びる。

活きた利き腕で打ち払おうとするが、その手すら阻み掴まれてしまう。

『だのに、カウンターを発する条件が満たされなかった事実が指し示す結論。

それは、私が纏う礼装は切り札でも何でも無い代物だというコトだ。

F. R. I. D. A. Y、壁面を開示してくれ。』

延びた手が、私の胸ぐらを掴んだ。

体は容易く持ち上がる。

その最中、展開される周囲の壁面が視界に入る。

其処には…

「そ…んな…?!?」

無数の、巨人が立っていた。

展開された壁面の全てに、ガリアスタが纏うソーバスターと同型の鎧が並ぶ。

『“設計図”は完成しているのでね。

ナノ・アイアンマン・デイト量産型軍団は、あらゆるアーマーの特徴を再現できる。

つまり、このソーバスターは君達が散々破壊してきた鎧の一形態に過ぎないというワケだ。

戦闘力の違いは、単純に魔術回路の有無と、有人による臨機応変さの違いでしかない。これらは全て、オートメーション自動化された工房にて均一量産可能な代物なのさ。』

…私は、一体何と戦っているのだろうか？

魔術師？

魔術使い？

そういう括りが、通用する輩なのか…？

『コレと同様の機能を持つアーマーを、冬木市全土で即時に使用可能だ。

無論、先程君達が見落とした事実からも分かる様に、平時は魔力を発生させない。故に、接触するまでは探知などまず不可能。

理解したかね？』

否…こんなモノが、魔術決闘儀式と呼べるのだろうか？

こんなモノは——

『大量生産された武装兵器の前に、君の魔剣などは無力なのだよ。』

ただの、“戦争”ではないか。

「……後^アより出^ンて先^カに断^ラつ者^ガ あアアツ!!」

渾身の力を振り絞り、魔術詠唱を叫ぶ。

我が血にて精製した、一族に刻まれた魔剣の励起。

利き腕に強化魔力を集中し、拘束を無理矢理引き剥がす。

肉と骨が軋む。

構わない。

雷光にも似た魔力の本流と共に、我が水晶体礼装が姿を表した。

刀身体が現出し、切っ先はガリアスタに向いて輝く。

『…やれやれ、意外だな。』

君程の術者が、やぶれかぶれに術式を行使するとは。

だが、この状況で成立するとも思うのかい?』

私の体は、そのまま壁面の鎧に叩きつけられた。

後ろから羽交い締めになされ、魔剣を携えた拳が揺らぐ。

『その剣を先手で撃つ場合、どうなるのかという一点については興味があつたがね。今の状況で優先すべき項目でもない。

受けてやるワケにはいかないな。』

「がつ……！」

ふ、フ斬りラ扶ガる……戦神ラの剣……ツ！」

それでも魔剣は発動し、ガリアスタにはカスリもせず全くの別方向へ飛んで行った。

『ふう……残念極まる無駄な足掻きだな。

さて……ここで積チみエツクだ、ミス・マクレミツツ。

どうするね？

正直、君という人材を失うコトは惜しいと、私は思っているんだ。

降伏し、私への恭順の意を示すならば……このまま、その細く美しい首をヘシ折る必要も無くなるのだがね。』

せせら笑い、機械の巨腕を私の首にかけるガリアスタ。鎧の眼光は依然無機質なままだが、その色に値踏みするような気味の悪さを感じ、鳥肌が立つ。

「……後免、被ります……貴方は、強いが……下衆な男だ。

私が、敬愛する……戦士の、姿には……程、遠い……！」

絞り出すような悪態。

しかし、私自身は既に抵抗する術を失っていた。

情けないが……事実に向き合った上で、それでも奴を否定する。

『ほう……？』

それはまた、見解の相違だな。

私は私なりに、戦人たるガリアスタの男として強く生きた末に今がある。それを否定されたとあつては……もはや、我々はきつと理解り合えない。』

首にかかる手に、力が込められ始めた。

ゆるゆると、じつくり殺すつもりだろうか。

今までも散見された彼の嗜虐性が、強く垣間見えた瞬間でもあった。

しかし…一思いに殺してしまわない、土壇場でのツメの甘さ。

それこそが、この男の“小ささ”であると理解出来た。

故に――

「その点については、全く…同意です。

だから、貴方に…見せて、あげましょう…！」

尊敬に値する、戦士の…姿を！」

意識を魔力に。

回路を廻し、腕先に込める。

体が熱くなる…それは、我が身に刻まれた、英雄との繋がりを示す“刻印”の発動であつた。

『……………！』

「令呪を持って、命ずる！」

来なさい、ランサーッ！」

瞬間、目映い光が周囲を包んだ。

魔力の発現。

奇跡の行使。

英霊契約の際に、聖杯より三画のみ与えられる、サーヴァントへの絶対命令権。

その命令がシンプルであればある程、確度を増し…その力は、魔法にも近い奇跡の実現すら可能とする。

『バカな、令呪だと…!?!』

この結界内部で、それを発動するのは不可能なハズ——』

奴が、ハッと気付いて後方を振り返った。

そこには、壁面を貫く小さな穴。

『しまった！』

さっきの魔剣か…っ！』

気付いた時には、もう遅い。

確かに先手で撃ち放つ魔剣の一撃は、ただ速く鋭いだけの光弾に過ぎない。

一定以上の実力者が相手ならば、躲かれてしまうのも道理だ。

だが、今回に限ってはそれであっても構わなかった。

壁面を穿ち、壁向こうまで貫通するコトさえ出来れば、そこから結界外部への魔力干渉が可能となる。

ほんの小石程度の幅のみを貫く我が宝具だが、貫通力という一点のみに於いては十分に信頼できる。

その信頼に、我が血は見事に応えてくれた様だった。

「我が主相手に随分とやってくれたな、ガリアスタ。」

我が僕は…偉大な英雄は、^{クロー・フリーレン}“来い”という命令に対して即座に参上した。空間を跳躍し、あらゆる障壁を飛び越えて現れる。

刹那の間に繰り出されるランサーの槍撃に対して、しかしガリアスタは即座に反応した。

『ぐあつ……つ!!』

槍による薙ぎ払いを、刃からズレた柄を受けるコトで斬撃を躲す。

しかし、英霊の筋力をモロに受けたコトで吹き飛んでしまった。

相当な衝撃であろうに、飛んだ先で即座に体勢を立て直すガリアスタ。

「反応が早い。」

やはり相当に戦い慣れていやがるな、テメエ。」

私を即座に救出し、空間中央に位置取るランサー。

『くっ……おのれ!』

F. R. I. D. A. Y、アーマーを全て起動しろ！
奴らを逃がさず、討ち果たせ！』

何者に呼び掛けるのか、ガリアスタの号令と同時に周囲を囲んだ鎧達が起動する。
軍勢が、私達を包囲しようと蠢く。

「…無事、とはいかねエ様だな、マスター。」

「…貴方、もね。」

よろめく私を支え、片手に槍を構えるランサー。

その靈基からだは、経過時間の相応以上のダメージを受けている様だった。
相手方のサーヴァントと戦闘したのだろう。

やはり、其方も強力な存在であったコトが伺える。

「ともあれ…貴方が来たなら、形勢逆転…です。

相手のマスターを倒せば…私たちは——」

「いや、ここいらが潮時だろう。」

俺も、キャスターの野郎を仕留め切れなかったからな。」

私の言葉を遮る、念話による返答。

それは、意外な言葉。

かの勇敢なる大英雄の口から発せられたとは思えない内容に、私は思わず彼の顔を見上げてしまう。

目が合う。

ランサーは私の姿を一瞥した後、再び戦場に向き直った。

「宝具を使う。」

万全を喫するなら、それが必要不可欠だ。

構わねエな、マスター？」

…ああ、そうか。

彼は、まだまだ戦える。

原因は、私だ。

弱った私を抱えて、戦う事実を彼は危惧したのだ。

私の命を、案じたのだ。

確かに我々は継戦能力の高さを自負していたが、拠点における補給を受け続けられるガリアスタ陣営が相手ではジリ貧になる。

相手方のサーヴァントも健在であるなら、尚更だ。

それ故の…全力を籠めた一手。

そのための、宝具解放。

「…ええ、良いでしょう。」

魔力の全てを持って、突き穿ちなさい…ランサー！」

頷く私に、彼は柔らかに笑いかける。

「おう、行くぜ！」

ガリアスタ、これで終いだ！」

彼が、槍を払う。

先程まで途切れていた魔力パスが、著しく活性化しているのを感じた。

『この魔力の奔流…門を破壊した一撃を放つつもりか!!』

くっ…F・R・I・D・A・Y!

全力で阻止しろ!』

壁面が変形してガリアスタと我々を遮った。

此方の切り札を知るが故の、護りの一手。

魔力の流れを見るに、結界の堅牢さの全てをその壁面に集約している様だった。

今までの戦闘での強度から想像しても、確かにランサーの宝具に抗し得る可能性を
持っているコトが伺える。

合わせて、こちらの妨害を行おうと動き出す鎧の軍勢。

しかし、そんなものは歯牙にもかけぬといった風情で英雄が^{ランサー}獰猛に笑った。

「ハ、面白エ!

キヤスター陣営が誇りし強靱なる拠点結界!

そいつに刃が突き立つかどうか、改めて見定めてやらア！」

鎧の光線、光剣、弾幕。

あらゆる全てを、ランサーは跳躍にて回避する。

魔力の奔流は昂り、その猛りが集約した槍が放たれた。

「突き穿つ死翔の槍！」

対決の火蓋を切った魔槍の輝き。

同様のそれが、結界壁面に突き刺さる。

『なっ…!?!』

ただし、対象はガリアスタを護る防壁ではなかった。

穿たれたのは、工房と市街を隔てる壁面。

戦場は、元々非常階段に相当する空間である。
であれば、壁向こうに外部が広がるのは道理であった。

『バカな…逃げるつもりか!』

偉大なる、ケルトの戦士ともあろうものが!』

大いなる破壊。

それにより、冬木市の夜闇と街明かりが露^{あらわ}となる。

「おう、逃げるさ。」

主の命を護るためならば、躊躇無くな。

アイアンマン
キヤスターのクソつたれには、よろしく伝えといてくれや。

次にツラ見たその時は、この俺が必ず殺すつてな。」

不敵に笑うランサー。

穿たれた大穴を潜り抜け、我々は夜闇の冬木市へと飛び込んでいった。

『…なんとも、腹立たしい程に鮮やかな手際の良さだ。

なるほど、あれこそが“戦士”の英霊。

メドゥーサとも、ギルガメッシュとも、スタークとも違う。

その戦働きによって星に召し上げられた英雄の魂…か。』

ボクは、ランサー陣営の去った穴を見据えて呟いた。

全く、派手に破壊してくれたモノだ。

門に、外壁に…ライダー陣営すらも弾いた結界を、いとも容易くやつてくれる。

しかし…この出費に見合う成果は得られた。

.....

『F. R. I. D. A. Y、ランサー陣営にセンサーはセット出来たかい？』

『はい。』

音声、魔力量の観測、共に発信源を探知可能です。』

ライダー陣営の時と同様だ。

ギルガメツシユの場合はマスターも周囲に見られず、そもそもそれを考慮する暇もなかったので実行できなかったが。

現状、ギルガメツシユと並んでトップクラスに危険な陣営であるランサー陣営を監視下に置けたという事実は大きなアドバンテージであると言えた。

『そいつは結構。』

では、キャスターの方はどうか。

ランサーに対してそれなりのダメージは与えられたようだが…。

ともかく、奴の現状把握と情報の擦り合わせを行いたい。

通信は開けるかね？』

私の質問に、いつもの平坦な調子で応える。

『スターク様は、現在通話が困難な状況にあります。』

スターク様からの伝言を預かっております。

ガリアスタ様は、至急ラボラトリー・スペースにお越し下さい。』

『…何?』

美しく、坦々とした口調から紡がれる、不穏な言葉。

ボクは、妙な胸騒ぎを覚える。

『…直ぐに向かうと伝えろ。』

マンションの破損箇所には、ナノ・マシンによる応急処置を施せ。

それとサジヨウ君とカウレス君にも、必要とあらば即座に行動出来るよう準備させる様に。』

『畏まりました。』

それだけ伝え、ボクは進み出した。

鎧を解くコトもせず、ジェット噴射に任せて、迅速に。

Episode 22 : 激戦の後、それぞれの傷

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 ガリアスタ・マンション

地下工場 “G&Sファクトリー”

ラボラトリースペース

…さて、一先ずランサー陣営の撃退には成功した。

中継映像を見るに、マスターは相手方のマスターを戦闘にて圧倒していた様だ。

僕の方は正直、ランサー相手にロクに決定的なダメージすら与えられなかったというのが口惜しい現実なのだが、それはそれ。

兎も角、なんとか今回も我が陣営は戦い残るコトに成功したわけである。

…その代償は、大きかったと言わざるを得ないのだが。

『キャストター!』

我がマスターが、けたたましいジェット噴射の轟音と共にラボに入ってきた。

アーマーを解き、僕の元に駆け寄る。

明らかとなった表情には、多少なりとも焦りの色が見受けられた。

僕という戦力の損耗を案じてなのか、それとも僕個人の安否を気遣ってくれているのか？

…まあ、心積もりの大半を閉めるのは前者の感情なのだろうが。

後者の心配もいくらか含まれてくれているのなら、そいつは相棒パートナーとしては嬉しいハナシなのだがね。

「何を笑っている!」

貴様、その様はどういうワケだ!？」

オペレーティング・テーブル

手術台に横たわり、幾つかのマシン・アームに囲まれた僕を、彼は睨み付けて怒鳴った。

まあ…そういう反応になるよな。

僕は、上半身を露出し胸の傷に繋いだ。『装置』を見ながら、やはり自嘲気味に笑った。

「…やあ、マスター。」

F. R. I. D. A. Yに話は聞いているだろうか？

ランサーの奴に、こっぴどくやられてしまったね。

今は…奴に付けられた傷に対する処置をしている所さ。

会話も、今しがたやつと行える程度の元気を取り戻した。

通信も出来ず、駆けつけるコトも出来ずに、すまなかつたね。」

言いながら作業を続ける僕に駆け寄り、彼は装置に視線を落とすした。

「そんなコトはどうでも良い…！」

傷だと？

ランサーの…クー・フリーンの持つ魔^{ガイ・ホルク}槍によるモノか！

まさか、直撃を受けたのか!？」

傷の位置について、奴の逸話に思い至り合点が入った様子のマスター。

「そうだとも…。」

伝説に曰く、かの槍はいかなる防具をも貫通し、心臓めがけ追い曲がる軌道にて突き刺さる。

無数に枝分かれし、刺さり穿つ。

貫いた相手の全身…内臓・血管のあらゆる隙間に毒の大釘を残す。

付いた傷は治らず、刺された者は必ず死ぬという。

恐るべき兵器だ。」

思い出すも悍ましい、大英雄の宝槍。

光を引き裂くあの朱が、脳裏に過るだけで鳥肌が立つ。

「…クソ。」

追尾兵装としては、僕の如何なる発明品よりも上回る性能を誇るだろうな、アレは。

…全く、改めて確認すると、つくづく相性最悪の相手だな。

こりゃ、ヒドイ目に遭わされるのも仕方なしてヤツだ。」

思わず溢れる、力籠らぬ自嘲の笑いが止まらない。

「…そんな神代級の宝具に貫かれ、何故お前は無事に現界していられるんだ？」

尤もな疑問だ。

だが、無事だなんてとんでもない。

「いやいや、致命傷だよマスター。

実際、僕は今現在も奴の槍のろいに貫かれて…

絶えず死に続けている。」

「…何？」

僕は、手元のコンソールを操作して立体映像ホログラフを映し出した。

表示したのは、先程スキャンした僕の霊基からだ…その輪切り。

「全身に、朱い線が流れているのが見えるだろうか？」

これが、奴の槍の呪いだ。

僕の霊基に刻まれ、全身を斬り刻み霊核を砕こうとする病魔どくまは、僕の心臓位置に固定・設置された傷痕そのもの。」

僕は、映像の心臓部を指差す。

朱い塊が蠢き、線が流動する中心。

その様を見ればまさしく血流の様にも見えるが、その実それとは真逆の代物。生命を害する異物そのものだ。

「これは、現状では除去不可能だ。

僕が存在するという事実^がに紐付けられた、確定された因果…。

どうやら、そういう類いの現象らしい。

ランサーはコレを「肉体殲滅」の呪いだとか言っていたが、正しくだと思っね。いかなる治癒を施そうとも、即座に致死のダメージを刻み続ける絶対殺傷装置だ。」

「……。

そんなものに侵され、何故こうして霊基を保ってられる？

この…それらを覆うようにして全身を駆け巡る銀色の効果か？

「ナノ・マシン…いや、それでは神秘の魔槍が残した呪いに耐えきれぬ筈も無かろうが。」

痛ましさと、興味深さ。

それらが入り交じった複雑な表情で、マスターは画面を見つめる。

その視線の先には、朱い心臓を抑えるように存在する発光体が映し出されていた。

そこから流れる白銀は、朱色の線を囲み駆け巡る。

「(一)明察。

こいつは、ただのナノ・マシンじゃない。

僕の宝具として存在する、エーテル霊子によって編まれたナノ・マシンさ。

これで常に、破損箇所パーツに該当する部分を元通り再生産しているんだ。

呪いによって失われた部分をナノ・マシンにて分解し、新たに置き換えている。」

僕は、胸の中心で輝く装置を指で叩いた。

「こいつは、急拵えで造った特殊なアーク・リアクターだ。

マーク50からマーク85までのナノ・アイアンマン・アーマー。

その全てのコアたるリアクターを、一つに重ねている。

そこに納められたナノ・マシンの殆んどを、霊基維持に使っているワケさ。」

リアクターの輝きは、正常な稼働を示してくれている。

咄嗟の策にしては、我ながら悪くない仕事だ。

「これは魔術や身体機能による肉体の治癒とは違う。

再生医療による、外付けの“代替装置”だ。

勿論、代替箇所はその瞬間から霊基にくだいとして見なされるので、直ぐ様破壊されるが…。

何、心臓が潰れた直後に霊基が消滅するワケでも無いからな。

瞬時に破損箇所を作り替えるシステムが確立しているのならば、なんの問題も無い。

このやり方なら、あの古くさい棒きれのパワーにも、ある程度は抗える。」

映像を確認しながら僕の言葉を全てを聞いた後、マスターは視線を此方に移す。

信じられないモノでも見つめるような目付きの彼は、一瞬の逡巡の後に口を開いた。

「では…何か？」

お前は、常にダメージを与え続ける呪いによって、一瞬で破壊される全身を…。
その都度新たに造り替えるコトで、無理矢理現界し続けている…そう言うのか？」

ドン引きつてヤツだな、あの表情は。
いや、まあ分らないじゃあないが。

「その通り。」

ああ、勿論その為に宝具としてのエーテル・ナノ・マシンは著しく消耗してしまうコトにはなるがね。

ただ、拠点さえあればソレは常に生産・補充が可能だとも。

手間もコストもかかるし、拠点を離れて活動するには制限時間も課せられるコトにはなってしまったが——」

「ボクは、そんな話が聞きたいんじゃないッ!!」

僕の言葉を遮る、マスターの怒号。

「お前は…そんな状態で何故、平気な顔をしていられる!？」

常に致死の殺傷ダメージを受け続けるなど…そんな状態で駆動するコトが、人体を模した英霊の霊基維持に負荷を掛けない筈もない!

軋み、罅^{ひじ}入り、途轍もない苦痛を伴うハズだ!」

初期に少しだけ見た、露骨な嫌悪の表情以来…初めての、彼の感情的な発露。それは、どこか子供じみた苛立ちの様子にも見えた。

「……っ!」

直ぐ様、我に帰るアトラム^{マスター}。

「…ボクが言いたいの、だ。

そんなザマで、これから始まる戦争本番を戦い抜けるのか…というコトだ。僕らの拠点の強さを、知る敵も居れば、これから知るであろう敵も居る。そうなれば、マンション外での直接戦闘の機会もあるだろうに…!!」

この一ヶ月間の付き合いで、それなりに関係性が変化したのだろうか。

怒る彼には申し訳ないが…僕には何だか、それが少しだけ喜ばしかった。

…もちろん、その歓喜を口になどは出さない。

何せ、彼は僕に似ている。

今言葉にすれば、面倒にこんがらがってしまふコトは目に見えていたからだ。

「…まあ、問題が無いかと問われれば、無いと答えると嘘になる。」

頭を垂れ、一瞬の逡巡。

落とした視線に入った胸のリアクターに、僕は既視感を覚えた。

そして浮かんだ、懐かしい情景。

辛くもあるが、しかし思わず微かな笑みが溢れる。

「——しかし、命を脅かす異物が体に埋め込まれる感覚は……初めてってワケじゃない。」

浮かんだソレは、僕の辿った鮮明なる道程だった。

その中でも、一際大きな人生の転機。

そこに思い至り、浮かんだ言葉がそのまま口をつく。

「そいつが爆弾の破片だろうが死の棘だろうが、大した違いは無いんだ。

同じ危機コトさ。」

……僕の言葉に、マスターは目を剥いた。

「何があるうと、僕はアイアンマンだ。

危機に抗い、鉄を打つ……僕の原点オリジンはそれだ。

ただ、それだけの話なんだよ。」

自分でも、無茶苦茶な理屈だとは理解っちゃいる。

だが、これが事実だ。

自分という英霊を動かす骨子は、それとしか言いようがなかった。

「…お前というヤツは、本当に。」

何かを諦めたように、頭を降るマスター。

「下らん根性論については、もういい。」

今回生じた問題を、解決する方策は考案してあるのだろうか？」

冷静さを取り戻したのか、彼も建設的な会話に移ってくれた様だ。

良いね、それでこそ我がマスターだとも。

「勿論さ。」

実は、ナノ・マシンによる体内再生運用のおかげか…。

いや、副産物とも呼べる効能スキルのおかげで、僕の身体機能そのものは寧ろ平時より向上

しているんだ。」

その言葉を聞き、マスターもソレに気づいた様だった。
流石の洞察力と思考力だ。

「そして、この事実から推察した結果…他にも幾つか思い付いたのさ。
そのうち幾つかは、既に実践もしている。

“サーヴァント”としての、僕なりの新たなやり方ってヤツをね。」

だから僕も感傷を横に置いて、語る。

堅実的で現実的な、目に見える事実の話を。

「…転んでも、ただでは起きないというワケか。
良いだろう。

詳しい話を聞かせろ。」

我がマスターは、ニヤリと不敵に笑う。

それでこそだ。

「ああ。

重要なのは、〃逸話〃と〃ステータス〃だ。

再生医療こそは、僕の生前の仲間の技術だったが――」

僕は、〃奴〃の顔を思い出す。

自責と後悔を多分に含んだ、奴に纏わる生前の逸話^{おもいで}。

それでも。

ああ、それだとしてもだ。

今の、僕の曲げられない信念のために――

「――利用できるモノは、残さず利用させてもらうさ。

僕のせいで悪人^{ヴァイラン}となってしまうた、哀しい男の遺産^{テクノロジー}だとしてもね。」

.....

冬木市 新都 某所

「……クソっ。

思った以上に手酷くやられたらしいな、マスター。」

冬木市の片隅、暗がりの路地裏。

マスターに対して、ルーンによる治療を施す。

しかし、それでも尚彼女の傷と消耗は目に余る惨状だった。

片腕・片足・肋骨・鎖骨……あらゆる箇所が折れ、軀の内側は酷い内出血をいくつも起こしている。

我が同胞、フラガの未裔たる主をこうも追い詰めるとは。

ガリアスタという異郷の戦士、その強さを見誤った結果なのか。

「……面目ありません、ランサー。」

貴方という、大英雄を迎えておきながら……この有り様とは。」

人気の無い場所とはいえ、声を潜めて治療に専念せねばならない事情は分かる。

しかし、その必要以上にバゼットの声は小さく曇り、微かに震えていた。

……どうやら、我が主は苛烈にして剛力なる魔術戦士であると同時に、その心根はか弱く繊細でもあったらしい。

いや、現代には似つかわしくないその強さこそ、自己防衛のための鎧であったのか。

「……謝るなんざ、止めてくれ。」

組んでる以上、この撤退はお互いの落ち度が招いた結果だけ。

今後戦い抜くためにも、その意識は強く持たねば。

勝てるモノも勝てんぜ。」

「……………」

努めて明るく掛ける声も、どうやら中々届かんらしい。

マスターが、俺という戦士に掛ける期待については理解していた。

だが、それ以上に俺と並び立つという状況に相当気負っていたという事実にも、俺は今になってようやく気付けたのだった。

…全く、俺という英霊おとしこは生前から女の心を量り損なうきらいがあるらしい。

「ともあれ…先ずは宿に戻って療養せねばならん。

マスター、応急処置は一旦終了だ。

また抱えて走る——」

——不意に。

背後に、何者かの気配を感じた。

弱ったマスターはともかく、人気の無いこんな場所で、俺にさえ存在を悟らせない何者か…！

「…何者だ、テメエ。」

手先に集中し、いつでも槍を振るえる様に気を張りつつ、問う。
気配は足音に変わり、無遠慮に此方に歩み寄る。

「落ち着くが良い、ランサーのサーヴァント。」

私はあらゆる陣営全ての敵ではなく、味方でもない。

ただ、公正なる場に立ち聖杯戦争を見守る「監督者」に過ぎん。

しかし…かつて肩を並べた戦士が相手ともなれば、多少ならざる温情も湧こうというもの。」

低く、温度を感じさせない声が響く。

それにマスターが、反応を見せて顔を上げた。

「貴方は……!」

今まで色の落ちた様な白ささえ感じたマスターの顔に、紅い熱が差したように感じられる。

その視線の先を、俺も追従する。

「傷を負おうとも、未だその眼に光は宿っている様だな。」

これは、要らぬ心配だったか……ともあれ、息災な様で何よりだ。
マクレミッツ。」

そこには、男が立っていた。

漆黒の神父服カソックに身を包み、胸に金色の十字架を抱く東洋人の男。

「……知り合いか、マスター。」

俺は、気を抜くことも出来ず主に問い掛ける。

「ええ……かつての戦友です。」

心配せずとも、彼の言葉は真実ですよ。

彼こそは、私が所属する魔術協会・時計塔と協賛し、この聖杯戦争の運営に関わる
「聖堂教会」所属の神父。」

気を抜けぬ理由が、理解出来た。

その男は、装いこそキヤスターが語った“救世主”を信奉する聖職者のソレである。しかし、その瞳は…それを信じさせぬ程度には黒く淀んで見えた。

「久し振りですね、言峰綺礼。」

Episode 23 : 裁定☒と、赤い宝石

僕は、裁定☒だ。

サーヴァント・ルーラー。

見極め、定め、裁くもの。

このクラスに選ばれる条件は、いくつものが複雑に存在するという。

例えば、召喚に際し我欲を持たず中立の立場で物事にあたるコトが出来るモノ…だとか。

この基準に自分が相応しいのかどうかについては、いくら僕の靈基からだに刻まれた逸話おもいでを振り返ってみても甚だ疑問なのだが…。

それでも、僕は「世界」に選ばれた。

そして僕も、そんな僕を選んだ喚び声に応えた。

だから僕はやはり間違いないく、ルーラーのサーヴァントなのである。

僕の世界には存在しなかったであろう、サーヴァントと呼ばれる存在。

魔術と呼ばれる奇跡の業よりも上位に位置するとされる、最上級の使い魔。

地球の記憶に刻まれた英雄の魂に、カタチを与えたモノ。

元来は未曾有の有事に際して世界によって行使され、コトを解決へ導く星の決戦魔術
 …で、あるとか。

生前の僕には、当然こんな異界のオカルトに纏わる記憶などは存在しなかった。

この情報は、冬木の聖杯によって喚ばれ現界する…その前段階。
 多元宇宙^{マルチバース}の壁を越える際に付与された情報の様だった。

つまりは、このサーヴァント等の神秘概念が存在する世界からそうではない僕らの世
 界に対する緊急^{エマージェンシー}呼出…それを受諾したコトによって、事態の解決の為に与えられた
 知識の一つなのである。

…仮にキヤスターのサーヴァントが、僕の世界から召喚された何者かであったとしても
 同様の知識を所持しているかは定かではないが。

これらの知識は、どうやら今回の騒動に於いて重要なピースである様だった。

何故なら、僕が呼び出され降り立った地…。

冬木という街に敷かれた儀式魔術におけるサーヴァントの定義は、世界が規定したソ
 レとは些か異なる存在であったからだ。

異なる定義を定めた魔術師達。

それらとの邂逅は、この戦いと向き合うにあたって必要で必然である。戦いを終わらせるためには、その根幹に向き合わねばならない。僕は経験上、そう感じていたものだった。

.....

…魔術師陣営と槍兵陣営との戦いより、少し時を遡り。さかのぼ

2004年 1月下旬 昼過ぎ

冬木市 深山町 遠坂邸

「…確かに、お父様が遺した文献にもそういう記述があったわね。」

エクストラクラス・ルーラー。

術式に何らかの異常が発生し、それによる世界規模の影響が予見された場合にのみ召喚される、監督役のサーヴァント……だとか。

その身に刻まれた“神明裁決令呪”が、何よりの証でしょうし。」

僕は、この街を魔術的に管理するという魔術師一族の邸宅を訪ねていた。

街を調査し、地質や霊脈を把握し、それらを統括する位置に座す家名こそが遠坂である、と突き止めたのだ。

かつての経験値と、ルーラーとしての知識とスキル。

それらを複合して弾き出した結論である。

その当主と名乗る人物が、想像以上にうら若い少女である事実にくそ驚愕したが……かつての家^{チームメイト}族であった少女の姿を思い出し、馬鹿な先入観であると考えを打ち消した。

思えば、彼女と目の前の当主……遠坂凛^{リントオサカ}は衣服のカラーリングといった趣味嗜好も近い気がする。

そう考えると、少し親近感が湧いてしまうように感じられた。

「確認が取れた様なら、何よりだ。」

敵対する疑いが晴れたなら、出来れば屋敷に入れてもらえると助かるのだが……どうだろうか？

僕は別に此処でも構わないが……ホラ、いくら魔術的に認識をズラす結果が敷いてあるとしても、玄関先で立ち話をいつまでも続けるとね……。

君としては、他陣営の目も気になるだろう？」

僕は、整った屋敷のガーデンングを眺めながら尋ねる。

彼女は、そんな僕を睨みながら深く考えた後——

「……はあ。」

いいわ、お上がりなさい。

もしも敵方のサーヴァントであるなら、まだ召喚も実行していない私なんて瞬く間に殺して見せるでしょうしね。

それを行なわず、此方を尊重する貴方の態度を信用しましょう。

……一旦はね。」

そう言い、彼女は踵を返して屋敷内に戻って行く。

成る程、状況判断はしっかりしている。

僕の「タクティカルアーツ軍隊戦技」スキルに含まれた、Eランクの気配遮断相当の効果。

それによる接近を赦してしまった状況を飲み込んだ上で、現状もつとも利を獲得しうる選択肢を選ぶ。

少々真つ直ぐすぎるくらいはあるが…だからこそ、彼女のような人物が運営サイドに居るのは好ましい状況だと言えた。

「ああ、ありがとう。

お邪魔するよ、ミス・トオサカ。」

……………

美しい装飾や調度品で彩られた屋敷内に通される。

この手の仰々しさを感じさせる雰囲気の屋敷を見るのは…生前のサーカス時代。上院議員の命の元、国債活動に専念していた時以来だろうか。

「…それで？」

その監督役のサーヴァントが、どういふ了見で運営サイドにして一参加者である私を訪ねて来たのかしら。

理由は聞かせて貰えるのでしょうか？」

応接間にて、紅茶とお茶請けのマドレーヌをテーブルに置きながら彼女は問う。

気を遣わなくても良いと断つたのだが、サーヴァントとはいえ客人に対して持て成しの一つも行わないなどというコトは、遠坂の沽券に関わる。

…と言って聞かなかつた彼女だ。

この若さでしつかり、一つの家の主を勤めあげている。

その姿勢は美しく気丈で、生涯僕の心を掴んで離さなかつた彼女の様で――

…いけない、いけない。

いくらなんでも気が緩みすぎだ。

僕が此処に何をしに来たのか思い出せ。

「ああ、もちろん。

単刀直入に言おう。

今回の聖杯戦争…開催を延期すべきだと僕は思う。

少なくとも、僕という存在が喚ばれた原因を解明するまではね。
土地の管理人である君に、それを提案しに来た。」

僕は、彼女を見据えて告げる。

「…紅茶。

冷めない内にどうぞ召し上がれ。」

椅子に腰掛け僕を一瞥した後、彼女はそう言つて自分のティーカップを口元に運んだ。

僕も言われるままに、それに倣う。

…美味しい。

コーヒークライクな僕だが、瑞々しく華々しい香りが熱と共に身体に染み入る紅茶の味わいもまた、悪くないものだと思ふ。

「で、貴方の提案だけど。

却下よ、勿論。」

たとえ星に喚ばれた裁定 \square の言だったとしても、貴方は所詮^{サーヴァント}使い魔。如何に人格を有してしようと、使い魔の言葉を重く捉える魔術師など存在しないわ。」

ぴしやりとした、真つ直ぐ叩き伏せるような語調の返答。

想定していた答えとはいえ、思わず己の微笑んだ表情筋が固まるのを感じた。

「当家はもちろん、間桐やアインツベルン…それに時計塔や聖堂教会も同様にね。様々な歴史ある家門、組織が関わった大儀式こそが聖杯戦争なの。」

それを、ポツと出の貴方の言葉を鵜呑みにして止めるコトなど出来はしない。誰も賛同したりはしないわ。」

言いきった後、彼女は再び紅茶を口にする。

「…成る程、確かに。」

しかし、少なくとも君は僕の言葉に耳を傾ける準備がある。

違うかい？」

ティーカップを口につけたまま、彼女の眉根が僅かに揺れる。

「何せ、サーヴァント僕を一個人として迎えてくれている。

この会合が成立しているという事実そのものが、それを裏打ちしていると思うんだが。

僕たちはきつと、儀式の不備調査という一点に於いては協力し合える。

「どうだろうか？」

僕は、彼女から目をそらさず紅茶を口に含む。

「……ええ、そうね。」

正直、今回の儀式について思うところが無いワケではないの。

今までは、遠坂の主として戦いに勝つことを主とするコトで、見ないようにしていた部分。

裁定 \square あなたという存在は、術式の向こう側から発せられた警告なのでしょう。

それが、嫌でも私に様々な疑念を思い起こさせる。」

紅茶をテーブルに置き、思い詰めたようにそれを見つめる彼女。

前回戦争から十年…彼女が積み上げてきたモノが瓦解しかねない事実を、言語化するのを躊躇っているのだと感じられた。

「僕は別に、この儀式そのものを潰そうだとか、そういう考えを持っている訳じゃない。

僕というサーヴァントの存在は、この戦争の勝敗には一切影響しないんだ。

僕を喚ぶに至った儀式の不備…それに連なる存在が参加者の一人でもない限りはね。」

僕の言葉に、彼女は身体を揺らす。

…彼女の心当たりは、その辺に関連しているのだろうか。

「…戦争の延期は、恐らく困難でしょう。

既に、何騎かのサーヴァントは召喚されてしまっているのだから。」

確かに、それはそうだ。

こちらはルーラーの知覚でそれを把握しているし、延期自体はダメもとの提案だっ

た。

「でも、儀式の不備…その可能性を各陣営に伝えるコトは可能な筈よ。

少なくとも、他の御三家である間桐とアインツベルン、そしてこちら側の監督役である聖堂教会には伝える必要がある。

貴方という監督役の存在を周知させる意味でもね。」

彼女はそう言うと、顔を上げて起立する。

「…一先ず、協力関係を築けたと見て構わないかい？」

思わず笑みが溢れる僕を、彼女は面倒くさそうに睨んでため息をついた。

「戦争が開始するまでの、一時的によ。

問題はさっさと解決するんだから。

今は一先ず、間桐と聖堂教会に連絡を取ってみる。

可能なら、先日連絡先を交換したキャスター陣営にもね。」

「……っ！」

それは、意外な展開だ。

ガリアスタと呼ばれる魔術師は社交的だと感じてはいたが、ここで繋がるとは。

「早ければ、今日にでもそちらとも会合を開くからね。

貴方は此処で待っていてちょうだい、ルーラー。」

そうやってぶつきらぼうに言つてのけた後、彼女は廊下に出て行ってしまった。

残された僕は、お茶請けのマドレーヌを口に運ぶ。

…うん、オレンジピールを含んだ酸味と甘味が心地良い。

キャスターについての不安や、僕の世界からの何者かについての不安は勿論ある。しかし、この世界での活動は、現状上手くいっていると感じられた。

.....

2004年 1月下旬 夕刻

冬木市 深山町 遠坂邸

「…自分でいうのも何だけど。」

魔術神秘に関わる人種の偏屈さを甘く見ていたわ。」

結論から言うと、連絡の総ては膠にかも無く断られてしまった。

間桐家には、当主やそれに準ずるもの達が不在であると断られた。

キャスター陣営もまた、多忙であるという理由で後回し。

戦争直前の現状では、当然とも言えるが…残念である。

僕の行動が慎重すぎて、運営サイドへの働きかけが遅きに失してしまつまコトにも起

因するのかもしれないが。

僕が知覚したところ、先ほど召喚が成されたランサーの陣営も冬木市内に存在するが
…連絡を取るのには難しいだろう。

そして――

「だとしてもよ！

監督役である聖堂教会の対応が後日に回されるつてのは、一体全体どーゆー見なワ
ケ!?

「綺礼のヤツ、やる気あんの!？」

今まで極力優雅に保っていた彼女が激した様は、廊下向こうからでも十分に聞こえて
きたものだった。

勢いよく受話器を電話機本体に叩きつけ、ずんずんと足音を鳴らして僕の待つ応接室
に戻ってくる。

「ルーラー！

支度なさい！

今すぐ教会に殴り込むわよ！」

外套を着込み、獣のように唸って彼女は告げる。

なんというか、彼女には有無を言わせないリーダーシップが備わっているように感じられる。

なんとも僕ら向きだ。

ニツクだったならば、スカウトしていたかもしれない。

「…アポイントメントは取れなかったんだろう？」

平気なのかい？」

僕は立ち上がり、椅子にかけていたジャケットを羽織ながら応える。

「いいのよー！」

普段からグググ嫌み言うばかりで、ろくすっぽマトモな仕事してないんだから！

たまには無理させてでも働かせてやるわ、あのダメ神父！」

∴言動から察するに、彼女と件の教会の神父は親しい間柄だということコトは理解でき
た。

というワケで、以上の経緯から僕はついに冬木教会に足を踏み入れるコトになったワ
ケだ。

ギルガメッシュと何らかの繋がりを持つ、異様な雰囲気を漂わせていた施設。
言い様の無い胸騒ぎを隠しながら、僕はリン・トオサカの後が続くのだった。

Episode 24 : 冬木教会にて

2004年 1月下旬 夕刻

冬木市 冬木大橋

「これは一体、どうしたコトだ？」

守護者よ、何故に魔術師などを連れている。」

教会に向かう最中、僕とリン・トオサカはギルガメッシュに遭遇した。

「やあ、ギル。」

怪我の具合はもう良いのかい？」

僕の言葉を、彼は歩みながら鼻を鳴らして一笑に伏す。

「悔るな。

この我が、斯様な炸裂如きの痕をいつまでも引きずる筈があるまい。

そんな当然の事実は横に置き、我が問に答えよ。

貴様こそは、星に喚ばれし裁定☒。

マスターを伴とし魔力を獲得する必要なんぞは皆無であると、我は記憶していたが？」

興味があるのかないのか良くわからない目付きで、僕に隣立つトオサカ嬢を眺めるギリガメツシュ。

当の彼女は、明らかな警戒の眼差しで彼を睨んでいた。

恐らく、彼の存在を彼女は今まで認識していなかった筈だ。

前回の戦争から十年、宝物を適当に扱いそのように行動していた筈だと彼は言っていた。

ならば、突然現れたトップ・サーヴァントを目の前にして緊張するのも無理はない。

「ああ、君の記憶通りだよ。

厳密には主従契約の必要が無いってだけで、不可能なワケではないんだけどね。ともあれ、彼女は僕のマスターというワケじゃない。

今回の件を調査するにあたっての協力者さ。」

僕の紹介を受け、ギルガメッシュは目を細める。

些かの興味を持った、というコトだろうか。

「ほお……？」

彼女を眺める目付きには、しっかりとした意志が宿る。

トオサカ嬢も、その視線に対する嫌悪を滲ませ眉間の力を強めた。

「…フン、成る程な。

そういう因果もある、か。

まあ、我にとっては興味の埒外よ。

良からう、せいぜい好きに足掻くが良い。」

雑多に言い放つギルガメッシュ。

ともすれば、挑発ともとれる語調。

しかし、それを受けてもトオサカ嬢は迂闊に言葉は発さない。

ギルガメッシュの強大さを肌で感じとり、出方を伺っているのだろう。

彼女は未だに召喚を成し得ないマスター候補であれど、一廉ひとかたの魔術師だ。

そういう素養は十分に備えているのだろう。

「ああ、勿論そうするさ。」

ところで：君はこれから出掛けるのかい？」

彼女が自ら名乗らないのならば、僕が野暮なお節介を焼くわけにもいかない。

魔術師にとつてもサーヴァントにとつても、名は個々人の大事な要素だ。

迂闊に開示するワケにもいかないだろう。

だから、話を変える。

もうじき夜にさしかかるこの時間に、彼は拠点であろう教会方向から反対側の此方：

トオサカ嬢やシロウの家が在る深山町へと足を向けていた。

今の時期の冬木市夜間の野外は、それだけで魔術的存在にとつて警戒すべき領域と化している。

彼の行動が気にかかるのも、また事実であつた。

「ああ。

何、ちよつとした日課の戯れ：謂わば漫遊よ。

貴様が気にかかる程のコトでも無い。」

目を伏せ薄く笑い、ギルガメツシユが歩み出す。

「ではな、守護者よ。

此度の聖杯戦争、開幕の時は近い。

良く見極め、励めよ。」

もはや語る言葉は無いとでも言うように、我々の横を通り過ぎる。

トオサカ嬢については、端からそこに居ないかのように無視を決め込んで。

「…貴方も、サーヴァントなのでしょう？」

それなのに、その基底に存在する筈の…聖杯に対する執着を、微塵も感じさせない態度。

ルーラーと同じ様に、この闘争そのものには興味がないとでも言うわけ？」

トオサカ嬢が、精一杯の強気を振り絞って問う。

過ぎ行く彼に振り向きもしないが、しかしその語調は名を表す如く凜としていた。

「…ハ、遠坂の娘よ。」

貴様もまた聖杯戦争について…いやさ、サーヴァント英霊存在についての理解が浅いと見えるな。

その様な頑迷さを抱えていては、折角の黒く澄んだ瞳も曇ろうというもの。」

家名を言い当てられ、強く肩を揺らすトオサカ嬢。

英雄王の言葉には、少しだけ愉悦の色が滲んでいた。

その感情の正体は、我々には計り知れない。

少なくとも、興味の対象としては認識されたらしかった。

「……この遠坂わたしの理解が浅いだなんて、そんなコトは有り得ないわ。どういいう意図の発言よ、ソレ。」

名を知る理由を問うのでもなく、真意を探るトオサカ嬢。やはり、彼女は気丈だ。

「さて……それは開戦の時を迎えれば自ずと解ろうさ。もし貴様が此度の余興を戦い抜き、我が前に再び現れたならば、答え合わせをしてやる。

良いな、また一つ楽しみが出来た。

それまで貴様もまた、せいぜい励めよ……雑種。」

歩みを止めず、彼は言い残し去って行った。

夕日の落ちかけた冬木市。

橙色が映り照る未遠川の反射光を浴びながら、我々は佇んでいた。

正確には、トオサカ嬢の足が動かないのである。

「大丈夫かい？」

僕は、ありきたりな言葉で心配の意を示す。

「…貴方、余程現行人類ヒトに対して優しい英霊だったのね。

ああも獯猛で傍若無人な魔力の塊に出会ってしまったと、それを実感するわ。

……あの金ピカな雰囲気キョウキのサーヴァントと、一体どういう関係なのよ、貴方？」

どういう関係…か。

友人と呼ぶにはまだ日が浅いし、彼が居ない場所で勝手に仲間と認定するのも違う気がする。

もちろん、現状は敵対もしていない。

「うん…君と同じかな。

協力者だよ、今回の異常解決にあたってのね。」

僕の言葉は素直な今の気持ちだったのだけど、彼女は胡散臭そうに僕を睨む。

「あれと協調して見せるとか。

貴方…案外なりふり構わない性格してるのね。」

「…ハハ。」

何か真を突かれたような気がして、つい笑ってしまった。

「…ともかく、彼の王氣オーラに当てられて、無理をするのも良くない。

ペースを落として、のんびり向かおうか。

— 先ずは——」

僕は、背負ったバックパックから水筒を取り出す。

「彼処でコーヒーブレイクといこう。

紅茶をご馳走になったお返しだ。」

河川敷の公園を指差し、笑って提案する僕。
それを見た彼女は、呆れたように息を吐いた。

「ほんと…変な使い魔ね、貴方。」

いいわ、その好意を受け取りましょう。

夜中の非常識な時間に殴り込んで、せいぜいあのトンチキ神父を困らせてやろうじゃないの。」

.....

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 冬木教会

「ふむ…キャスター陣営と戦り合ったか。

かの陣営は、確かに今回の聖杯戦争攻略に於ける大きな障害と言えるだろうな。」

夜中の教会で、私は旧き戦友…言峰綺礼に負傷箇所を診て貰っていた。

彼の大きく無骨な掌…いや、治癒の手腕を私は信頼していた。

かつて共に戦った折、何度も助けられたコトを思い出す。

…不覚にも、戦地に在るといふのに安堵してしまう。

「成る程、そう考え真つ先に対処に打って出るのも頷ける。

しかし来日早々行動するのは、些か早計に過ぎたやもしれんな、マクレミッツ。

何せ、彼らは既に冬木市全土を表面から掌握し、ライダー陣営や…アーチャー陣営を退けているのだから。」

綺礼の言葉は、私に稲妻の如き衝撃を齎した。

彼が、既にこの街に広く陣を敷いている事実そのものは把握していた。

この街で、既にサーヴァント戦が幾度か繰り広げられていたコトも。

しかし…それら戦闘総てにガリアスタが関わり、優勢をもって切り抜けていたなどと。

「信じられない、という様な表情だな。

どうやら、かの中東の富豪相手に注視し警戒したつもりが、その実は度し難い侮りが君の胸中を支配していたらしい。」

…そうなのかもしれない。

最大限警戒している、つもりだった。

なのに、この結果なのだ。

見積もりが甘かった。

調べも足りなかった。

だって、ガリアスタの前情報を精査した上でも、信じられない成果を彼らは積み上げて
ているのだ。

元来の聖杯戦争では勝率が低いであろうキャスタークラスを操る、外様の魔術師。魔術使いとさえ揶揄される様な、邪道のやり口の成金政治屋。

絡め手を整える為に多く時間を儲けたのだから、相応の準備はしたのだろうと考えた。

しかし、私とて封印指定執行者だ。

辺境に籠り、膨大な時間と才能、贅を凝らした魔術師の…それこそ、“神殿”に届く程の魔術工房とて潰した経験が在る。

急拵えの拠点など恐るるに足らない…そんな考えが少しも無かったとは言いきれなかった。

「…奇しくも、十年前。

君と同じ様にランサークラスのサーヴァントを従えた時計塔からのマスターが、旧く尊き血筋を誇りに参戦し、慢心の果てに魔術使いに敗北した。

君程の戦士ならば、その情報から心を武装して挑むモノと思っていたのだがな。」

…十年前の、ランサー陣営。

マスターは、希代の天才と名高かった先代のロード・エルメロイ。

そしてサーヴァントは、名高きフィオナ騎士団の一番槍であったという。つまり、ケルトの勇者。

彼ら陣営は、御三家の一たるアインツベルンが雇った魔術師殺しの傭兵に敗北したという。

魔術師一族の命たる、魔術の源流刻印すらズタズタに破壊されるほどの酷い末路を遂げたと聞いた。

今回私が敗北した相手も、それとは異なるとしても魔術使いめいた輩だ。

古い魔術師一族。

ケルトの偉大な槍兵。

そして、魔術使い。

皮肉が過ぎる程、近しい状況だった。

…似たような無様な敗北を、私は大英雄クー・フリーンに齎す所だったのだ。

「ランサーのサーヴァントを教会外にて警邏に回しているのは、敗北による自責の為かね？」

「合わせる顔がない…という訳か。」

その通りだった。

恥ずかしかった。

申し訳なかった。

失望して欲しくなかった。

だって、ランサーは私の大英雄だったから。

短時間接しただけでも解るほど、彼は強く優しかったけれど。

だからこそ、今はランサーのそれを受け取るコトが辛かった。

マスターとして、魔術師としては愚かで弱く用心の足りない命令を彼に下してしまっ
たと自分でも思う。

しかし、今ランサーの顔を見てしまうと、私はダメになる。

それに…綺礼と一緒にならば、少なくともランサーの考える様な不安要素はきつと少
いだろうと思うから。

「ふむ…それをサーヴァントも察している様だ。

確かに、君は前回のランサー陣営と似た失態を演じたと言えよう。

しかし、それでもその主従関係に於いては比べ物にならない程良好である様だな。」

…そう、だろうか。

「そうだともしも。」

互いを尊重し、尊敬しあっている。

共に強く、補い合い、傷を糧とし高め合える。」

不意に、胸中が言葉に漏れていたコトに気付き、頬が熱くなる。

心臓が、早鐘を打つ。

そんな私を見て、綺礼は小さく微笑んだ。

「第四次聖杯戦争を、運営側から見届けた私が保証しよう。」

その始まりから君達ランサー陣営は、前回に於いて最高峰の相性を誇ったキャスター陣営やライダー陣営に比肩する程に、理想的な主従関係であると。

君達ならば、あらゆる困難を乗り越えられるだろう。」

…何故だか、目頭が熱くなるのを感じた。

それほどに、彼の言葉に心が緩んだからなのだろうか。

その言葉に、歓喜してしまったのだろうか。

己が心の、なんと弱いコトだろう。

でも……そう、なのだろうか。

そうだったら、良いな。

嗚呼、また私は……綺礼に勇気付けられている。

強く厳しく、しかし整然としていた彼。

何時も苦悶に耐えるような鉄の如き在り方で、真つ直ぐな真実ばかりを口にした。

久々に会った彼は、少し雰囲気違って見えたけれど。

それは、経年による洗みを含んだ優しさなのかもしれない。

そう思った。

彼もいくらか変わったのかもしれないが、それでも彼から向けられる言葉は心地良かった。

「だからこそ、まだ戦争が開始する前に君に出会えたのは幸運だった。

この戦争唯一の監督役である私が、戦争を放棄していない君を保護する現場を、他者に気取られずに済んだからね。」

……。

唯一の、監督役？

「運が良い。」

それは、おかしい様な。

監督役は…他にも居た筈。

裁定^{ルーラー}のサーヴァントが…。

「今処置するならば、開戦に間に合う。」

ルーラーの存在を知らないのだろうか。

その存在を、隠している様子もない。

人類側の監督役として聖杯戦争を運営する聖堂教会の神父が、未だ世界側の監督役であるルーラーと接触していないのか？

そうだとしても、監督役は保有するとされる霊基盤によって召喚されたサーヴァント

総てを把握している筈だ。

その効果では、ルーラーを感知できない？

もしくは、あの溶け込むような、気配を遮断するようなルーラーの雰囲気か？

或いは、その両方か…。

そうだとするならば、ルーラーは敢えて綺礼に接触していない？

「君の召喚したランサーは優秀だ。

開戦前に墜ちるには、なんとも惜しい英霊だろう。」

ルーラーは、一度顔を合わせただけの相手だ。

しかし、彼は誠実で真つ直ぐだった。

陥れる様な企みは、恐らく無い。

そのルーラーが、なぜか。

協力者たり得る聖堂教会の神父…。

綺礼との接触を、避けていた？

「…あの、綺れ——」

瞬間、ナニカが私のカラダを貫いた。

「故に、彼は私が引き取ろう。」

内側から、熱を持つ血液が溢れるより速く。

激痛が、喉の奥から悲鳴を捻り出すより早く。

事態を、私のココロが理解するより疾く。

嘗て幾度も見た、聖なる刃が彼の聖衣より現出する。

懐かしさすら感じるその閃きは、私に瞬く間すら与えなかった。

「あ……」

振り向く最中であつた私の視線の端には。

「君のこれまでの克己の総ては、無明の闇に消える。
眠りたまえ、バゼット・フラガ・マクレミッツ。」

血肉の紅アカと、令呪刻印の赤アカ。

それらが鮮やかな己の腕部が、カラダを離れて斬られ舞い…。
鮮明に、確かに映って見えていた。

Episode 25 : 不壊誓いし星条の盾

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 冬木教会前

「お引き取りください。」

只今の時刻、綺礼神父は誰ともお会いになりません。」

トオサカ嬢の落ち着きを待った後、教会を訪れた我々は、門前にて膠にべも無い調子で通行を制されてしまった。

立ち塞がるのは、修道服に身を包んだ数人の少年少女。

年の頃は、シロウやサクラ、トオサカ嬢と同程度といったところか。

「私が、綺礼に話があるって言ってるのよ。

それを聞けないって言うの？」

彼らに対し、親しくも威圧する様な調子で立ち向かうトオサカ嬢。

「誰であろうと、通してはならないと言付かっております。

遠坂女史、お引き取りを。」

「……アンタ達。」

やはり、変わらぬ彼らの態度。

苛つくトオサカ嬢。

テコでも動かぬその雰囲気は、かつての身内のエージェント達を思わせる――

その感覚で、彼らのうち何人かの顔を冬木公園の封鎖スタッフの中に確認したコトを
思い出した。

「トオサカ嬢、彼らは？」

「冬木教会を運営する言峰綺礼の弟子達よ。

十年前の冬木大災害で、孤児となって引き取られた子供達。

つまりはまあ…私にとつては弟・妹弟子でもある子達つてワケ。

だから、いつもなら私には頭が上がらない筈なだけど…。」

彼らの態度は、彼女の言葉からは想像もつかない程に無機質だった。

そう、無機質過ぎるのだ。

「[[[[[……]]]]」

…違和感を覚える。

彼らの無機質さは、何か異常だ。

立ち居振舞いは、確かにエージェントめいている。

しかし、そもその根本。

言峰神父という単一存在からの敝命以外の総てを、完全に度外視するような無機質

さ。

その在り方に、何か別の既視感を覚えた。

正体は分からない。

だが…胸騒ぎがする。

しかし――

「成る程。

彼らの頑なさ、君の存在は関係があると考えて良いのかな？

そこで此方を伺うサーヴァントの君。」

僕は、それよりも明確に僕の知覚ルイラに引つかかる存在への対応を優先した。

門に繋がる扉の上に座す空白を見据えて尋ねる。

「……っ！」

トオサカ嬢が、その言葉に触発されて身構える。

「……オイオイ、どうなってるんだ。」

今回の聖杯戦争に参加するサーヴァントは、どいつもこいつも霊体化さえ看破するスキルが標準搭載されてやがんのか？」

呆れたような、諦めたような溜め息を吐きつつ、蒼衣の英霊が姿を表す。

「また、サーヴァント……！」

これで四騎目!？」

なんだってのよ、戦争も開始してないのにこの遭遇頻度は!？」

「そういう嬢ちゃんは、マスター……じゃねエな。」

マスター候補ってトコか？」

なんだ、こいつは一体どういう状況だ?？」

…確かに、彼女は土地の管理者云々の事情を差し引いても、己のサーヴァントを召喚していない身の上で他騎と遭遇し過ぎな気もする。

まあ、僕が巻き込んでしまったのが理由でもあるのだが……だからこそ、協力者である

彼女は護らねばなるまい。

ともあれ、さて。

ルーラーのクラススキルである“真名看破”によつて、彼の正体は把握できる。

ランサーのサーヴァント・クー・フリーン。

名高キケルト神話の大英雄。

ギルガメッシュも大概だが、彼もまたとんでもないビッグネームだ。

「他がどうかは知らないが、僕の霊体感知についてはクラススキルが由来さ。

僕は、ルーラーのサーヴァント。

この戦争の監督役だからね。

彼女は、僕の協力者である魔術師だよ。」

隠す必要もないので、トオサカ嬢との関係と感知のタネは明かす。

聖杯戦争のルールを隅々まで把握しているマスターや、聖杯から知識共有の恩恵を受けているサーヴァントならば、真名看破スキルの存在自体は熟知していて当然だからだ。

僕の今回の戦争のスタンスとして、直に相対した相手には自分がルーラーである事実

を隠匿したりしない。

協力者を得るにせよ、敵対者を浮き彫りにするにせよ、必要な行程だからである。

「…マジかよ。

ってコトは、何か？

この聖杯戦争は、世界を乱しかねない異常が発生してやがるって話か？」

僕の言葉の真贋を、真つ直ぐ受け取るランサー。

中々に聡明らしい。

「ああ。

その正体はまだ分からないけどね。

それを探るのが、僕の目的だ。

此処に赴いたのも、その一環。

そこで、最初の質問に戻るワケだが――

蒼衣のサーヴァント、君は此処で何をしているんだい？」

「……。」

心中の察せぬ表情で、塀上から此方を窺うランサー。しかし、彼が言葉を発さずとも状況は推測可能だった。

「アンタたちも。」

何人も通さないと宣のたまいながら、サーヴアントなんていう特級の不審物が現れても少しも動じず、対処しない。

アレが此処に居るのが、当然であるかのようにね。

これは一体、どういうワケ？」

「「「「……。」」」」」

トオサカ嬢の言葉に、言峰神父の弟子達は黙するのみ。

それはつまり、少なくともこの場所：門前を封鎖するという状況に関しては一定の共通認識を持つというコトだ。

どの程度かは知れないが、なんらかのカタチで繋がっているというコト。

「……つたく、間怠まだるつこしいぜ。

ああ、そうだよ。

我らの態度を、どう受け取ろうと構わんがな。

どうあれ、テメエらを此処から先に通すワケにやいかねえ。」

面倒くさそうに目を伏せ、頭をガリガリ搔きながら溜め息混じりに言い捨てるラン
サー。

「それは——」

「理由は訊くなよ。

正直、サーヴァントとしちや心底気に食わん状況ではあるがな。

それでも今の俺は、此処を塞ぐという目的意思のみで動く兵士だ。

それだけ言やア、テメエみたいな手合いは現状を理解できるだろう？

なあ、ルーラーさんよ。」

射抜くような眼光。

彼という戦士が、敢えて“兵士”と言葉を選ぶ。

それはつまり、ある程度僕というサーヴァントの在り方を見抜いているが故であろう
と思えた。

本当に、聡明だ。

聡明で、それでいて戦士だ。

少しでも僕らが踏み入れば、彼は獰猛に襲い来るコトだろう。

人数で不利な以上、トオサカ嬢の身の安全を考慮すると迂闊な真似は出来なかった。

「…胡散臭いわね。

ルーラー、貴方の権限スキルで無理矢理通るコトは出来ないの？」

イラつきも隠さず、門向こうの教会を睨みながらトオサカ嬢が問う。

「出来なくはないが…今、短絡的にそういう使い方するのは避けたい所だな。」

嫌な膠着状態だ。

そう、僕らが共通して感じ始めた刹那。

「……っ!？」

何やら、硬いモノを破碎するような衝撃音が教会内部より響いた。

閑散とした敷地に響く鈍い音と共に、ランサーが大きく体を揺らす。

衝撃による外的要因、という雰囲気には見えない。

あれは、むしろ…なんらかの内側からのシヨックによる抗いようなないモノ。

「——ッ!？」

こいつは…バゼットっ!!」

そう呻き、足早に教会へ向けて駆けて行くランサー。

ああまで拘っていた門の封鎖を、ノータイムでかなぐり捨ててる程の慌て様。

「…なんなの?」

さて、状況は分からない。

分からないが…明らかに、何やら大きな事態が巻き起こったというコトだけは理解出来た。

「…っ！」

リン！」

僕は咄嗟に、彼女を促して駆け出そうとする…が、そこに変わらず言峰の弟子達が立ち塞がる。

無機質に、しかし硬質に。

「…ドサクサでファーストネームを呼ぶ図々しきは気になるけれど、いいわ、私のコトは気にせず貴方は教会に向かって。」

言葉と同時に、石畳が揺れる。

凄まじい振動と破砕音。

その発生源は、隣立っていたリンだった。

立ち姿は、何気無くて自然なものだ。

しかし、彼女は既に構えていた。

自分のファイティングスタイルを模索する中で、こういう在り方を見聞きしたコトはある。

中国武術というヤツだ。

床を踏みしめ、神父の弟子達の注意を引き付けた、その思惑は理解出来た。

「…しかし、君を独りにするのは——」

「舐めないで。

こいつらは、私の弟・妹弟子だと言ったでしょう。

束になったって、私に片膝すらつかせるコトなど出来やしないわ。

でも、タフさは綺礼譲りだから粘られると鬱陶しい。

だから、私が全員相手にする。」

言いながら、彼女はコートポケットのポケットから何らかの物品を取り出した。

それは、色鮮やかに輝く宝石。

「こんな所で一つ消耗するなんて…腹立たしいけど、先への投資と考えるわ。だから——」

その輝きが目に入るや否や、神父の弟子達は動き出した。一斉に、リンの行動を止めるべく襲い来る。

「うん？」

こいつが発動したら、同時に教会目掛けて全速力で走りなさい。協力者だと言うのなら、利のために動いて。」

僕の返答を待つまでもなく、彼女は宝石と詠唱ことばを放った。

「————A c h t ……」八番

言葉はそれきりだったのか、後に続いたのか。

ともかく、教会からの破碎音などメではない…むしろ、この靈基からだに染み付いた記憶を

呼び覚ますような、戦場の炸裂じみた爆発音が全ての音を掻き消してしまった。

同時に立ち上る爆炎と爆煙。

覚悟が奮い立つのを感じる。

リン・トオサカ。

彼女はつくづく――

自分が思ったよりもずっと軽やかに、僕の脚は塀を飛び越えていた。

.....

少し時を遡り。

冬木市 新都 冬木教会

「驚いた。

心の臓を潰せなかったという事実もそうだが、胸に孔を空けられ、片腕を失つても尚、反撃する余力を持ち合わせていたとは。

君に、一欠片でも私に対する疑心が芽生えていたというコトだろうか？

そうだとするならば……まあ、多少は喜ばしい事実ではある。」

赤い血を滴らせ、目を見開き言峰綺礼は呟く。

彼が洩らす感嘆の溜め息は、きっと本心なのだろう。

しかし、その身の健康状態に私のカウンターの影響などは皆無であった。

何せ、傷一つついていない。

私が破砕したのは、彼が座っていた椅子や、セツトの机のみであった故に。

溢れ落ちる血液は、彼が掴む私の左腕から発せられたモノだと理解出来ていた。

「何故……何故なのですか、綺礼。

どうして、あなたが……わたしを……？」

情けない未練が、心にもない疑問符を伴って口をつく。

何故、そんなのは決まっている。

私の体を傷付けた、その刹那に吐いた言葉が物語っている。

彼の持つ、私の左腕から…令呪刻印が消失している事実が物語っている。

「そいつは、俺も是非とも聞きてエな…ッ！」

強い声が、怒りを伴って私の耳に届いた。

教会の壁を粉碎し、私の大英雄が飛び込んでくる。

その手に握られた朱槍は、真っ先に言峰綺礼めがけて突き進んだ。

「さて、何故と問われてもな。

私が時計塔のマスターを陥れる理由など、一つしかあるまい。」

「えっ…?」

「——っ!？」

ば、バカな…テメエ!？」

大英雄クー・フリーンの魔槍は、一人の神父にんげんの手によつて受け止められていた。言峰綺礼は魔槍の柄を握り、刺突による突進力を完全に腕力のみで制していたのである。

「さて…ふむ。

ランサー、クー・フリーンよ。

令呪をもつて命ずる。」

彼の言葉に私は肩を震わせ、ランサーはハッとする。

「テメエ、待ちやが——」

「主替に、同意したまえ」。

サーヴァントへの絶対命令権、令呪が起動する。

圧縮された膨大な魔力の塊が、奇跡となってランサーを縛る。

「……ッっ!!!」

っが、ああああアッ!!!」

ランサーは、地に片膝をついて呻いた。

令呪の束縛に、必死に抗っているのだろう。

身を震わせる、咆哮にも似た大英雄の慟哭が教会に響く。

「ら、ランサー……っ!」

私は、傷口の激痛と、大量に流れ出る血液に目眩を覚えながらも必死に叫んだ。

叫んだつもりだ。

しかし言葉はか細く、叫ぶ彼に聞こえる様な力強さを持つてはくれない。

「強情だな。

さすがはクランの猛犬といった所か。
ならば…重ねて令呪を持って命ずる。

「主替に賛同しろ、ランサー」。

二画の令呪使用…!?

だが、私から剥ぎ取った令呪に残った画数は二画のみだ。
それをこの状況で全て使い切るなど、サーヴァントの逆を——

「——さらに重ねて、二画の令呪を持って命ずる。

「主替に同意せよ」。

——馬鹿、な。

「ランサーの直接命令権さえ獲得すれば、あとはどうとでもなる。

私には、父より受け継いだ聖杯戦争監督権限…預託令呪が在るのでね。今の今まで使用する機会が無かったので、折角だから有効活用させてもらおう。」

霊基盤と共に、聖堂教会側が管理する運営能力…！

迂闊ものめ、私はまた失念を……！

「……っ!？」

……がッ、あ……ッ！」

もがき足掻いていたランサーの、体が静止する。

「落ち着いたかね、ランサー?」

槍から手を離し、後ろ手に手を組んだ綺礼が愉快そうに問いかけた。ランサーは返答を発さず、槍を杖のように床に突き立て立ち上がる。

「よろしい、では最初の命令だ。

其処に居る、時計塔からの部外者を始末しろ。
手段は任せる。」

「……クソ野郎が。」

苦々しく呟きながら、ランサーは槍を払う。

その眼は、悲しげに私を見据えていた。

「ラン……サー……。」

……どうして。

「……すまねエな、元マスター。」

野郎の胡散臭さに、厭な予感はしてたんだが……ここまで最悪の展開になるとは。

——ああ、クソっ。」

大英雄が、槍を構える。

切っ先は、私に向けられていた。

綺礼は、私たちを見ながら愉しそうに嗤っている。

……どうして、こうなってしまったのだろう。

私は、愚かだけれど。

愚かだったけれど。

「こんなコト、俺が吐いて良い言じゃねエ。

未練にも程があるが……。

せめて——」

嗚呼、脚に力が入らない。

逃げる気力も、湧かない。

こんな救いようなない結末を、向かえるだなんて。

「俺に、バゼットを殺させないでくれねエか？」

裁定者さんよ。」

間髪射れず、言葉が響く。

男の声。

勇猛な声色。

「スターズアンドストライプス不壊誓いし星条の盾!!」

瞬間、カン高い金属音が響いた。

武器と武器が、ぶつかり弾ける音。

続け様に、それごと吹き飛ばす衝突音が轟く。

「え…？」

瞬間…そう、まさに瞬間だった。

白い星の瞬きが、赤と青の尾を引いて目前を横切る。

その勢いに、応戦したランサーは吹き飛ばされてしまったのだ。

「…なんだ、お前は。」

綺礼の口から、シンプルな疑問が投げかけられた。

愉快そうに歪んでいた笑みはなりを潜め、深みに沈んだように感情の読み取れない表情で、それを睨み付ける。

「何、と訊かれてもな。

どう答えたものか。

何せ、僕は生前いろんな呼び方をされたものだからね。」

白亜の壁を粉碎し、彼方へ消えたランサーの去った其処には、一人の男が立っていた。白と、赤と、青。

ランサーに近い、シンプルな意匠。

「だから、一先ずこう答えておくよ。

今この場を目の当たりにした限りに於いて、嘘偽らざる気持ちだからね。」

しかし確かな象徴として作られたと感じさせられる、星の戦スケイルアーマー衣を纏った戦士。

頭部を覆う兜ヘッドギアの額には、強い主張を放つAの一字。

そして、その手には戦衣と同様のシンボルを戴く、星の盾が鈍く輝いていた。

「サーヴァント・ルーラー。」

窮アベンジャーズ地に立たされ自由を奪われようとしている知人の代行をするために戦う、一騎の逆襲者さ。」

Episode 26 : 聖域の戦い

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 冬木教会

「ルーラー…：正規の聖杯戦争では呼ばれざる、裁定の役割を与えられたエクストラクラスのサーヴァント。」

盾持ち対峙する英霊を前に、淡々と口を開く綺礼。

動揺するでもなく、やはり鉄のように頑なに、態度を変じさせない。

「成る程、マスターとしての視覚を有した故に、お前がサーヴァントであるというコトは把握できる。」

しかし、その身の証をどう立てる？

少なくとも〃聖堂教会が認定した聖人〃でもない限り、この戦争の監督役を担っている身としては――」

高速回転する円盤が直線に飛び襲い、綺礼の言葉を遮った。

「っ……」

咄嗟に聖なる刃…黒鍵こっけんを出現させ、彼はそれを弾こうとする。

素手で防ぐコトに危険を感じたのだろうが、それでも甘かったらしい。

円盤を受けた三振りの霊剣は、けたたましい金属音を発して総て砕け散った。

「む…ッ!!」

円盤シールドの持ち主たる英霊は、その陰から間髪入れずに駆け寄っていた。

弾かれた盾を直ぐ様キヤツチしつつ、勢いをつけた飛び蹴りを叩き込む。

盾の威力を殺しきれなかった綺礼は体勢を崩し、それを受けるしかなかった。

「ぐあッ……。」

ガリアスタの礼装アーマーが繰り出した拳撃。

あれの威力を、私はダンプカーの追突と連想した。

しかし、目の前のサーヴァントが繰り出したソレは、明らかにそれすらも大きく超える破壊力を誇っていた。

それが、為す術もない綺礼の胸部に直撃する。

当然の帰結として、彼の体はキリモミ回転をしながらランサーとは別方向へ吹き飛んでいった。

壁面を破壊し、轟音と共に沈む。

「悪いが、少なくとも現状に於いて貴方と問答をするつもりはない。

聖杯戦争の部外者を害そうとした時点で、貴方は「裁定者ルイラーとして僕が決めた信念ルイール」の許容範囲を大きく逸脱している。

ならば、貴方は僕が止めるべき敵だ。」

綺礼の埋もれた瓦礫を睨みながら、彼はキツパリと告げた。

部外者：その呼称に該当する人物は、勿論私しか居ないだろう。

ルーラーは、状況から即座に判断したのだ。

腕を失い血を流して震える私こそは、マスターとサーヴァント聖杯戦争参加者に襲われる弱者である。

「…ルーラー。」

貴方は、どうして此処に……？」

許容するしかない現状を受け止め、私は問う。

「やあ、赤毛の魔術師さん。

此処に来たのは——」

言葉の最中、彼は走り出す。

かろうじて強化していられる私の視力で、なんとか認識できる速度で私に迫り来る。

「え——」

そうして彼は背を向けて、私の側に立った。
同時に、先程も聞いた大きな金属音が響く。

「——少なくとも、この状況に参戦したのは偶然さ。

調査の一環で訪れた教会で、おかしな様子の彼に遭遇したのがキツカケだよ。」

盾の向こうで槍を握る、我がかつてのサーヴァント僕を見据えるルーラー。

「…チツ。

氣イ抜くな、元バゼットマスター。

俺は依然、お前を殺すように指示を受けている状態なんだからよ。

俺は戦士として、主命を違える真似はしない…お前が一番、理解しているコトだろうが。」

ルーラーに刺突を防がれ、即座にその場を飛び退いたランサーが言い放つ。

「ランサー……！」

「……なんとも複雑な事情がありそうだね、君達も。」

「とはいえ——」

今度は、銀色の流線が迫り来る。

ルーラーは、即座にそれを盾で弾いた。

流線は黒鍵、発信源は瓦礫。

そこには、英霊の跳び蹴りを受けてなお平然と立つ綺礼の姿が在った。

「綺礼……!？」

「頑丈だな、神父。」

「それも、クシプー功夫の賜物ってヤツかい？」

「……成る程、そういうワケか。」

「ならば、尚更悠長にコトを構えていられる状況でも無くなった。」

…ランサー、殲滅対象の追加だ。

マクレミッツの始末は最優先とし、イレギュラーたるルーラーも此処で始末する。」

何気ない立ち振舞い。

しかし確かに感じられる境の冷たい圧が、綺礼を包んでいた。

「…了解。」

ランサーもまた、槍を払い身構える。

空気が張り詰め、物理的にすら重苦しく、息苦しくなった様に感じられた。

「——とはいえ、赤毛のお嬢さん…ミス・マクレミッツ、で良かったかな。

詳しい話は後々聞かせてもらおうでしょう。

今は、この状況を打破する！」

私の同意を待つ迄もなく、戦端はランサーの咆哮によって開かれた。

猛り、奮い、迫り来る。

「そらそらそらアアツ!!」

迫り来る朱い槍撃。

その間を縫うように飛来する黒鍵。

中・遠距離から覆い被さるように私達を包囲する、刃の結界。

「…すいこ。」

片や、我が昔日の憧憬に輝く大英雄。

片や、我が旧友にして恩人の異端狩り。

どちらも、封印指定執行者にして赤枝の戦士たる私をして、尊敬に値する武人だ。

彼らは初見にも関わらず、恐ろしい精度を誇る連携絶技を展開していた。

確かに、彼らも凄い。

凄まじい。

だが、私が視線を奪われたのは、それではなかった。

そんな絶技を、ルーラーは盾の一つを持って完璧に防ぎきっていたのである。

決して、身体能力に於いてランサーを凌駕しているワケではない筈だ。
寧ろ逆：迅速さも筋力も、ランサーが断然優れている。

だが、ルーラーは屈しない。

その戦闘行動は常に的確で、己より強大な相手や複数人相手との戦闘を得手としている様に見受けられた。

それこそ、スキルとして^{からだ}霊基に深く刻み付けられている程に。

「オイオイ、マジかよ。」

認めるのはシャクだが、此方の新たなマスターもまた、かなりの手練だ。

我が槍の呼吸を把握し、それを完全に補うカタチで放たれし聖なる飛剣。

そのどちらも、^まテメエは纏めて捌きやがるってのかよ！」

先程までの陰鬱とした眼差しとは、うって変わって好奇の光を^{ランラン}爛々と灯すランサー。
想像以上の好敵手の登場に、戦意が昂っているのだろう。

「これでも、^{サーヴァント}此方も英霊だ！」

神秘の濃度では君には遠く及ばないだろうが、護るための戦いで遅れをとるつもりは

ない！」

護るための、戦い…。

彼は、私を護るために…ほんの一瞬、顔見知っただけの私のために戦ってくれているのか。

「…ハ、そうかい！」

テメエもキャスターの野郎と同じく近代の英霊なんだろうが、うって変わってらしいじゃねエか！

良いぜ、英霊ツてなアそうじゃねえとなア！」

嬉しそうに、ランサーは槍撃の攻勢を強めた。

それでも、ルーラーは退かない、負けない。

いつしかランサーの槍は、ルーラーを殺す為だけに振るわれていた。

「…存外というワケでもないが、粘ってくれるな。

仕方あるまい。

優先度の変更だ、ランサー。

邪魔物の前に、障害物を排除する。」

黒鍵による援護を途絶えさせず、綺礼が呟く。

金属の激突音と破碎音と最中、確かに聞いた。

邪魔物…か。

それは、そうだ。

私を殺そうとする…新たななる、ランサー陣営にとつてだけじゃない。

私を護ろうとしてくれる彼ルルーにとつてだって、私は勿論邪魔なお荷物だった。

でも…どうするコトも出来ない。

片腕を失い、魔剣を撃つのは勿論…参戦するコトも当然ままならず。

かと言って、綺礼やランサーを掻い潜ってこの場を離れる事すら難しかった。

それにきつと、このルルーは…私を切り捨てて、離脱を選択するコトが出来るタイ

プじゃない。

戦場では、そういう手合いは生き残れないのが常だが…。

生き残った戦士の結果こそが、彼という英霊存在なのだ。

そう思わせる何かが、彼には確かにあった。

どうするコトも出来ない理由は、確かに在った。

「…フン、良いだろう。」

どうせ、相手は元マスターとルーラー。

真名もとうに割れているともなれば、出し惜しみの必要もない…！」

攻勢が、一瞬静まる。

だが、それはほんの一息。

「必殺の…！」

魔槍の一撃が来る、ルーラーっ！」

私は、失われた血による脱力も忘れて必死に叫ぶ。

その一瞬に、ランサーの朱い魔力は迸る。

ルーラーも理解してくれたのか、承知の上だったのか。

それに追隨する様に、彼の中からも高い魔力が出力されようとしているらしかった。

「この一撃、手向けと受け取れ……！」

鋭い殺意。

魔力は、解き放たれた。

「^ゲ刺し^イ穿つ^ボ死棘^ルの槍^ク……！」

その躰ごと、クー・フリーンの槍は一条の光と化す。

心の臓を貫くコトに特化した、一撃必殺の鋭さを誇る刺突槍術。

しかし。

「グスターズアンドストライプス不壊誓いし星条の盾！」

槍の先には、盾が在った。

死棘の一撃を正面から受けたにも関わらず、その装備者はおろか、盾にすら傷の一つもついていない。

「——防いだな、ルーラー。」

我が必殺の一撃を……！」

「……そりゃあ防ぐさつ。」

この盾は、地上最強の盾だ。

友人達の、想いの籠った盾だ！」

そのままルーラーは間髪いれず、
盾ラウンドシールドの曲線をスライドさせて槍を往なす。

「——ッ！」

「彼らと出会い、駆け抜けた逸話じんせいの末に得た幸運しんせいが在つてこそ！」

僕は、此処に立っているんだ……！」

擦れる刃に火花を散らし、懐に飛び込んだルーラーの盾が、その外縁にてランサーの胸部を強く打った。

まるで拳闘ボクシングのカウンターののように、死棘ゲイ・ボルクの槍の勢いは相乗され、彼自身に返る。盾は胸板に突き刺さり、血が噴き出す。

「偉大なる伝説相手にだって！」

決して、負けはしないぞッ!!」

そのまま殴り抜かれ、ランサーは吹き飛ばされる。

…が、二度も為すがままの彼でもない。

槍を地に突き刺し、勢いを制して何とか立ち止まったらしい。

「…なんて野郎だ。

面白エ、あア面白エな！

上等だ、そういう手合いこそ戦り甲斐があるってモンだぜ!!」

獣の如き笑みで、再度進撃してくるランサー。

先のキャスター戦や、今のダメージは確実に蓄積している。

しかし、その魔力の猛りは寧ろ激している様にも見受けられた。

高ランクの「戦闘続行」スキルが作用しているのだろうが、明らかにそれだけが理由ではあるまい。

生前の逸話による狂戦士への高い適正も納得できてしまう程に、彼の戦意は昂り続けていた。

「それは光栄な話だが…今はその勢い、あまり歓迎できないね！」

一撃必殺を謳った直後に、これほど嵐のような乱撃とは…！

前言撤回するつもりはないが…狙い澄まされるより、寧ろ厄介だぞ！」

言いつつ、それでも彼は総てをはね除ける。

その眼で見極め、その躰で躍り、その盾で弾く。

神話の大英雄を前に、一步も退かないのだ。

恐らく彼はきつと、ルルー強度や霊格でもクー・フリーンに遠く及ばない…近代の英霊である筈なのに。

彼の外見や、登場時や先程に叫んだコトバ…。

「スターズアンドストライプス
星条旗」。

恐らく宝具の真価を發揮する為の真名解放だったのだろうが、であれば明らかに彼はアメリカ合衆国由来の英霊である筈だ。

その点については露骨なほど解りやすい割りに、その真名は謎めいていて、推し量るコトが出来ない。

…が、かの神秘薄き近代文明の最たる怪物国家の英霊が、ケルト神話の大英雄たるクー・フリーンに霊格で及ぶ筈などは無いというコトだけは理解なのだ。

神秘は、より古き神秘によつて打ち負かされる。

そんなのは、魔術世界では常識だ。

常識で、ある筈なのに。

もつとも、それは近代どころか近未来的物質文明を象徴するかの如き奇妙なキャスター陣営も同様ではあつたのだが。

「ハ、ぬかせ！

その堅牢さ、地上最強つてのはフカシじゃねエらしい！

その盾と、その心身の強さを併せさえすれば、何者をも護り通すコトが出来らう
よー！」

そうだ。

そんな考察を吹き飛ばすほどに、明確な力強さをルーラーは持っている。

その星条の盾は、影の国の女王より与えられたという魔槍の連撃を悉く防いでいた。
砕かれず、傷付かず、私の前に立つてくれている。

自分の無力が、情けなくて悔しいけれど……でも。

古き血筋に固執し育つた私にとっては、彼の存在はなんだかとても新鮮で。

それに、とても頼もしく見えた。

「——だが、立ちほだかるモノ総てをその小さな盾一つで防ごうとすれば、些かの檻樓ポロも出ようというモノだ。」

盾の隙間。

刃の隙間。

ほんの小さな一瞬の隙を突いて、現出する拳。

そうだ、言峰綺礼……！

彼の恐ろしさは、メイソウエボン聖堂教会の代行者界限でも扱い難いとされる退魔の護符・黒鍵を操るといふ点では断じて無い。

それは、超至近距離戦に於いては陸の船とさえ呼ばれる、一つの拳撃の極地！

「ルーラー！」

言峰綺礼は八極拳士です！

血を吐き、叫ぶ。

それつきりしか出来ない私だったのに、それすらも遅かったかもしれない。既に払いによって隙を作るまでもなく、ルーラーの盾はランサーの荒れ狂う槍によって塞がれている。

「……！」

強く踏み抜かれる地。

返しチヨウチユウの衝撃を纏い綺礼の頂チヨウチユウ 肘は鋭さを増していた。
怖気おそけが走る。

馬鹿な……でも、あの威圧感は。

あの肘は、恐らく英霊にだつて突き刺さる……！

「——成る程、踏み込みの早さは、生前のいつかに噂で聞いた鐵拳士アイアン・フィストを連想させる。やはり、神父……確かに貴方は拳士かもしれないが、それ以前に尋常な人間ではないな。」

ルーラーの躰に綺礼の肘が差し込まれると思われた、その直前。

鮮烈なる光が、炸裂にも似た轟音と共に彼の右腕ルイラーに集約しているのが見えた。

「——バカな！」

マスター、避けやがれ！」

「……ッ！」

ランサーのその言葉が、私ではなく綺礼に向けられている。

そんな、英雄としての彼の姿を垣間見るコトが出来て嬉しくもあり、少し悲しくもあり……でも、何故だろうか。

悲しみが薄れる程に、私はその稲光に心惹かれていた。

「力を貸してくれ！」

「悉く打ち砕く雷神の鎚!!」

——何故かは、わからない。

ムジヨルニア。

北歐神話に於ける大神の子、雷神ソールが持つとされる鎚。

何故、その名を冠する宝具を、合衆国の英霊であろうルーラーが所持していたのか。ともあれ、そこから発せられた神々しい雷光は、綺礼を迎え撃った。

嗚呼、八極の肘で捉える程に接近していたのだ。

恐らく、その威力を真正面から総て浴び、撃退されただろう。

ランサーは、どうなっただろうか。

ルーラーは、どうしたのだろうか。

それらに気を向けるより、私は稲光に見入ってしまった。

私の血脈なに納められた太陽神フラガラックの剣と雷神の鎚が、天空の属性によって惹かれあつたのだろうか。

マクレミッツ家秘伝のルーン魔術に関する魔術刻印が、雷神の父にしてルーンの祖である大神が手ずから鎚に刻みし「原初のルーン」に呼応したのか。

それとも…それらとは全く関係の無い何らかの縁が、私と鎚にはあつたのか。

あるいは、その全てなのか。

私は、その美しさに目を奪われた。

だから、手を伸ばした。

失った筈の左手も、きつと伸びていて…両の手で触れようと身を乗り出した。

流れる血の感覚も、痛みも、気付いたら消滅していた。

そうして、ルーラーがそれを察知したのか、振り返った頃には総てが遅くて。

念願叶って、私は――

……

……

……

『驚いたな。』

此処にはきつと、ロ・ジ・ヤ・ー・ス・の・ヤ・ツ・だ・つ・て・来・な・い・だ・ろ・う・と・思・つ・て・い・た・の・に・。』

.....

雷に、触れた。

E p i s o d e 2 7 : 鎮魂歌

正直、現状は想定外の事態ではあった。

私は確かに、彼女の中に存在していた。

十年前のあの日、奴がこの地に喚ばれた瞬間から今までずっと。

キツカケは、まあ様々存在する。

いくつかの要素が、彼女の中で絡み混ざり合って出来上がった霊核。

そこに、彼女が成長することに蓄積され、しかし表出させるコトのなかった感情が肉付けされてゆく。

やがて、彼女が自身へと自問するための別人格として確立した。

それは良い。

しかし、本来そこ止まりだった筈なのだ。

すべては、あの日。

あの暖かい日の、帰り道。

私の確立は、さらに一つ別の段階へと推移した。
してしまつた。

何故なのか。

何か、強く優しい祈りが私を突き動かした。

⌞
——
■ ■ ■
ちやんが、もつと自分に素直になれますように。
——
⌟

——暖かな、ひだまりのようなソレが私を強くした。

そうして私という霊核こころは、確かなる霊基からだを獲得してしまつた。

ならば…動くしかあるまい。

今まで、表立つコトのなかつた感情である私だが。

それでも、私を支えてくれた祈りに応えるだけの意思は確かに存在した。

その意思を貫く為ならば、私はなんだつてやってやろう。

なんだつて、やれるのだ。

それが例え、私を生み出した彼女じぶんを害する結果になろうとも。

.....
時を、少し遡り。

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 冬木教会前

正直、現状は想定外の事態ではあつた。

「くっ……っ、のおー！」

私の八極拳は確かに彼ら突き抜いていた。
しかし、彼らは倒れない。

フィン^ガの一撃^ドの呪いは確かに、彼らを撃っていた。

しかし、彼らは倒れない。

殺さぬように加減したとはいえ、彼らは私の宝石魔術による炸裂を受けてさえも立ち上がってきたのだ。

有り得ない……いくら綺礼譲りのタフネスを誇るとはいえ、そんなものは人類が誇って良い強度ではなかった。

「アンタ達、ホントに私の知っている言峰^{きょうだい}兄弟^ななの!?

どうなってるのよ、その異常な身体は!」

「……。」

無機質に投げかけられる視線と、機械的な拳。

合間に放たれる黒鍵。

そのどれも私は躲し続けていたが、しかしそれにも限度があつた。

奴らは、どれだけダメージを積み重ねようと動きを緩めない。

まるで、体力などという概念が存在しないかの様に。

このままでは、確実にジリ貧になる。

ルーラーが事態を解決し、増援に現れてくれるコトばかりを期待は出来ない。現状の打開が、自分一人では困難であると認めるしかない事実が齒痒かった。

「——もうっ！」

私は、苛立ちを震脚シンキヤクに籠める。

地を踏み、返る衝撃を拳に備え打ち放つ。

吹き飛ぶ兄弟弟の長男から視線を離し、次の標的へ目を向けようとした。

その時、少しの違和感。

言峰綺礼の弟子・義理の子供達は、現状五名存在する。

当初はもつと人数が存在したが、他所に引き取られていたりする者達もおり、残ったのは四男一女のみ。

彼らは八極拳士として、聖職者として綺礼の影響を存分に受けて育った子供達である。

年齢順に、上から言峰一郎、次郎、花子、三郎——

あまりにやる気のないネーミングに、それを聞いた当初は私も憤ったものだが……

それでも、総てを失った後に与えられたモノに心底喜んだ様子の彼らを見て、毒気が抜かれてしまったのを覚えている。

そんな血の通った表情を失い、無機質に襲い来る彼ら兄や姉。

それらとは違った様子の一人が、私に違和感を覚えさせたのである。

「…どうやら、アンタは少し様子が違うみたいね。

そういえば、私達がここに来たとき応対したのもアンタだった。

アンタに訊けば、この狂った現状の理由も解るのかしら？

四郎^{シロウ}」

言峰兄弟弟の、末の子。

言峰四郎。

私と同年齢のそいつは、薄ら笑いを浮かべて後方に佇んでいた。

「私の領分で貴女にお答えできるコトなど存在しませんよ、言峰女史。

確かに私は兄や姉と違って未熟者で、綺礼神父へ滅私を捧げるには功夫が足りていない。

ですが、その在り様は彼らと変わりないつもりですから。」

四郎は笑顔で黒鍵を放つ。

この程度なら、ガンドで撃ち落とせる。

決め手がないのはお互い様だが、確かな害意が彼らの攻め手に籠っているのだけは理解出来ていた。

「侵入を阻む意思から、私を殺す意思に設定を変えているってワケ…?」

なんでよ…:どうして、そういう結論になるの?

綺礼のヤツは、アンタ達にどういう命令を下したの?

アンタ達は、アイツに何を仕込まれたの!?

何をしようとしているのよ、言峰^{アンタたち}一家は!」

私はやはり、苛立ちを威力に変えてガンドを撃ち出す。

迫り来る三郎の脚を撃ち抜き、機動力を削ぐつもりだった。

だが、それでも奴らは止まらない。

「我々の活動理念など、十年の時を共にした貴女ならばご存じの筈だ。

再び答えるべき事柄でも無いかも知れませんが…そうですね。」

吹き飛ばした筈の太郎が、次郎が、正面より迫り来る。

花子と三郎は、背後より黒鍵を放つ。

確かに脅威だ。

だが彼らの技量などは私に遠く及ばず、対処は容易かった。

しかし、その対処の間。

末の四郎がほんの一瞬、フリーとなつてしまふ事実だけは回避のしようがなく。

「敢えて告げましょう。

我々の理念は、常に…少しの芯もブレるコトなく。

新たな誕生を祝福し、全人類を救済するコトであると。」

四郎の手が拳を握るでなく、黒鍵を構えるでなく。

見たコトもない銃火器らしきモノを携えているのを、私は確認した。

此方に向ける姿を目の当たりにしてもまた、やはり対処のしようは無いのだった。

「宝具、断片展開。

全天を浄化せし光の矢よ。

彼の者に、絶対なる慈悲を与えたまえ……！」

魔術とは明らかに違う、この世界の理ならざる神秘。

そう感じさせる違和感を、あの銃火器は纏っていた。

それは、確かなる光の脅威となつて銃口に溜められてゆく。

その速度は、あまりにも一瞬で。

何を行う間も無いままに、光は放たれ直線を描いた。

光線は、当然此方に向かい飛ぶ。

飛んだのだろう。

何せ光だ。

その弾速の視認が叶つたとしても、やはりどうするコトも出来なかつた。

「——っ！」

「呆れたわ。

まさかと思うけど、一応訊かせてもらおう。

今の一瞬、生を諦めたりしなかつたわよね？

遠坂家の当主さん。」

光線の威力は、私に着弾しない。

「えっ…？」

何処からか降り立った、目の前の存在によって弾かれたらしかった。

「…何者ですか、貴女は。」

光線を撃ち出し弾かれた四郎が、銃を構えたまま笑顔を絶やさず問う。

私と兄弟達の間立つ女は、その身に纏う白い外套を翻した。

その身には、恐らく黒い装甲を纏っている……筈。

曖昧な表現になってしまふのは、その装甲をさらに覆うカタチで外套より漏れ出る黒い霧のためだった。

霧は女を隠し、認識を阻害する。

「何者か、ね。

そこのところを、上手く答えるという発想が今まで無かつたわ。

でも確かに、ええ。

名前が無いのは不便といえば不便……そうね。

何か、地球人らしい名乗りは無いものかしら。」

女はその手に握っていた剣を杖のように地に突き立てつつ、もう片方の手を顎に当てて思案する。

その声もまた、姿の如くノイズ混じりで聞き取りにくい。

「アー…ザードウー・ハッセルフランとか？」

…いいえ、何か違うわね。

違った筈。

それに、私は別に喋る船？

じゃなくて、車…？

とにかく、そういったアイテムは持ってないもの。

それに、心身共に女だわ。」

ブツブツ呟く女の顔が揺れ、外套のフードと霧に隠された顔が少し表に覗いた。

鼻から上はやはり装甲に覆われており、目に相当する部分には赤い亀裂が妖しく光る。

そこまで観察して、漸くノイズまじりの彼女の素性が、ほんの少し垣間見えた様な気がした。

それは、膨大なる魔力の塊。

この短期間で、幾つも確認した最上級の神秘存在。

「貴女…サーヴァント?」

私の問いに、彼女は赤い亀裂を此方に向ける。

眼窩がんかなどは確認できないけれど、確かに見られていると確信できる威圧感が、其処にはあつた。

「…さあ、どうなのかしら?」

正直なところ、自分で自分をどういう風に定義すべきか分からないの。」

剣をプラプラ揺らし、それに視線を落としながら呟く女。

その剣は、間違いなく四郎が放った自称・宝具とやらの光を容易く弾いた代物である。その挙動だけで、この場にいる誰よりも強力な存在であろうコトは間違いなかった。

謎の強者の乱入に、誰も迂闊に動けない。

「では、所感で構いませんよ。

貴女という存在の理由…即ち、その目的は?」

「この場に闖入ちんにゅうした狙いを、是非お聞かせ願いたい。」

四郎が、変わらぬ調子で問いかける。

兄弟弟揃って戦闘態勢は緩まず、乱入者を警戒する。

「目的…：そうね、そこにしましょう。」

行動理由を、そのまま呼び名に紐付けるのは間違ではない筈よ。

「そうよね？」

静かな声色で、納得したように頷く女。

そうして外套を翻し、剣を払う。

その閃きを視認するやいなや、まさしく同時に。

「私は別人格^{アルターエゴ}・レクイエム。」

刃は、言峰次郎の首を刎^はねていた。

「アンタ達のように、間違えてしまった存在に対して捧げる鎮魂歌おわりのうた。そういうコトにしておいて頂戴。」

そこからは、凄烈せいいれつの一言に尽きる。

「…どういふ状況よ、コレ。」

アルターエゴを名乗った女の、剣が躍る。

八極の拳など、届く前に叩き斬られる。

四郎の光線などは通用せず、他の兄弟達も同種の宝具を展開したとて無駄だった。斬られる。伐られる。切られる。

拳げ句、花子が放った黒鍵に至っては、信じられないコトに刃を掴んで受け止められてしまった。

「この靈基からだ曰く、貴女の飛劍の扱いは全くなつちやいないそうよ。刃を投げるなら——」

握られた黒鍵が変質する。

それは、身に纏う黒い霧の作用であつたのか。

はたまた、女がサーヴァントであるとしたならば、彼女のスキルだか宝具だかが作用した結果であつたのか。

黒鍵は名の如く、輝く白刃すらも飲み込んで黒く染まってしまうていた。

「コレくらいはやらないと。」

漆黒の聖書つるぎを、まるでそれが最初から我が物であつたかの様に振るう。

黒い霧が尾を引くその腕は、魅入られるほど美しい所作で黒鍵を放つた。

その自然な動作からは想像もつかない程の速度で、黒鍵は飛ぶ。

そのままソレを放つた花子の腕を穿ち抜き、その向こうの分厚い石扉までをもコナゴナに粉碎してしまった。

「『鉄甲作用』……って言うらしいわよ、この技。

手首の返しを工夫して、『弾丸』としての物理威力をハネ上げる。

私みたいな存在と戦うなら、最低限これくらいは出来ないとお話にならないんじゃないかな
いかしら。」

…圧倒的だった。

弟・妹弟子達が…幼馴染み達が蹂躪されゆく様を、私は——

「――Anfang^{セツト}。」

宝石魔術の炸裂が、アルターエゴに直撃する。

爆炎が上がる。

一旦は、その攻勢を止められただろう。

しかし、私のなけなしの財産をはたいた一撃が、大したダメージを与えられていない
コトだけは理解できた。

「…どういふつもり？」

見て分からないかしら、私は貴女に助力していたつもりなのだけれど。」

爆炎が晴れた向こうから、赤い亀裂が此方を睨んでいるのが垣間見える。

「…誰が、そんなコトを頼んだのよ。」

アンタが何者かは知らないけど、余計なお世話だつて言うの！」

私は、牽制にガンドを撃ち込む。

通用しないコトなんて、分かっている。

ただ、注意をこちらに向けさせるだけでいい。

…これ以上、綺礼の子供達を謎の闖入者に殺させるワケにはいかなかった。

「…ハア。」

まさか、幼馴染みとやらの情が湧いたとしても言うんじゃないでしょうね？

いえ…気持ちちは誰よりも分かるつもりだけどね。」

アルターエゴは、私のガンドに対して少しの防御行動もとるコトなく歩き出す。

向かう先には、奴が斬り飛ばした次郎の首。それを鷲掴み、その断面を私に見せつけた。

「……ッ！」

グロテスクな光景を想像した私は、眼を背けそうになる。

しかし、戦場に立つ魔術師としての矜持が、それを許しはしない。

アルアーエゴの剣にて暴かれた幼馴染みの内側が、私の視界に飛び込んできた。ソレは…機械だった。

「見なさい。

こいつらはね、心身ともに人間じゃないの。

とつくの昔に、別のモノに置き換えられているのよ。」

ドス黒いオイルの様な何かを垂れ流す、有機的な内部機構。

機械的でありながら、しかしやはり生物のような生々しさを残す。

全く理解の及ばないソレを見た後、私は周囲を見渡した。

アルターエゴに破壊された幼馴染み達の肉片の、総てに同様の特徴が見受けられる。

「何よ…コレ。」

「さて…スクラルと同種の変形種シェイプフターのだけれど、地球人相手にはなんと説明したモノかしらね。

詳しく知りたいなら、本人に訊くのが一番早いけれど——」

アルターエゴは周囲を見回し、舌打ちする。

「ああもう、アンタがウダウダやってくれたお陰で逃がしちゃったじゃないの。

一匹くらい、生かして捕らえたかったのに。」

その言葉で、私も気付く。

四郎の姿が、どこにも見当たらなかった。

同時に、他の兄弟達も糸が切れた人形のように静止し、地に伏せている。

「見たところ、こいつらの体に埋め込まれた核……宝具の断片も持ち去られている。仕事が早いわね。」

これじゃ、こつちの実入りは実質ゼロ。」

溜め息混じりに言った後、アルターエゴは扉の上へと跳躍する。

用事はすんだから、後はサツサとお暇するとも言わんばかりだ。

「ま、待ちなさい！」

アンタは何物なの!?

どういいうつもりで、こんな——」

瞬間、閃光……継いで轟音。

空にはこんなにも星が瞬くというのに、落雷が冬木教会を襲った——
否、これは……教会の内側より、超級の魔力と共に発生したらしかった。

「な、何なのよ！」

次から次へと……！」

「さて、何かしら。

誰かの宝具らしいけれど……。

兎も角、この戦場の状況は決した様ね。」

輝く教会を眺めた後、アルターエゴは私を見下ろす。

「……これは、老婆心からの忠告ってヤツよ。

遠坂凩……聖杯戦争なんて投げ出して、何処か他所の国にでも移りなさい。」

穏やかな様な、冷たい様な……何れにせよ、何らかの諦観の意が籠められている。

「……なんですって？」

その言葉は、聞き捨てがならなかった。

「だって、アンタは弱いでしょう。」

戦闘能力は勿論のコト、その心までも脆弱。

今の戦いが、それを証明してたんじゃない？

相手の姿に戸惑って、冷徹になりきれずに仕留め損なつた。

そんな女が、気張って戦場に出る必要なんて何処にも無いでしょう？」

…それは、その通りだ。

私は、言峰綺礼の弟子達と昔馴染みだった。

それが、倒す覚悟こそ出来ても、殺す覚悟を抱かせなかつたのは事実である。

だが――

「突然現れた正体不明のアンタに、ワケ知り顔で語られる謂われは無いわよ！

私は、この地を管理する遠坂の当主よ！

それだけで、この戦争に参加する意味は在る！

まだサーヴァントも喚んでないってのに、戦る前から諦めるだなんて出来るワケ無い

でしょう!？」

ルーラーは聖杯戦争の見直しを求めたが、こいつは違う。

私に、セカンドオーナー遠坂の矜持せきにんを棄てて逃げ出せと言うのだ。

冗談じゃない。

遠坂の200年を、お父様の死を、私の十年を。

こんなポツと出の化け物なんかに否定させはしない。

「…下らない。」

吐き捨てるような、アルターエゴの言葉。

私は、それに呼応して弾ける様に宝石を構えた。

散財などと、知ったコトか。

たとえ敵わなくとも、ヤツに一発叩き込まねば気が済まない――

瞬間、アルターエゴは黒鍵を放つ。

それは私の数歩先に突き刺さり、地を抉った。

衝撃で、私は吹き飛ばされる。

「ああ、便利ねコレは。

奴らがバラ卷いた分を回収しただけでも、今後それなりに活用出来そう。」

抉れた地面を眺め感想をのべた後、アルターエゴは踵を返して歩み出した。

「ま…待ちなさいって、言ってるでしょ…！」

今の衝撃だけで、身体が軋む。

十分な強化魔術を施した身体に、これほどの影響を与えるなんて…それこそ、宝具でもない限り…！

「忠告はしたわよ。

家名も、街も…このままだと、直ぐに意味が無くなる。

弱いコトは、けつして悪いコトじゃないわ。

恥じなくても良いの。

だから、総てを受け入れて…逃げなさい、遠坂凜。」

言い残し、アルターエゴは立ち去った。

跡には破壊の痕跡と、幼馴染みだったらしいモノ達の残骸が転がるのみ。

「…なんだつてのよ。」

私はいえ、混乱と鈍痛に呻くコトしか出来なかった。

しかし、痛みは混乱を少しづつ解きほぐしてゆく。

同時に、自分が頭に血を上らせて悪手を打ったという事実が明るみになった。

あの正体不明の女には、訊くべきコトがたくさんあったのに。

何者なのか。

幼馴染み達が変わったモノの正体を知っているのか。

何故、遠坂家当主のコトを知っていたのか。

「…なんで、私を助けてくれたんだろう。」

その疑問に答えてくれるモノなど、この場には存在しない。
そんなコトは解っていても、疑問は口を突き：私の心を支配して離れなかった。

Episode 28 : 移民の歌

.....

——眼前、と表現して良いのかは解らないが。

『此処は……？』

私の自意識の先には、確かにその光景が広がっていた。

『ア・ス・ガ・ルドだ。』

眼前を見つめ、男が言う。

アースガルズ
アスガルド。

北欧神話に於ける、大神の膝元。

絢爛たる、アース神族の王国。

『……。』

バカな、と思った。

だって、其所には何もなかった。

男が見据えるそれは、海。

男と私が立つのは、海に面して崖に隔てられた穏やかなる草原。

それだけしか、此処には無い。

偉大なる神々の住まう世界とは、とても思えない。

寧ろ……いつも寒々しい、私の故郷を思い起こさせる静けさだった。

『ああ、言葉が足らなかつたな。

此処は、ニュー・アスガルド。

神々の黄昏で滅びた国土に代わり、新たにアース神族が居住した土地だ。

向こうには首都もある。』

彼の指差す方向を見ると、そこにはこれまた私の実家と似たような雰囲気の漁村が見えた。

『まあ、言いたいことは分かる。

だが、国家とは“人”だ。

我々が集い協力し合うコト、その平和と信頼こそが生きる道なんだ。

たとえ、他の何を失おうともな。

規模スケールなんかは問題じゃない。

だろう?』

男は、懐かしむように語る。

『それに実際…此処の雄大な風景も、中々どうして悪くない。』

噛み締める様な、思いの込められた言葉。

優しい声色に、私は首都から視線を離して彼に向けた。
なんというか：頼りない風体の男だった。

基礎の体軀こそは、むくつけき戦士のソレであろう。

しかし、伸び放題の髭や長髪。

でっぷりとしたお腹。

それに存分に着崩れた、だらしない部屋着。

骨格に見えるかつての勇姿は既に無く、自墮落という概念がカタチになったような男だ。

『…貴方は、何者ですか?』

私の問いに、彼は笑う。

『理解^{わか}っている筈だろう、君は。』

そう言い、彼は私の手元を指差す。

視線を落とすと、そこには――

『あれ…？』

たしかに、失った筈の左手が其所にはあつた。

同時に、胸に空いた筈の孔が塞がっているコトも確認できる。

『此処は、君の内側だ。』

そして、俺そのものでもある。

そう、だからこそアスガルドの象カタチをしているんだ。』

わかるような、わからないような理屈。

ただ、魔術的ではある。

即ち、心的な形容。

そう考えれば、なんとなく理解できる気がした。

彼と私は、内面に於いて繋がっている。

だから私は、私の心象世界ウチガワで彼の世界アスガルドを視ている。

『確かに、君の切つ先は斬り飛ばされた。

だが、魂は死んじやいない。

だから此処で腕は元通り、在るがままだ。』

私は、記憶を反芻して左手を握る。

信じたモノに裏切られ：否。

私が勝手に懐いていただけだ。

彼の本心を量りかね、自分勝手に感情を押し付け、油断した私の落ち度だった。

…なぜだろうか。

今は冷静に、自己を省みるコトが出来る。

確かに：あの時私は絶望していた。

なのに、今此処に至っては寧ろ——

『…良い顔になって来たな。

バゼット・フラガ・マクレミツ。

それでこそ、俺に手を伸ばした戦士。』

稲光が走る。

さきほど目にした、眩き雷熱。

顔を上げると、其所に居たのは先程の男ではなかった。

筋骨隆々、鎧とマントを纏った神。

『ロジャースの奴に、火を点けられたろう？』

あいつは、そういう奴だ。

いつだって奴は、その諦めない姿で俺達のハートを奮い立たせた。』

∴ロジャースとは、誰だろうか。

いや、わかつている。

今の私を奮い立たせる存在など、一人しかいない。

『そんな奴だから、俺を扱えたんだ。

誰かを助け、自分を曲げず、いつだって困難に立ち向かう。

奴の高潔さが、この世界に於いて英霊と化して尚、俺を喚び寄せた。』

嗚呼、そうか。

彼は――

『手を差しよべる優しさ。

応える意地。

繋がれた握手そごには、勇気が生まれる。

勇気があれば、ヒトは立ち上げられるんだ。』

神かれは、私に向き直って手を差し出した。

大きな、掌。

『…私に、どうしろと？』

『握手だ。

それだけで、君の力になれる。

ロジャースが手を差しよべたんだ。

なら、奴の一部として現界している俺もそれに倣うというコトさ。』

単純すぎる理屈を、彼は言つてのけた。

『…なぜ、そこまで私にしてくれるのですか?』

『何故つて、それを今更訊くか?』

彼は、快活に笑う。

『ロジャースと俺は、きつと似た者同士だ。

ブルースハルと俺も勿論似た者同士だったが…奴ども、また違った意味で似た者同士。

で、此処アスガルドに来るコトが出来た君も、きつと似た者同士なんだ。

理由なんてのは、そんなもんで十分さ。』

…また、わかつたようなわからないような。

彼は、そのまま手を差しのべ続けている。

『…………。』

この握手に応えるという行為が招く結果を、私はなんとなく予感していた。何か…私の中の決定的な部分が、変革するという予感。それだけの神気を、彼は内包している様だった。

『無力に絶望し、膝を折るならソレも良い。

立ち上がり、^{アベンジ}逆襲するならばこの手を掴め。

^{ハンマー}鎚を振るえば、君という船は新たな大陸へ辿り着くだろう。

君には、その気概と資質がある。』

その言葉には、惹かれる。

成す術もなかった自分の不甲斐なさに、我慢がならなかったのは事実だ。
だが――

『…………。』

言われるがまま、手を伸ばし…触れる寸前、躊躇する。

『…私は確かに、彼に救われました。』

でも、彼の優しさに見合うだけの高潔さは…私には無い。』

私の胸中で熱を放つ感情…それは、“怒り” だった。

綺礼への怒り。

そして、無力な己への怒り。

『怒りが原動力で、何が悪い？』

神は、あっけらかんと言つてのける。

『俺達の友人には、いつも怒つてると宣つて暴れる、心優しい巨人ハルクが居た。

奴おれたちだけじゃない。

逆襲者おれたちはいつだって、理不尽に怒り反抗した。』

雷光が、ほとぼし 迸る。

しかし脅威は感じられなかった。

むしろ、後押しする様な暖かさ——

『怒りの矛を握るコトそのものは、悪じゃない。

大事なのは、その大いなる力をどう振るうかだ。

自分にとって正しい方向へ、真つ直ぐに振り下ろせるか否か。』

そのコトに対してだけは、私は自信を持てる。

他者に、あらゆる魔術師に、故郷の血族にさえ疎まれようとも。

刃を突き立てる時は、いつだって己に正直に。

それならば。

それだけのコトが、重要なのだと言うならば——

『——それならば、答えは決まっています。』

胸が、高鳴る。

私は、神の手を握った。
大きく、力強い掌。

『——私は、このまま終わるコトを良しとしません。
私は……私を襲った理不尽に立ち向かいたい！
力を、貸してください……！』

神は朗らかに笑い、そして鳴り響いた。

『それでこそぞだ！
ハンマー
鎚は我らを結ぶ仲立！』

それを介し、これよりは俺が君と共に在ろう！』

私の魂を、熱が貫く。

『貴方の……ッ！』

脳が焼き切れるような、魔術回路を更新する痛みの中。
私はうわ言のように尋ねる。

『神よ…貴方の、名前は……っ!?!』

既に答えの分かりきった問い。
神鎚を携えし、北欧の戦神。

『応えよう、ケルトに名高き光神の眷属よ！』

我が神名、そして今より此れは君の名前だ！』

手から、足から、眼からすら光が迸るのを確かに感じた。

『我こそは、最強の逆襲者！』
The mighty
力強き——』

.....

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 冬木教会

召^ム雷^{シヨルニア}の行使は、状況の総てを決定的にした。

僕が手ずから借りた友神^{ゆうじん}の力とはいえ、その威力を改めて実感する。

なにせ僕個人としては、このパワーを生前は宙^{ソラ}からの侵略者相手にしか振るつたコトは無かったのだ。

「ぐ……む……っ。」

僕がフツ飛ばした言峰綺礼の身体は、打点となった右腕部から下顎部、腹部にかけて真つ黒焦げだ。

まさに、炭化寸前といった様相である。

それでも、僕に出し得る最大出力の召雷をもってして、その程度のダメージで済んだ言峰綺礼の頑丈さは異様の一言に尽きる。

「ガはっ……！」

…クソツ、なんだよ今のは。

とんでもねエ奥の手もあつたもんだ。

そいつあ、真正正銘の神造兵装じゃねエか……！」

それに関してはランサーも同様で、しかし確実に大ダメージを与えられた様だった。崩れ落ちそうな言峰綺礼の傍らに立ち、槍を杖がわりに彼を支え立っている。

まだまだ動けそうなその姿には恐怖すら覚えるが、ワンアクションの結果として、コレはかなりの成果であると言えた。

しかし、事態は好転だけには留まらない。

「ミス・マクレミッツ……！」

僕は、保護対象である魔術師の彼女に駆け寄る。

彼女は弾ける様にのけぞり、天を仰いでいる。

雷撃の瞬間、信じられないコトに彼女は雷鎚に魅入られていた。

そして、手を伸ばした。

視界に入った瞬間それに気付いたのではずいぶん遅く、まず間違いなく彼女は雷撃の端に触れた筈である。

言峰程ではなくとも、かなりのダメージを受けた筈で——

「え……？」

僕は、己が放った筈の雷を彼女の中に視た。

四肢から、口腔から、眼から稲光を迸らせる、その威容。

それは、まるで——

「スリサズ
『?』」

その刹那、彼女はコトバと同時に姿を消した。
違う。

飛んだのだ。

まさしく彼のように。

力強く、轟音を鳴らして一直線に。

「おまえ、バゼツ——」

容赦の無い雷電が、ランサー陣営を襲った。
直進と拳。

纏う神雷が炸裂し、彼らを焼き飛ばす。

「『ロジャース、こいつらはまだ動けるぞ。』」

情けをかけたワケじゃあないだろうが、気を抜くのは戦いが終わってからじゃないか？」

ミス・マクレミッツの凜とした声色で、しかし豪快に笑う。

その口調には、覚えがあつた。

忘れる筈もなかつた。

僕の家族、最強の雷神。

「…ソ…？」

僕の記憶の中の彼とは似ても似つかない、しなやかな彼女に向かって僕は恐る恐る尋ねる。

「なんだ、その質問は。」

他の誰に見え…まあ、そりや彼女に見えるよな。

そりやそうだ、そうとしか見えん！

今は取り合えず彼女の身体は俺が主体となつて動かしているからな！

すまん！

ハツハツハ！』

腕をぐるんぐるん振り回し、がははと笑うミス・マクレミツツ。
あまりの光景に、目眩と頭痛がしてくる。

「な、なんでそんなコトに……君が、彼女に憑依しているとでも言うのか？」

よく視ると、彼女の傷は全て雷で塞がっていた。

その左腕すら、まるで生来そういう作りであるかの様に雷が代わりを成し、腕として機能している。

『何でも何も、当たり前だろう。』

俺は、マイテイ・ソー。

雷の神だぞ。

言わなかったか？

俺の体に流れているモノは、なんだった？

…チーズソースだなんて言うなよ。』

…そういえば、丸々太って以降の彼は己に言い聞かすようにそれを呟いていたな。

「…稲妻だ。」

僕がムジオルニアを振るう時だって、いつも君の力の片鱗を借りているという自覚はあつた。」

「『そう、その通り。』

俺は稲妻そのものなんだ。

つまり、稲妻は神威おれそのもの。

ムジオルニアは、神威を制御し集約するための神器なんだよ。

父上が言っていたから、間違いない。』

かの大神の言葉でなくとも、仲間の言葉だ。

勿論信じるに値する。

…だが待て、待ってくれよ。

じゃあ、何か？

「――僕が宝具としてムジヨルニアを持ち込んで召喚されるというコトは……。つまり、君という雷を伴って現界するのと同義、というコトなのか？」

「『そうだー！』

ハッハー、さすが理解が早い！』」

そうか、そうなのか。

…そんなのってアリなのか？

僕がルーラーで、この世界から魔力の供給を受けているからこそ成立するインチキ靈基だという気がする。

…なるほど、彼という稲妻を許容できるミス・マクレミッツはつまり――

「…彼女もまた、ハンマーを持ち上げる資格をもつモノだということか。」

「『そういうコトだ。』

ルーン文字による魔術と神の剣を操る彼ゴツズホルダー女の体軀は、ムジヨルニアと同様のパワーを發揮できると踏んだ。

今は精神を癒し、雷おれを身体に馴染ませるために内側で休んでいるが：おい、怖い顔をするなよ。

大丈夫、彼女の意識は覚醒していて、今も内側から状況を視ている。消えてしまったワケじゃない。』

安堵する僕を尻目に、言いながらソーは拳を地に振るつた。

雷撃が巻き起こり、瓦礫が弾け飛ぶ。

同時に、ランサー陣営の身体が僕らの間近に落下した。

「ぐはっ……い！」

ランサーは既に満身創痍、言峰綺礼に至っては意識すら無い。

『なあ、おい。

俺は彼女と違って、アンタ達と何の因縁も無い。

だが、力を貸すと誓った以上は遠慮無く叩き潰すつもりだ。だから、お前達は絶対に逃がさん。

コソコソと息を潜めて身を屈めようと無駄だ。』

この調子を、久し振りに見る。

そう、彼はこれで戦いに關しては全く容赦がないのだ。

九つの世界で気が遠くなるほどの時間を戦い続けた戦士なのだから、当然ではあるのだが。

「…ハ、全くどうなつてやがる。

インテリアーマー野郎と正体不明の兵士の次は、北欧の雷神ときた。

確かに俺は血沸き肉踊る戦いを望んじやいたが、最初ハナつからフルコースとはよ…！」

ランサーは主を庇い立てする様に立ちはだかり、槍を構える。

インテリアーマー野郎…：気になりすぎるワードだが、今すぐ問い質すのは難しいだろう。

「『主命を重んじる矜持か。

お前は、誇り高き戦士なのだろうな。

こんな卑怯者をも、是が非でも護り通すつもりらしい。

成る程、彼女が尊敬するのも頷ける。』」

「…ハ、当然だ。

不本意な主替えを強いられたが、なっちまったもんは仕方がない。

今の主を守護するために、かつての主に刃さえ向けよう。」

焼け焦げ、血を流し、それでも不敵に笑うランサー。

「『そいつが、この世界に仇成す存在だったとしてもか？』」

「…何？」

ランサーが、訝しげに問い返す。

『ロジャー、お前も気づいているだろう？』

言峰綺礼：…その肉体は、既にこの星のモノじゃない。

外宇宙からの存在に改造でもされたのか…。

その在り方はインヒューマンズに近い。』

インヒューマンズ。

かつて僕らの世界で、僕が所属していた諜報機関が関わった異能力者の総称だったか。

ナターシャが纏めたレポートによれば、彼らは異星人ククリによる人体改造手段で誕生したという。

言峰綺礼の異常な頑丈さや怪力を見るに、確かにその可能性はあるが――

「…ランサー。」

言峰綺礼が意識を失った今だからこそ、君に問いたい。

確かに彼は異常だ。

僕がこの聖杯戦争について調査をするために訪れたというコトは先にも話したが、彼という存在はその核心に近い所に在ると考えて間違いないと思う。

願わくば…彼の身柄を引き渡してほしい。」

「……。」

僕の問いを受けて、ランサーは言峰綺礼を一瞥^べする。

全身ボロボロの彼を見て、偉大なる槍兵は何を思ったのだろう。

「…悪いな、裁定者。」

答えはやはり、ノーだ。」

槍を握る力を強め、薄く笑うランサー。

その笑みには己の性分に対する呆れと、やはり改めて持ち上がりし譲れぬ矜持が垣間見えた。

「…そうか。」

残念だ。」

僕は、盾を固定するベルトを締め直す。

彼を己の障害として、打ち倒す決意を固めた。

「全くね。」

今、サーヴァントにリタイアされちゃ困るって言うのに。」

言葉と共に、何者かが乱入する。

白い外套と、黒い霧を纏った：恐らくは、女性。

ステンドグラスを派手に突き破って現れた闖入者は、ランサー陣営の傍らに着地した。

「なっ、何者だ、テメエ!？」

急な状況変化に驚くランサー。

どうやら、彼の知り合いというわけでは無い様だった。

「誰だって良いでしょ。」

それより、マスターをしつかり抱えてなさいよ。

サーヴァントであるアンタが舌を噛もうが知ったこつちやないけど、マスターに死なれると面倒だから。」

「なんだとっ——」

女は、その場の誰が動くよりも早くランサーのおさげをひつ掴んだ。

そして、そのまま——

「うおわああっ！

いででで！

やめろやめろ!!

髪抜ける、皮フ千切れる、首折れるウウー——ッ!!!」

恐ろしき怪力を發揮した彼女によって、憐れランサーは天井を突き破つて虚空の彼方へ消えてしまったのである。

「——なっ……！」

あまりの事態に、呆氣にとられる僕。

「全く……本当は介入する予定はなかったんだけどね。

事態が事態だから、話は別。」

ランサー陣営が消え去つた彼方を眺める彼女……

その携えた一振りの剣を見て、ソーが眩いた。

「『……バカな。』

お前は、何者だ？』」

その問いに、彼女はため息を漏らす。

「だから、誰だつて良いでしょう。

シンプルな話よ。

私は、聖杯戦争の邪魔者。

敢えて呼びたきや、アルターエゴでもレクイエムでも、好きな方を――」

『ゴッドスレイヤー。』

ソーの言葉に、彼女の文句は遮られる。

『それは、ゴッドスレイヤー神殺しの星剣だろう。

我ら神の国アスガルドの住人すら斬り殺すとされる、銀河きつての名剣。

長剣と短剣の二振りから成る合成剣で、重量制御のエネルギーコアを持つ……ニダベリア製の武器だ。』

「……ッ！」

ニダベリア：それは、ソーのムジヨルニアやストームブレイカーを産み出したドワーフの住まう、銀河最強の武器を鑄造する「鍛冶の惑星」。

しかもあれは、ソーが知り得る武器の一つであるという。

と、いうコトは――

「『そうだ、ロジャー。』

あの女：正体は知れんが、間違いない。

俺たちの世界の住人だ：！』

女が、またもため息混じりで剣をプラつかせる。

諦めたような、呆れたような様子に見合わぬ、溢れる殺気。

「どうにもアンタ達は邪魔者は邪魔者でも、とつても面倒な邪魔者みたいね。

この靈基からだの正体隠しも貫通してくるなんて、どういうインチキよ。

察するトコロ、抑止力だかの作用で喚ばれた向こうの誰かなのでしようけど……。」

まさしく、緩と急。

彼女の剣は、瞬きよりも尚早い速度で僕に襲いかかった。

それを盾で即座に防ぐコトに成功した、己のサーヴァントとしての補正に改めて驚いたが…。

それに安堵していられる状況でないコトは、一目瞭然だった。

「十年遅いつて言うのよ。

もう今更アンタ達に出来るコトなんて、何一つ在りはしない……！」

Episode 29 : 聖域の戦いの終わりに

——なんて、意気がつてはみたけれど。

ええ、分かってる。

私一人つきりじや、星に裁定を託された英霊を相手取るには……かなり分が悪いつてコトくらい。

.....

2004年 1月下旬 夜

冬木市 新都 冬木教会

雷鳴が響き渡り、私を打ち据える。

かの騎士由来の鎧は猛攻を耐えてくれるけれど、それだって流石に限界があった。

「くっ……！」

私は、神の如き一撃のインパクトに耐えきれず吹き飛ばされる。

しかし、なんとか剣を地に刺して制止するコトに成功した。

私の宝具、神殺しの星剣には「重量制御」のエネルギー・コアが内蔵されている。

鍛冶の惑星・ニダベリアのドワーフが持つ秘伝技術であり、その効力をもつてすれば刀身を鉛の様に……いや、岩山の様に重くするコトさえ可能だった。

振るう際には、羽毛のように軽く。

斬り抜く際には、巨山のように重く。

ソレに依る剣戟を、時には強靱な一剣にて、時には長短二剣にて繰り出すコトが可能。それが、私の愛剣・ゴッドスレイヤーである。

……まあ、この剣の由来を把握できたのも、この霊基を得てからのコトではあるのだが。しかしそんなゴッドスレイヤーさえ、その刃が届く前に悉く弾かれる。

盾に、稲妻に、鎚に。

盾持ちの裁定者は、強い。

まず、神造兵装たるゴッドスレイヤーの一閃さえも防ぐ円形の盾。ラウンドシールド

あれは、いかなる衝撃をも完全に吸収・分散してしまえるらしい。

いかに宝具とはいえ、その硬度は恐るべき頑強さだ。

そして、ゴッドスレイヤーと同じくニダベリア製だという、稲妻を制御し飛翔さえも可能とさせる鎚。ハンマー

しかも、ニダベリア製だとはいえ許容しがたい理不尽さではあるのだが…

あれにはゴッドスレイヤーと同等か、ソレ以上の重量制御能力が備わっているらしい。か

かった。恐らく、要たるエネルギー・コアの性能が段違いなのだろう。

アレは、岩山どころか星を思わせる驚異の重量を内包している。

…なんという反則じみた強さだろう。

ゴッドスレイヤーの、完全上位互換ではないか。

だが、アレの脅威はソレだけに留まらないのだ。

何せ――

「『どうした！』

そんなものか、神殺しのレクイエムとやら！

我らを相手取ると豪語した女のモノにしては、その剣はあまりにも軽いぞ！」

私の剣の腹を踏みつけ吼える、雷神と宣う女。

鎚が放つ稲妻と、この女の纏う雷はリンクしている。

それは、鎚と稲妻が同一存在であるという証。

そのパワーと、そこに宿る何者かの意味にて彼女が強靱さを獲得し、縦横無尽に暴れまわっているという事実を指していた。

即ち、この世界の人間であろう彼女自身も今や裁定者の宝具と化しているのだ。

…奇しくも、その在り方は私と似ていた。

あの子に宿り、あの子の裡から派生した別人格^{アルターエゴ}。

「軽い剣にだって、想いは籠もるわ。

それに、アンタが自分で言ったでしょう？

私のゴッドスレイヤーは、重さを制御する…ッ！」

魔力を廻す。

ゴツドスレイヤーのコアが煌めき、踏みつける雷神女ごと刀身を軽くした。さきほどランサー陣營をブン投げたのと同じ要領で、私は非力な全力を捻り出す。しかし、それは神劍の効力によって強力無比な怪力と化していた。

「ぬおっ……！」

テコのように勢いよく発射された雷神は、しかしその飛行能力で急ブレーキをかけて天井への直撃を免れた。

しかし、それでいい。

ほんの一瞬ヤツを引き剥がすコトさえ出来れば、本体である裁定者はガラ空きだ。騎士は徒手にて死せず。

私は彼の逸話に倣い、先程回収した黒鍵を放った。

黒い霧に飲まれ、紅き脈動と漆黒の刀身を獲得したソレが翔ぶ。

「その飛劍は、さつき言峰綺礼が放ったモノをさんざん見た。」

私が放った、無数の黒き靈劍。

宝具と化したソレが命中すれば、サーヴァントとはいえ無事では済まないだろう。

しかし、彼には通用しなかった。

ある黒鍵は盾で難なく弾かれ、ある黒鍵は弾くまでもないと言わんばかりに身をひるがえ翻して躲かわされる。

黒鍵の軌道は、完全に読まれていた。

回避の最中も、裁定者は駆け寄り迫り来る。

「そう。」

だったら、躲せなくするだけのコトよ。」

私は、ゴッドスレイヤーを地に深く突き刺した。

そのまま、斬り上げるでなく持ち上げる。

すると、アラ不思議。

重量制御で羽根の様に軽くなった教会の石畳が、ペろりとめくれ上がるのである。

コレが叩き壊すハンマーと、突き刺すソードの違い。

取り回しの利便さは、此方が勝るのだ。

「なツ……！」

さしもの裁定者も、姿勢制御を崩して停止する。

生前の私……いえ、彼女では此処までの重量制御は難しかっただろう。

というより、英霊システムによる拡大解釈が成された霊基からだだからこそ可能な荒業である。

そのパワーは、所持者である私や突き刺した対象にまで及んだ。

ともあれ、コレでヤツの懐はガラ空きだ。

間髪入れず、黒鍵を放ちつつ駆け寄る。

飛剣を防ぐので精一杯の奴は、私の剣戟を躲すコトにまで手は回らない。

私は、ゴッドスレイヤーを双剣に分け——

『甘いッ!!!』

——放たれる雷撃を、即座に切り裂いた。

雷神女が放つ稲妻、隙を突いて裁定者が放つ稲妻。

双方を、双剣にて対応する。

『アレをやるぞ、ロジャーズッ!』

稲妻を纏って降り迫る雷神女を躲し、私は後退した。

しかし、奴は軌道を変えない。

稲妻と拳は、裁定者に真つ直ぐ振り下ろされた。

「…ッ!」

盾が、雷神女を受け止める。

衝撃と神雷は吸収され、表面を這い円形に拡散した。

教会に散らばる装飾も、家具も微塵に吹き飛ばし、教会そのものさえも軋ませる爆雷。

後退する私も、例外なく巻き込まれてしまった。

剣一つでは、為す術もない。

英霊の鎧が罅入る。

私は、吹き飛ぶ最中で破砕寸前の机を掴んだ。

侵食し、宝具と成す。

神秘にて超強化したソレを盾に、辛うじて衝撃をやり過ごした。

「『強いな。』

我ら二人を相手取って、巧みに戦ってみせるとは。』」

雷神女は弾ける雷光もそのままに、裁定者に並び立つて此方を見据える。

私と言えば、満身創痍もいとこだった。

ただの一撃を許しただけでコレ。

まったく、邪魔者にも程がある。

「…そつちこそね。」

でも、宿主の女の子に多少気遣ってあげても良いんじゃない？

ホラ、せつかく仕立てたイカすスーツが焼け焦げちやつて…頭あたまになった腕にまで、貴方あなたの乱暴なパワーが宿ったよう。

その筋肉、コタテイ族の金属纖維メタルファイバーみたい。」

一定の距離を保ち、気を抜かず奴らを見据える。

意思を持ち所有者と完璧な連携を取る、トップ・サーヴァント級の戦闘力を誇る宝具だとか：なんとも悪い冗談だ。

『コタテイ族とはな。』

かの美しき鉄身の種族に例えられるならば褒め言葉として受け取るが…。
もはや、己が出自を隠しもしないというワケか。』

「コタテイ族？」

此方から目を離さず、裁定者が問う。

『俺達の宇宙に住む一種族だ。』

俺もそこまで詳しくはないが、大学の授業で映像を見せられたコトがある。
ビルジスナイプが持つ強靱さとの比較として例に出される程だから——』

「なに？」

「『ビルジスナイプ。』

デカくて、ウロコがあつて、角がある。

地球に居なかつたか?』

「居ないね。」

「『そうか。』

奴らは……うん?

この話、前にも何処かでしたな。』

「少なくとも、僕は聞いたコトがないな。」

グランヘル艦隊の残骸で作られた樽に入った、千年モノの酒の話なら聞いたが。」

「『おお、その話は確かにしたな!』

懐かしい、たしかアレはヒドラ残党を斃たおした記念の戦勝会で——』

張り詰めた緊張感の中、のほほんとした調子で語る裁定者達。

大したタマというか、恐るべき胆力というか…。

…それで、ついノツてしまうのは彼女の記憶によるものか。

ノリと勢いで銀河を救った、ロクデナシどもとの記憶。

だから。

「グランヘル艦隊！」

なんとまあ、伝説級の名前が出たモンね。

流星は長命のアスガーディアンってトコかしら。」

つい、口を突いて出てしまった言葉。

それが、遠い記憶を手繰り寄せた。

「そうね、確かにアンタはグランヘルのおとぎ話に登場する様な——」

姿形は違う。

でも、今ヤツに抱いた印象は、確かにあの時——

「天使と…海賊の、子供みたい…。」

彼女や、破壊者ザ・デストロイヤーの彼が抱いたモノと、同じだった。

「『グランヘルの話を知っているなら、地球とかなり近い宙域の事情も知る民族ってコトになる。』

お前は——」

「…貴方、ソー？」

アスガルド最後の王…ソー・オーディンソン!？」

疑問が、口を突いて飛び出す。

「『…ロジャース、俺はあの女に一度だって名乗ったか?』」

「いや。」

それに彼女が現れてから、僕も君の名前を口にしてはいない。
アスガーディアン雷神というワードから導き出したのかもしれないが…。
どうやら、そういった様子でもないな。」

——嗚呼、なんとという運命。

彼女は、彼女の終わりのキツカケ：その一つにまたも出会おう。

彼のコトなど、詳しく知りはしない。

だが、過去に一度だけ。

決定的な瞬間に、彼女は彼に出会っていた。

ソー・オーディンソンに恨みはない。

あろうハズもない。

だって、彼はあの時忠告した。

今のままでは、お父様には勝てないと。

あの時、その発言を信じていれば結末は変わっていたかもしれない。

今回も、あの時と同様に彼は顕れた。

これは運命からの忠告だろうか？

今のままでは、私は望む結果を得られないであろう…と。

「『どうやら、件の神父と同じくお前も今回の騒動の中心人物の様だな。

答えろ、レクイエムとやら。

何故、お前は俺のコトを知っている。

お前は…本当は何者だ？』

「……ッ!!」

刹那、破碎した壁面の向こうから何かが飛来する。

それは、黒く鋭い矢。

捻じくれた剣の如く奇妙な鍔やじりを持つソレが、私達の言葉を遮った。

私は、自身に向かって直進する矢を咄嗟に剣で払う。

しかし、ドリルの様に回転し襲う矢は、私の剣に抉るような衝撃を与えた。

「くッ……!」

続く二射の輝きを彼方に垣間見た私は、衝撃で弾かれ跳ねる長剣に代わり、短剣で対

応ずる。

ただ弾くのではダメだ。

重量制御をフルにして、衝撃を最低限に抑え込む……!

「『また闖入者か、一体何者だ!？」

わかるか、ロジャーズ!」

どうやら、奴らもこの矢の主を知り得ない……即ち、同勢力ではないらしい。

厄介な事実には変わりないが。

「……すまない、連戦に気を取られて気付かなかった。

アレは弓兵アーチャーのサーヴァントだ!

何者かによつて今しがた召喚されたアーチャーが、教会外部から狙撃を続けている
!」

アーチャー……英雄王とは違う、この聖杯戦争本来の弓兵か。

それが、何故私を狙うのか。

「言峰を見失った今、彼女という参考人まで失うワケにはいかない！」

ソー、君は彼女を拘束し、保護してくれ！」

僕は外に向かい、アーチャーを——」

「…お優しいこと。」

でも、必要無いわ。」

もう、良い。

乱入の目的である、ランサーの保護は果たした。

恐らく、今となつてはルーラーにさえその居場所を掴めないだろう。

余分な邪魔者であるルーラーを除くためなら戦いもしたが、アーチャーが顕れてしまったのならば話は別。

多勢に無勢でもあるし、勢い余つてアーチャーを殺してしまうワケにもいかない。

「…ツ!？」

貴様、レクイエム!!

何をしようとしている！』

私は、私の靈核たましいを起動する。

しかし…奴がソー・オーディンソンであるならば、その全容を見せるわけにはいかなかった。

だから――

「…っソー！」

目を瞑って耳を塞げ！」

私の一瞬の挙動で、行動を予測したらしい。

恐ろしい戦況把握能力だが、その察しの良さが今は有り難かった。

あまり手札を晒しすぎるコトは躊躇われたが、コト此処に至っては仕方がない。

私は、予めこの世界で調達した宝具の内から、一つを発動した。

M₈₄ ラッスタングレネードン。

強烈な爆音と閃光によって、視覚・聴覚にダメージを与える閃光発音筒である。

フラッシュ・バンの爆音に、宝具の真名は掻き消された。魂が、開く。

「…聞こえているかはわからないけれど、忠告するわ。

アンタ達が、聖杯戦争から世界を護りたいのならば…何もしないで。」

私の靈基^{からだ}が、この世界を離れる。

「待て、レクイエム…君は一体…!？」

ルーラーは、皮フを貫通した若干の光に喘ぎながらも、私を止めようと追い縋^{すが}った。

「聖杯戦争という儀式が完成した瞬間、この銀河は絶対の終焉を迎えるのだから。」

…言えるコト、言つてあげるべきコトは伝えた。

そうして、遂に私というアルターエゴはこの世界から姿を消したのだった。

.....

フラッシュユバンによる影響が収まり、僕らはやっとマトモに動けるようになった。
案の定、レクイエムの姿は消えている。

『くっ…おのれ、卑怯者め！』

あんなにビカビカ光る宝具で直接攻撃など、反則じゃあないのか！

なあ、ロジャース!」

…と、光迸る雷神が怒り心頭といった様子で宣っている。

「まあ、確かに彼処までの現代兵器を魔術的に扱うモノが存在するとは予想外だったな。僕も、サーヴァントとしての固定観念に縛られていたらしい。」

彼方から、サーヴァント反応が接近する。

これは、アーチャー…先程援護攻撃を繰り出した何者かだろう。

「ルーラー!」

無事!？」

同時に響く、聞き覚えのある少女の声。

その発生源は、アーチャーの反応地点と一致していた。

「リン…君、まさかサーヴァントを召喚したのか?」

見ると、其処には戦闘ダメージに身を痛めたリン・トオサカが立っていた。サーヴァントの姿は視えない。

どうやら、霊体化しているらしい。

此方がルーラーであると承知の上で、正体を隠すための措置というコトだろうか。

「まあね…悔しいけど、私一人のチカラじゃどうしようもない状況だったから。

最優のセイバーを召喚するための、大枚はたいた準備もゼンブおじゃんよ。」

ため息混じりに答えるリン。

…それは、召喚したばかりのアーチャーの傍での発言としては、些か配慮に欠けては
いないだろうか。

「で？」

あのレクイエムだかいうクソ生意気な女は？

それに、綺礼やランサーも。

居るのは…ズタボロの赤毛の女ひとり。

ソレがレクイエムの正体ってワケじゃ無いんでしよう？」

矢継ぎ早な質問の連続。

今の口ぶりから推測するに、彼女もまたレクイエムに遭遇したらしい。しかし、そんな状況で突発の召喚を敢行するとは…

「…まさか、サーヴァントの召喚は僕を助けるために？」

僕の間には彼女は目を丸くした後、頬を紅潮させて外方そっぽを向いた。

「そんなワケないでしょう、勘違いしないで。

レクイエムって女に、目にモノ見せてやるためよ！

いいから、質問に答えなさい！

一体、何がどうなったの!?

その女は、一体ナニ!？」

…なんと説明したモノか。

兎も角、一先ずの状況整理が必要だった。

「ソー、彼女の言う通りだ。」

詳しい話をする為に、今は——」

突如、ソーがバランスを崩して倒れかかる。

僕は、咄嗟にそれを抱き止めた。

「『ロジャー・ス……すまん、緊張の糸が切れたと言うか……彼女の魔力も限界だ。」

生命維持は、俺が責任を持って果たす……。」

だから——』」

そこで、ソーの言葉は途切れた。

寝息をたてて静かに眠るその表情は、我が友神のソレではない。

「……今は、落ち着いて休むコトが必要みたいだね。」

思わず、ため息をついて呟く。

「…いいでしょう。」

様子を見るに、彼女は今回の一件で少なくとも敵対していない重要人物みたいだし。連れて来なさい。

一旦、私の家に戻るわよ。」

そう言って、踵を返して歩み始めるリン。

出来れば留まって現場を保存しておきたかったが、此処は不明な敵地だ。

意識を失ったマクレミツ嬢を抱える今の状況では、そういうワケにもいかなかった。

「…了解した。」

でも…君のサーヴァントは？

我々を受け入れるコトに、賛同してくれるのかな。」

マクレミツ嬢を抱えて歩みに並ぶ僕を、面倒くさそうに一瞥しながら彼女はため息

をつく。

「否定的な文句は勿論さんざん投げかけてくるわよ。

でも、今回に関しては全面却下。

兎にも角にも状況が不明すぎるんだから、せめて友好的な存在からの情報は確保したいもの。」

つくづく、彼女は善人であると思った。

こうした戦争に向き合う気概を持ちながら、しかし本質的には確かな善性を持つ。

そういう彼女の存在が、今の僕にはとても有り難かった。

「助かるよ、感謝する。」

「私達はウイン・ウインの関係よ。

言葉だけの礼なんて要らないわ。

私の役に立ってくれさえすればね。

…っていうか。

よく見ると、アンタまた凄い格好してるわね。

それが、英霊としての正装ってヤツ？」

僕の容姿をまじまじ見つめ、彼女は日本で言うところの能面のような表情で問いかける。

…こういう視線も久しぶりだな。

奇抜さで言うなら、ランサーと大差ないと思うのだけれど。

「…それもまた、後で話すよ。」

気の抜けた苦笑いを、している自覚はあった。

僕の人となりチームアップを総て明かすには相互理解が足りないが、僕らはきつと今以上の協力度制をとる必要がある。

そういう決意を秘めたまま、僕は冬木教会を後にしたのだった。

.....

2004年 1月下旬 夜

冬木市 深山町 円蔵山

彼方にて、光が奔^{はし}る。
遅れて、響く轟音。

其は雷鳴である。

しかして雷光は天に無く、地より溢れている様だった。

「ふん…気に食わん魔力よ。」

此度の戦争、何処その雷神に縁の在る英霊でも喚ばれたか。」

興味はない。

むしろ不快ですらある。

ああも雑然と神威を誇って見せる愚かな英霊などは、嫌悪の対象でしかなかった。

我^{オレ}は麓^{ふもと}を見下ろすコトを止め、歩みを再開する。

我は今、この地方都市に於いてはそここの見応えを誇る場所へと足を運んでいた。

聖杯戦争なる茶番の根幹。

総ての起点たる、汚れた大杯の収められた穴蔵へと。

唾棄すべき雷神由来の英霊などの排除は、後回しで良い。

今は先ず、この遊興の場を我の手元に戻さねば気が済まん。

.....

冬木市 深山町 円蔵山

地下空洞 // 龍洞 //

荒涼とした大空洞に、黒々とした魔力が湛えられている。

一つの哀れな人形の、臓腑を伸ばして固めた器。

純粹無垢たる其の杯に、収められたる満々の汚泥。

幾百の年月の果に形作られたソレは、現世の醜悪さを凝縮したが如き奇跡の産物であると言えた。

「斯様な毒の杯なんぞに、何を望むと言うのか。

貴様如き矮小な毒蟲風情には、まあ似合いの玩具ではあろうがな。」

我は、杯を見つめる影を眺めて言い放つ。

此度の余興、その端を発した御三家なる愚か者達の一人：否、ひとつ。

延命を願い、粗末な魔術で蟲に命を移して永らえる、ひ弱な妖物の塊である。

「英雄王。

此度の聖杯戦争、未だ開幕すらしておらぬ。

七騎が揃い覇を競った先にしか、聖杯の完成は有り得ぬのじや。

だというのに：如何なる用向きで、お主は此処を訪れた？」

蟲が、一丁前に嘯ヒスヒスりよる。

「決まっていよう。」

此度の、十年越しの我が遊興。

つまらん邪魔が入らぬように、群がる害虫を排除しようというだけのコト。」

門を開く。

宝物を装填する。

照準は、蟲に向けていた。

「…遊興、か。

お主の様な王は、これほどの願望器をさえも…その程度の認識にて捉えるのじゃな。」

一丁前に、苛ついて見せる蟲。

「遊興、だとも。

我が蔵に収蔵するにも値せぬ、汚れた玩具。

戯れに壊し、爆ぜる様でも眺める以外に何の役に立つ？

斯様につまらぬ当世に、我を呼び出した不敬を贖^{あがな}う代償だ。

当世の人類などは、諸共に死に絶え我を楽しませよ。」

蟲は、我が言の葉を震えて聞いていた。

「…この星きつての英雄王も、所詮その程度の器か。」

諦めた様な、吐き捨てるような言葉。

否、言の葉に似せた不快な羽音である。

一顧するにも値せぬ。

だが――

「ハ…矮小な妖物害虫如きが。

事もあろうに、この我に向かつて王器の何たるかを語るか。

呆れすら通り越して、憐れ極まる不敬よな。」

王への不敬は、罰せられねばならぬ。

我は、宝物をいくつか射出した。

不浄を滅する、世に名だたる名剣・名刀の原典達。

我が宝物の弾速は、ヤツ如き魔術師では逃れ得ぬ。

宝物は、容赦なく蟲の塊を貫いた。

」。

…なんと、呆気ない。

手応えがあつた。

我が宝物は、確かに蟲めを殺すコトに成功していた様だつた。

「愚かな杯の娘を視た時、我が眼をもつてすら把握しきれぬ領域が確かに在つた。

その不確定要素は如何なるモノかと視野を広げ、繋がりを手繰り寄せ自ら赴いてはみたが…下らん。

所詮は、程度の知れた現世の魔術師風情であつたか。」

グズグズに崩れ去る蟲の塊を見届けるコトなく、我は踵を返した。

もはや、視るべきモノは無い。

あとは、かの守護者が如何な手段を用いて滅びに抗うか。

その様を眺めるのみ——

「不確定要素が在ると知りながら、その慢心。

王とはかくあるべきと思わんでもないが…やはり、客観すると愚かに過ぎるな。」

振り返った先。

龍洞の入り口には、蟲の塊が立っていた。

「…？」

先程撃ち倒した蟲を一瞥する。

その姿は跡形すら残さず消え失せている。

…なんだこれは。

理解が及ばぬ。

あの手応えは、確かに現実だった。

しかし、蟲は確かに再び這い出て我が進行を阻んだ。

まるで、我を逃がさぬとでも言うような威容でだ。

「…ほう。」

面白い。」

思わず笑う我を見て、奴はゆっくりと首を傾げる。

「面白い？」

お主では、儂には絶対に勝てん。

儂に立ち向かうならば、それはお主の消滅を意味するのだぞ？

当世の破滅だけでなく己の敗北や消滅にさえも、お主は愉悦を覚えるのか？

ならば、お主は暴君ですらない愚王だな。」

顔色一つ変えず、ガチャガチャと声音を鳴らす蟲。

言いようのない、嫌悪感。

目の前の蟲は、毒の杯なんぞは歯牙にもかけぬほど悍ましい何かを内包している様だった。

「…ハ、毒蟲風情が！」

先程の比にもならぬ量の門を、我は開く。

次は、確実に撃滅する。

叶わぬまでも、不確定なる手段の総てを解き明かす。

コト此処に至っては、聖杯戦争という遊興の前の座興として、この毒虫を認識するコトは吝かでもなかつた。

「まあ良い。

程度は知れた。

ならば…お主というサーヴァントなんぞはもう要らぬ。

我が杯に溶けるが良い、英雄王。」

Episode 30 : 金色の夜明け

「…わざわざ護衛させてしまつて、申し訳ありません。

フリーユージャーさん。」

「だから、フリーユージェで構わねエって言つてンだろう？

サジヨウの嬢ちゃん。

護衛については気にすんな。

これだつて俺の仕事だからな。」

2004年 1月下旬 早朝

冬木市 深山町

ランサー陣営との激戦を越えた翌日。

未だ日も登りきらない朝方に、私はガリアスタ氏傘下の傭兵であるフリーユージャー氏に

警護されながら帰路についていた。

聖杯戦争の時間である夜が明けけるのを待ち朝帰りするコトが、ここ数日の私の日課となっていたのである。

「そう言っていただけだと助かりますが…。

ただでさえ少数精鋭の様相を呈しているガリアスタ陣営の戦力を、分割させる結果になつてしまっているワケですからね。

やはり、そこは少々申し訳無いです。」

「そう思つてンなら、戦争期間中は旦那のビルを活動拠点にしちまえばいいじゃねエか。お前さんと旦那は対等な契約関係にあるし、なによりお前さんは旦那の友人であるエルメロイの弟子だ。

いくら女好きの旦那とはいえ、工房内に引き込んで無礼を働いたりはせんだろうぜ？」

「……。」

…この人も、どこまで本気で言っているのだろう。

外様のガリアスタ陣営の方々とは違って、こちらは現地の学生だ。

世間体もあるし、そもそも大事な霊地である自宅を長期間空けるにはそれなりの準備も要る。

…まあ、イザという時のためにその用意は進めてあるのだが……

今はまだ、私はそこまで胸襟を開ける程にガリアスタ陣營の面々を信用しきつてはいなかった。

「ま、構わんがね。」

ともかく、今回の戦いは想定以上に大規模なモンになりそうだ。

決断の瞬間、その一つ一つが命運を分けるコトになるだろう。

そいつの見極めを、常に怠らんようにせんとな。」

へらへらとした調子だが、しかし真に迫ったフリーユージャー氏の物言い。

「…それは、占星術師としての知見ですか？」

それとも、傭兵としての勘とか？」

「両方だ。」

…分かる話ではある。

魔女としての私の未来予測に於いても、この街を待ち受ける災厄はとても大きなモノであると感じられるから。

幼い頃、稀代の天災魔術師と呼ばれた姉を怒らせてしまった時と同等か、それ以上の悍おそましき…。

日増しに強くなるソレを、私は確かに冬木市の至るところから感じ取って――

「……………え？」

不意に、覚える違和感。

街に張り巡らせた、根のような魔術の感覚器。

それに、突然一つの異物が触れた様だった。

「……………嬢ちゃん、感じたか？」

私は、無言で頷く。

フリーユージャー氏もまた、同様の何かを感じ取ったらしい。

唐突に、まさしく瞬時に現れた不明な“それ”。

強大な魔力を内包しながらも、しかしどこか弱々しい。

そんなあやふやな何かが、私たちが歩く道の向こう…道を進んだ突き当たりの路傍に佇んでいるらしかった。

「…どうするべき、でしようか？」

「どうするったって…こういう時、ここいらの国じゃあ君子危うきに近寄らずってんだろ？」

どう考えたって怪しい。

道を変えて、近寄らんようにするべきだ。

確認は、F・R・I・D・A・Yの姉さんに任せようぜ。」

「ですよね…。」

踵を返そうとするフリーガー氏。

まったくの正論だ。

いつもの私なら、同じ結論に至って行動を共にするだろう。

「…嬢ちゃん？」

でも…何故だろうか。

私は、既視感にも似た妙な感覚を“それ”から感じ取っていた。

煌めくような、ゾツとするほど美しい魔力の貌^{カタチ}。

それが、弱々しく明滅している。

まるで…助けを求めるように。

「…すみません、フリーユージャーさん。

今すぐF・R・I・D・A・Y・さんに伝えて、周囲に設置してあるアーマー幾つかの出勤要請を出してもらえますか？

念のために…。」

私は、意を決して道を進む。

「おい、おいおいおい…！」

まさか、確認に行くつもりじゃねエだろうな!?

今言つたばかりだろう、決断の瞬間を見極めろつて!

何があるかも分からん魔力塊を、わざわざ手ずから確認に向かうつてのかよ!?
こんなイカれた大儀式の真つ只中に在る街で!

おたく、正気か!?”

…まったくもつて、おつしやる通り。

でも、仕方がないのだ。

私は先を読むチカラを持つ魔女ではある…しかし、その像はいつだつてあやふやだ。
いつも心よくほうに正直で強い姉と、私は違う。

それがコンプレックスというか、恐ろしい時期も確かに在つた。

でも…そういうあやふやなモノに向き合うやり方を、私は師匠せんせいから学んだのだ。
逃げたつていい時もある。

でも、立ち向かわなきやならない時は、必ずある。

そうでなければ、運命は切り開けない。

直視するべき運命というものは、人生に於いて何度か必ず訪れるのだ。

あやふやだ。

あやふやだが…そういう運命は今なのだ、漠然とした感覚が確かに告げていた。

強大だが弱まってしまった何か、消え入りそうに助けを求めている。

そういう、漠然とした感覚。

なんとなく、手を差し伸べなければならぬ気がしたのである。

そう感じてしまったのなら、仕方がない。

私は、今の私の魔術に嘘はつけない。

沙条の魔術に幾ばくかの忌避感を覚えようとも、師匠や現代魔術科のみんなと出会って開花した、沙条綾香の魔術には絶対に嘘をつけないのだ。

「……っ。」

ああもうっ！

仕方ねエなア！

こつちも仕事だ、やってやろうじゃねえか！

ただし、余分な仕事をさせる分だけイロはつけてもらうからな！

こいつは、ガリアスタの旦那からじゃなく、お前さんから請求させてもらう！」

進む私に観念したフリーユージャー氏は、頭巾の中に手を突っ込んでボリボリと頭を掻きながら唸った。

「…私に応えられる内容なら、如何様にも。」

…これも、仕方がない。

代償もなしに、魔術師を動かすなどと呑気が過ぎる考えなのだから。

「ああ、安心しろ。

金銭だの、魔術秘伝だの、ましてやお前さん自身をどうこうしようってんじゃない。ただ…ちよいと化した情報が欲しいってだけだ。」

フリーユーカー氏は、ガリアスタ氏から支給された携帯端末を操作しながら言う。

「…情報？」

当家の魔術絡みでもないと言うなら、いったい何を？」

「…まあ、ちよいと人探しをな。

この街にや、どうやら俺の昔馴染みの身内が住んでいるらしくてな。

そいつを探すための、情報が欲しいってだけさ。」

中東魔術師で、傭兵の彼の知人…その身内？

初耳だ。

この話を、ガリアスタ氏は知っているのだろうか。

「ああ、勿論旦那には話を通してあるぜ。

契約上、雇い主の不利益になる様な真似はしねえさ。

安心しな…と。

さあ、お着きだ。

こっちの質問の詳細は後で話す。

さっさと確認に向かおうぜ、嬢ちゃん。」

此方の疑問を先読みし、彼は答える。

同時に、アーマー数機の到着をもって会話を打ち切ったのだった。

「…了解しました。」

行きましょう。」

.....

此処は何処なんだろう。

僕は、誰なんだろう。

僕は何故、此処に居るのだろう。

自分を取り巻く、殆どの事柄が不明だった。

分かることといえば、少しだけ。

僕の靈基^{カラダ}を形作る黄金色の何かは、きつとこの世の何よりも尊いものであるというコト。

それは、きつと僕本来の軀^{カラダ}などではなかったのだというコト。

そして…そんな尊い何かで形作られた僕は、どうしようもなくぼろぼろに弱つていて。

きつと、もうすぐ形を保てず消滅するのだろうというコト。

「…………ちくしょう。」

腹が立つ。

何故だろう。

許せない、憎たらしい、耐えられない。

何処とも知れぬ草むらに、裸ん坊で打ち捨てられた僕は恐らくもうすぐ消え去る。

経緯も何も、仔細一切理解できぬままに、誰にも気付かれるコトなく消滅するのだ。

僕をこんな風にした „誰か” が存在するというコト。

それもまた、数少ない僕が分かっている事柄だった。

だからこそ、許せない。

そいつのコトが、憎らしくってたまらない。

それに…何故だろう。

『例えどんな苦境に追い込まれても、全力で生き残ってくれ。』

「…………。」

誰かに、そう強く願われた気がした。
そんなのは、ただの言葉のほずなのに。

「……っ。」

何故だろう、この身を動かす原動力ちからとなる。

大事な軀と、憎しみと、言葉。

それらがあるから、僕は絶対に、このまま消え去るワケにはいかなかった。

「…助けて。」

僕は、弱る軀を捻って声を捻り出す。

「お願い、だ…だれか…誰か、僕を…たすけて…っ！」

か細い声だと、自分でも分かっていた。

でも、精一杯叫ばずにはいられなかった。

「……まったく、此処でも想定外。」

不意に、声が聞こえた。

唐突に、突然に、その声の主は倒れ伏す僕の頭上に現れる。

「だ、だれ…?」

「誰でも良い…僕を…っ。」

姿は見えない。

身を翻して確認するほどの力すら、今の僕にはない。

「でも、そうね。」

今回に関しては裁定者の存在と違って、悪くはない想定外だわ。

儀式の完成へは、きつと大きく進んでしまったのでしようけれど…それでも、恐らくは避けられなかった事態の一つを大きく利用できる。

きっとコレの存在は、儀式に潜んだバグとなる。」

声の主は、僕を無視してブツブツ呟く。

「あつ。」

そして、僕の髪の毛を乱暴に掴み、無理やり担ぎ上げた。

「問題は、今にも消え入りそうなコレの修繕をどう行うか。敵に気取られぬように、そして…安全に。」

それが叶う術者を見繕わないと。」

言いながら、声の主は歩き出した。

視界には、声の主が纏う白い外套のみが映る。

僕には、抵抗する余裕も何も無い。

為すがままだ。

「…へえ、一応貴方も、カテゴライズとしてはサーヴァントなのね。

クラスは…アーチャー？

それともランサーかしら。」

声の主を取り巻く、景色が変わる。

例えようの無い、赤いような黒いような…空間の歪み。

そこに、僕は声の主ごと飲み込まれていった。

「まあ、なんでもいいか。

せいぜい生き足掻いて頂戴。」

.....

私とフリーゲーマーさんは、アーマー数機による警護を受けながら進んだ。

道の先に行く。

この辺は、円蔵山の麓付近というコトもあつてか木々雑草も多い。私たちが向かう先も、そういった緑の一角だった。

『魔力体、こちらの接近に反応を示しています。

魔力反応数値を承合中……。』

アーマーから、F・R・I・D・A・Yさんの音声聞こえる。

私たちは、その姿を視認する距離まで近付きつつあった。

「…なんだ？」

この魔力反応は…よくわからねエ。

使い魔の様な…魔術礼装の様な…妙な感じだ。」

フリーユーカーさんの所感は、的を射ていた。

私も同意見だ。

正体は知れないが…今のタイミングで冬木市に現れる、魔術神秘関連の何か…。
十中八九、聖杯戦争絡みの存在であろうが――

『承合完了。』

ライブラリ内に、一致する魔力反応データが一件存在します。』

F・R・I・D・A・Y. さんの言葉と同時に、私はその姿を遂に確認した。

「え…?」

艶やかな金色の髪、白い肌…。

一子纏わぬ姿で、木々の隙間に弱々しく佇むその少年の姿は…まるで、一つの芸術作品のようだった。

「…人型のガキか。

つてことは、やっぱ使い魔かなんかなのか?

サーヴァントにしては弱々しいが…おい、嬢ちゃん?」

私は、言葉を失う。

その少年の姿に、強い既視感を覚えていたからだ。

年格好は、勿論違う。

その弱々しさは、あれとは似ても似つかない。

でも――

「……たす、けて……お姉さん……。」

その、すぎる様に見上げる赤い瞳。

それは、私を値踏みするように見つめていた奴の瞳にそっくりだったのである。

『英雄王ギルガメッシュ。』

彼の振るった財宝の反応と、対象の反応は一致しています。』

Episode31:Game Restart

父アイアン・モンガーの友人との戦いは、一つの契機だった。

今までの人生、その全てを突き付けられて思い知ったのだ。
だから誓った。

生涯をかけて自分の罪と向き合い、戦うと。

『私がアイアンマンだ”って?』

しかし、それは彼にとって想定外な事柄の開始をも意味していた。

『ヒーローは自分一人だと思ってるのか?』

長いような、短いような――

『君は、より大きな世界の一員と成ったのだよ。
まだそれを知らないだけだ。』

しかし、間違いなく濃密な――

『君に『アベンジャーズ』の話をしに来た。』

――大いなる、戦いの始まりを。

.....

『アベンジャーズ計画』

危険だが、強力なアイデアだった。

目覚ましい力を持った者達を集め、チームを組んで、より大きな力にする。

彼らが力を合わせれば、強大な敵にも必ず立ち向かえると信じた国家秘密機関……S・H・I・E・L・Dが主体となって実現すべく、進行していたプロジェクト。

お伽噺やコミックブックに語られるような、ドリーム・ヒーローチームを誕生させようという試み。

——荒唐無稽な話だ。

『地球人は、もつと知的かと思つたが。』

神だと嘯く、大物ぶつた地球外生命体。

『なんだと？』

なんなら君の星をフツ飛ばしてやろうか。』

偉そうで上から目線で、好き勝手干渉してくる秘密主義の諜報機関長。

『なんで男って子供なの？』

S. H. I. E. L. Dは常に脅威を監視してる。』

その部下の、頭のテツペンから爪先まで嘘で塗り固めたスパイ女。集められたメンツはどいつもこいつも、彼にとっては信用ならない傲慢な他人に他ならなかった。

『僕らがチームだって？』

とんでもない。

薬品を無理やり混ぜたようなモンだ。

ある意味：時限爆弾だ。』

唯一の理解者たる、自分に匹敵する頭脳の持ち主である彼の言う通り。協力し合うなんて、出来るワケがなかった。

『ああ、鎧を着た無敵の男。

脱いだら何が残る？』

…特に、この老いぼれ。

『君の十倍も価値がある人達を知ってる。

映像を見たが、君が本気で戦うのは自分の為だけだ。

自分を犠牲に出来る人間じゃない。

仲間の為、鉄条網に身を投げられるか…!?!』

彼の父が製造に携わった、第二次世界大戦時代の人間兵器。

科学の力で強化された超人兵士にして、作戦行動中^I行方不明^Aとなった大尉^{キャプテン}。

彼の父は、その死を認めず探索を続け、それが打ち切られてもなお…その兵士が体現した正義に追い縋っていた。

…少なくとも、彼の目にはそう映っていた。

彼の父の目は、彼に向けられることは無かった。

その正義に注視されていたのだ。

——— 気に食わない。

『君のような奴がヒーローのふりをするのは、止めた方がいい。』

七十年も昔の耄碌もつろくジジイが、氷の底から発掘されるや否やヒーロー面だ。
貫い物のパワーを傘にきて、偽善を振りかざして偉そうに、訳知り顔で…。

《僕の心コトなんて、何にも知りやしないクセに。》

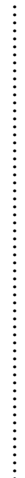
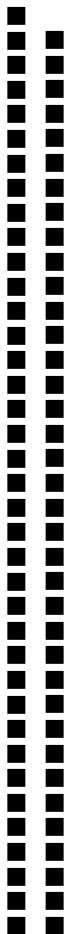
彼には、とてもこの兵士が気に食わなかったのだ。

こんな奴が居るようなら、尚のチームアップコト…協調なんかは望むべくもない話であった。

……

それでも――

……



彼は
—
…



…

『ごめんなさい。』

彼の懐かしい話を観劇している所、悪いのだけれど…一時中断して貰えるかしら？
ミスタ・ガリアスタ。』

『……。』

『ねえ、色男さん。』

「ここは夢の中よ？」

寝たフリなんて通用しないんだし、観念して、起き上がって、話を聞いて貰いたいん

だけど。』

…女の声がする。

正確には、耳が認識した音声なのか判別はつかない。

しかし、呼び掛けられるという実感だけは確かに自意識が受け付けていた。

『……………。』

まるで、明晰夢のような感覚。

何処かに横たわり、目を瞑り眠っていたという実感がある。

実感はあるが、現実味は無い。

この不可思議な感覚を受け入れるか否か、ボクは一瞬^{しゅんじゅん}逡巡^{しゅんじゅん}し…そのまま、感覚の目を
見開いた。

『あら、案外すんなり状況に対応するのね。

魔術師って、もつと疑り深いモノだと思ってた。』

自分で急かしておいて、良く言う…。

ともあれ、状況を確認せねば。

そこは、洒落た作りのオープンフロアの様に見えた。

ボクが横たわっていた革張りのゆったりしたソファがガラステーブルを囲み、そこを中心にするきりとした階段が階上に伸びている。

ビリヤード台やバーカウンターなどもあり、パーティスペースとして十分に機能する空間。

その一面を覆うガラス窓の向こうには……紅が広がる。

『…なんだ、此処は。』

思わず言葉が漏れる。

そのガラス窓は空間の構造上、屋外を望むためのモノである筈だ。

現実的な、都市ビルディングに有りがちなデザイナー設計物。

なのに、その向こうに広がる空間はあまりに非現実的だった。

だって、その紅はあまりに鮮やかで。

現実的ではない。

朝日や夕日の赤とも違う、その色はまるで血液…否。

むしろ“代償魔術”を行使する折に、今まで何度も見てきた素材の放つ…“魂”の輝きに似るような――

『あまり、窓の向こう側は見えない方がいい。』

女の言葉が、ボクの意識を引き戻す。

女は、ボクに対面する形で卓向こうのソファに腰掛けていた。

青い高級感のあるスーツに身を包んだ、金のショートヘアをした壮年の女性。

黄金色の液体が入ったショットグラスを片手に、それを弄ぶように回して此方を見つめる。

『…サーヴァントと契約したマスターは、その英霊存在に纏わる過去を夢として追体験すると言う。』

先ほどもでは、ボクの自意識はその一環に存ると認識していたのだがね。

どうやら、事情が変わったというコトかな?』

ボクは、迂遠気味に女に問う。

こういう場合、気高さと思考の両立を優先してしまう己の性分が少々鬱陶しくも感じられるものだ。

『それでもないわ。』

確かに「貴方の世界」の魔術神秘に因んだ形式からは外れざるを得なくなっただけで、此処がスタークの心象風景であるコトに変わりはない。』

女は、グラスに口をつけることもなく淡々と答える。

『…では、此処は奴の心に刻まれた場所…例えば、自宅だと？』

そして…奴の心を語って見せる、貴女は一体何者だ？

話に聞く、奴の奥方だとも言うのかな。

それが、奴の精神の一部として現れた？』

ボクの言葉に女は笑った。

『まさか。』

スタークとの結婚生活なんて、想像も出来ない。

ペツパーみたいに寛大な奥さんには成れないわ、私は。

でもそうね…此処も、彼にとつては家の一つであつたとは言えるわ。

この、[”]アベンジャーズ・マンション[”]は。』

ひとしきり笑つた後、手元のグラスに視線を落として女は言う。

『……っ！』

思わず、もう一度辺りを見回してしまふ。

アベンジャーズ…その言葉は、奴の夢でも聞いた言葉だ。

奴から提示された資料にも、何度か登場した名称でもある。

奴がかつて所属していた組織の名前…その名を冠する施設が、此処……

『気になるっ？』

見回した視線が、グラスから離れた女の視線とぶつかった。
…なんだか、弄ばれている様な感覚を受けて少し苛つく。

『…では、貴女は何者なんだ？』

ボクはついに、単刀直入に問う。

『そうね…私の名前は取り敢えず、*“ラツシユマン”*…いいえ。

この格好だものね、*“ホーリー”*とでもしておいて頂戴。

お察しの通り、スタークというサーヴァントの一部…というコトになるのかしら。
かなり、不本意ながらね。』

…取り敢えず？

わざわざ、名を偽るコトを宣言するの？

『…それを、ボクにどう証明する？』

敵の魔術師やサーヴァントが仕掛けた幻術存在の類いでは無いという保証は？』

ボクの問いに、ホーリーとやらはまたも微笑む。

『何がおかしい？』

『別に。』

ただ、貴方ってやっぱりスタークのマスターなんだなって思ってる。』

それは、サーヴァントとマスターの性格は似るとい話か？

…一々言動が腹立たしいな、この女。

『証明も何も、^{キャスター}スタークのセキユリティをすり抜けて貴方に攻撃を仕掛けられるようなヤツが、フユキの街に居ると思う？

それを、スタークにさえ気取らせない様な存在が。』

暗に、お前は己の^{サーヴァント}力を把握していないのかと言われている気がした。

この邂逅が外部から仕掛けられたモノでないのなら、それは内側から生じたモノに他

ならないであろう…と。

『まあ、その疑り深さは貴重だけどね。

その粘着質な感覚を持った男がスタークとチームを組むのなら、それはかなり鬱陶しいコトこの上ないわ。

敵からしたらね。』

…OK、理解した。

このラッシュユマンだかホーリーだかいう女は、刺々しい含みを持たせなければ会話が出来ない。

それがウイットに富んだ会話であると信じて疑わないタイプだ。

実に面倒。

それだけは確実らしく、今はそれで十分。

現状を把握するため、会話を進めるとしようじゃないか。

『…では、ミス・ホーリー？

貴女は何故、夢に介入してまで発生したのかな。

貴女が奴というサーヴァントの一部であると言うのなら、マスターの精神に訴えかけると言うのは相応の事態であろうと推察するのだがね。』

ボクの問いを聞いた後、ホーリーは真剣な目付きで此方を見つめた。

『…そうね。』

言うなら、仕様変更のお知らせってトコロかしら。』

グラスをテーブルに置き、腕を組んで座り直すホーリー。

『仕様変更…？』

キャスターの性能に、変化があるという話か？』

ボクは、キャスターがランサーから不治の致命傷を受けて処置を施した経緯を思い返す。

そして、それに対するキャスターの見解と、その対処に紐づく今後の方針を議論したコトも。

その後、互いに状況整理と準備を整え、休息についた末の今である。それについての話なのか、と考えたのだが：

『概ね正解よ。』

でも、貴方や本人が考えているより、遥かに大きな変化がスタークの霊基に起こったの。

その内容と、それによって引き起こされる現象について。

貴方は知っておかなければならない。』

ホーリーは言葉の後に、ふと視線を反らした。

というより、つい他所を注視してしまったとも言える。

その視線は、紅い風景が広がる窓の外に向けられている様だった。

『全ては、ランサーの槍によってスタークというサーヴァントの“死亡”が決定し…それでも消滅せず無理やり活動し続けてしまっているコトに起因する。』

それによって、明確な不具合が発生したのよ。』

不具合…バグ。

コンピューターなどの内部プログラムに於いて、想定し得ない挙動を生じさせる欠陥。

『…そのバグとやらが、君である。

とでも言うのかな?』

ボクの問いに、ホーリーは首を横に振る。

『むしろ、私の発生はスタークという英霊^{ヒーロー}“本来の仕様”通りとも言えるわ。

でも、その本来の仕様は発揮される筈が無いのよ。

聖杯戦争という魔術儀式の制限下ではね。』

…サーヴァントという存在は、人智を超えたパワーを持つ。

神話に登場する英雄や、歴史に名を残す偉業を成した人物。

何れにせよ、星が一種の“情報兵器”として保管した記憶そのものを具現化する召喚魔術である。

後者の場合、現代に近い人物であればあるほど元来は強力な直接戦闘力など持ち得ず、その補正の為、偉業に因んだ能力を星より付与され召喚される。

現代どころか未来の英霊であるキャスターは、超技術こそ持ちうるものの、こちらに属する英霊だと理解していた。

…しかし、前者。

神話に登場する英雄などは、その当人の能力が既に現代兵器を大きく上回る場合が多い。

ギルガメッシュ王にせよ、メドゥーサ嬢にせよ、クー・フリーンにせよ。

彼らは、ヒトの手元に収まるだけのパワーに弱体化されるのだ。

それでやつと、現代の英霊と最低限のバランスが保たれる。

神秘が薄れた現代に、真つ当に存在しうるだけのサイズに落ち着くのである。

…ここで、ホーリーの言葉である。

彼女の言葉は、まるでスタークが前者に属する超存在であると告げたように聞こえた。

『元々スタークはこの世界にとって異世界の存在だから、再現は完全じゃないわ、勿論ね。』

それでも…貴方が次に目覚めた後のスタークは、今まで通りのサーヴアントとは大きく違ってる。』

その言い方だと…恐ろしいコトの様に聞こえはするが、むしろ望むところという気さえする。

『つまり、キャスターは今後とてつもなく強力にパワーアップすると。

貴女は、そう言いたいのか？

サーヴアントが、心的接続を行ってまで警告するほどに。』

ならば、頷ける。

強力になるというコトは、それだけ魔力消費も大きくなるというコトだ。相応の魔力を賄う準備もしなければなるまい。

『…そうね。

単純な話をするならば、パワーアップと消耗の増加。

そう言う話になるけど。

消耗に関して言うなら、出力以外にも大きな問題があるわ。

今は、貴方達が設計した拠点の効力も併用して持ちこたえられてはいるけどね。』

現在、我が拠点には大量に設置されたりアクターと、ボクが以前入手した^{アシユクダーン}涙の壺と呼ばれる魔術礼装の併用によって強力な魔力補填機構が備わっている。

ほぼ無尽蔵とすら言える魔力リソースを実現しているワケだが…。

それを持つてすら懸念される程の、出力に起因する以外の大きな問題…？

サーヴァントの運用に際して、パワー以外の問題など——

『…待て。

先ほど、貴女は言ったな。

聖杯戦争の制限下に於いては、キャスター本来の力は発揮出来ない。

つまり…それから解放されたというコトは——』

己の行き着いた考えに、^{おぞけ}怖気が走る。

それを察してか否か、しかし彼女は無表情で頷いた。

『今のスタークは、聖杯戦争という魔術儀式そのものによる支援を受けていない。』

『……ッ!!』

淡々と告げるホーリーの言葉が突き刺さる。

元来、サーヴァントという使い魔は人間の術者のみで使役可能な存在ではない。

その程度の貧弱な魔力や記憶領域で保つコトなど不可能な、人智を超えた存在なのだ。

その調整の為にこそ、冬木の街の様に強力な霊脈と高度で大規模な術式を要する。

そんな最低限の存在基盤が、今のキヤスターには無い。

この世界に存在していられる保証さえもが貧弱な状況の筈だ。

ボクは、夢の中にも関わらず息を飲んだ。

『じゃあ……なにか？』

我がキヤスターのサーヴァントは：ランサーの槍によって、聖杯戦争の枠組みから切り離されてしまったとしても言いたいのか？』

バカな。

有り得るか、そんなコトが？

如何に魔槍ゲイ・ボルクによる死の効力とはいえ…

否、キャスターが異世界人であるという言を信じるならば、キャスターの持つ技術との衝突が、我々の想像し得ない効力を発揮したのか…。

いや、しかし、それでは——

『私はこの世界の魔術師じゃないし、聖杯戦争という儀式とランサーの槍、そしてスタークの靈基からだがどんな因果を生んだかは解らない。

でも、これだけは確実に言えるわ。』

——そんな…ふざけるな。

冗談じゃないぞ。

『さつき、バグと表現したわね。』

それじゃあ——

『聖杯戦争というプログラムに於いての不具合バグというのなら、間違いなくトニー・スタークトニー・スタークの存在こそがソレなのよ。』

——ボクの聖杯戦争は、どうなってしまうと言うんだ…？



.....

.....

「.....ッ！」

ボクは、目を覚ます。

自室のベッド。

贅を凝らし、快適に設計し、ストレスを生じさせないように作った部屋。

そこで休み目覚めたボクはしかし、滝のような汗をかきつつ覚醒したのだった。

『良かった...起きたかマスター。』

F. R. I. D. A. Y.、彼の容態は?』

傍らから、この約一ヶ月ですっかり聞きなれた男の声を聞いた。

『呼吸と脈拍に若干の乱れは確認出来ませんが、いずれも許容範囲内。
肉体的には、いたって健康な状態です。』

続き聞こえる、美しい女性の音声。

『そりゃ良かった。

一段落だな。

マスター、聞こえてるか？

おはよう、僕のコトが分かるよな？』

ボクは、身を起こすコトなく男を見やる。

姿形は、確かに声の主：我がキャスターのサーヴァント。

トニー・スタークだった。

しかし目の前のソレからは、主従契約に伴う魔力パスによる繋がりが感じられなかった。

「…ヴィジョン・アーマーか。

本体は何処にいる？」

ボクの言葉に、ヴィジョン・キャスターはため息をつく。

『ラポラトリー・スペースだ。』

そこで、複数のリアクターによるエネルギーチャージを続けている。

その表情から察するに、君も当然実感しているコトと思うが…どうも魔力の回復が遅くてね。

いや、それどころか消耗し続けている。

常に宝具をフル回転させてでもいるような調子でだ。』

夢で、あの女が語った内容を思い出す。

それが、如実に現れているらしかった。

信じるしか、無いと言うコトか。

『いやまあ、実際稼働はしているが…それでも回復が追い付かない様な事態は想定して
いなかったからな。』

昨夜もあの後、互いに最低限の事後処理しか行えない程消耗していたし、限界も近
かった。

『おかしいとは思っていたんだが…。』

言われて、自分の身体の至る箇所にギプスの如くりアクターを含んだアーマーパ
ーツが装着されているコトに気付く。

『ああ、ごてごてと張り付けてしまつてすまないね。』

それだけ処置して、やっとマスターが生命活動を問題なく行うに足る魔力を用意出来
たんだ。

『ざつと…リアクター20基分のエネルギーだ。』

一基で、最低でも原子炉三基分のエネルギーを生み出すリアクターを、二十基使つて
補わなければならぬ程の魔力消費量だと…!?

『正直、ソレだけのエネルギーを常に消費し、供給され続ける状態が健康的であるとはどうしても思えない。』

ナノマシンによる補助措置も施してはいるが、それでもだ。

バイタル上では問題ないと診断されているが、どうだ？

重ねて言うが、身体の不調は感じないか？』

…ボクは、手を握り足を動かす。

不思議なコトに、身体機能に不備はない。

「…お前の処置が的確だったのだろうか。」

魔術回路が活発に機能しているコトによる、運動時的高揚感を覚える程度だよ。」

身を起こし、ボクは答える。

魔術回路は、即ち臓器だ。

その活動が激するとはつまり、高ペースでマラソンを走り続ける様なもの。

その手の鍛練は、ガリアスタの家柄上慣れていたものだった。

この程度の負荷ならば、活動に支障は無い。

…が、それでもやはりこの程度で済んでしまっている事実が腑に落ちなくはあるのだが。

『そいつは上々だ。』

正直、この現状については理由などは不明なんだが…。

死の棘の影響に抵抗しているコトによる副作用なのか…調べてみる必要があるな。聖杯戦争開幕まで時間もないというのに、また仕事が増えた。』

ため息混じりに肩を竦めるヴィジョン・キャスター。

…この調子では、あのホーリーだかいう女の出現については覚えが無いらしい。間違いないく、ホーリーの存在はキャスターの変化に関連がある。

これについては、真っ先に話しておかねばならなかった。

「…キャスター、これについてはボクにも伝えるべき事柄がある。

まずは——」

『いや、待った。』

ひとまず君の状態が安定したなら、もうひとつの懸念事項にも対処して貰わないといけない。

そちらを先に聞いてくれるか？」

…冗談じゃないぞ。

まだ何かあるのか？

「…言ってみろ。」

ボクの言葉に促され、キャスターはタブレット端末を取り出す。

それで空を叩くと、我々の眼前に立体映像が出現した。

それは、我がビルディング内部の医務室の一角を映し出している。

『これは、生中継の映像だ。』

ベッドで眠る彼を見てくれ。

先程ミス・サジヨウが発見し、君が契約している傭兵と協力して回収した。』

それは、一人の少年だった。
金髪で、美しく、弱々しい。

安らかに眠りについているらしいが…

「…この子供が、なんだと言うう？」

僕の問いに、キャスターは手を口に当てて再び困った様に溜め息をつく。

『…なんと言ったら良いか。』

あれは、ギルガメッシュもどきだ。』

…耳を疑う。

「何だと？」

『そうとしか言いようがないんだよ。』

F. R. I. D. A. Y. ?』

キャスターに促され、ギルガメッシュもどきと称された少年を映した画面の隣に、様々な比較資料が示される。

『あの個体の基礎を構成する霊核要素は、99.6%の精度でギルガメッシュと一致しています。』

しかし、それを内包する霊基パターンはギルガメッシュ当人と近くとも同一ではありません。

寧ろ、彼が所有していた様々な宝具と酷似しています。』

成る程、確かに情報の精度は高い。

ボクは、資料に映るギルガメッシュ王と、隣に映る金髪の少年を見比べる。

「…外見上も、英雄王と似ているな。

この子供は。」

『そう、だからもどきだ。』

彼が何者かは解らないが、この観測結果ならば、英雄王が展開したデコイ的な人型の宝具である可能性も捨てきれない。』

…ワケのわからん存在だ。

この状況で抱え込むには、あまりにも面倒過ぎる。

「…何故、ミス・サジヨウはボクに何の相談もなくあれを回収し、この拠点内部に引き入れたんだ？」

『放っておけなかったらしい。』

キャスターは、肩を竦めて笑った。

「……………」

頭を抱える。

問題が…問題があまりに多い！

…だが、確かにあの少年の存在が不可解であるというのも事実。関わってしまった以上、解明する他はあるまい。

『…大丈夫か？』

キャストアが、伏せたボクの顔を覗き込む。

「……大丈夫じゃない。

全く……これだけ入念に準備をしたというのに、問題が次から次へと……！」

気を落ち着けるため、深呼吸。

ボクは溜まった息を吐ききった後、ベッドから跳ね起きた。

「まったく、時間がいくらあっても足りやしない！

一つずつ解決するぞ、キャストアー！」

まずは、我らが同盟者と契約傭兵に、聞き取りがてら説教の一つでも呉れてやらねばな……っ！」

ボクの行動を笑って眺めつつ、キャスターは立体映像を閉じる操作を行った。

『ああ、だな。』

ウジウジしてても始まらない。

先ずは一ツ風呂浴びて来たまえ。

F. R. I. D. A. Y. !』

『はい、バスルームの準備は完了しております。』

…くそっ、なんだ？

こいつらの気の利き方は。

お前らボクの両親か！

理不尽にムカツ腹が立ちもするが、しかし実際リフレッシュはしたかったので有り難かった。

「では、十五分後にブリーフィングだ！

各員に伝えるように！

解散！」

足手まといになる従者は、大量のスタッフと共に本国へ帰ってしまったので、今は衣服も自分で用意せねばならない。

……まあ、こういうあくせく動く感覚は少年時代の権力闘争を思い出して昂りもする。魔術回路の活性も相まって、なんだかやけにハイになっている自覚はあった。

「……………ふう。」

兎に角、動く。

ボクは、着替えを一揃え引っ付かんで自室を後にするのだった。

Episode 32・英霊トニー・スタークによる幾つか の自己考察と、ズレる運命のカタチ

「……………」

「おい、聞いているのか、キャスター？」

まさか、霊基の不調による目眩でも発症している…だなんて言うんじゃないだろうな。」

閉口する僕に向かって、主たるアトラム・ガリアスタが問い掛ける。

「…ああ、もちろん聞いてるさ。」

体調も、依然問題は無いよ…マスター。」

思わず取り繕う。

正直に言うならば、問題はあった。

マスターからの報告を聞いた瞬間、僕は友神にカミナリをブチ落とされたような途方も無い衝撃を受けたのだ。

日本流に言うならば、まさしく青天の霹靂へきれきってヤツだろう。

「…では、その反応はやはり心当たりが有るんだな？

ボクがお前との魔力経路パスを通じて視た、奇妙な夢の全てについて。」

「……………」

……………

思わず、はぐらかしてしまった。

.....

——さて。

我々キヤスター陣営が対処すべき問題は、もちろん山積している。

我がマスター・アトラムが語った、僕の霊基に起こっているとされる異常については、もちろんその一つに該当した。

∴僕の適当な誤魔化し文句を、マスターは不本意そうではあったが呑み込んでくれたらしい。

正直、組み始めた当初は彼がここまで僕に気を遣ってくれる様になるとは思いもしなかつたが……。

彼の様な自分本意な男がそういう態度をとる程に、彼が話した夢の話は僕を動揺させ、混乱に陥れてしまっていたというコトだろう。

ニューヨークの事件の直前、アベンジャーズ結成時の話。

それをブツ切つて現れた、アベンジャーズ・マンシヨン。
その外に広がる、赤。

そして…：よりにもよつて、ホーリー議員…：僕の世界における世界安全保障会議員の名前と姿を用いて現れた、僕の内面存在を気取る何者か。

…：まあ、議員を騙る直前にラッシュユマンと名乗つて見せた時点で、その正体など僕に判らないワケもないのだが。

ともかく、彼女によつて齎もたらされた情報は大きな懸念材料だ。

サーヴァント・トニー・スタークの仕様変更。

この街を基点に展開されている「聖杯戦争」という術式システムから弾かれたコトにより、システムそのものの機能不全を引き起こしかねない異常バグと化した、僕。

それによつて開放された、英霊としての僕が持つ本来の機能が、僕を維持する魔力コストを莫大に増やしてしまつている…：らしい。

…：まあ、確かに筋は通る。

それに、そういつた状況を産み出しかねない宝具アーティファクトの存在にも、一応の覚えはあつた。

ラッシュユマンを名乗る彼女が僕の内面に存在するコトにも、その宝具の存在があればこそ納得がいく。

…：彼女は、その宝具にとつても関連性が強い。

彼女がいなければ、その宝具は僕の一部分として存在し得なかったとまで断言できるだろうから。

………。

——だが。

だが、しかしだ。

その存在について、それをこの^{からだ}霊基が使用し得るといふ事実について、僕自身にはこれっぽちの自覚もありはしなかった。

サーヴァントとは、この世界の大きいなる仕組みと魔術神秘によつて設計・製造された、超兵器の名称だ。

^{せかい}星そのものに記録された、様々な偉人や伝承に基づいた人^{パーソナリティ}格を内蔵する、モノ思う兵器。

その機能バリエーションは多岐に渡り強大で、故にこそ備わった人格意思は己の性能を全て把握していなければならぬ。

仕様説明書の付属していない兵器など、危険なコトこの上ないだろう。

だのに、僕はそれについて全くの無自覚だった。

寝耳に水も良いところだ。

これは、おかしな話なのである。

それに、あれは一介のサーヴアントが所持するアイテムとしては、どう考えても強大すぎる。

あくまで、この星の自衛システムの一環でしかないという「抑止力」が運用・管理できるとは思えないのだ。

この星の「領域外」なる存在であり、ともすれば「人類の脅威」にさえなり得るだろう。あまりにも規模が違いすぎる。

この問題内容について、内面存在だとか言うホーリー||ラツシユマンを問い質したくもあつたが：

残念なことに、そういった精神的なアレコレについて僕は明るくない。

試しに、F・R・I・D・A・Yに呼び掛けるように声に出して呼んでみたり、内心で呼び掛けてみたりもした。

しかし僕の内面存在とやらからはウンともスンとも返しを得られず、望ましい結果などは皆無であつたワケだが。

ならばと我が陣営に属する様々な魔術師プロフェツシヨナル及び魔術使いのお歴々にも解決策を訊ねてみたが、これも上手くいかない。

この問題について解を導き出す程の知識を持ち得る魔術師となると、近場では聖杯戦争という術式のサーヴァント制御に関する分野研究を担当したとされる、間桐家の術者を於いて他に無いだろう…という話だ。

ライダー陣営と最初に交戦した事実からも明白だが、現状において彼らは当然、敵対勢力のひとつである。

しかも、戦争運営の根幹を担う御三家の一角。

そう易々と、協力を仰ぐコトなど出来る筈もなかった。

初戦にて彼らに仕掛た集音機器は一見問題なく機能しているものの、魔術や戦力に関する目ぼしい成果は一切獲得できない。

不自然な程に、彼らの一般的な家庭のような生活音のみを拾い続けている。

魔術師という人種はテクノロジー方面に関しては疎いというのが通説とされる筈なのだが…我々の盗聴を察してか否か、ライダー陣営は情報を完全にシャットアウトしていた。

手詰まりである。

兎も角、大事なものは開戦が差し迫った現状に於いて、僕自身の霊基状態を改善する手段が見当たらないという事実だ。

萎む風船に空気を入れるように、失われる魔力を補填し続けて体裁を保つ。

ランサーの魔槍を受けた時点で覚悟していた事柄ではあったが、しかし状況はその想定を大きく下回る程であり、まさしく“最低”である言えた。

そして…常に魔力を消費するだけの宝具効力が、なんらかの形で齎もたらされている筈であろう、というコトも忘れてはならない。

なのに、僕にはその自覚さえも無いのである。

それでも時間は容赦無く進むし、我々は戦わねばならない。

「…うん。

此処か、成る程。」

何故なら、聖杯戦争に挑むサーヴァントは未だ出揃わずとも、状況は刻一刻と変化を続けているのだ。

それを、僕は砕けた石畳のカケラを歩き様に蹴飛ばしながら実感したものだ。

「音声と衛星写真こそ確認したもの…コイツは酷いな。」

これは、より明確に新たな懸念材料のひとつであると言える。

僕らが治療や情報整理を終え、休眠状態にあったであろう時間帯に、ひとつの騒動があつたと思わしき場所の確認。

2004年 1月下旬 朝

冬木市 新都 半壊した冬木教会

「神秘の隠匿だかいう共通認識も何も、あつたモンじゃない。」

…まあ、これに関しては我々に言えた義理じゃないという自覚はある。

だがしかし、倫理観とは別に聖杯戦争参加者としての観点から俯瞰して見れば、公園の破壊と今回の破壊は意味が違う。

聖杯戦争の運営本部とも言える教会が、本番開始直前に全壊してしまうというのはどう考えても問題だろう。

「周囲に動体反応は確認出来ず…か。

まさしく廃墟だな。」

マスターに請われてヴィジョン・アーマーを偵察に飛ばしてみたが、見渡す限り全壊した、かつての教会施設が広がるのみだ。

真新しい破壊の痕。

そこにはしかし、生命の存在を示す反応等は皆無。

破壊の主が隠匿したのか、そもそもこの破壊によって発生しなかったのか定かではないが…良くも悪くも死体らしき影もまた同様に見受けられない。

本来ならば、この場に滞在し聖杯戦争運営を監督するとされる、聖堂教会の神父とやらの姿さえも確認できなかった。

だが、魔力反応の残滓は随分と色濃い。

F・R・I・D・A・Yが衛星カメラと集音機器で観測した、強大な神秘による発光現象…

雷神ソールの力に酷似したエネルギー反応が、そこには確かに在る。

…今まで出会ったサーヴァントは皆、なんらかの神性を含む存在だった。

彼らもまた、かの太つちよサーヴァー雷神と似通ったエネルギー数値を示していたコトを思い出す。

恐らくアレが、“神性”スキルとやらを保持したモノ特有の何かなのだろう。

何処かの雷神存在に類する何かが、他に召喚されているのか…

何もかも、現状を精査せねば知りようもない情報だった。

「さて…マスターの方も、渡りがついているといいが。」

僕は、ヴィジョン・アーマーの遠隔操作によつて廃墟を探索しながら呟く。

現在、マスターはこの場での出来事の詳細を知るであろう人物に、通話による連絡調査を試みている。

衛星カメラが記録した映像には、様々な人物が映し出されていた。
教会を運営していたであろう、幾人かの聖職者。

何らかの魔術か英霊スキルの影響か、像がブレて蠢く二人の人物。

僕らが撃退したランサーの主従。

ランサーの主：バゼット・フラガ・マクレミツツは見る影もなく負傷していた。彼女に仕掛けた集音と追尾の機能を持つ装置は破損してしまつたらしかつたが、あの場に於いて彼女を傷付けた最初の一撃は、信用しきつていたのであろう教会の神父によるものらしかつた。

なんとも痛ましい話だが、重要な事実がもうひとつ。

騒動の末に気を失つた彼女を救い出し、廃墟から連れ出した人物が居たのだ。

映像に写つていた、最後の一人。

あらゆる形パターンで四方八方に散つては姿を消した他のモノ達とは違い、像のブレた何者かの片一方を伴い、徒歩にて足早に立ち去つた一人の少女。

サーヴァントを召喚し聖杯戦争参加者と成つた、リン・トオサカの姿を。

「…分かつてるさ、F. R. I. D. A. Y.。」

今は余所事に脳のリソースを割いてる場合じゃない。

ともかく、僕は出来る限りの状況検分を——」

急かすように表示される、現場情報のウインドウ。

兎も角今は己に出来ることをせねばと、一瞬の沈黙から再始動した僕は――

「あの、もし。」

不意に、か細く透き通るような女性の声をヴィジョン・アーマーにてキャッチした。
ツイン・カメラによる、発生源の確認を行う。

『…ハイ。』

これまた寝耳に水、と言うべきなのか、あまりに咄嗟で気の抜けた返事をしてしまう。
そこに立っていたのは、少女だった。

ウエーブのかかった銀色のロングヘア、金色の瞳、そして白磁のように無垢なる肌色
…その全てが透き通ったように美しい。

ゾツとするようなその美貌を黒い帽子と修道服で包んだ少女は、ともすれば人形とさ
え見紛う無表情で佇み、此方を見つめていた。

「あなたは、聖杯戦争に関係する魔術師ですか？

あるいは、その従属ですか？」

あまりにストレートな問い。

魔力の類いを一切用いていない、このヴィジョン・アーマーを見て魔術と関連付けるとは驚愕すべきだが、それ以上に驚くべき事実がある。

「F. R. I. D. A. Y.、彼女はいつ此処に現れた？」

アーマーのマイクを切った上で、僕はF. R. I. D. A. Y.に確認をとる。

そう、あらゆる公的機関による捜査も、野次馬する衆目も、現在この場所に及んではないのだ。

魔術による隠蔽：それがどの勢力による仕業なのかは定かではないが、この惨状を確認できる存在など限られるというコトは事実。

なのに、この少女は現れたのだ。

もし何者かが接近しているならば、周辺捜査を行うF. R. I. D. A. Y.が発見し、警告する筈である。

だが――

『今この瞬間です。』

様々なカメラを用いても、対象の女性が現段階まで冬木市に存在したという事実は確認できません。

対象の女性は、何らかの手段で突然教会跡に出現しました。』

…怪しい。

そんな芸当が可能なのは、この世界に於いてはよほど隠蔽魔術に長けた術者か、あるいはアサシンクラスに類するサーヴァントくらいのものであろう。

怪しい、確かに怪しいが…しかし、物騒な戦争への関連について関心を持つ彼女の正体こそが気になった。

なので、ここは素直に応答する。

『ああ、()明察。』

よくぞ言い当てたと称賛したいところだが…しかし状況はどう見たって不気味だ。

その服装と、この場所…

それらの共通項から導きだされる答えは一つだとは思いますが、念のために訊いておきた

い。

『そういう君は何者だ？』

少女は、その感情の読み取れない瞳でヴィジョン・アーマーを黙して見つめたあと、ゆつくりと口を開いた。

「お察しの通りです。

私はカレン・オルテンシア。

今回の聖杯戦争の監督代理を行うため、聖堂教会から派遣された者です。」

『……。』

その言葉は、きつと真実なのだろう。

そう思わせるほど彼女の言葉は、その眼差しにも似て真つ直ぐだった。

だが…なぜだろうか。

どうにも、無条件で信用するには彼女の存在はどこか胡散臭かった。

「訝しんでおられますね。

当然の反応です。

聖杯戦争に興じておられる魔術師ないし、サーヴァントならば尚の事。」

それでも構わず、少女オルテンシアは歩み寄る。

害意があるという風でも無い。

そもそも、戦闘能力の低いヴィジョン・アーマーでさえ制圧してしまえそうな程、彼女は華奢だ。

現状確認について重要であろう彼女を捨て置くコトも得策でない以上、この場を去るという選択肢は取り難かった。

だが：やはり言い様の無い不信感は募る。

何故だろうか？

「ですが新たに遣わされた監督者として、いずれは全ての陣営と会談の場を設ける必要があるのです。

それ程までに、我々聖堂教会は現状を危険視しています。

その危機感、この教会の惨状を確認したコトで確信的となった。」

ヴィジョン・アーマーの目前で周囲を見回した後、少女は再び此方を見つめた。

「前任の聖杯戦争監督者……言峰綺礼。

彼の行いと危険性について、我々は参加者の皆様と協議する場を求めます。」

ほんの一瞬、言葉に詰まる少女。

それが如何なる感情ゆえなのかは読み取れない。

『その男の危険性とやらが、この教会の状況に関係する……と？』

少女は淀みなく頷く。

そして、変わらぬ調子で淡々と口を開いた。

「彼は我々にとっては背信者であり、異端者であり……

この世界にとっては、未曾有の破壊を齎すもたら悪逆です。

私は、その男を浄滅すべく遣わされた代行者なのです。」